

一橋大学大学院 言語社会研究科

博士論文

日本統治下における台湾エスペラント運動研究

氏名：呂 美親

指導教授：星名 宏修

日本統治下における台湾エスペラント運動研究

章立て	i
序章	01
第一節 エスペラント運動史を考察する視点	01
(一) 思想の媒介としての台湾エスペラント運動	02
(二) 社会的運動としての台湾エスペラント運動	04
(三) 言語・文字改革運動としての台湾エスペラント運動	05
(四) 「普遍性」を求める台湾エスペラント運動	06
第二節 人工言語のエスペラントとは	07
(一) ザメンホフとエスペラント	08
(二) エスペラント主義と人類人主義	09
第三節 関連文献	10
(一) 日本エスペラント運動に関する文献	10
(二) 台湾エスペラント運動に関する研究	11
(三) いくつかの関連雑誌	13
(四) その他: 日記、回想録など	14
第四節 論文の構成	14
第一章 台湾エスペラント運動の展開	21
第一節 日本エスペラント運動の概況	21
(一) エスペラントの日本伝来: ガントレット・二葉亭四迷・堺利彦	21
(二) 日本エスペラント協会から日本エスペラント学会へ	22
(三) 大正デモクラシーとエスペラント運動	24
(四) エスペラントとプロレタリア文芸団体	26
第二節 武装抗日時期における台湾のエスペラント移入	27
(一) 児玉四郎と『Esperanta Libreto』	28
(二) 最初の台湾人エスペランチスト	29
1. 蘇璧輝	
2. 連温卿	
3. 黄呈聰	
(三) Esperanto、世界語、エスペラント、国際語、愛斯潑蘭多、 裔須敝蘭土、挨斯批蘭杜、愛斯不難読、益斯伯蘭特、愛世語	32
(四) 「日本エスペラント学会台湾支部」と『組織的研究 エスペラント講習書』	35
第三節 西来庵事件と台湾エスペラント学会	36
(一) 1915年西来庵事件の影響	36
(二) 台湾エスペラント学会への改組と機関誌の創刊	38
(三) エスペランチストが関与した台湾文化協会の創立	39
第二章 台湾エスペラント運動の隆盛と分裂	47
第一節 台湾エスペラント運動に取り組んだ在台日本人たち	47
(一) 「人類の家」の創立者稲垣藤兵衛	47
(二) 山口小静と台湾エスペラント学会	49
(三) 「台北エスペラント会」の主催者たち	52
1. 台湾農業局参事—武上耕一	
2. 台湾専売局参事—杉本良	
3. 台北高等学校校長—甲斐三郎	

第二節	ほかのエスペラント団体とその普及運動	57
(一)	台湾エスペラント大会と台湾エスペラント連盟	57
(二)	「大本教エスペラント部」と「希望社エスペラント部」	59
(三)	エスペラント普及会と台湾全島「緑化運動」	62
第三節	台湾エスペラント運動の衰退	64
(一)	満州事変と太平洋戦争の影響	65
(二)	国語政策の急進	66
第三章	『La Verda Ombro』と『La Formoso』および『La Verda Insulo』	75
第一節	台湾エスペラント学会の『La Verda Ombro (緑の蔭)』(1919-1926)	75
(一)	『La Verda Ombro』の内容概観	76
(二)	「生蕃物語」から「台湾先住民物語」へ	79
(三)	エロシェンコ作品	81
第二節	台北エスペラント会の『La Formoso (台湾)』(1926-1930)	87
(一)	『La Formoso』の内容概観	87
(二)	在台日本人のエスペラント観	89
(三)	『La Formoso』がみた「台湾」	92
第三節	台南エスペラント会の『La Verda Insulo (緑の島)』(1933-1934)	96
(一)	「台湾全島緑化」講習会と王雨卿の「啓南緑友会」	97
(二)	『La Verda Insulo』の内容について	99
第四章	プロレタリア・エスペラント運動への移行	109
第一節	1930年代初期の台湾:政治運動から文化運動へ	110
(一)	政治運動の挫折と文化運動への転換	111
(二)	プロレタリア文芸運動の潮流	111
(三)	台湾大会の「プロレタ・エスペランチスト分科会」	114
第二節	日本プロレタリア・エスペラント運動の台湾移入	116
(一)	比嘉春潮・小坂狷二および伊東三郎	116
(二)	「PEU」とプロレタリア・エスペラント運動の綱領	119
(三)	台湾エスペラント学会の「赤化」	121
第三節	階級闘争の手段として	123
(一)	台湾エスペラント学会通信『Informo de F.E.S.』(1931-1932)	123
(二)	初級エスペラント教科書『Elmentaj Lecionoj de Esperanto』(1932)	128
(三)	農民運動や文化運動への影響	130
第五章	言語・文字改革運動のなかにあるのエスペラント運動	139
第一節	日本と中国の文字改革運動のなかのエスペラント論	140
(一)	日本の国語国字問題と言文一致運動	140
(二)	日本のローマ字論とエスペラント論とのつながり	141
(三)	中国のエスペラント運動および魯迅と胡愈之の役割	145
(四)	エスペラントと中国のラテン文字運動	148
第二節	1920年代から1930年代の台湾文字改革運動	150
(一)	1920年代初期の台湾文字改革論	152
(二)	模倣と創造による台湾の近代文体:「台湾白話文」	153
(三)	もう一つの文字改革:口語体を表記するローマ字	156
第三節	文字改革運動の一環としての台湾エスペラント運動	158
(一)	台湾の国語国字改良論とエスペラント	159
(二)	ローマ字とエスペラントおよび「大衆」	161
(三)	台湾語の文法制定とエスペラント	164

第六章 連温卿の「エスペラント主義」.....	177
第一節 「ホマラニスモ」と「国語」排斥.....	179
(一)「ホマラニスモ論争」と連温卿のエスペラント主義.....	180
(二)国語としての日本語への排斥.....	183
(三)「無産階級」の武器で帝国主義に対抗.....	185
第二節 連温卿の「台湾話文観」.....	187
(一)「言語之社会的性質」で考える社会問題.....	188
(二)近代意識から生まれた「将来之台湾話」.....	189
(三)連温卿の言語ナショナリズム.....	191
第三節 エスペラントから出発した台湾民族論.....	194
(一)「台湾先住民物語」での連温卿の民族観.....	196
(二)プロレタリア的ナショナリズム.....	198
(三)「台湾民族性の一考察」における台湾民族像.....	200
終章.....	211
第一節 台湾エスペラント運動の歴史的意義.....	211
第二節 文字・言語改革問題への示唆.....	217
第三節 台湾近代思想の基軸として.....	220
第四節 今後の課題.....	224
参考文献.....	227

序章

1990年代以降、台湾の民主化運動の進展とともに学術的な台湾研究が本格化した。今日に至るまで、20年余りにわたって台湾の政治、歴史、文学、言語、文化などが盛んに研究されてきた。しかしその一方、文献や資料の制約により、台湾エスペラント運動についての研究は非常に乏しい。だが、エスペラント運動は、言語の問題ばかりではなく、1920年代から1930年代にかけて世界中で流行したものであり、欧米のみならず、アジア各地の多くの知識人を魅了し、コスモポリタニズムや社会主義などの思想を伝える役割を担うもの、つまり20世紀初期の世界的な変革の潮流の1つであったと言える。またエスペラントは、1920年代以降の日本・中国また台湾の言語・文字改革運動や社会運動にも影響を与えたのであった。さらにいえば、台湾の思想史や言語・文字改革運動史、また社会運動史を論じる上で、エスペラント運動を見逃すことはできないが、これに関してはいまだにまとまった研究は出ていない。

特に、台湾エスペラント運動の中心人物であった連温卿は、日本統治下における台湾の社会運動を語る際、不可欠な存在である。彼に関する多くの研究には、彼が植民地時代にエスペラント運動に取り組んでいたことがよく言及されているが、いずれも詳しく論じてはいない。しかしながら、彼が思想や社会運動の意識を深めた根源を明らかにするには、エスペラント運動を検討することが重要であろうと思われる。

筆者は幸運にも、2010年後半から、東京にある日本エスペラント学会で日本統治期の台湾エスペラント運動に関する数多くの雑誌や書籍などに触れることができた。これらの史料や文献を通じて、運動の形成、展開、分裂などのプロセスが明確になり、また台湾の政治や社会運動または文化運動に与えた影響などもより明らかになってきた。これを契機に、筆者は台湾エスペラント運動を研究するようになったが、本論文では、まず、台湾エスペラント運動の史的輪郭を描いていく。しかし歴史的な考察だけではなく、文字改革運動や社会運動の領域で、この運動が当時東アジアの国々、特に日本や中国とどのように連帯していたかも論じる。また運動のなかに、エスペラントの考案者ザメンホフが提出したエスペラント主義から受けた思想、または知識人を魅了したコスモポリタニズムや社会主義との関係について検討し、さらにこれらの思想が植民地における政治や社会状況に影響されてどのように変化していったかを分析する。つまり本研究は、運動の全貌を解明したうえで、思想や社会運動、そして言語・文字改革運動などの視点から、各分野における位置づけやそれが果たした役割を明らかにするものである。

第一節 エスペラント運動史を考察する視点

エスペラント運動は、なぜ日本統治期の台湾で始められたのだろうか。エスペラントが台湾に導入されたときの社会背景はどのようなものであったか。植民地支配を受けていた台湾人がエスペラント運動を推進したことは、どのような意義を持つのか。また、台湾のエスペラント運動はどのような形で行われ、どのように推移していったのか。これらの問題はもちろん検討課題になるが、本論文では、特に「思想の媒介」、「社会運動の一環」、

「文字改革運動の一環」、「普遍性の追求」の4つの視点から、台湾エスペラント運動を考察していきたい。

(一) 思想の媒介としての台湾エスペラント運動

日本統治下の台湾では、台湾住民によるさまざまな「武装抗日運動」が行われた。1915年に起こった大規模な武装蜂起「西来庵事件」¹は、台湾の漢人による最後の武装抗日運動だと言われている。その後の運動は「非武装抗日運動」と規定されたが、それは知識人による政治運動・社会運動であり、ブルジョア民族運動でもあった²。「非武装抗日運動」の胎動期に当たる1915年の「西来庵事件」から1921年の「台湾文化協会」が設立されるまで、「啓発会」(1918)の設立や『台湾青年』(1920)の創刊など、特に日本に留学していた知識人が果たした役割はよく知られている。しかし、この時期に島内にいた一般の台湾人が、エスペラントを通じて新たな非武装抗日運動を模索していたことはあまり注目されていない。

「非武装抗日運動」の出発点といえ、従来、1921年1月に始まった林獻堂率いる「台湾議會設置請願運動」や、同年10月に蔣渭水や連温卿らを中心として設立された「台湾文化協会」などから論じられることが多かった。若林正文の指摘によれば、台湾議會設置請願運動は、とりわけ日本内地の米騒動以後いっそう社会的に広がりを見せた大正デモクラシーの昂揚、これを背景とした政党の本国権力中枢への上昇および世界的な民族自決の解放運動、さらに朝鮮三・一独立運動の衝撃などの要素を契機として植民地支配体制の修正が進められるなか、展開されたものであるという³。すなわち台湾の「非武装抗日運動」は、日本の大正デモクラシーや当時の世界的思想潮流に影響されながら展開されてきたと言えよう。

実は大正デモクラシーの時期は、日本のエスペラント運動が高揚した時期でもあった。あまり知られていないが、デモクラシーを「民本主義」と訳し民本主義による政治を提唱した吉野作造もエスペランティストであり、関東大震災直後に憲兵隊に殺害された思想家大杉栄は、エスペラント学校を開いたことがあった。一方、「非武装抗日運動」の象徴的な組織である台湾文化協会が1921年に設立される前に、島内の台湾人エスペランティストたちは、エスペラントのネットワークを通じて各国の政治問題や民族問題、国際情報などを得て、雑誌を創刊し、日本内地や世界各地の社会活動家とも知りあい、近代的世界観や社会主義的思想を身につけていった。とりわけ蘇璧輝や連温卿といった「台湾エスペラント学会」の中心人物は、エリートでも日本留学生でもなかったが、のちに台湾文化協会の設立に加わり、その担い手となった。台湾文化協会の左傾化も彼らとの関係が深かった。

第一章で詳しく論じるが、エスペラント運動に参加した目的について、連温卿は次のように語っている。

1913年以来行なってきた世界語運動—Esp. movado—is、恰も嫌悪な政治的雰囲気から逃げ出したい台湾人に1つの道を準備したものだ。Esperanto—世界語の内在思想は民族を超え、反差別の人類主義—Homaranismo—を信仰するものだから

である。しかも実際に使用すると、知識を増進できる上、商売にも役に立つ⁴。

ここでの「いやな政治的な雰囲気」というのは、台湾住民によるさまざまな「武装抗日運動」と総督府による鎮圧との繰返しのなかで形成された雰囲気であろう。そうした状況下で 1913 年に台湾エスペラント運動が始められ、台湾人に「1つの道」を準備したというのである。さらにいえば、エスペラント運動は総督府に不満を持ち、政治に関心を持つ島内の台湾人にとって「いやな政治的な雰囲気から逃げ出す1つの「思想的な」道だったのではないだろうか。後述するが、台湾在住の日本人児玉四郎が、1913年に「日本エスペラント協会台湾支部」を設立して普及運動を始めた。講習会のほか、彼の通信教育を受けた人が全島で70人以上おり、「当時の世界最大の初等エス語講習書」と言われる『組織的研究エスペラント講習書』も出版された。1915年に西来庵事件が発生すると、台湾支部の活動は停滞してしまうが、1919年に台湾人の蘇璧輝、連温卿、黄鉄らが台湾支部を引き継ぎ、「台湾エスペラント学会」と改組して運動を続けることになった。

エスペラントは日本に伝わってから、コスモポリタニズムを帯びながら、当時の社会主義運動、アナキズム運動、プロレタリア運動など社会運動の諸勢力と徐々に結び付いていった⁵。日本のプロレタリア・エスペラント運動に応じて台湾でも運動に展開したことは、第四章で詳細に分析するが、台湾エスペラント学会の左傾化は、関東大震災の前後から始まっていた。第二章で論じるように、1920年代初期から台湾人エスペランチストは台湾文化協会に参加し、台湾在住の社会主義者の山口小静が学会に加入したことによって、台湾エスペラント学会は「赤化」し始めた。植民地政策やエスペラントの思想に対する考えの相違によって、多くの在台日本人が次々と脱退し、別のエスペラント団体を創立した。1922年は、台湾エスペラント学会が最も隆盛したと同時に、分裂し始めた時期でもあった⁶。

また、1930年代前後の日本エスペラント運動は、プロレタリア・エスペラント運動に移行し、その影響は台湾にも及んでいた。1931年の第1回台湾エスペラント大会において、「プロレタ・エスペランチスト」分科会が作られた記録が残っている⁷。プロレタリア・エスペラント運動を推進した台湾エスペラント学会は、エスペラントを階級闘争の武器として植民地主義支配に抵抗しようと主張した。左翼的なエスペラント運動を広げるために一時期活動を休止した学会を再組織し、学会通信や教科書を発行し、知識人の間に影響を与えようとしたのである。

つまり台湾のエスペランチストたちは、民族や言語の平等を求め、世界と交流できるコスモポリタニズム的な思想を持つエスペラントに心を惹かれて普及運動を始めたものの、運動を行っていく過程で、ザメンホフのエスペラント主義や人類人主義、またはエスペラントと結びついたアナキズムやマルクス主義などさまざまな思想を学んだ。そして植民地政策に対抗しながら、世界や日本のプロレタリア・エスペラント運動の傾向に応え、台湾のエスペラント運動を左翼的な色彩に深く染めていった。さらに、エスペラントからもたらされたさまざまな思想を身につけたエスペランチストは、植民地政策に対抗していくうちに、より複雑な思想を形成してきた。そのため、本論文はエスペラントが思想の媒介で

あったという視点から運動を考察していく。また、この研究を通じて、日本統治下における台湾の思想運動史の構築にも示唆を与えるだろうと考える。

(二) 社会的運動としての台湾エスペラント運動

前述したように、「非武装抗日運動」は、知識人による政治運動・社会運動であり、ブルジョア民族運動でもあった。特に台湾文化協会によるさまざまな運動は、よく例として語られている。第一章で詳述するが、「エスペラント運動は、1921年に始めて発生した文化運動に先駆したこと8年、蘇氏の薦めと私の考慮によつて、エスペラント運動で経験されてきた組織を持込んだことである⁸」という連温卿の証言によれば、台湾文化協会の設立は、エスペラント運動と深い関係があった。

一方、日本内地では、1923年9月1日に関東大震災が起こった。その後、朝鮮人暴動のデマが流され、多数の朝鮮人や中国人が各地の自警団によって虐殺された。また戒厳令がしかれるなか、労働運動の幹部が軍隊により殺害される亀戸事件や、エスペラント運動でも活躍した大杉栄らが殺害された甘粕事件なども混乱に紛れて発生した⁹。震災を契機として、共産党党员が検挙されたこともあり、日本の社会主義運動の重心は合法活動に移行した。例えば同年10月に山本（権兵衛）内閣が行った普選実施声明にともなう、無産団体の方向転換にも応じた、社会民主主義的合法政党結成に対する積極的姿勢となっていた¹⁰。

こうした日本の社会運動と連動し、台湾エスペラント学会も左傾化し始めた。第一章と第二章で詳しく論じるが、1920年代初期から、学会の機関誌には、山川均の指導を受けた在台日本人の山口小静が執筆した社会主義的な文章や、ロシアや中国の社会運動、さらにコミンテルンの消息などが掲載され¹¹、また日本の左翼誌に連載されたエロシェンコ童話を機関誌の附録¹²として発行した。さらに、山口小静が連温卿や蘇璧輝らとともに「マルクス研究会¹³」を組織し、1922年9月末に学会の名義で連らと「ロシア飢饉救済運動」を行つたが、この救済運動は、台湾史上初の社会主義的色彩のある活動だと言われている¹⁴。こうした背景があり、のちに連温卿は台湾文化協会を左傾化させ、ついに文協の分裂を招いた。

結局、1920年代初期の台湾エスペラント運動は、「非武装抗日」の活動を行いながら推進されたのであった。一部のエスペランチストにとって、エスペラント運動は、言語普及を目的とするよりも抗日の手段として行われたのである。また、運動が社会運動の方向により激しく傾いたことは、1930年代初期に「プロレタリア・エスペラント運動」への移行や、台湾エスペラント学会の通信『*Informe de F.E.S.*』に掲載された文章からもうかがえる。特に連温卿が1931年の台湾第1回エスペラント大会で行った挨拶は、そのなかに掲載された。連は、「従来有産階級によりて宣伝されてきたこの言語の運動がいまや、無産階級によりて更にその発達を招来せしめてゐる事実であります。それは世界の平和、即ち闘争なき人類の平和を期待する点に於ては、無産階級が決して有産階級に落ちないものであります。否真の闘争なき人類の平和には決して有産階級によつてなしうべきものでないと云つた方が本当である¹⁵」と発言している。第四章で詳述するが、1930年代のプロレタ

リア・エスペラント運動は、1920年代の台湾エスペラント学会の「赤化」主張と一貫しており、より明確に社会主義運動として行われていたのである。

台湾エスペラント運動についての研究が乏しいため、従来この運動は一種の文化運動としてのみみなされてきた¹⁶。確かにエスペラントが台湾に広まった当初、台湾に移り住んだ日本人商人や官僚がそれを文化運動として展開した側面はある。しかし、日本内地の社会運動との連帯もあり、抗日意識が強い台湾人エスペランチストや社会主義思想を持つ日本人が運動を主導するなかで、台湾エスペラント学会は徐々に左傾化していった。その結果、総督府による弾圧を招くことになり、学会の分裂が引き起こされた。分裂後の日本人を中心に進められた「台北エスペラント会」の運動は、文化的なものに止まっていたが、台湾人を中心とした台湾エスペラント学会が主導した運動は、意識的に無産階級運動や階級闘争の道へと導かれ、それによって日本帝国主義に対抗しようとした社会運動に転化した。特に農民運動のリーダーである簡吉や李応章らが、積極的にエスペラントを学習した記録¹⁷も残っており、それは日本や台湾でも行われたプロレタリア・エスペラント運動から与えられた影響だと裏付けられるだろう。こうした社会運動の一環として行われていたエスペラント運動について、台湾の社会運動史は1頁を割くべきなのではないだろうか。

(三) 言語・文字改革運動としての台湾エスペラント運動

もう1つ、エスペラント運動は、「言語・文字改革運動」と絡んだ側面も持っている。明治維新以降、日本の国語・国字問題や言文一致運動が盛んになるにともない、日本の近代文学も形成されてきた。国語・国字問題や言文一致に関する議論のなかに、エスペランチストは、エスペラントを国語とともに普及していくことや、エスペラント式のローマ字で国字を改良することなど、多くの意見を出していた。社会の近代化とともに言語・文字改革運動が行われたのは、日本だけではなく、中国や植民地朝鮮・台湾でも同様である。中国の白話文運動、朝鮮の朝鮮語規範化運動¹⁸、あるいは台湾の新文学運動や台湾話文運動は、近代化に応じた言語・文字改革運動であった。これらの運動のなかで、エスペラントの役割を見逃すことはできない。

中国では、注音字母を作った呉稚暉やアナキストの劉師培、または中国近代思想にかなり影響力を持つ銭玄同、作家の魯迅、思想家の傅斯年らは、皆エスペランチストであった。彼らはエスペラントから影響を受け、のちに中国語文字をラテン化する運動を推進した¹⁹。一方、1920年代から1930年代にかけて行われた台湾の言語・文字改革運動について、中国白話文運動からもたらされた影響は頻繁に語られているが、日本の言文一致運動の影響や、エスペラントが果たした役割についてはほとんど言及されてこなかった。だが、1920年代以降、台湾の新文学運動とともに行われた言語と文字の改革運動には、エスペラントからの影響も見える。後述するが、新文学運動の導火線の1つとなった連温卿が提出した「将来之台湾話」は、エスペラントからもたらされた思考であり、またその文章で提起された問題は1930年代の台湾話文論争の焦点となっていた。

実際、台湾の言語・文字改革に関する文章は、1920年代以来途切れることなく発表されてきた。『台湾民報』系列のメディアに掲載された例を挙げれば、黄呈聡の「論普及白

話文的新使命」(1923)、黄朝琴の「漢文改革論」(1923)、連温卿「将来之台湾話」(1924)、あるいは「新旧文学論戦」の火付け役となった張我軍の「請合力拆下這座敗草穢中的破舊殿堂」(1924)など数多い²⁰。また、蔡培火をはじめ、張洪南などクリスチャンのエリートは、ローマ字で台湾語を書くよう台湾文化協会に働きかけた²¹。一方、連温卿は「英国に於ける英語擁護運動とエスペラント」(1921)、「怎麼是世界語主義」(1926)などを発表し、知識人の間でエスペラントを普及しようとしていた。すなわち、漢文改革の呼びかけや、中国白話文またはローマ字とエスペラントなど一連の議論は、廖毓文が「台湾文字改革運動史略」で論じたように、「文字改革運動」のために行われたのである。

民国 11 年(引用者: 1922 年)から民国 22 年にかけての 10 年間に、一連の文字改革運動が起こった。「白話文」を唱える人、「ローマ字」を唱える人、「台湾話文」を唱える人や、「エスペラント」を提唱する人さえいた。それぞれの主張は一致しなかったが、その意図は、異民族の支配下、全省民(当時は台湾人と称した)に新知識や新思想を吸収させるため、識字の利器を獲得させることだった²²。

廖毓文がなぜ台湾の「文字改革運動」を 1922 年から 1933 年までに限定したのかは第五章で詳述するが、この文章から、中国白話文、ローマ字、台湾話文だけではなく、エスペラントも「文字改革」を推進するための 1 つの方法として認識されていたことがわかる。またこの文章では、中国白話文、ローマ字、台湾話文などが推進された背景やプロセスが詳しく紹介されている一方で、エスペラントに関しては、連温卿の名前や「世界語」の背景についてさえ言及されていない。だが第五章で論じるように『台湾民報』に掲載された連温卿の「言語之社会的性質」(1924)や「将来之台湾話」(1924-1925)などの文章は、エスペラントの思考に影響されて台湾語の近代化を主張するものであった。特に「将来之台湾話」は、1920 年代初期に一連の文字改革を提唱する文章のなかで、最も早く台湾語の語彙や文法を整理することの必要性を提起したものであり、1930 年代の台湾話文論争の論点にもつながっていたのである。つまり、日本や中国と同様、台湾エスペラント運動が台湾の言語・文字改革運動の一環として推進されたということは、現在の台湾文学研究において、これらの問題を再検討すべき余地があるということではないだろうか。

(四)「普遍性」を求める台湾エスペラント運動

エスペラント運動は、もう 1 つの性格を持っている。思想問題であれ、社会運動であれ、また文字改革運動に関する思考であれ、いずれもみな「普遍性」を追究するために行われたものである。17 世紀から、正確な思考を可能にする論理的な言語を求める考え方が生まれ、この視点から多くの人工言語が考案された。これらはそれを生み出した思想によって、「哲学語」や「普遍語」ということばでくくられている。また 18 世紀半ばごろから、人工言語の歴史のなかに新しい潮流が現れ始め、思考のための哲学語・普遍語でなく、国際コミュニケーションに使うためのことばを生み出そうとするものもあった²³。人工言語としてのエスペラントは、そのなかで考案された言語の 1 つであり、国際語や共通語など

とも称され、言語の「中立性」を強調しながら、全人類の共通語になることを目標として普及されてきた。社会言語学者の安田敏朗は、全人類が共通に話せる言語である国際語という考え方は、いきおい「普遍主義」的な色彩を帯びると指摘している²⁴。

こうした普遍性を追求する思想を持つため、第二章で論じるように、1920年代以降にエスペラントは、大本教や希望社などの宗教団体や社会福祉団体によって、全人類の共通語になることを目指し、ローマ字とともに採用されていた。つまり同じ言語や同じアルファベットで書かれた文字を使えば、大本教の教祖が言う「世界人類は皆神の子であり同胞である」ことがより実現できるため、宗教団体や社会福祉団体はエスペラントの普及運動にも力を注いだ。また、第五章で詳しく分析するが、1920年代から日本や中国でも多くのエスペランチストはローマ字論者になり、文字ラテン化運動を行った。それは1930年代前後に、エスペラント運動は、世界に広まった階級の「普遍」を体現する弁証法的唯物論を唱えるマルクス主義と結びついたこととの関係があった。

こうした背景で、エスペランチストであり日本語や方言のローマ字化を提唱した斉藤秀一が、1939年に唯物論研究会関連の「左翼ローマ字運動事件」で検挙された事件が起こった²⁵。それについては第四章で詳述するが、1920年代初期の台湾エスペラン学会の左傾化や、1930年代の台湾エスペラント運動がプロレタリア・エスペラント運動に移行した傾向と類似する論理で、左翼のエスペランチストは「階級的普遍性」を求めていたため、労働者や農村青年向けのエスペラント運動を推進し続けた。第五章でも触れるが、エスペラントにも影響を受けた中国のラテン化運動もこうした思考で行われたものである。すなわち、安田敏朗が言うように、エスペラントは日本語のローマ字化運動や「無産階級解放運動」とも連携し、「民族語」と「国際補助語」との自由な交流のために、各「民族語」のローマ字化が必要であったという考え方から生まれた動きであり、そこでは「生産者大衆の言葉」を基盤にした「民族語」のローマ字化が求められたという²⁶。さらに満州国成立後、藤澤親雄などのエスペランチストは、「王道楽土」と「民族協和」というスローガンを掲げた多民族国家の満州国に、エスペラントを公用語として普及させようと建言した。第五章で言及するように、これも一種の普遍主義の実践だと言えよう。

このように、全人類の言語的平等を追求するエスペラントの「人間の普遍性」や、宗教団体がエスペラント運動に参加することで求めた「普遍主義」、または全世界の階級平等を求めた「階級的普遍性」、あるいは日本帝国の傀儡国家である満洲国で行われた運動が実践しようとした「八紘一宇」や「日本精神」などのスローガンで表される普遍性は、各時期に行われたエスペラント運動のなかで追究されている。これら普遍性を持つエスペラント運動における出来事は、第二章や第四章または第五章で具体例を挙げて説明する。

さて、そもそもエスペラントという言語がなぜ作られたのか。以下の第二節ではエスペラントという人工言語の由来・創作者ザメンホフの生い立ち、そしてこの言語に関連する思想的なものを簡潔にまとめる。

第二節 人工言語のエスペラントとは

16世紀から20世紀にかけて、ポルトガル・スペイン・フランス・オランダやイギリス

などの国は、植民地交易によって多大な利益を上げた。ロシアも18世紀頃までにはシベリアをほぼ征服した。帝国の支配を受けた植民地の人々は、政治や経済などの搾取だけではなく、特に言語の問題に悩まされ、解決を求めた。そこで誰にも属さず、誰でも使える1つの共通語を作ろうという考えが生まれたのである。

エスペラントは1887年に公開されたが、それより20年前の1867年の第一インターナショナルの第2回大会では、「労働者階級のある前衛的先駆者の中に、共通語が人類に与える偉大なる有用さについての思想」が会議で賛成され、当時はすでに国際語を創る可能性が感じられていたという²⁷。そして1880年から1889年までの間に、多くの人工語が発表され使われていたという。エスペラントはそれらの人工言語のなかで使用頻度の最も高い言語である。また、ドイツ人が考案したヴォラピュク (Volapük) は、いままだ極少数の人の間に使われていると言われている。以下、まずエスペラントとその考案者のザメンホフについて簡単に紹介しておく。

(一) ザメンホフとエスペラント

エスペラント (Esperanto) とは、ユダヤ人医師ザメンホフ (L. L. Zamenhof) が1887年7月にロシア領ポーランドのワルシャワで公表された人工言語である²⁸。「エスペラント」の由来について、ザメンホフは次のように書いている。

どこよりもこういう町にすんでいますと、生まれつき感受性の強い人間は言語のちがう不幸の重圧を感じ、それが一つの家庭であるべき人類をばらばらにして、敵対するいくつもの部分にわけている唯一の、でなければ少なくとも主な原因である、という確信を事あるごとに抱くようになります [中略] 大人になったら、きっとこの悪をなくしてやろう。²⁹

差別のない人類の共通語を作ろうと考え、ザメンホフは高校時代に国際語を草案し、さまざまな障壁を乗り越えてようやく1887年7月にロシア語による学習書を刊行した。この小冊子の表紙には、「^{Esperanto}希望者博士。国際語。まえがきと全課学習書 (ロシア人用)」や「ある一つの言葉が世界語であるためには、そう名づけるだけでは十分でない」などと書いてある³⁰。また、「どの国語とも同じように、国際語はすべての人の財産である」、「このことばの作者はこの国際語に対するすべての私有権を永久に捨てる」、「この小冊子を各国語に訳す権利はすべての人のものである」とも印刷されていた。ザメンホフは、小冊子のまえがきに、「もし一千万人の人がエスペラント博士の国際語を学ぶ約束をするなら、私も学ぶことを約束し、ここに署名します」という約束文の文例と、書き込み用の紙きれをつけておいた。その後、世界から多くの返信が集まり、ザメンホフは外国の住所録を手に入れ、いろいろな国の新聞社・編集所・教授・医師などに宛てて、『第一書 Unua Libro』を発送した³¹。

エスペラントが多くの国々からの大勢の支持者を集めた理由の1つは、当時は人々の間で交流が盛んになってきた時代であり、「国際語」の必要性が認識され始めたからである

う。しかしなぜ「国際語」が世界にある言語から選ぶのではなく、人工言語でなければならないのか。その理由は、ザメンホフが提出した「エスペラント主義 (Esperantismo)」にうかがうことができるだろう。

(二) エスペラント主義と人類人主義

ザメンホフは、1905年のフランスの「ブローニュー宣言³²」でエスペラント主義について次のように説明している。

エスペラント主義とは、国民の内生活に立入ることなく、又毫も現在の国語を駆逐することを目的とせずして異なる国民に相合了解の可能を與へ、且つ諸種の民族が言語に関して相争へる国内に於ては公共機関の和解用語として用ひ得べく、尚之を以て各国民に対して平等の利益を有する著作物を発表し得べき、人類共有の言語の使用を全世界に普及する努力なり³³。

すなわち、言語の平等的かつ「中立性」を求めるには、人工言語が最もふさわしいというのである。そして「現在の国語を駆逐することを目的とせずして異なる国民に相合了解の可能を与える」ことと、「諸種の民族が言語に関して相争へる国内に於ては公共機関の和解用語として用ひ得る」ことは、エスペラント主義の強調する点である。つまり中立的な立場に立つ言語が、エスペラントなのである。

またエスペラント主義は、ザメンホフの「内部精神」(internaideo) または「ホマラニスム」(homaranismo、人類人主義)とも結びついていると言われている³⁴。ザメンホフは1913年9月に自分は「人類人」であると言い、人生の指針となる10カ条の原則としての「ホマラニスム」を宣言しながら、それがエスペラント主義と異なるものであることを強調する。彼は「エスペラント主義の思想はただ漠然とした同胞愛の感覚と希望を表しているにすぎず、この感覚や希望は中立の言語に基づく人々の交流によって自然に生まれ、エスペランチストは誰でもそれについて思うままに意見を述べることができ、それを受け入れても受け入れなくてもまったく自由である」と言い、「ホマラニスムとは特殊な明確な政治的・宗教的綱領であって、私の純粋に個人的な信条を表すものであり、ほかのエスペランチストたちがまったく関知するところではないのだ³⁵」と述べている。つまり、ホマラニスムは、「人類構成員主義」という意味で人類人主義と訳され、「純然たる人間性と民族間の絶対正義と平和を目的」とし、「偏狭愛国心のない基礎の上に立って中立的な人間の文化に奉仕することのできるために」、中立的言語エスペラントを起用する主義である³⁶。

ところで、1905年のブローニュー宣言にある内容と、1913年に改めて提出したその内在思想としての人類人主義では、どちらが真のエスペラント主義なのだろうか。その点については、ヨーロッパや日本内地で大きく議論され、台湾でも1920年代初期にエスペランチストの間で検討されていた。とりわけその頃は、台湾の各エスニックグループの言語に向けられた「国語」の抑圧に対し、反発がいつそう強くなった時期であった。この2つの「エスペラント主義」については、第六章の「連温卿の「エスペラント主義」」で詳

述するが、連が発表した「Kia estas Esperantismo ?」(エスペラント主義とは何か?)や「怎麼是世界語主義」(エスペラント主義とは何か)などの文章³⁷は、日本におけるエスペラント主義批判に応じながら、植民地の言語状況を踏まえた上で反論を提出したものである。このような台湾内部でのエスペラントの言語思想に対する考えの相違は、在台日本人と台湾人エスペランティストとの間の矛盾を現わし、植民地政策によって生じた日本人と台湾人との間で、民族的・階級的な差異が露呈した1つの事例である。

第三節 関連文献

台湾エスペラント運動についての研究は、簡易年表のような資料や刊行物の紹介、または運動の輪郭を描く短い文章や論文などはあるが、運動の詳細なプロセスやその思想を深く論じた学術論文は、ほぼ見当たらない。これらの文献はのちに簡単に紹介するが、この運動を研究するには、台湾関連の資料のみならず、日本や中国のエスペラント運動についての文献や史料を参照しなければならない。またエスペラント運動は、社会運動や文学運動、そして宗教団体などとも関わったため、社会主義者や作家の回想録、および関連団体の歴史の文献や研究も参考する。以下、本論文で主に参考するいくつかの重要な資料を紹介する。

(一) 日本エスペラント運動に関する文献

日本のエスペラント運動についての文献は多く、研究も進んでいる。例えば戦後に刊行された計8冊の『ザメンホフ』³⁸には、ザメンホフの物語、エスペラントや人類主義などのザメンホフの思想や行動についての演説や文章が収められている。これらの文章から、エスペラントについての基礎知識、そして思想面や当時の運動をめぐる議論などが概観できるだろう。1924年に出版した千布利雄の『エスペラント主義 ブローニュー宣言³⁹』は、当時の「エスペラント主義」の背景や内容について最も詳しく記述した日本語文献である。エ・ドレーゼン著、高木弘訳の『エスペラント運動史⁴⁰』は、世界各国のエスペラント運動の歴史を概観したものだが、附録の「日本エスペラント運動史と社会史年表」には、1930年代初期の日本エスペラント関連の出来事などが詳述されている。そこから、特に日本の社会主義者がエスペラント運動に参加した時期をうかがうことができよう。

戦後の研究では、植民地のエスペラント運動にいくらかでも触れたものはあるが、その多くは当時の日本内地のエスペラント運動の普及のプロセスや思想に関する議論などを詳しく取り上げている。そのなかでも大島義夫、宮本正男共著の『反体制エスペラント運動史』⁴¹は見逃すことはできない。著者ら自身がエスペランティストであり、主観的な見解もあるが、エスペランティストの思想を分類し、特に「広い意味での社会主義者」と「社会主義者と正反対のナショナリストたち」を取り上げて日本エスペラント運動の歴史を論じている。また、プロレタリア・エスペラント運動の足跡をたどり、台湾の運動にも関わった山口小静や山鹿泰治らを詳しく考察している。本論文にとって非常に参考価値がある。

また、ドイツの研究者ウルリッヒ・リンス著、栗栖継訳の『危険な言語—迫害のなかのエスペラント—』⁴²、初芝武美の『日本エスペラント運動史』⁴³、言語学者の田中克彦の

『エスペラント―異端の言語』⁴⁴などは、エスペラントの世界での伝播や日本での普及運動を詳しく記述し、植民地での普及運動についてもしばしば言及している。2013年に新たに出版された『日本エスペラント運動人名事典⁴⁵』には、運動に貢献や影響を与えた多くの日本人エスペランチストの生い立ちや重要な事績を記している。また、台湾人や中国人エスペランチストも何人か取上げられる。人名事典であるが、多くの手がかりを提供し、史料的な役割も持っている。

台湾エスペラント運動は1920年代半ばに分裂し、「台湾エスペラント学会」、「台北エスペラント会」、「大本教エスペラント部」、「希望社エスペラント部」などのグループとなった。大本教の台湾での布教についてはさほど研究されていないが、鹿野政直の『大正デモクラシーの底流』⁴⁶は、大本教の歴史から台湾布教まで詳しく考察している。また藤代和成編集の『大本えすぺらんと史⁴⁷』は、大本教がエスペラントを導入した背景などを詳しく記している。社会福祉団体である希望社は、組織が宗教的なもののように拡大してきたため、宗教団体ともみなされる。後藤静香選集刊行会編集の『後藤静香選集(10) 実践運動編⁴⁸』のなかに、創立者後藤静香の年譜が付いており、ローマ字運動やエスペラント運動に参加したことや、後藤が台湾を訪問したことなどについても言及されている。これらの資料から、台湾の「大本教エスペラント部」と「希望社エスペラント部」のエスペラント運動の足跡は、より明らかになるだろう。

(二) 台湾エスペラント運動に関する研究

台湾エスペラント運動に関する先行研究には、1970年代後半に書かれた松田はるひ「緑の蔭で―植民地台湾エスペラント運動史⁴⁹」がある。また日本在住の台湾人作家鄭穂影が1991年にエスペラント雑誌『緑蔭 La Verda Ombro』を発行し、「世界與台湾及中国日本国際語運動史 対照年表⁵⁰」を発表した。しかし言語や民族問題を中心に論じた松田論文も、説明や出典のない鄭の年表も、数少ない貴重な先行研究であるが、入手が極めて困難であるため、台湾の学术界に影響を与えるには至らなかった。また、植民地時代に発行された雑誌や刊行物などの一次資料の多くは散逸しており、これまで台湾エスペラント運動についての研究は非常に少なかった。

前述したように、筆者は2010年以降に日本統治期の台湾エスペラント運動に関する雑誌や書籍などを見ることができた。文献が発掘されたことによって、2011年以降、日本統治下のエスペラント関連の雑誌や運動に関する研究が現れ始めた。まず、鄧慧恩の博士論文「日治時期台湾知識份子對於「世界主義」的实践：以基督教受容為中心」の第五章では、エスペラント運動が簡単ではあるが紹介されており、前述した「論普及白話文的新使命」の作者である黄呈聡の言うところの、エスペラントやキリスト教に由来する「世界主義（コスモポリタニズム）」という概念について分析している⁵¹。だが、運動の内容については詳しく分析しておらず、付録の台湾エスペラント学会の機関誌『La Verda Ombro（緑蔭）』の目次の誤訳も少なくない。筆者は、「《La Verda Ombro》、《La Formoso》、及其他戰前在台湾發行的世界語刊物⁵²」、「關於連温卿的〈台湾原住民伝説〉⁵³」、そして「日本時代台湾世界語運動的開展與連温卿⁵⁴」の3篇で、これまで発掘した当時台湾で発行された雑

誌や書籍の内容、運動の発展や台湾エスペラント学会の分裂の経緯などについて、おおまかな分析を行ったが、各地の組織や思想面での分析、当時の台湾社会への具体的な影響などに関しては、まだ十分整理されているとは言い難い。

一次資料の発掘は遅れたが、二葉亭四迷の『世界語』が1906年に発行された後、『台湾日日新報』には日本人が執筆したエスペラント関連の文章がしばしば掲載されている。筆者が確認した限り、『台湾日日新報』だけでも、1920年以前に30篇以上があり、1920年以降から1940年までには70篇以上の記事がある。これらの文章からは、1913年に児玉四郎が台湾にエスペラントを持込む以前の動きや、それ以降に運動の具体的な活動や関連する議論、または当時台湾人がどのようにエスペラントを認識していたかがうかがえる。

また、運動に関係した連温卿が戦後に発表した文章は、「人類之家・台湾 ESP 学会」と「日抛時期台湾 ESP 運動」⁵⁵ 2篇が現存する。連が日本統治期に書いたエスペラント運動に関する文章の多くは、日本語やエスペラントで書かれたものである。台湾エスペラント学会の機関誌『La Verda Ombro』や、学会通信『Informo de F.E.S.』にも、連が「Lepismo（蠹魚）」や「L」などのペンネームで多くの文章を寄せている。そのほか、署名のない多くの文章も、編集を行っていた連のものではないかと推測される。また日本エスペラント学会機関誌『La Revuo Orienta エスペラント』⁵⁶にも、連が書いた「台湾エスペラント運動の回顧」（1936）など台湾に関連する記事がある。

連温卿に関する研究は少なくない。1970年代に戴国輝が連温卿に関する一次資料⁵⁷を日本で校註・発表してから、連の左翼思想や社会運動についての研究は増えている。中国語で書かれた論文も多く、代表的なものに陳芳明の「連温卿與抗日左翼的分裂—台湾反殖民史的一个考察⁵⁸」や、呉叡人の「誰は「台湾民族」？：連温卿與台共的台湾解放論與台湾民族形成論之比較⁵⁹」などが挙げられる。このように連温卿に関する研究は左翼運動にとどまらず、ナショナリズムに関連づけて論じられることもあった。また、連温卿著、張炎憲・翁佳音編校の『台湾政治運動史⁶⁰』や、邱士杰の『1924年以前台湾社会主義運動的萌芽⁶¹』には、連の社会主義運動や社会主義思想について言及し、台湾エスペラント運動の概況が紹介されているが、やはり資料が不十分で、台湾エスペラント運動について詳しく分析したものとは言えない。

なお、前述した連温卿が1924年に執筆した「蠹魚的旅行日記」について、邱士杰は著書の第八章で、この日記を手掛かりに連が内地で訪ねた人の名前について考察している。例えば「界利彦氏」は「堺利彦」で、「山川氏夫妻」は「山川均夫妻」、「S 君」は飛行士の謝文達で、「東君」が当時改造社で働いた比嘉春潮、「仲曾根⁶²」は共産主義運動者の仲宗根源和であるときとめた。しかし、「K 氏」が台湾エスペラント運動の開拓者である児玉四郎で、「石君」が当時東京にいた石煥長であり、堺利彦や比嘉春潮らは皆エスペランティストやエスペラント関係者であることに、邱は気づいていなかった。この日記から、エスペラントが連温卿の思想を形成する重要な源流であることをうかがい知ることができるだろう。

そのほか、王美恵の博士論文『1930年代台湾新文学作家的民間文学理念與実践』の第6章「伝説與故事新編：朱鋒的民間文学理念與実践」では、「世界語與台湾文学主体性精神」

を分析している。王は、左翼作家の朱鋒の年表や何人かの回想録を引用し、1920年代前後に連温卿が推進したエスペラント運動や、朱鋒が1930年代以降の「啓南緑友会」の雑誌『La Verda Insulo (緑の島)』でエスペラントによって台湾民間伝説を發表したこと、または1934年12月の『台湾新民報』でザメンホフが紹介されたことに言及しながら、エスペラント運動と台湾文学の主体的精神との関係を分析している⁶³。王論文が論じる「朱鋒」は「莊松林」のペンネームであるが、2008年の時点では『La Verda Insulo』がまだ発掘されていなかったため、莊松林のエスペラント名「So-Ŝjo-Lin」であることや、雑誌と「啓南緑友会」の創立背景などが確認できなかった。そこで、『La Verda Insulo』の創立経緯や莊松林の作品を第三章で論じることとする。これらの文献や資料を通して1930年代以降の台湾エスペラント運動が、農民運動や文化運動にどのような変化や反応を起させたかが明らかになるだろう。

(三) いくつかの関連雑誌

史的な考察以外、本論文では日本のエスペラント運動と社会主義運動との連動を把握するため、エスペラント雑誌だけではなく、『ナップ』、『プロレタリア文化』、『コップ』、『国際文化』など表紙にもエスペラントで題字が付いている左翼系の刊行物を参照し、より広い面で台湾エスペラント運動の文化面や文学面への影響およびその位置づけを明確にした。また、本論文は日本や中国の例を取り上げながら、台湾のエスペラントを言語・文字改革運動の一環として論じるため、ここでは高木弘が編集した『国際語研究』(1933.01-1936.07)と斉藤秀一が編集した『文字と言語』(1934.09-1038.05)という雑誌を挙げたい。

『国際語研究』の編集者高木弘(大島義夫)は、ドレーゼンの『世界語の歴史』、『エスペラント運動史』、スピリドビッチの『言語学と国際語』、そしてブイコフスキーの『ソヴェート言語学』などを翻訳して雑誌に掲載した⁶⁴。そのほかにマルクス主義言語学の問題点を提出し、国語・国字問題または方言問題についても論じている。この雑誌は、プロレタリア・エスペラント運動の理論構築には大きな役割を果たしたものであった。一方、『文字と言語』は、斉藤秀一によって謄写印刷で50部ずつ自費出版した雑誌である。唯物論言語学の立場に立ち、プロレタリアートのためにエスペラントが必要だという理論を發展させ、魯迅を初めとする世界各国の進歩的な人達と各国語をローマ字化して識字運動をすすめるため、エスペラントを使って国際的連帯を實踐した。また、中国知識人との連携を通じて、日本内部の国字問題に関して積極的に改革の意見を提出した。

この2つの雑誌から、1930年代のエスペラント運動の理論化とその実践的な面を見ることが出来る。本論文の第四章と第五章でこの2誌を引用しながら、台湾のプロレタリア・エスペラント運動と言語・文字改革運動について分析する。

ちなみに、1926年、日本の雑誌『大衆』に「日本帝国主義下の植民地台湾」、「台湾に於ける政治運動」⁶⁵を發表した「陳規懐」は、筆者の考察を通じて連温卿であると確認できた。詳細は第四章に譲るが、1926年3月から1927年10月まで発行された『大衆』は、表紙に「無産階級評論雑誌」というスローガンを掲げていた。執筆陣は大山郁夫、市村今

朝蔵らの同人以外に、山川均、堺利彦、山川菊栄、猪俣津南雄、野呂栄太郎、秋田雨雀などがいた⁶⁶。興味深いのは、1927年に台湾文化協会が分裂し、指導権を掌握する連温卿や王敏川らが東京で新たな週刊機関誌『台湾大衆時報』（1928.03-1928.10）を創刊したことである。この雑誌は台湾の左翼運動の黄金期を示していると言われている⁶⁷。『台湾大衆時報』の創刊号には、「労働農民新聞社」から祝辞が載せられ、誌名も日本の『大衆』とほぼ同じ、『大衆』の執筆者の山川均、堺利彦、山川菊栄、秋田雨雀など1920年代から連温卿と知り合った知識人が寄稿していることから、エスペラントも左翼系の台湾人が日本人と連携していた1つのルートだったことが理解できる。

（四）その他：日記、回想録など

前述した連温卿の「蠹魚的旅行日記」のほか、台湾人が書いたエスペラント関連の日記として農民運動のリーダーである簡吉の『簡吉獄中日記⁶⁸』が挙げられる。エスペラント運動は1930年代前後に強い弾圧を受けたが、台湾の知識人に少なからず影響をもたらした。『簡吉獄中日記』から、簡吉が獄中でエスペラント語を勉強したことや、もう1人の農民運動のリーダーである李応章がすでにエスペラント語を学んでいたことがわかる。また、プロレタリア作家楊遠が1935年に発行した『台湾新文学』の表紙には、エスペラント語で「La Formosa Nov-Literaturo」と書かれており、連温卿の「エスペラント講座」も連載されていた。

最後に、第二章で論じる台湾在住の山口小静という女性に関連する文献を挙げたい。1923年亡くなった山口小静については、遺著の『匈牙利の労農革命⁶⁹』や、井手文子・江刺昭子共著の『大正デモクラシーと女性⁷⁰』、江刺昭子の『覚めよ女たち 赤瀾会の人びと⁷¹』、山川菊栄の『女二代の記⁷²』、竹中信子の『植民地台湾の日本女性生活史 大正篇⁷³』などによって、山口小静の思想形成、社会主義運動や婦人運動への参与、エスペラントの思考と実践などが描写されている。これらの文献から、山口小静が台湾エスペラント運動にどのような影響を与えたかが検証できるだろう。

第四節 論文の構成

本論文は、台湾と日本または香港で収集したエスペラント運動に関するさまざまな資料や文献を検証し、日本統治下における台湾エスペラント運動のプロセスや展開の背景、およびその言語が表した思想の内実、そして当時の世界潮流との関係について検討するものである。また、国際交流やプロレタリアに知識を普及するためのエスペラントの主張、または日本内地における宗教団体や福祉団体の運動への加入、あるいは大正時代前後の国語国字に関する議論および言文一致運動、戦争期における言語政策がエスペラント運動に与えた影響などは、植民地台湾にも及んでいた。そのため、本論文は歴史的考察ではあるが、思想運動や社会運動または言語・文字改革運動など、いくつかの側面を提起しながら分析していく。

およそ50年間の日本統治期にいくつかの段階を経て、台湾内部の社会や政治状況、そして文化・文学活動は各段階によって変化していったが、エスペラント運動もいくつかの

思潮に応じて運動の主張を変換していく。まずは運動における在台日本人と台湾人エスペランチストたちの中で運動に対する期待、普及の方向性、あるいは思想の相違などが原因で分裂を招いたことを明らかにしたい。第四章で論じるが、「プロレタリア・エスペラント運動」は1930年前後の台湾エスペラント運動の一潮流となった。それは植民地での独特な現象ではなく、日本内地の運動に強く影響を受けたものである。だが、植民地での状況によって、台湾の運動は、日本内地と異なる性質を持っていた。こうした運動は、エスペラント界内部のみならず、台湾の文学者や社会運動家を魅了しており、文学関連の議論や社会運動の主張などにも、エスペラントの影響がしばしば見られる。

以下、論文全体の構成について簡潔に説明しておく。

本論文は、序章を含めて8章構成となっている。序章では、まず、研究の目的や本論文の4つの視点について述べ、次いでエスペラントの関連用語や運動に関する文献や史料などを紹介し、最後に、論文の構成について説明する。

第一章から第二章までは、まず、日本エスペラント運動を簡潔にまとめてから、台湾エスペラント運動の歴史像を詳細に描いていく。1910年代初期に運動が始まって以来1940年代の終焉まで、台湾の社会や政治背景の変化およびエスペラント運動との関連性を分析しながら、運動に関わった重要な人物や彼らの言論を整理し、特に台湾文化協会の設立やその後の運動が、エスペラント運動から多大な影響を受けたことを強調する。一方、エスペラント運動を行ってきたのは、台湾人エスペランチストだけではなく、在台日本人エスペランチストの役割も見逃せない。そのため、本論文は連温卿を軸にして運動の歴史を考察するが、第一章と第二章では、連温卿と蘇壁輝や黄呈聰など重要な台湾人エスペランチストのほか、児玉四郎、山口小静、武上耕一、杉本良、甲斐三郎などの在台日本人の生い立ちや彼らの果たした役割、そして運動のなかで重要な出来事を詳しく論じる。

歴史像を描き出してから、第三章では日本統治期に台湾で発行されたエスペラント刊行物を分析する。1920年代から1930年代まで、3つの重要な雑誌が出版される。それは台湾エスペラント学会の機関誌『La Verda Ombro (緑の蔭)』(1919-1926)と、1926年から1930年までの台北エスペラント会の機関誌『La Formoso (台湾)』(1926-1930)、そして台南エスペラント会の機関誌『La Verda Insulo (緑の島)』(1933-1934)である。雑誌の発行時期を見れば、運動における発展期から衰退期まで順に刊行されたものだと言えよう。本章ではこれらの雑誌の内容を紹介しながら、それぞれの執筆者や重要な文章を分析していく。これら3誌はすべてエスペラント雑誌だが、創刊された社会背景はそれぞれ異なっていた。例えば『La Verda Ombro』には、台湾先住民の物語やエロシエンコの作品、または社会主義に関する文章が多かった。一方、『La Formoso』には、官僚や学者である在台日本人の植民地言語に対する考え方がうかがえるほか、彼らが発表した文章には台湾に対する感情が溢れている。また、『La Verda Insulo』では、1930年代以降に大本教のエスペラント普及がどのように台湾へ影響を与えたかがうかがえる。つまり運動に関わった人々の思想が異なっているため、雑誌の分析を通じて、運動の歴史像をより立体的に見ることができるだろう。

第四章では、1930年代前後から始まった台湾のプロレタリア・エスペラント運動を詳

しく論じる。1930年代以降は、台湾の知識人が政治的抑圧から解放を目指す新たな文化運動に転換していった時期であった。本章ではこうした政治や社会的な状況を振り返りながら、日本のプロレタリア・エスペラント運動の発展と理論化の経緯を簡潔にまとめ、特に台湾の運動に影響をもたらした小坂狷二、比嘉春潮、伊東三郎などを紹介しながら、運動がどのように台湾へ移入されたかを検討する。また、1931年に行われた第1回の台湾エスペラント大会で設置された「プロレタ・エスペランチスト分科会」の歴史的意義を論じ、再発足した台湾エスペラント学会の通信『*Informo de F.E.S.*』の内容などを分析する。それを通じて1930年代以降の運動の輪郭や性質を描き出し、エスペラント運動と台湾の社会運動や文化運動との連動や、そのなかの位置づけを明確にする。

第五章では、エスペラントの視点から東アジアの言語・文字改革運動の連鎖に着目し、エスペラント運動が台湾の文字改革運動で果たした役割を論じる。日本でも中国でも、近代化が進み、エスペラント運動もそれぞれの言語・文字改革運動のなかで展開された。こうした運動は東アジアの各地域と連動しているため、台湾の一連の言語や文学運動を論じる際に、エスペラント運動を視野に入れて検討しなければ、大きな意義を失ってしまうだろう。本章では日本の国語・国字問題と言文一致運動、そして中国の白話文運動・中国語ラテン化運動のなかでエスペラントが果たした役割を整理しながら、それを踏まえて、1920年代から1930年代までの台湾の言語・文字改革運動を改めて考える。とりわけ、連温卿はエスペラントから言語や文法の整理など言語を近代化させる思考を得て、1924年に「言語的社会性質」や「将来之台湾語」を発表し、台湾語の近代化や標準化を提案した。第五章ではこの提案が1930年代の「台湾話文論争」で具体化されたことを提起するが、第六章で連のエスペラント主義やナショナリズムについて論じるため、「将来之台湾語」と「台湾話文論争」のつながりや、そのなかに現われた「台湾文化の特殊性」や言語的ナショナリズムについては、第六章で分析する。

第六章では、台湾エスペラント運動に最も深く関わった連温卿の「エスペラント主義」を論じる。日本統治下における台湾の政治や社会運動のなかで、最も重要な人物の1人である連温卿についてはすでに多くの研究がある。なかでも、彼の思想に関する論文は少なくないが、エスペラント運動を通じて考察されることはなかったため、連の全体的な思想は明らかにされてこなかった。結局、マルクス思想を持ち帝国主義に対抗する連の「ナショナリズム」は、研究者それぞれの政治的イデオロギーによって、台湾ナショナリズムの原点と考える者（呉叡人）、または祖国（中国）意識と強く結びつける左翼とみなす者（邱士杰）のように両極に分岐する。しかしながら、エスペラント運動の視点を導入すれば、連の思想の原点や変化、またその複雑性はより明確化される。

例えば連温卿は1920年代初期に台湾エスペラント学会の機関誌『*La Verda Ombro*』に「台湾先住民物語」を、また1940年代初期の『*民俗台湾*』に「台湾民族性の一考察」を発表した。この2つの文章は彼のナショナリズムを象徴するものと見なされるが、前者はザメンホフの思想や世界中で議論された民族問題に刺激されたものであり、後者はエスペランチストでもある柳田国男の「一国民俗学」の学問に間接的に影響されたため、両者のナショナリズムの内容は相当異なっている。また、1930年前後に連温卿はエスペラント

を階級闘争の武器にしようと主張した。左翼的なイデオロギーでありながら、「台湾人全体」の立場で植民地政策を批判し、プロレタリア・エスペラント運動を行っていた。こうした彼の「ナショナリズム」は、いくつかの段階を経て変化していった。第六章では、言語問題と民族問題を切り口として連のエスペラント主義を論じながら、彼の複雑な「ナショナリズム」を再考する。また、連温卿の思想の源流であるエスペラントと、彼が行ってきたエスペラント運動の変革を検討することによって、エスペラントと連の思想がどのように台湾人に影響を与えたかがより明らかになり、台湾の思想運動史の構築に貢献できればと考える。

終章では、各章の検討を通じて得た結論をまとめ、台湾エスペラント運動の歴史的意義を評価する。また、この研究を通じて、依然として構築中の台湾の近代思想史に示唆を与え、現在、盛んであるものの、いまだに多くの再検討すべき課題を抱える台湾文学や台湾の言語に関する研究にいくつかの考えを提出したい。最後に、当時植民地台湾で行われたエスペラント運動の限界、およびこの研究でまだ明らかにされていないいくつかの課題を提起したい。

-
- ¹ 伊藤潔、『台湾』、中公新書、2008.10、97-98 頁。
 - ² 向山寛夫、『日本統治下における台湾民族運動史』、東京：中央経済研究所、1987.07、164、565 頁。
 - ³ 若林正丈、『台湾抗日運動史研究 増補版』、東京：研文出版、2001.06、19-20 頁。
 - ⁴ 史可乗（連温卿）、「人類之家・台湾 ESP 学会」、『台北文物』(3)1、1954.05、92 頁。原文：「一九一三以来発生的世界語運動—Esp. movado 恰好為從嫌惡政治逃避出来之台湾人準備了一條出路，因為 Esperanto—世界語之内在思想是超越民族，信仰之〔引用者：反〕歧視的人類主義—Homaranismo，而且其實際上之利用不但可以增進智識，對商業上也有所幫助的。」。
 - ⁵ 例えば、社会主義運動者やアナキストの中に、片山潜、大杉栄、堺利彦、山鹿泰治など多くのエスペランチストが存在していた。大島義夫・宮本正男『反体制エスペラント運動史』、三省堂ブックス、1974.07 を参照されたい。
 - ⁶ 拙論、「日本時代台湾世界語運動的開展與連温卿」、陳翠蓮ら主編、『跨域青年学者台湾史研究』第五集、台北：政治大学台湾史研究所、2012.10、153-159 頁。
 - ⁷ 『第一回台湾エスペラント大会』（大会記録）、台北：台北エスペラント会、1931.09、9 頁。史可乗、「日抛時期台湾 ESP 運動」、『台湾風物』(17)4、1967.08、55 頁。
 - ⁸ 連温卿、「台湾エスペラント運動の回顧」、『La Revuo Orienta』、1936.06、74 頁。
 - ⁹ 初芝武美、『日本エスペラント運動史』、東京：日本エスペラント学会、1998.03、58 頁。
 - ¹⁰ 齋藤勇、『日本共産主義青年運動史』、東京：三一書房、1980.08、23-24 頁。
 - ¹¹ 例えば、「Klasbatalo en Ĥina Socio (支那社会における階級闘争)」(『La Verda Ombro』、1923.1-2 月合併号)、「Kion Volas la Insululoj? (島民たちは何を求める?)」(1923.3-4 月合併号)、「Lernejo de Tria Kominterno (コミンテルンの学校)」(1923.05、6-7 月合併号)、「Pri Rusa ESP. Movado ロシアのエスペラント運動について」(1923.10)、「Familiaj Budĝetoj de Rusaj Laboristoj (ロシア労働者たちの家庭予算)」(1923.11-12 月合併号)。
 - ¹² V. Eroshenko、『Unu Paĝeto en Mia Lernejo Vivo (私の学校生活の一頁)』、『La Verda Ombro』第 6 巻第 1-2 月合併号付録、1923.03)、『Turo por Fali (墜ちる為の塔)』(『La Verda Ombro』第 6 巻第 6-7 月合併号付録、1923.07)。
 - ¹³ 「マルクス研究会」(当時：「馬克斯研究会」)は、1923 年 7 月末に成立した「社会問題研究会」の先駆である。連温卿、「過去台湾之社会運動」、『台湾民報』、1927.01.02。
 - ¹⁴ 邱士杰、『1924 年以前台湾社会主義運動的萌芽』、台北：海峡學術、2009.10、105 頁。
 - ¹⁵ 連温卿、「我々は闘争なき人類の平和に生きん」、『Informo de F.E.S.』第 1 号、1931.12.15、6-7 頁。

- 16 例えば、松田はるひ、「緑の蔭でー植民地台湾エスペラント運動史(1-6)」(『La Revuo Orienta エスペラント』58a(6-11)、59a(1)、1977-1978)、張炎憲、「社会民主主義者ー連温卿(1895-1957)」(連温卿著、張炎憲・翁佳音編校、『台湾政治運動史』、台北：稻郷、2003.11、361-369頁)。
- 17 簡吉、『簡吉獄中日記』、台北：中央研究院台湾史研究所、2005.02。
- 18 本論では朝鮮の言文一致運動や朝鮮語規範化運動については触れないが、三ツ井崇の『朝鮮植民地支配と言語』(東京：明石書店、2010.12)や、金三守の『韓國에스페란토運動史』(ソウル：淑明女子大学校出版部、1976.11)などの関連研究を参照されたい。
- 19 周質平、「晚清改革中的語言烏托邦：從提倡世界語到廢滅漢字」、『二十一世紀』137号、香港：香港中文大学、2013.06、31頁。
- 20 李南衡校註、『日抛下台湾新文学・明集5・文献資料選集』、台北：明潭、1979.03。
- 21 蔡培火、「新台湾建設と羅馬字」(1922、『台湾』、1923、『台湾民報』)、張洪南、「誤解されたローマ字」(1923、『台湾』)。
- 22 廖毓文、「台湾文字改革運動史略」、『台北文物』3(3)、4(1)、1954.12.10、1955.05.05(李南衡校註、前掲書、459頁。原文：「自民国11年起，至民国22年止，十年來之間，發生了一連串的文字改革運動，有的提倡「白話文」，有的提倡「羅馬字」，有的提倡「台湾話文」，甚至也有人提倡過「世界語」，各人的主張都不一致，但其企圖，都是一樣想在異族的支配下，使全省民(當時稱台灣人)，獲一識字的利器，以吸收新智識，新思想。」)。
- 23 二木紘三、『國際共通語の夢』、埼玉：筑摩書房、1994.07、24-25、28、66頁。
- 24 安田敏朗、『近代日本語史再考 帝国化する「日本語」と「言語問題」』、東京：三元社、2004.06(初版：2000.09)、280頁。
- 25 安田敏朗、「解説」、平井昌夫著、『国語国字問題の歴史(復刻版)』、東京：三元社、1998.02、596頁。
- 26 安田敏朗、『近代日本語史再考 帝国化する「日本語」と「言語問題」』、281、290-292頁。
- 27 エ・ドレーゼン著、高木弘訳、『エスペラント運動史』、東京：鉄塔書院、1932.09、3-4頁。
- 28 初芝武美、『日本エスペラント運動史』、12頁。
- 29 ウルリッヒ・リンズ著、栗栖継訳、『危険な言語ー迫害のなかのエスペラントー』、岩波新書、1975.11、3頁。
- 30 エドモン・ブリバー著、大島義夫・朝比賀昇訳解説、『エスペラントの歴史』、東京：理論社、1957.11、47頁。
- 31 『エスペラントの歴史』、47-48頁。
- 32 1905年第一回の國際エスペラント會議はフランスのブーローニュ・シュル・メール行われ、この會議でザメンホフの提案に従い「エスペラント主義に関する宣言」という「ブーローニュ宣言」が発表された。千布利雄編著、「ブーローニュ宣言の由来」、『エスペラント主義 ブーローニュ宣言』、日本エスペラント社、1923.08、7頁。
- 33 千布利雄編著、「ブーローニュ宣言本文」、4頁。
- 34 千布利雄編著、「ブーローニュ宣言本文」、10頁。
- 35 ザメンホフ著・述、水野義明編・訳、『國際共通語の思想 エスペラントの創始者ザメンホフ論説集』、東京：新泉社、1997.06、96頁。
- 36 中村陽宇編、『國際補助語エスペラントと人類主義に就いて』、京都：愛善エスペラント会、1950.04、19-20頁。
- 37 Lepismo(連温卿)、「Kia estas Esperantismo? (エスペラント主義とは何か?)」、『La Verda Ombro』、1923.05。温・連(連温卿)「怎麼是世界語主義(一~四)」、『台湾民報』、1926.10.24、10.31、11.14; 1927.01.09。
- 38 いとうかんじ、『ザメンホフ』(一~八)、京都：永末書店、1967-1978。
- 39 千布利雄、『エスペラント主義 ブーローニュ宣言』、東京：日本エスペラント社、1924.09。
- 40 エ・ドレーゼン著、高木弘訳、『エスペラント運動史』、東京：鉄塔書院、1932.09。
- 41 大島義夫・宮本正男、『反体制エスペラント運動史』、東京：三省堂、1974.07。
- 42 ウルリッヒ・リンズ(Ulrich Lins)著、栗栖継訳、『危険な言語ー迫害のなかのエスペラントー』、東京：岩波新書、1975.11。Ulrich Lins氏からは、日本エスペラント学会に収蔵されていない『La Verda Ombro』の号や、附録として刊行されたエロシェンコの童話などを提供していただいた。ここに記し感謝を申し上げたい。
- 43 初芝武美、『日本エスペラント運動史』、東京：日本エスペラント学会、1998.10。

-
- 44 田中克彦、『エスペラントー異端の言語』、東京：岩波新書、2007.06。
- 45 柴田巖・後藤斎編、『日本エスペラント運動人名事典』、東京：ひつじ書房、2013.10。
- 46 鹿野政直、『大正デモクラシーの底流』、東京：日本放送出版協会、1973.10。
- 47 藤代和成編、『大本えすぺらんと史』、京都：天声社、1986.08。
- 48 後藤静香著・後藤静香選集刊行会編集、『後藤静香選集(10) 実践運動編』、東京：善本社、1978.10。
- 49 松田はるひ、「緑の蔭でー植民地台湾エスペラント運動史(1-6)」、『La Revuo Orienta (エスペラント)』、1977.06-11、1978.01。
- 50 本刊資料室(鄭徳影)、「世界與台湾及中国日本国際語運動史 対照年表」、『La Verda Ombro 緑蔭』創刊号、台湾国際語学会東京研究会、1991.05.20、9-20 頁。
- 51 鄧慧恩、「日治時期台湾知識份子對於「世界主義」的实践：以基督教受容為中心」、台南：成功大学台湾文学系博士論文、2011.05。鄧論文のエスペラントに関する資料は、筆者が提供したものである。また、1916年3月『Japana Esperantisto』の「本年度会員拂込者」(8頁)には、黄呈聡の名が載っている。黄は、連温卿よりも早く日本エスペラント協会会員になったことが確認できる。
- 52 拙論、「『La Verda Ombro』、『La Formoso』、及其他戦前在台湾発行の世界語刊物」、『台湾文学史料集刊』創刊号、台南：国家台湾文学館、2011.10。
- 53 拙論、「關於連温卿的〈台湾原住民伝説〉」、『経眼・辨析・苦行 台湾文学史料集刊』第三輯、台南：国家台湾文学館、2013.07。
- 54 拙論、「日本時代台湾世界語運動の開展與連温卿」、陳翠蓮ら主編、『跨域青年学者台湾史研究』第五集、台北：政治大学台湾史研究所、2012.10。
- 55 史可乘、「人類之家・台湾 ESP 学会」、『台北文物』、1954.05.01。史可乘、「日抛時期台湾 ESP 運動」、『台湾風物』、1967.08。
- 56 「La Revuo Orienta」を和訳すると「東方評論」となるが、表紙に付いている正式な日本語題名は「エスペラント」になるため、本論では「エスペラント」を用いる。
- 57 戴国輝、「台湾抗日左派指導者連温卿とその稿本」、連温卿、「台湾に於る日本植民政策の実態」、『史苑』(35)2、立教大学史学会、1975.03。連温卿(戴国輝校註)、「日本帝国主義の台湾に於る土地収奪の過程(一)」、『史苑』(37)1、1976.12。連温卿(戴国輝校訂)、「日本帝国主義の台湾に於る土地収奪の過程(二)」、戴国輝校訂「連温卿日記ー1930年の33日間ー」、『史苑』(39)1、1978.11。
- 58 陳芳明、「連温卿與抗日左翼の分裂ー台湾反殖民史の一個考察」、『殖民地摩登：現代性與台湾史観』、台北：麦田、2004.05、265-292 頁。
- 59 吳叡人、「誰は「台湾民族」？：連温卿與台共の台湾解放論與台湾民族形成論之比較」、『地方菁英與台湾農民運動國際學術研討會論文集』、台北：中央研究院、2008.03、199-229 頁。
- 60 張炎憲、「社会民主主義者ー連温卿(1895-1957)」、連温卿著、張炎憲・翁佳音編校、『台湾政治運動史』、台北：稻郷、2003.11、362 頁。
- 61 邱士杰、『1924年以前台湾社会主義運動的萌芽』、台北：海峽學術、2009.10。
- 62 「仲曾根」：「仲宗根」の誤植。「仲宗根源和」に当たる。仲宗根源和(1895-1978)：沖縄県出身の政治家。沖縄師範卒。東京で堺利彦らと共産主義運動にたずさわり、1923年第1次共産党事件で検挙、投獄される。1942年沖縄県会議員。1947年沖縄民主同盟を結成し、琉球独立を主張した。著作に『沖縄から琉球へ 米軍混乱期の政治事件史』(1973)がある。
- 63 王美恵、『1930年代台湾新文学作家的民間文学理念與実践』、第6章の第3節「世界語與台湾文学主体性精神」、台南：成功大学歴史系博士論文、2008.01、214-216 頁。
- 64 大島義夫・宮本正男、『反体制エスペラント運動史』、東京：三省堂、215 頁。
- 65 陳規懐(連温卿)、「日本帝国主義下の植民地台湾」(『大衆』、1926.11)、「台湾に於ける政治運動」(『大衆』、1926.12)。
- 66 鈴木徹三、「解題」、『無産階級評論雑誌 大衆(4)』復刻版、東京：財団法人法政大学出版局、1976.08、473-482 頁。
- 67 陳芳明、『台湾大衆時報』與『新台湾大衆時報』解題、台湾研究・期刊報紙『台湾大衆時報』(復刻版)、台北：南天書局、1995.08、6 頁。
- 68 簡吉、『簡吉獄中日記』、台北：中央研究院台湾史研究所、2005.02。
- 69 山口小静(遺著)、『匈牙利の労農革命』、東京：水曜会、1923.06。

-
- 70 井手文子・江刺昭子、『大正デモクラシーと女性』、東京：合同出版、1977.02。
71 江刺昭子、『覚めよ女たち 赤瀾会の人びと』、東京：大月書店、1980.10。
72 山川菊栄、『女二代の記』、東京：日本評論新社、1956.05。
73 竹中信子、『植民地台湾の日本女性生活史 大正篇』、東京：田畑書店、1996.10。

第一章 台湾エスペラント運動の展開

エスペラントとは、そもそもヨーロッパの言葉に由来し、文法を簡易化し、単語を限定化した人工言語であるが、なぜ漢字文化圏に属する東アジアの国々に伝わったのだろうか。また、エスペラントは明治維新以来さまざまな改革を通して近代国民国家となった日本だけではなく、植民地台湾・朝鮮、さらに清末民初の中国にも広がった。漢字文化圏の知識人がエスペラントに惹かれ、熱心に運動に取り組んだのは、どのような理由や社会的な背景があったのだろうか。

植民地台湾におけるエスペラント運動は、1913年台湾在住の日本人によって展開され、1915年前後に下火となるが、1919年に台湾人エスペランチストによって再生した。しかし、1920年代初期、植民地政策に対する批判／擁護の立場の違いから、エスペラント運動は分裂した。エスペラント運動は植民地において展開されたものの、日本内地の政治状況からも影響を受け、政府的弾圧に耐えながらさまざまな形で行われてきた。普及運動は1930年代以降、一時的な隆盛を見せるが、戦時中の国策に大きく影響され、終焉を迎える。本論文の第一章から第二章は、日本統治下の台湾におけるエスペラント運動を歴史的に考察するが、植民地社会の背景をも視野に入れながら、宗主国日本におけるエスペラント運動の状況についても言及しなければならない。そのため、第一節では、明治末期から太平洋戦争に至るまでの、日本のエスペラント運動のプロセスを簡潔に振り返る。

第一節 日本エスペラント運動の概況

明治維新以来、日本は外国と接触する機会が増加したが、エスペラントの導入は意外と遅く、1900年代以降のことであった。とはいえ、エスペラントは日本に伝わってから多くの知識人を魅了し、普及運動は急速に展開され、2013年には、日本エスペラント大会が第100回を迎えている。これまで、日本のエスペラント運動についての研究は、多くの蓄積がある。序章で言及した初芝武美の『日本エスペラント運動史』や2013年に新たに出版された『日本エスペラント運動人名事典』などから、運動の全体像を捉えることができるであろう。以下の第一節では、エスペラントの日本伝来のルートや全国的な組織の創立や再編成、そして大正デモクラシーとエスペラント運動との関係、さらには関連するプロレタリア文芸団体について簡単に紹介する。

(一) 日本に移入した三つのルート：ガントレット・二葉亭四迷・堺利彦

エスペラントの日本伝来について、初芝武美は2つの経路があると指摘した。1つ目は、岡山の第六高等学校の英語教師ガントレット (G.E. Gauntlett, 1868-1956) によるものである。ガントレットが1903年の夏に、金沢の友人で宣教師のマッケンジー (D.R. McKenzie, 1861-1935) の家を訪ねた際、マッケンジーが読んでいたオコンナー (J. C. O'Connor) の英文の『エスペラント 学生用テキスト』を借りた。4ヵ月後、ヨーロッパのエスペランチストと文通を始めた彼は、エスペラントをマスターし、1905年に通信教育や講座会を開始し、受講者が約700人に達したという。2つ目は、小説『浮雲』の著者として知られ

る二葉亭四迷（長谷川辰之助、1864-1909）が1902年にロシアでエスペラントを学び、帰国した後の1906年7月に『世界語（エスペラント）』を出版したことによるものである。二葉亭は、当時日本との間で摩擦を起こしていたロシアに強い関心と危惧を抱いていたため、東京外国語学校でロシア語を学び、のちにロシアへ渡った。その後、ロシアのウラジオストクで当地のエスペラント会会長ポストニコフ（F.A. Postnikov）に会い、エスペラント語の学習を勧められた。1903年に帰国した二葉亭は、ポストニコフからエスペラント教科書の出版資金を寄託され、1906年に『世界語』を出版した。日本エスペラント運動の父とされる小坂狷二を含め、多くのエスペランチストがこれを教科書とした¹。

一方、朝比賀昇は、もう1つのルートを加える。それは、社会主義者堺利彦が（1871-1933）1905年に『平民新聞』の後継紙『直言』に「エスペラント語の話」（3月19日）という文章を発表し、エスペラントを紹介したというものである。朝比賀はこのルートによって、社会主義者の大杉栄、山川均、高島素之、片山潜らがエスペラントを学んだと考える。大杉は堺の影響を受けて、1906年から07年にかけて東京で日本最初のエスペラント学校を開き²、1908年には中国人留学生の張継や梅景九らの革命黨員20名にエスペラントを教えた。堺がエスペラントを始めたのは黒板勝美との談話からであり、そのことから、エスペラントが日本へ伝来した直後に社会主義者とつながったことがうかがえるであろう。また、朝比賀は、堺の『直言』でのエスペラント紹介を日本のプロレタリア・エスペラント運動の始まりだと考える³。朝比賀の説は、1つのルートとして認められるかどうか議論する余地があるが、本論文の第四章で台湾のプロレタリア・エスペラント運動について論じるため、ここでは朝比賀が加えた3つ目のルートを紹介しておく。

（二）日本エスペラント協会から日本エスペラント学会へ

日本エスペラント運動を述べる際に、最も重要な組織である「日本エスペラント学会」への言及は避けられないであろう。日本最初のエスペラント組織は、1906年5月に横須賀で生まれた。横須賀海軍工廠で実習中の東京商船学校機関科の学生、加藤節（1882-1938）は、友人からエスペラントのことを聞き、オコンナーのテキストを取り寄せ学習し始め、英国エスペラント協会に入会した。その後まもなく近くの横須賀幼稚園を講習会会場として借り、入り口に「日本エスペラント協会」の表札を掲げる。ところが同年6月に東京でも黒板勝美らにより「日本エスペラント協会」が設立された。加藤が早速協力を申し出て協議した結果、横須賀の協会が「日本エスペラント協会・横須賀支部」となった⁴。

一方、東京の「日本エスペラント協会」を創立した黒板勝美（1874-1946）は、当時東京帝国大学文科大学講師で、1902年に英字新聞でエスペラントを知り、1903年から勉強を始めた。1906年6月12日に読売新聞記者の薄井秀一と出版社有楽社の支配人安孫子貞次郎が発起人となり日本エスペラント協会を発足し、日本エスペラントの開拓者と言われる⁵。最初の事務所は、安孫子の有楽社に置かれていた。協会の設立によって、日本各地に散らばっていたエスペラントの学習者が組織化された。同年7月の例会には、丘浅次郎、堺利彦、高楠順次郎、大杉栄らも出席し、機関誌の出版について話し合い、8月に月刊の『Japana Esperantisto（日本エスペラント）』の創刊号を発行した⁶。会員の實力養成とエス

ペラント普及のため、横須賀支部のほか、東京、京都、奈良、北海道、大阪、岡山などに支部または研究会が次々と設立された。

世界的エスペラント運動の高まりに呼応して、日本エスペラント協会が設立され、日本大会も開かれ、多くの人々の関心を集めた日本エスペラント運動であったが、黒板が欧米出張に行ったことや、実用的な効果が上がらないこと、加えて赤旗事件（1908年）や大逆事件（1910年）など社会主義者への弾圧政策が、エスペランティストと社会主義者のイメージをダブらせ、エスペラント学習を躊躇させる雰囲気生まれ、一時衰退した⁷。黒板勝美は1910年8月に帰国したあと、各地で講演会を開き、エスペラントの普及に努めたが、有楽社が倒産したため協会は12月に事務所を日比谷公園の南隣にあたる麴町に移した。1912年から1913年まで、運動は再び衰退したが、当時例会に参加した東大学生である小坂狷二の謄写版刷りの隔月刊誌『Orienta Stelo（東方の星）』と、原田勇美のカラー謄写版の月刊誌『Orienta Azio（東アジア）』が、それぞれ1911年の1月と11月に創刊された⁸。この2つの雑誌は、『Japana Esperantisto』の版型や発行部数に比べるとかなり小規模であったが、衰退期にも運動に取り組む動きがあったことがうかがえる。

1914年年以降、協会は『大成エスペラント和訳辞典』や『エスペラント全程』などの教科書を発行した。1916年から、協会の幹事にのちに研究者として台湾に移住した浅井恵倫⁹が加わり、機関誌の編集は日本エスペラント運動の父と言われる小坂狷二が担当することとなった。1918年に至ると、横浜、広島、金沢、台湾、沖縄、十日市（新潟）、堺、大阪などの多くの支部が設立され、普及活動が全国的に展開していった¹⁰。1919年5月3日に第6回日本大会が横浜で開かれ、400名もの聴衆が集まる盛況となった。また、同月31日には東京帝大法学部で普及講演会が開催された。浅井恵倫の「開会の辞」、小坂狷二の「エスペラントの輪郭」、吉野作造の「エスペラントと私」、大庭柯公の「受け入れた外国語の影響」、黒板勝美の「活きた国際語」、藤沢親雄の「閉会の辞」などの講演が開かれた結果、多くの学生が入会した。1919年8月の会員数は460余名に増加したという¹¹。

1919年10月22日に日本エスペラント協会は総会を開き、会頭推薦、副会頭推薦、評議員改選、幹事改選、会則変更、諸種討議など6項目を議論した¹²。その後、協会改革をめぐる問題が中心メンバーの間で議論された。小坂狷二は、①協会は「経済的関係なき実際エスペラント企業団体」を組織すること。②経費の欠損は多数有志会員の等しく負担すべきところとすること。③会の事務は組織的分業制度により多数会員が委員として事務を分掌し、すべての事業において会員の意志によって行動すること。④会計の収支を明らかにし、恒常基本金を作ることなど、4つの改革案を提出した。その①に基づいて12月に創立されたのが「日本エスペラント学会」である¹³。

「協会」から「学会」への改革は、エスペランティストたちの間の組織経営や普及運動などに関する理念や方針の相違によって行われたのであろうが、黒板らに不満をもつ小坂狷二の一派がクーデターを行ったとも言われている¹⁴。ところで、日本エスペラント学会が創立した1919年は、ちょうどコミンテルンの結成、中国の五四運動、朝鮮の三・一独立運動など世界が大きく変動した年であった。また、日本エスペラント協会台湾支部であった「台湾エスペラント学会」も1919年10月に改組された。

1920年1月に日本エスペラント学会は、エスペラントによる東アジア、特に日本紹介を目的とした機関誌『La Revuo Orienta (エスペラント)』を創刊した。創刊号では、「日本エスペラント学会設立次第」や「新学会と旧協会と」などの記事を載せ、新組織の設立経緯や、新しい組織の構想を説明している。また学会は規約を定め、エスペラントの研究、普及、実用の目的を遂行するため、図書雑誌の出版、講習会、講演会、学術および実用的機関の設置などさまざまな事業を行うことにした¹⁵。

一国のエスペラント組織を代表する日本エスペラント学会が創立してから、各地のエスペラント運動も、より多様な活動によって新たなエスペランチストを獲得していた。例えば、「Japana Esperanta Komerca Korporacio (日本エスペラント貿易商会)」が横浜山下町に開業した。ほぼ同時に台北の蘇璧輝も「Komerca Informejo en Formoso (商業仲介所)」を開き¹⁶、大阪でも「Internacia Komerca Korporacio (国際貿易商会)」が設立された。また押田徳郎が常設講習、図書出版、図書輸入などのために自宅で「日本エスペラント社」を設置し、小坂狷二の何冊かのエスペラント関連著書もこの社が出版した。何盛三が設立した「極東エスペラント書院」は、外国雑誌の取次ぎや図書輸入などを行っていた。さらに東京エスペラント倶楽部、鉄道エスペラント会、東北宣伝隊、日本鉄道エスペラント連盟、横浜商業学校エスペラント会などさまざまな組織が作られた¹⁷。また、中央大学エスペラント会、東京学生エスペラント連盟、慶応エスペラント会、東大エスペラント会、京大エスペラント会、京都学生エスペラント連盟、名古屋学生エスペラント連盟¹⁸など大学生が作った組織もあった。

特に言及すべきは、組織の拡大によって、エスペラントが宗教団体や社会福祉組織に宣教や教育のため採用されたことである。例えば「大本教」は1923年にエスペラントを導入し、この言語を布教とともに普及させようとしていた。また1918年後藤静香によって創立された希望社は、点字の普及、ハンセン病患者救済、エスペラント運動、老人福祉、アイヌ救済、現代仮名遣いの普及など「希望社運動」と呼ばれる様々な社会活動を行った。第二章で詳述するが、大本教も希望社も、台湾で「大本エスペラント研究会」と「希望社エスペラント部」を1930年前後に設立した。

(三) 大正デモクラシーとエスペラント運動

言語運動として発足していたエスペラント運動は、大正デモクラシーと深い関係がある。しかし大正デモクラシーについての研究は、エスペラント運動との連動はあまり言及されていない。エスペラント運動の関連文献から、大正デモクラシーにおいて重要な役割を果たしたエスペランチストは少なくないことが見られる。例えば前述の1919年5月31日東京帝大法学部でエスペラント学会が開催した普及講演会において、吉野作造は「エスペラントと私」というテーマで講演した。

吾が国にてこの新言語の研究と普及とを計れるのは明治39年ころよりのことなりとす。即ち38年の4、5月頃、東京帝国大学教授文学博士黒板勝美エスペラントに関する談話を雑誌「直言」に掲げし時は絶て反応も無かりしが翌39年5月読売新

聞に再び同氏の談話筆記を掲ぐるに及び漸く世間の注意を引けり。とあるが私は之より先き明治36年5月発行の「新人」誌上に「世界普通語エスペラント」と題し可なり詳細の紹介を公にしたことがある。[中略]「新人」は海老名弾正先生の牧せる本郷教会の青年信徒の宣伝機関で、同先生を主宰とし、大学々生たりし私も、その編集同人の一人であつたのである。[中略]オーコンノル著「エスペラント」と云ふ獨案内を倫敦へ注文した。この本は今以て所蔵して居るが、11月10日到着の附記があるから、私も明治36年11月から之を学び始めたと云ふわけになる¹⁹。

すなわち、堺利彦が1905年に『直言』で「エスペラント語の話」を発表する前に、海老名弾正が主宰するキリスト教関連の雑誌『新人』の編集者の1人である吉野は、すでに1903年にエスペラントを紹介し、エスペラントを学び始めたというのである。また、同文章には吉野が『新人』に寄せた約3000字のエスペラントを宣伝する「世界普通語エスペラント」を再録し、その一段落目の小見出しは「普通語の必要」とある²⁰。吉野の思想源流にキリスト教との関係があるかどうかは別として、彼はヨーロッパ各国の教会の間で、交流するために公用語が必要とされている現状を知っていた。吉野は日本と世界とをつなぐこの言語を学習し宣伝していたとわかるであろう。

吉野作造は、1916年1月と1918年1月の『中央公論』に「憲政の本義を説いて其有終の美を濟すの途を論ず」と「民本主義の意義を説いて再び憲政有終の美を濟すの途を論ず」を発表し、民本主義、つまりデモクラシーを提唱した。これらの論文は、のちに大正デモクラシー運動のマニフェストとして、日本の近代言論史に記録される²¹。また、1928年2月に刊行された『社会科学』の特集「日本社会運動史」に、吉野の「民本主義鼓吹時代の回顧」が掲載された。彼は自身の経験から、大正デモクラシーの直接の源流が憲法発布前の自由民権運動にあるのではなく、社会主義運動にあることを強調している²²。吉野はエスペラントの影響でデモクラシーを唱えるようになったわけではないが、エスペラント運動が社会運動と関わるようになったことや、人類の平等を唱え言語の平等を求めるエスペラントの理念などから見れば、エスペラントがなぜデモクラシーを提唱する知識人を引き付けたかがわかるだろう。

エスペラント運動と大正デモクラシーとの関係は大杉栄の例からも見られる。周知のように、1923年9月1日に関東大震災が起きた。地震後の火災による被害が拡大し、死者・行方不明は14万人、全壊・焼失家屋57万戸の大惨事となった。日本エスペラント学会の事務所であった小坂宅と機関誌印刷の大道社は無事で、1ヶ月も休むことなく発行できたが、震災の混乱のなかで、朝鮮人暴動のデマが流され、多数の朝鮮人や中国人が各地の自警団によって虐殺され、労働運動幹部が軍隊により殺害される亀戸事件などが発生した。戒厳令が敷かれるなか、日本エスペラント運動初期の重要な担い手である大杉栄が、淀橋町柏木の自宅付近から大手町の麹町憲兵分隊に連行され、殺害される事件（甘粕事件）も起こった²³。大杉は東京外国語学校でフランス語を学び、のちにエスペラントを独習した。1906年日本エスペラント協会の評議員となり、協会付属のエスペラント学校を創設し講師を務めた。また1908年には中国留学生にエスペラントを教えた²⁴。大杉は虐殺された

が、中国人留学生の師復らが中国に戻って、エスペラント普及運動を続けた。若くして亡くなった大杉栄だが、彼の影響でエスペランチストになり、社会運動を行った者も多い。このエピソードは、吉野作造が言う大正デモクラシーの直接の源流が社会主義運動にあることの証拠の1つになるのではないか。

日本エスペラント運動は、反政府の立場に立つ左翼知識人も関わっていたが、その主流は、国家主義を擁護し政策に協力しつつ運動を行うものであった。特に1930年代の満洲事変以降は植民地だけではなく、国策に協力しながら満州国への普及運動も広めていた²⁵。本論文は台湾エスペラント運動を対象としており、第四章で台湾のプロレタリア・エスペラント運動を論じるため、次の第四小節では、日本のエスペラント運動とプロレタリア文芸団体との関係についてのみ簡単にまとめる。

(四) エスペラントとプロレタリア文芸団体

1924年7月に仙台で行なわれた第12回日本エスペラント大会において、「サート(SAT)²⁶」分科会が初めて設けられた。のちの1927年に「サート」の機関誌『Sennaciulo(無民族者/無国籍者)』を輪読する「柏木ロンド」というエスペラント研究会が結成され、サートの日本における連絡機関となった。この「柏木ロンド」研究会は、日本のプロレタリア・エスペラント運動の始まりだと言われる²⁷。ところで、エスペラントは1920年代初期から左翼の知識人の間で知られており、左翼系の刊行物にエスペラント名が付いているのもよく見られる。例えば1921年に創刊された『種蒔く人』(La Semanto)は、表紙のエスペラント名だけではなく、創刊号に「神が人間を作ったのではなく、人間が神が作ったのである云々」の宣言をエスペラント文で出している²⁸。『種蒔く人』を継いだ『文芸戦線』(La Fronto、日本プロレタリア文芸連盟機関誌)や1928年の『国際文化』(La internacia kulturo)などもエスペラントで誌名を表記している。

1925年11月、「日本プロレタリア文芸聯盟」が結成され、当時の進歩的な革命作家やプロレタリア作家と言われている者たちの大きな統一戦線組織となった。文芸聯盟はのちに「日本プロレタリア芸術聯盟」と改め、文学、演劇、美術などの専門部門を作った。1926年には労働運動のなかで、山川均らを中心とするのちに労農派と言われる者たちと、福本和夫を中心とするグループとの間に深刻な対立が起こり、「山川イズム」と「福本イズム」の対立は「芸術連盟」にも持ち込まれた。その後、日本のプロレタリア文芸運動は分裂し、「労農芸術家聯盟」(労芸、機関誌『文芸戦線』)と、「前衛芸術家同盟」(前芸、『前衛』)および「プロレタリア芸術連盟」(プロ芸、『プロレタリア芸術』)という3つの団体が鼎立した。蔵原惟人が組織を統一しようと呼びかけ、1928年3月に「日本左翼文芸家総連合」が結成されたが、その直後、日本の左翼運動に対する空前の弾圧である三・一五事件が起きる。共産党と距離をおいていた「労芸」は連携に消極的になり、「プロ芸」と「前芸」は組織を合同し、「全日本無産者芸術連盟」を結成した。

「全日本無産者芸術連盟」のエスペラント組織名はNippona Artista Proleta Federatioで、頭文字の略字が「NAPF」であるため、「ナッフ」と呼ばれた。12月に改組し、「全日本無産者芸術団体協議会」と改名したが、略称は「ナッフ」のままであった²⁹。「ナッフ」は

機関誌『戦旗』を刊行し、文学、演劇、美術、映画など各方面で広くプロレタリア文化運動を推進していた³⁰。だが「大衆化の論争」、「形式主義論争」、「芸術価値論争」などの議論や運動に対する思想的相違から、蔵原惟人が芸術運動を再組織しようと再度呼びかけ、1931年11月に日本プロレタリア文化連盟「コップ」(Federacio de Proletaj Kultur Organizoj Japanaj, KOPF)が立ち上げられた³¹。同年12月、コップが中央協議会機関誌『プロレタリア文化』を発行し、また1933年4月に『コップ』を刊行した。

もう1つ重要な組織は、1929年10月創立された「プロレタリア科学研究所」である。この組織は、1930年代以降、エスペラント関連の書籍を多く出版した。所長を務めた秋田雨雀は、エスペラント運動に大きな力を注ぎ、1928年に創刊された国際文化研究所の機関誌『国際文化』でもエスペラント講座を開いた。また1930年に「日本プロレタリア・エスペランティスト協会」(PEA)が結成された。1年後全国的組織の「日本プロレタリア・エスペランティスト同盟」(PEU)への改組を経て、1937年の支那事変までに運動が終息したと言われる³²。それ以外にも日本プロレタリア・エスペランティスト協会会報『AVANGARDO (前衛)』、日本プロレタリア・エスペランティスト同盟中央機関誌『ポエウ (PEU)』、プロレタリア・エスペラント通信『ペーク (PEK)』、日本無産者エスペランティスト会会報『無産者エスペランティスト』などの関連雑誌が、1930年代以降に次々と創刊された。このようにエスペラント運動は、1930年前後にプロレタリア文芸運動と強く結びつき、文化運動の1つの象徴的な存在でもあったと考えられる。

以上、1930年代までの日本のエスペラント運動をおおまかに紹介した。戦争期に入った1940年代以降のエスペラント運動は、別の形で推進された。それについては、台湾エスペラント運動を論じる際に合わせて紹介する。以下の第二節から、台湾エスペラント運動の考察に移る。

第二節 武装抗日時期における台湾のエスペラント移入

周知のように、日本の台湾統治は1895年から1945年まで約50年間に渡った。日本統治下における抵抗運動は、日本領有に対する阻止運動や清国への復帰運動を含め、武力を中心とした組織的かつさまざまな武装蜂起が相次いでいた。それに対して当局の弾圧が加えられ、抵抗と弾圧の繰り返しのうちに、植民地統治が確立されていった³³。1915年4月の西来庵事件を最後に、漢人による武装抗日運動はほとんど終息した。その後、第一次世界大戦時に勃興したデモクラシーや民族自決主義、さらには社会主義の影響を受け、政治闘争によるさまざまな抵抗運動が展開された³⁴。のちに詳述するが、台湾エスペラント運動は、武装蜂起がまだ発生していた1913年に始められた。西来庵事件への弾圧を含む当時の社会や政治状況の影響を受けて一時沈滞し、ようやく1919年に再開した。

前述したように、1906年に二葉亭四迷が『世界語』を出版した。『世界語』の出版とほぼ同時に、日本内地の新聞紙はもちろん、1906年以降には台湾でも、『台湾日日新報』に「エスペラント語流行」、「魯魚焉馬」、「世界語」、「エスペラント協会大会」、「所謂世界語」、「国際語に就て」、「万国エスペラント会議」など日本人が執筆したエスペラント関連の文章が掲載された³⁵。「国際語に就て」(1909.01.01)の作者村井徳寿は、同年5月の日本エ

スペラント協会会員名簿に名前が載せられる³⁶。しかしエスペラントが本格的に台湾に移入されたのは1913年以降である。以下、台湾エスペラント運動の開拓者児玉四郎と彼が作ったエスペラント小冊子を紹介しながら、運動の展開を整理していく。

(一) 児玉四郎と『Esperanta Libreto』

1909年5月の日本エスペラント協会の機関誌『Japana Esperantisto』に掲載された会員名簿によると、台湾地方の会員は、成富五十子、宮荘福丸、河内杵仙、村井徳寿など台北、台中、彰化に滞在する4人の日本人であった³⁷。しかし彼らの身分や、いつエスペランティストになったのかは確認できず、のちの台湾エスペラント学会の会員名簿にも、彼らの名前は見当たらない。一方、日本統治期に発表された台湾エスペラント運動の歴史についての文章としては、1926年6月杉本良の「Esperanta Movado en Formoso : Vidanta el la fenestro de la Verda Domo³⁸」、1931年9月武上耕一の「台湾に於けるエスペラント運動に就て³⁹」、同年12月連温卿の「台湾に於けるエスペラント運動年代記⁴⁰」、そして1936年6月連温卿の「台湾エスペラント運動の回顧⁴¹」の4篇がある。4篇とも児玉四郎について言及している。例えば武上耕一は、「1913年9月、台北艋舺龍山寺で児玉四郎氏がエス語初等講習会を開かれた事が、台湾エスペラント運動史の最初の頁を飾る出来事であります⁴²」と述べている。連温卿は、「台湾に於けるエスペラント運動は1913年児玉四郎氏に依つて宣伝し普及されてから19年になつた⁴³」と言っている。すなわち、台湾のエスペラント運動は児玉が1913年に始めたという。連は運動の経緯について次のように述べている。

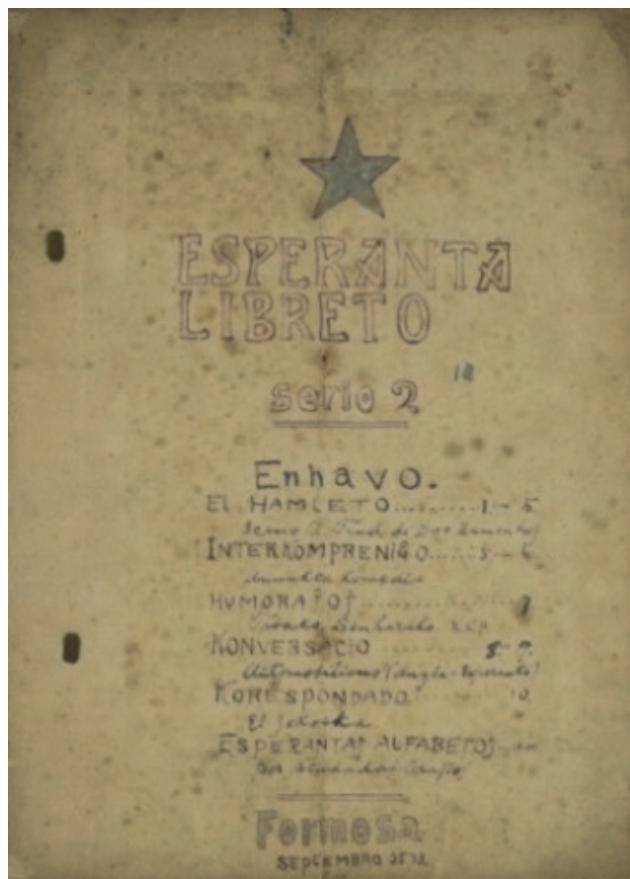
台湾日々新報紙上に“Esperanta Libreto”無料送呈の記事を見てから、今まで記憶の隅つこにあったエスペラント、世界語、学習容易などの印象が急に呼び起こされた。“Esperanta Libreto”とは児玉四郎氏が蒔菟版で印刷された小冊子で、第1輯は1913年8月20日附になつてゐるし、最終号の第5輯は翌年の1月5日附になつてゐる。これは台湾に於けるエスペラント雑誌の濫觴である⁴⁴。

ここから、児玉四郎が『台湾日日新報』を通じてエスペラントを宣伝していたことが見て取れよう。無料送呈の記事がいつ掲載されたかはまだ確認できないが、児玉は、同紙に1913年5月末から6月初まで「エスペラントに就て⁴⁵」という文章を3回連載した。新聞の復刻版では該当箇所が読み取れないが、この文章は、台湾で最初に最も詳しくエスペラントを紹介したものと思われる。

1911年の時点では、まだ東京市京橋区に在住していた児玉四郎は、「有価証券仲立商」という職業名で日本エスペラント学会に加入し⁴⁶、1913年に三井物産の社員として台湾支社に赴いた。その後、児玉は台湾人の蘇璧輝の協力を得て、1913年9月に台北の龍山寺で初めてエスペラント講習会を開き、12月に「日本エスペラント協会台湾支部⁴⁷」を創設した。当初の会員は16名だった⁴⁸。1914年3月の日本エスペラント学会の機関誌をみれば、児玉が最初に台北で3つの講習会を開き、そのほかに枋（板）橋の富豪林本源宅にも教えに行き、さらに全島で通信教育を行い、学習者の大部分は本島人であったことがわか

る⁴⁹。児玉は、1915年に当時エスペラント界空前の大著『組織的研究 エスペラント講習書』を台湾支部と横須賀支部の名義で出版したが、同年6月に東京に戻った⁵⁰。後述するが、児玉の帰京で台湾エスペラント運動は一時休止したが、それは1915年に起こった武装抗日運動「西来庵事件」との関係もあった。

連温卿の回顧で言及した無料送呈の『Esperanta Libreto』という小冊子は、児玉四郎が1913年8月から1914年1月にかけて発行した雑誌である。全部で5号あったが、第2号と第3号のみ現存する。ガリ版印刷で薄い半透明の用紙に書かれた文字の色がだいぶ褪せているため、内容の判読はかなり困難であるが、目次を見れば、第2号では1頁目の紹介文のほか、「El Hamleto (ハムレット)」、「Interkompreniĝo (相互理解)」、「Humuraĵoj (笑い話)」、「Konversacio (会話)」、「Korespondado (文通)」、「Esperantaj Alfabetoj (エスペラントのアルファベット)」などがあり、ほぼエスペラントで書かれたものである。



図：『Esperanta Libreto』第2号、表紙。

第3号はほぼ日本語で書かれたもので、「国際語の理想」、「内外エスペラント雑信」、「エスペラント初步講義 (第二章、第三章)」、「エスペラント書籍解題」などが載せられている。第5号で廃刊した原因は、台湾支部の結成という段階的な目標が達成されたことや、『組織的研究 エスペラント講習書』の編集に着手したことのためだと考えられる。

1915年に発行された『組織的研究 エスペラント講習書』については第三小節で紹介するが、この本が出版された直後の6月に、児玉は東京の三井物産本社に戻った。運動はしばらく休止したが、1919年以降に台湾人エスペランチストによって再開された。ちなみに、1935年2月に児玉が再び台湾に来た時に、台湾エスペラント学会は彼の歓迎会を行ったという記録が残っている⁵¹。

(二) 最初の台湾人エスペランチストたち

1913年12月の時点で、講習会以外に児玉四郎の通信教育を受けた者は全島で約70人いた⁵²。最初の台湾人エスペランチストは、蘇璧輝、連温卿、黄呈聰、黄鉄、王祖派、謝

文達、張福興などがいた。のちに台湾エスペラント学会の機関紙の編集者も務めた黄鉄の経歴は判明できないが、王祖派は艋舺在住の医者で⁵³、謝文達は台湾のパイロットの第一人者で⁵⁴、張福興は近代音楽家の第一人者⁵⁵であった。以下では、当時エスペラント運動に最も関わった蘇璧輝と連温卿、および台湾新文学運動に大きな影響を与えた黄呈聰を簡単に紹介しておく。

1. 蘇璧輝

台湾エスペラント運動は、在台日本人によって始められたが、最初の台湾人エスペラントチストは誰であろうか。連温卿は次のように述べている。

もし単にエスペラントを識ると云ふだけでも、恐らく台湾に於ては蘇氏を以て嚆矢だと云える。と云ふのは、児玉氏の未渡台五年前に、蘇氏はすでに長谷川二葉亭の「世界語読本」によつて識つてゐたからである。講習会の開始は殆ど蘇氏の懇請から会場の世話参加者の勧誘などの成功によることであつた⁵⁶。

この「蘇氏」は、蘇璧輝のことである。蘇の漢詩やエスペラントに関する文章が『台湾日日新報』に掲載され、同紙には「蘇璧輝君娶婦」（1908.11.21）という報道もある。蘇璧輝は同紙の記事を通して『世界語』を知り、「児玉氏の未渡台五年前に」、つまり1908年からエスペラントを独習してきた。武上耕一は「当時の講習生は内台人8名でありまして、この摇篮の中から台湾エスペラント学会の中心人物である連温卿君、蘇璧輝君などが育まれたのであります⁵⁷」と述べているが、しかし、蘇璧輝は1908年にすでにエスペラントの独習を始めており、児玉の運動は蘇が台湾で普及運動に取り組むきっかけを与えたのではないだろうか。ちなみに、医者である弟の蘇璧琮⁵⁸も、のちに台湾エスペラント学会の会員となった。

貿易商である蘇璧輝についての研究は非常に乏しいが、彼は漢詩だけではなく、エスペラントから訳した「飢寒に泣く児童達：ブタペスト市の五万の小児」や、エスペラントを宣伝するために執筆した「国際語の問題：エスペラントの発達と研究過程」などを『台湾日日新報』で発表した⁵⁹。また、1915年に出版された『組織的研究 エスペラント講習書』に、蘇の「余のエスペラント語研究に就ての感想」が収録されている。1915年以降の台湾エスペラント運動の実際の活動はあまり見受けられないが、日本エスペラント協会の機関誌にある「各地支部会」には「台湾支部」がまだ存在し、蘇璧輝が幹事を務め、台湾人会員も何人か所属していることが記されている。1919年に「日本エスペラント協会台湾支部」を引き継いだのも、蘇璧輝、連温卿、黄鉄の3人の台湾人であった。

日本エスペラント協会は1919年12月に「日本エスペラント学会」と改組したが、台湾支部はそれに先立ち11月に「台湾エスペラント学会」と改称し、蘇璧輝の居住地に事務所を構え⁶⁰、同年末にエスペラントの商業仲介所を創立した⁶¹。1921年に連温卿や蔣渭水らと台湾文化協会を創立した当初、蘇は協会の理事も務め、文協の「通俗學術土曜講座」で「国際語之過去現在及将来」を講演したという記録が残っている⁶²。1923年に「治警事

件) (『治安警察法』違反検挙事件) が起こった際には、台北監獄に投獄されている⁶³。

「民族主義的、社会主義的傾向を多分にもった」⁶⁴と評価される蘇璧輝は、偶々上海から訪ねてきた息子とともに 1937 年夏にアモイで支那兵に銃殺されたという記事が『La Revuo Orienta』に載った⁶⁵。比嘉春潮の補足によると、蒋介石と毛沢東が内戦をしていた時、蘇はある旅館の 2 階にいて、ちょうど日本軍の空襲があり、蘇がタバコを吸ったので蒋介石から漢奸とみられて殺されたと言っている⁶⁶。

次に、蘇璧輝と一貫して学会の中心人物であり、社会運動者としてよく知られた連温卿について簡単にまとめる。

2. 連温卿

連温卿 (1895-1957) は台北で生まれ、本名は連嘴 (レン・スイ)。温・連、陳規懷⁶⁷などの筆名で多くの文章を発表した。エスペラント雑誌では、Lepisomo (蠹魚)、L. S. Ren などの筆名を使っていた。戦後、史可乗という名前でエスペラント運動関連の文章を発表した。連温卿は初等教育しか受けておらず、1913 年にエスペラントを学び始め、1915 年末に日本エスペラント協会に入会した⁶⁸。1919 年から蘇璧輝らと運動に取り組み、1921 年に蔣渭水らとともに台湾文化協会を設立した。左翼政治運動家である許乃昌からは共産主義者と見なされる一方で⁶⁹、山川均と関わったことから、社会民主主義者と評価されている⁷⁰。1919 年 9 月の『Japana Esperantisto』で、連は台湾支部の機関誌『La Verda Ombro (緑の蔭)』を同年 10 月に発行すると宣伝した。

1920 年代から、連温卿は台湾のメディアで「英国に於ける英語擁護運動とエスペラント⁷¹」、「言語的社會性質⁷²」、「怎麼是世界語主義⁷³」などのエスペラント関連文章を発表した。現在参照可能な『La Verda Ombro』を見ると、「言語的社會性質」、「怎麼是世界語主義」はエスペラントでまず発表されたことがわかる。それは Lepismo の筆名による「Kia estas Esperantismo ?⁷⁴」、「Skizo de Parolado pri Esenco Lingva en socio⁷⁵」である。また連は学会の主な事務を担当しており、機関誌の編集者であるため⁷⁶、雑誌中の無署名の文章の大半は彼によって執筆されたか、翻訳された可能性が高い。

台湾エスペラント運動に最も力を入れた連温卿は、公学校教育しか受けていないが、エスペラント運動を進めていくうちに、組織のやり方を模索しながら思想が形成され、社会運動や政治運動へ活かし、台湾の「非武装抗日運動」を促した台湾文化協会の中心人物となり、文協の分裂を引き起こした人物にもなった。この代表的な知識人のエスペラント観や彼の思想の形成と変化については、第六章でより詳しく論じる。

3. 黄呈聰

もう 1 人は黄呈聰 (1886-1963) である。彰化生まれの黄は、1907 年に台湾総督府国語学校卒業後、鳳梨 (パイナップル) 缶詰業、軽便鉄道業や糖米業などを経営し、区長、庄長を歴任した。1917 年総督府より紳章を授与された後、32 才で日本に留学した。1921 年に早稲田大学政治経済科に入学し、「新民会」⁷⁷の幹事を務めたほか、台湾文化協会にも参加した。1923 年早稲田大学を卒業し、同年『台湾』雑誌社に入社した。1925 年アモイ

に渡り、南京・上海でキリスト教神学を専攻し、1930年に帰台して布教する。のちに日刊『台湾新民報』の社会部長を務めた⁷⁸。

黄呈聰は1913年に児玉四郎のエスペラントの通信教育を受け、彰化で研究会を開いたことがある⁷⁹。1916年3月の日本エスペラント協会の機関誌『Japana Esperantisto』の会員名簿にも彼の名前があり、連温卿より早くエスペランチストになったとわかる。また1921年に「国際商業語協会」が横浜に設立され、黄呈聰も会員になった⁸⁰。鄧慧恩は黄の蔵書から『エスペラント和訳辞典』（東京、1917）、『英漢雙解基本世界語字典』（上海、1927）など2冊のエスペラント関連書籍を見つけたが、どちらにも黄のサインが入っており、メモも多かったという⁸¹。このことから、黄は1913年から通信教育を受けた後、日本エスペラント協会や国際商業語協会に入会し、東京や上海に渡っても、1920年代後半まではエスペラントを勉強し続けたことがわかるであろう。

特に言及すべきは、黄呈聰が1923年に『台湾青年』で発表した「論普及白話文的新使命」が、台湾の文字改革の議論を引き起したことである。黄の文字改革についての考え方は、中国で経験した五四運動とも関係があるが、この時点では、彼はまだ日本にいて、『台湾』雑誌社に務めていた時期である。第五章で詳述するが、黄呈聰は、日本国語・国字問題とも関わったエスペラント関連組織に加入することで、日本の言文一致に関する議論に接して刺激を受け、まだ漢文で知識を流通していた台湾の文章語も近代文体に改造しようという発想が芽生えた。

続いて、台湾におけるエスペラントのいくつかの異称について紹介する。

（三）Esperanto、世界語、エスペラント、国際語、愛斯潑蘭多、 裔須敵蘭土、挨斯批蘭杜、愛斯不難読、益斯伯蘭特、愛世語

エスペラントは台湾伝来以後、植民地下の台湾の複雑な言語状況により、いくつかの異称を持っていた。前述のように台湾人エスペランチストの第一人者蘇璧輝は、1908年に二葉亭四迷の『世界語』でエスペラントを学習した。『世界語』の正式な書名は『教科用 独習用 世界語（エスペラント）』であり、「世界語」という3文字が太字にされていた⁸²。エスペラントが台湾に伝えられた当初は、日本内地と同様に「世界語」として伝えられた一方、「エスペラント」という名称も同時に認識されていたことが、『台湾日日新報』の記事からもわかる。また日本内地で「エスペラント」という言い方が徐々に定着していったことが、当時の左派誌の『種蒔く人』や『改造』⁸³などからうかがえる。

なおかつ1913年、児玉四郎によって発刊された『Esperanta Libreto』という小冊子や、それ以外にも教科書の内容や、次々と行われたエスペラントの研究会などから、エスペラント語の「Esperanto」と日本語の「エスペラント」などの表記が、すでに台湾の日本人や台湾人のエスペランチストに広く認識され使われていたと考えられる。

ここで特に注目したいのは、当時の台湾人がそれぞれの場面でどのようにエスペラントを表現していたかということである。多くの場合、日本語で書かれた文章では「エスペラント」が使われており、漢文で書かれた文章では「世界語」と表現されている。例えば「エスペラントと国際連盟⁸⁴」（藤澤親雄、1921）、「英国に於ける英語擁護運動とエスペラン

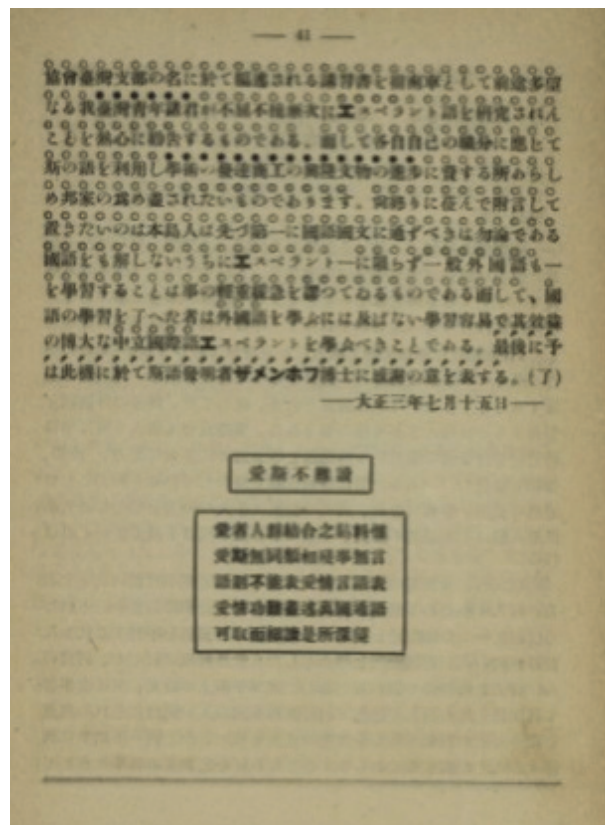
ト⁸⁵」（連温卿、1921）などの日本語の文章では「エスペラント」が使われているのに対して、漢文の「世界語概釈⁸⁶」（転載、1912）や「怎麼是世界語主義⁸⁷」（連温卿、1926）では「世界語」が使われていた。だが、漢文の「世界語」の使用例は、日本語の「エスペラント」より少なかった。これはおそらく当時の国語政策とも関係があるであろう⁸⁸。また、台湾エスペラント運動の最初の推進者には日本人が多かったため、「エスペラント」という言い方がすでに定着していたことが、台湾で発行されたエスペラントの書籍や刊行物からわかる⁸⁹。

そのほか、台湾で使われたエスペラントの別称はまた7つある。それは、「国際語」、「愛斯潑蘭多」、「裔須敵蘭土」、「愛斯不難読」、「挨斯批蘭杜」、「益斯伯蘭特」と「愛世語」である。

まず、「国際語」について説明する。「国際語」と「世界語」とはまったく別物であって、決して混同してはならないとザメンホフは考えていた⁹⁰。ザメンホフはエスペラントを考案した時、「国際語」（国際共通語）として推進したわけである。だが、日本に伝えられた当初、「世界語」がよく使われ、「国際語」は「世界語」を説明する場合や⁹¹、「外国語学習の必要」や「外国語（特に英語）学習の困難」を強調し、ヨーロッパ諸国の言語に基づいて作られたエスペラント語を「国際共通語」として採用しようとする意見を述べる際に、しばしば用いられた⁹²。そのため、例えば蘇璧輝は『台湾日日新報』の「国際語の問題 エスペラントの発達と研究過程⁹³」というタイトルの記事のなか、国際交流や世界観の視点で「国際語」としてのエスペラントの重要性を強調している。

右図：蘇璧輝、「余のエスペラント語研究に就ての感想」、『組織的研究 エスペラント講習書』、41頁。

次に、「愛斯潑蘭多」、「裔須敵蘭土」と「愛斯不難読」の3つの別称である。1912年12月の『台湾時報』漢文版に「世界語概釈⁹⁴」という文章が転載され、エスペラントが「愛斯潑蘭多」と音訳されたが、ほかのところではこうした訳語は見当たらなかった。中国の新聞から訳されたものためか、「愛斯潑蘭多」の台湾語読みになれば「Ài-su-phuah-lân-to」になり、発音がかなりはずれる。また、1914年3月の日本エスペラント協会の機関誌『Japana Esperantisto（日本エスペランチスト）』に、「台湾支部規約」がエス



ペラントと漢文で掲載された。規約から、当時のエスペラントが台湾で「裔須敵蘭土⁹⁵」（台湾語読み：È-su-pè-lân-thôo）と呼ばれ、台湾支部の名称が「日本エスペラント協会台湾支部」と「日本裔須敵蘭土台湾支部」と表記されたことがわかる⁹⁶。「裔須敵蘭土」は一時期しか使われず、同時期の「愛斯不難読」（台湾語読み：Ài-su-put-lân-thok）のほうがより馴染んでいたようである。例えば、蘇璧輝が1914年に書いた「余のエスペラント語研究に就ての感想」では、エスペラントを「愛斯不難読」と称している⁹⁷。この「愛斯不難読」という別称は、おそらく1910年代から台湾人エスペランティストの間で使われており定着したのであろう。1920年代まで至っても、連温卿の講演原稿「言語之社會的性質」にも「愛斯不難読」という表現がある⁹⁸。

さらに、「挨斯批蘭杜」、「益斯伯蘭特」など2つの訳語がある。1924年の『台湾民報』では、より原語に近い台湾語読みの「挨斯批蘭杜 (E-su-phue-lân-tōo)」⁹⁹や、1925年の『台湾日日新報』漢文版では、日本語読みのあて字の「益斯伯蘭特¹⁰⁰」は、いずれもあまり使われていなかったようである。このことから、1920年代初期のエスペラントの漢字訳語はまだ統一されていなかったとわかるだろう。

最後の「愛世語」という別称は、知識人の間によく知られている。連温卿は次のように書いている。

世界語 (Esperanto – 愛斯不難読、中国ではまた『愛世語』と略称する) が世界に広まって以来、40年が経ったが、共鳴者の中でこの言語を話せる人は、全世界に五百万人あまりいる¹⁰¹。

すなわち、「愛世語」とは中国での略称である。もちろん、中国には万国新語や愛斯不難読、世界語などの別称があるが¹⁰²、ここから中国ではエスペラントを「愛世語」と称することを台湾人が認識していたことがわかる。また、『台湾語典』の著者連雅堂は、1932年に『三六九小報』で「愛世語」に言及した。

我等はこうした文運が盛んになった際に、固有の華文や和文、英語、仏語、露語、独語も使用可能であり、さらにローマ字で白話文を書くことも構わない。しかし私は多くの人と互いに感情を通わせるため、愛世語も学ぶ。¹⁰³ (太字：引用者)

第五章でも触れるが、1930年代の「台湾話文論争¹⁰⁴」が起こった際に、台湾の知識人は、台湾の「郷土」文学を中国白話文で書くか台湾話文で書くかについて激しく議論した。ここで連雅堂は「本土與世界」という題名で多くの外国語が台湾で使われるようになった状況を述べながら、ローマ字やエスペラントにも言及している。彼はおそらくエスペラントを学んだことがなく、「名称」だけ知っていたのであろうが、エスペラントが国際共通語だと認識していたのではないだろうか。

ところで、1936年にプロレタリア作家の楊逵により創刊された『台湾新文学』に、連温卿は日本語で「エスペラント講座」を2回載せている¹⁰⁵。いくつかの異称を持つエスペ

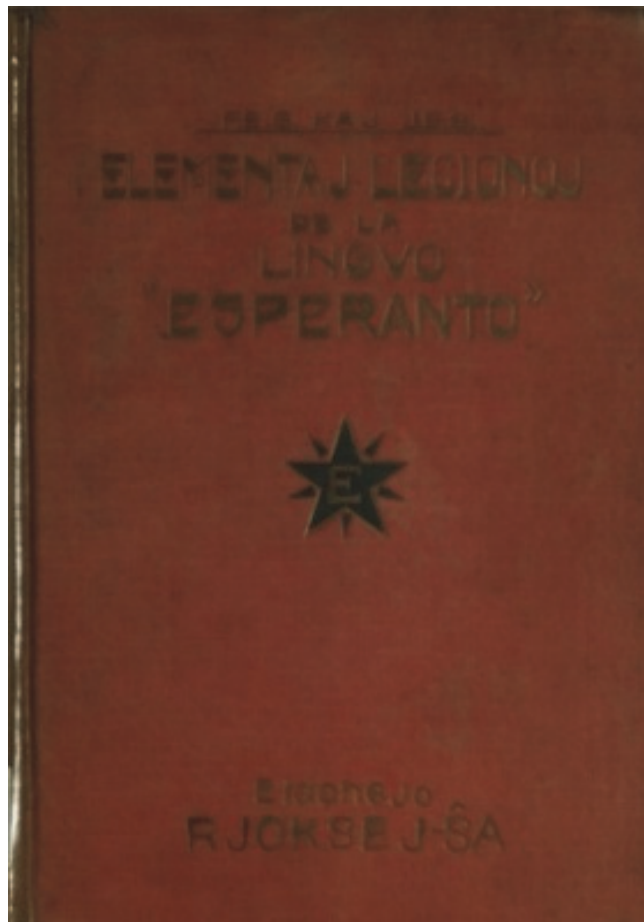
ラントは、その時点で完全に「エスペラント」という名称のみで認識されていた。それは、1930年代後半以降、日本語の普及が進み、知識人も日本語で書くことに慣れてきたからであろう。

(四)「日本エスペラント学会台湾支部」と『組織的研究 エスペラント講習書』

児玉四郎は蘇璧輝らの協力を得て運動を始め、日本エスペラント学会台湾支部を成立し、小冊子の『Esperanta Libreto』は段階的な役割を果たした後に廃刊した。児玉はのちに自宅にて「緑星社」を創立した。1915年3月に日本エスペラント協会横須賀支部が台湾支部と共同編集という形で、「当時の世界最大の初等エスペラント講習書」と言われる『組織的研究 エスペラント講習書』を発行した。発行所は児玉の立ち上げた緑星社となっている¹⁰⁶。出版に際して中村精男、黒板勝美ら日本の重要なエスペランティストや、『読売新聞』、『台湾日日新報』、『芸備日日新聞』、『国民新聞』などのメディア、そして台湾人士紳の林鶴寿、黄玉階、呉昌才らの援助を受けたという¹⁰⁷。

この4百頁余の分厚い講習書は、出版する前の1914年8月に『台湾日日新報』に広告が載せられた¹⁰⁸。内容は前・後半部に分けられる。前半部は、独習用の講習書になっており、後半部は、エスペラントと国語（日本語）、あるいは国際情勢などの論述、各国の刊行物、アジアのエスペラント組織などが紹介されている。蘇璧輝の「余のエスペラント語研究に就ての感想」という文章から、当時の台湾人のエスペラント学習のきっかけや学習方法などが垣間見える。

だが、この本が1915年に発行された時点で、運動は「すでに退潮になりかけた時期」を迎えており、「どんだの砂地を表し」た状態が1919年の末頃まで続いた¹⁰⁹。それはもちろん児玉が1915年6月に帰京したことと関係があるが、1915年に起きた大規模な武装蜂起「西来庵事件」とも深く関わっている。次に、西来庵事件のエスペラント運動への影響と1919年の台湾エスペラント学会の創立、またエスペランティストと台湾文化協会の設立との関わりについて分析していく。



図：『組織的研究 エスペラント講習書』、表紙。

第三節 西来庵事件と台湾エスペラント学会

全島で通信教育を受けた者は70人を超え、1915年3月には「当時の世界最大の初等エスペラント講習書」と言われる『組織的研究 エスペラント講習書』が発行され、また日本内地の横須賀支部との連携も始まったばかりであったにもかかわらず、なぜ台湾の運動は急に「どん底の砂地を表し」た状態となったのであろうか。それには当時の植民地統治がまだ不安定で、武装蜂起が相次いで発生している社会状況を考えなければならないであろう。本節では、台湾エスペラント運動の1919年に台湾エスペラント学会改組まで、社会状況との関係を整理し、「非武装抗日運動」時期の最初の組織である台湾文化協会との関わりを論じる。

(一) 1915年西来庵事件の影響

1915年に起きた漢人による大規模な武装蜂起「西来庵事件（^{ダバニー} 礁吧咄事件）」は、台湾史上重要な武装抗日運動であり、「非武装抗日運動」との分岐点でもあった。この事件は「大明慈悲国」を建国する企てで、ほぼ台湾全域に及んだが最終的には鎮圧された。866名に死刑判決が下されたものの、大正天皇の即位式の恩赦があり766名が無期刑に減刑された¹¹⁰。1915年の西来庵事件から1921年の台湾文化協会が創立されるまでの間は、「非武装抗日運動」の胎動期であったと言われる。この胎動期を検証する際には、1914年板垣退助創設の「同化会」や1919年に蔡恵如が創設した「啓発会」、あるいは1920年の『台湾青年』の創刊などがよく言及されるが、エスペラント運動の視点から検証すれば、これらとは別の非武装抗日運動への影響などを見出せるかもしれない。

連温卿は1936年に日本エスペラント学会の機関誌に発表した運動の回顧文では、西来庵事件に言及している。

それから考慮せねばならないことは、エスペラントが台湾へ入ってきた時期は極めて不利な社会的条件のあつたことである。恰度台湾を日本から分離すること種の所謂騒擾事件の最後たる西来庵事件が勃発した最中であつた。一方には日露戦後に於ける日本資本主義の発達に促されて漸く発達しかけたところの土着資本が急速に産業資本化しつつある傾向を表はしたときである。この対抗資本に対する抑制として「会社の文字使用に対する禁止条例」を制定せねばならなかつた。それを政治的に最もよく象徴した政策は板垣退助伯の同化会に対する禁止である。台湾人を日本人と同等に待遇せよとの要求が同化会の目的であつた。この主張すら入れられないときである。だから講習会の隣部屋に私服の居たことや児玉氏が月一回位は警務課に出頭して台湾人会員の動静を申告せねばならないところの理由も、一にここから由来する¹¹¹。(太字：引用者)

この証言からすれば、西来庵事件がエスペラント運動に間接的影響があつたことや、エスペラント運動も政府の監視対象となつたことがわかるであろう。実際、西来庵事件が勃発する前に、「同化会」も禁止され、台湾島内には政治的な緊張感が漂っている。戦後の

回想文でも、連温卿は「1913年以來行なってきた世界語運動—Esp. movado は、恰も嫌悪な政治的雰囲気から逃げ出したい台湾人に1つの道を準備したものだ。Esperanto—世界語の内在思想は民族を超え、反差別の人類主義—Homaranismo を信仰するものだからである。しかも実際に使用すると、知識を増進できる上、商売にも役に立つ¹¹²」と述べている。すなわち、エスペラントは別のルートで政治問題を考えようとする青年たちに新たな道を提供したのであろう。だが、エスペラント運動すらも政府から注意された。回想文中に言及した児玉が月に1回警務課へ台湾人会員の動静を申告することは、国際的な背景とも関わっていた。例えば1914年12月に蘇璧輝がエスペラント観について総督府囑託の松岡正男と論争している。

児玉氏と足並を揃へて実用的方面から台湾人知識階級の間には宣伝を務めてきた蘇氏はこの際遂にある重大問題に逢着した。それは官僚と台湾人知識階級の社交機関たる大正協会例会の席上に於て後に九大の講師になった台湾総督府官房調査課囑託松岡正男氏が真向からエスペラントはロシアの虚無党が使ったものであるから危険だと云つて蘇氏を攻撃したことである¹¹³。

日露戦争が終結しても、当時日本とロシアとの政治関係は依然として対立していた。総督府側はエスペラントをロシアの虚無党の用いた危険な言語と見なし、エスペラントを通じて社会主義思想を持つようになったエスペランチストを警戒していた。また1906年に創設された日本エスペラント協会のなかには、日露戦争に反対し日本共産党初代委員長に選ばれた堺利彦¹¹⁴や、1907年にエスペラント語学校を創設し、1923年に虐殺された大杉栄¹¹⁵などが中心人物となっていた。さらに1914年4月のエロシェンコの来日、山鹿泰治の中国アナキズムエスペラント雑誌への協力、大杉栄発行の『労働新聞』へのエスペラント表記の導入など¹¹⁶も含めると、社会主義的雰囲気が濃厚であるとみなされたエスペラントに、そのような罵声が浴びせられても不思議ではない。

ところが西来庵事件によって抗日思想の種をまかれた台湾人は、素朴な民族的反逆は抑圧されたものの、士紳などの有力者や日本に留学した青年たちが、のちに東京で「啓発会」を設立し、あるいは雑誌『台湾青年』を創刊して「非武装抗日運動」を試みた。彼らとは異なり、有力者でも留学生でもない、総督府に不満を持ち、政治に関心を持つ島内の台湾人は、連温卿の言うように、エスペラントの学習から知識を探る「1つの道」を見つけた。彼らは、エスペラントを通じて見聞を広め、世界的智識を吸収し¹¹⁷、コスモポリタニズムや社会主義などの思想を学習することで、左翼的な傾向を持つまでに成長し、新しい抗日手段を模索し、いつか行動に移そうと考えていた。

総督府がエスペラントへの警戒をし始め、そのうえ西来庵事件が起こったため、1913年から始まったエスペラント運動は「当時の世界最大の初等エス語講習書」を発行した直後に、活動を停止した。もちろん児玉四郎の個人事情も原因となったが、ほぼ4年の間休止状態にあった組織「日本エスペラント協会台湾支部」を1919年に積極的に引き継いだのは、在台日本人エスペランチストではなく、台湾人の蘇璧輝、連温卿、黄鉄らであった。

彼らは「日本エスペラント協会台湾支部」を「台湾エスペラント学会」に改組し、機関誌の発行や研究会の開催など活発に運動を展開していった。エスペラント運動だけではなく、彼らがのちに「非武装抗日運動」を行ったことは、1921年の「台湾文化協会」の創立に参加したことからうかがえる。

エスペランチストが台湾文化協会の創立に関わったことは後述するが、以下の第二小節では、1919年に創立された台湾エスペラント学会とその機関誌『La Verda Ombro (緑の蔭)』の創刊について概観する。

(二) 台湾エスペラント学会への改組と機関誌の創刊

前述したように、児玉四郎は『台湾日日新報』を通じてエスペラントを宣伝し、1913年9月から台北でエスペラント講習会を開き、同年12月に「日本エスペラント協会台湾支部」を創設した。その後も研究会や講習会を続けたばかりでなく、日本内地のエスペランチストを招いて講演会を開催した。例えば1915年1月14日に、台湾支部は当時日本エスペラント協会副会長である理学博士の中村精男の歓迎会を艋舺の呉昌才の別荘で催し¹¹⁸、中村はエスペラントと英語の話をした¹¹⁹。東京気象台長の中村は、当時の総督府がエスペラントを圧迫していることに憤り、台湾を訪問した際にエスペラント以外の会合には出席せず、そのほかの会議は開催できなかったというエピソードも存在するようだ¹²⁰。中村精男が1914年3月に「飛行機界 (エスペラントの必要) ¹²¹」を『台湾日日新報』で2回連載したのは、児玉の人脈を通じてのものではないだろうか。この文章はもともと1913年6月21日に横須賀支部が主催した講演会の内容であり、1915年に『組織的研究 エスペラント講習書』に収録された「飛行機界とエスペラント」にまとめられた。ちなみに、横須賀支部の創立者の1人は、日本のエスペラント運動の父と言われる小坂狷二である。

まだ武装抗日運動が相次いで発生していた1910年代半ばの台湾では、エスペラント運動は沈滞した状態となっていたが、エスペランチストたちが台湾のことをエスペラントを通じて日本や世界に発信したことは銘記すべきであろう。1915年8月の日本エスペラント協会の機関誌『Japana Esperantisto』では「Formosa Numero (台湾特集) ¹²²」が組まれた。この特集には、「Formoso, Trezorejo de Japanujo」(台湾は日本の宝庫である)、「Iom pri La Antikvaĵoj de Formoso」(台湾の古物)、「Pri la Meteorologio d Formoso」(台湾の気象学)、「Avino Tigro (Formosa popollegendo)」(虎婆ちゃん [台湾民話])、「La Estinteco kaj la Estanteco de Taivan (Formoso)」(台湾の過去と現在)、「Formosaj Specialaj Produktaĵoj」(台湾の特産品) など¹²³の文章が掲載された。そのうち、「台湾の特産品」は蘇璧輝が執筆したものである。また、「虎婆ちゃん」は小坂狷二によって訳されたものであり、のちに台湾エスペラント学会の機関誌に加筆され連載された。台湾と横須賀との連携は、この例からもうかがえよう。また台湾のエスペランチストは、エスペラントを通じて内地人と交流したほか、彼らの宣伝が内地人の植民地への関心を集めたとも言えよう。なお、『Japana Esperantisto』は日本で発行された雑誌だが、エスペランチストのネットワークを通じて世界中で読まれていた。

台湾エスペラント運動は1919年までにほぼ休止状態となったが、1919年に連温卿や蘇

璧輝らが「日本エスペラント協会台湾支部」を引き継ぎ、10月から機関誌『La Verda Ombro（緑の蔭）』の刊行を開始した。11月に「台湾エスペラント学会」と改称し、事務所を蘇璧輝の住宅に置いた¹²⁴。これは同年12月に「日本エスペラント学会」と改組した日本エスペラント協会より1ヶ月早かった。ところが台湾エスペラント学会と改称した当初、機関名はエスペラント語「Asocio」と綴られたが、小坂狷二に「Asocio」が一国的な意味を有し、一地方の台湾に適しないと指摘され、地方組織というニュアンスのある「Societo」と訂正することとなった¹²⁵。とはいえ、いま見られる『La Verda Ombro』によれば、「Formosa Esperantsita Asocio」という名称が1921年3月まで使われていたがわかる。

また、学会は1922年3月に例会を開催し、委員会を組織し、日台各9名の委員が選ばれた¹²⁶。同年12月の総会では39名の委員（日：24人、台：15人）が選出されたが、153名の会員のうち、台湾人はわずか2割であった¹²⁷。そのほかの活動として、例えば松下清が台湾全島を縦断するエスペラント講習会を計画し、1923年3月から11月末まで行った¹²⁸。また各地方の講習会とは別に、台北、彰化、屏東にも研究会があったが、正式に成立した学会の支部は高雄、台中に置かれた¹²⁹。機関誌の『La Verda Ombro』は、東京の『La Revuo Orienta』（エスペラント）、大阪の『La Verda Utopio』（緑のユートピア）とともに、当時の日本で三大エスペラント雑誌といわれた¹³⁰。

1922年12月以前、台湾エスペラント学会に資金を提供し、学会長を務めたのは、上林熊雄という人物である。上林は1919年7月に三井物産台北支店に着任し、1922年9月から11月まで「賜暇帰朝」をし、1923、24年に再び来台。1928年まで台湾で生活した¹³¹が、連温卿らが台湾文化協会に参加すると次第に学会から遠ざかった¹³²。1923年1月以降、雑誌の発行人は蘇璧輝となった。1922年11月以前の編集者は連、蘇、黄鉄、山口小静、江副秀喜などであったが、1923年1月からは連温卿1人となった。後述するが、1922年は台湾エスペラント運動の隆盛期であると同時に衰退し始めた時期でもあった。

機関誌の『La Verda Ombro』は、1919年に創刊されてから、何回か休刊したことがある。1926年に再刊したが、1期しか発行されなかった。1920年代後半は、連温卿が台湾文化協会で主導権を握っていた時期であり、文協が多忙だったため、エスペラント学会の活動はほとんど休止していた。一方、学会から脱退した在台日本人は、「台北エスペラント会」を創立し、普及運動を継続していた。彼らの組織や活動などについては第二章で解明する。

（三）エスペランチストが関与した台湾文化協会の創立

1921年に創立された「台湾文化協会」は、台湾の「非武装抗日運動」を本格的に行った組織であり、台湾民族運動史において大きな役割を果たしたことは、贅言を要しないが、協会の創設はエスペランチストとの関係が深かった。

前述したように、日本エスペラント協会台湾支部の活動は、西来庵事件以降に一時沈静化したが、メンバーたちは、エスペラントを通じて国際情報や思想的なものを学び、新たな抗日手段を考え始めた。台湾文化協会の創立以前に、台湾人エスペランチストはすでにエスペラントを通じて日本の社会主義運動者と知り合ったことは、連温卿の証言からうかがえる。台湾文化協会の始まりについて、連温卿は以下のように述べている。

大稻埕には、台湾民族運動史上において磨滅できない事実がある。[中略] 協会が成立する前に、1つの物語があった。組織の規則は連温卿によって提案され、艋舺にある徐慶祥の家で検討し修正し、それに基づいて会員を召募した。その夜に出席したものは徐慶祥、蘇璧輝、蔣渭水、呉榮卿、連温卿のほかに数名いた。蔣渭水が発会式で演説した「私は台湾人に生まれたことを神様に感謝します」との一句は、あの当時東京旅行中でエロシエンコ、小坂狷二、高尾、熊谷諸氏に逢った私と一面識もない「人類の家」の主人稲垣藤兵衛から寄せられた私信によってヒントを得たものであった¹³³。(太字：引用者)

「日本エスペラント協会台湾支部」の設立は1913年であり、連温卿や蘇璧輝らが支部を「台湾エスペラント学会」と改組したのは1919年であった。1921年10月21日に創立された「台湾文化協会」の会則がエスペランチストである連温卿によって提案されたことは、エスペラント運動に取り組み、組織運営のノウハウを学んだ結果とも言えよう。1936年の連の回顧でも以下の証言は残している。

エスペラント運動は、1921年に始めて発生した文化運動に先駆したこと8年、蘇氏の薦めと私の考慮によって、エスペラント運動で経験されてきた組織を持込んだことである。¹³⁴

すなわち、台湾文化協会についての研究では、中心人物である蔣渭水が最も語られているが、組織の経験を文協に持込んだのは、長い間でエスペラント運動に力を入れたエスペランチストたちであった。創立前の会議に出席した5人の中で、徐慶祥と呉榮卿が誰かは判然としないが、連温卿と蘇璧輝は、台湾エスペラント学会の創立者であり、のちに台湾文化協会の理事を務めた。また、蔣渭水がエスペラントを学んだことがあるかどうかはいまだ証拠がないが、1922年3月から台湾エスペラント学会の集会所は、彼が経営する「春風得意楼」に置かれ¹³⁵、例会もそこで行われていたため、彼が間接的にエスペラント運動に協力したとも言えよう。

この「組織の規則」は、台湾文化協会会則であり、総則、会員、幹部、評議員、名誉会員及顧問、会合、脱会など七章で構成され、附則も付いている¹³⁶。規則の構成は、日本エスペラント学会の規則や台湾エスペラント学会の会則¹³⁷と似ている。このような組織規則の提案・会員の召募、そして発会式の演説などから、エスペラント運動の組織経験が文化協会の運営に影響を与えたことが裏付けられるだろう。また台湾文化協会は、日本帝国主義に反対する意識を喚起するために成立したものである。日本帝国主義に反対する意識は、日本資本に反対する意識から出発したのだと、連温卿はまとめている¹³⁸。

前述したように、児玉四郎が台湾でエスペラント運動を始めた当初、講習会を開き、通信教育を行い、学習者の大部分は本島人であった。その後、連温卿と蘇璧輝らは停滞したエスペラント運動を引き継いで台湾エスペラント学会に改組し、多くの在日日本人も学会

に参加してきた。在台日本人の参加は、1922年の会員名簿を見ればわかる。しかし連温卿らが総督府を批判する台湾文化協会に關与したことで、在台日本人は次第に学会から遠ざかるようになる。エスペラントを通じて社会主義などの思想を持つようになった台湾人エスペランチストたちは、在台日本人たちと運動の方針や植民地政策に対する考え方の相違によって、学会の分裂を招く結果となった。

以上、第一章では、日本エスペラント運動の概況と台湾エスペラント運動の展開についてまとめ、特に1915年の台湾運動の停滞は西来庵事件に影響されたことや、非武装抗日運動の象徴的な組織である1921年に創立された台湾文化協会は、エスペランチストが組織経験を提供したことを考察した。第二章では、1920年代初期からの台湾エスペラント学会の分裂と在台日本人エスペランチストたちの果たした役割、および1940年代前後の台湾エスペラント運動の終焉について分析する。なお、1930年代以降の運動に関しては第三章と第四章で論じる。

-
- ¹ 初芝武美、『日本エスペラント運動史』、東京：日本エスペラント学会、1998.10、14-16頁。
 - ² 『Japana Esperantisto』1(6)、1907.01、1頁。この号の表紙では、エスペラント学校第一回卒業生及び講師の写眞があり、なかには学校の創設者大杉栄がいた。
 - ³ 朝比賀昇（小林司）、「日本のプロレタリア・エスペラント運動」、『第81回日本エスペラント大会』資料集、東京：日本エスペラント学会、1994.10、1頁。
 - ⁴ 初芝武美、17頁。ちなみに、加藤が1920年代半ばに台湾へ行ったことが、台湾エスペラント運動に熱心に取り組んだ杉本良の文章に記録されている(R. S.(杉本良)、「Esperanta Movado en Formoso : Vidanta el la fenestro de la Verda Domo (台湾エスペラント運動：「緑の家」の窓から見る)」、『La Formoso』(1)、1926.06、4頁)。また、加藤は台湾エスペラント学会にも入会した(『La Verda Ombro』、1922.11、12月合併号、4頁)。
 - ⁵ 初芝武美、18頁。
 - ⁶ 初芝武美、20頁。題名の「Japana Esperantisto」を直接訳せば、日本のエスペランチストとなるが、表紙での日本語タイトルは「日本エスペラント」であるため、本論では「日本エスペラント」と使用する。
 - ⁷ 初芝武美、26-28頁。
 - ⁸ 初芝武美、30頁。
 - ⁹ 台湾の言語学の構築にも大きな貢献をした浅井恵倫が日本エスペラント協会の会員になったのは、1915年の春であった。『Japana Esperantisto』、1915.03、3頁。
 - ¹⁰ 初芝武美、35頁。
 - ¹¹ 初芝武美、38頁。
 - ¹² 初芝武美、41-42頁。
 - ¹³ 三宅栄治、『闘うエスペランティストたちの軌跡—プロレタリア・エスペラント運動の研究』、大阪：リバーロイ社、1995.10、15-16頁。
 - ¹⁴ なだいなだ、小林司、『20世紀とは何だったのか マルクス・フロイト・ザメンホフ』、東京：朝日新聞社、1992.01、71頁。
 - ¹⁵ 初芝武美、47頁。
 - ¹⁶ 「Komerca Infomejo en Formoso (台湾に於ける商業仲介所)」『La Revuo Orienta』、1920.01、4頁。
 - ¹⁷ 日本エスペラント運動50周年記念行事委員会編（代表者福田正男）、『日本エスペラント運動史料 I 1906-1926』、東京：日本エスペラント学会、1956.11、51-52頁。
 - ¹⁸ 日本エスペラント運動50周年記念行事委員会編、53-56頁。
 - ¹⁹ 吉野作造、「エスペラントと私」、『講学餘談』(1927)。ここは「日本エスペラント運動の回顧」(『La Revuo Orienta』、1936.06、21-22頁)に再掲載されたものから引用。
 - ²⁰ 吉野作造、「エスペラントと私」、『La Revuo Orienta』、1936.06、22頁。吉野が書いた「世界普通語エスペラント」は『講学餘談』に全文再録されたが、『La Revuo Orienta』には一段落

- 目だけが掲載された。
- 21 井出武三郎、『吉野作造とその時代 大正デモクラシーの政治思想断章』、東京：日本評論社、1988.08、21-26 頁。
 - 22 松尾尊允、『大正デモクラシー』、東京：岩波書店、1974.05、2-3 頁。
 - 23 初芝武美、57-58 頁。
 - 24 初芝武美、58 頁。宮本正男の『大杉栄とエスペラント運動』（東京：黒色戦旗社、1988.02）も参考されたい。
 - 25 例えば、藤澤親雄、「日満両国の共通語問題」、『満蒙』14(3)、1933.03.01、32 頁。または、田中貞美、「満洲エスペラント運動史概観(上)、(下)」、『満洲評論』第 20 卷 11 号、1941.03.15、第 20 卷 12 号、1941.03.23。
 - 26 サート (SAT) : Sennacieca Asocio Tutmonda、全世界無国民協会。1921 年にプラハでの第 1 回労働者大会において設立された。設立の目的は世界の進歩的な人たちを支援し、お互いに理解し合い、抑圧等に対して闘うために助け合うものである。目的を達成するために、エスペラントという中立的言語を使用。また、エスペラントを使用する組織などと協力。公式サイト (<http://www.satesperanto.org/spip.php?page=sommaire>) での主要言語もエスペラントである。第 86 回 SAT 大会は 2013 年 7 月 28 日から 8 月 4 日までスペインのマドリッドで開催。
 - 27 小谷一郎、「中国人留学生のプロレタリア・エスペラント運動—日中プロレタリア・エスペラント運動の関係を中心に—」、『一九三〇年代後期中国人日本留学生 文学・芸術活動史』、東京：汲古書院、2011.12、180-181 頁。
 - 28 「総論 エスペラントの歴史(終) 日本におけるプロレタリア・エスペラント運動」、『プロレタリア・エスペラント講座 3』、東京：プロレタリア科学研究所エスペラント研究会、1930.05、219-220 頁。
 - 29 蔵原惟人、「プロレタリア文学運動」、蔵原惟人編、『日本プロレタリア文学案内 (1)』、京都：三一書房、1955.06、20-28 頁。
 - 30 ナップは各分野の組織を充実させる方向をとった。例えば、日本プロレタリア作家同盟 (ナルプ、1929.02)、日本プロレタリア劇場同盟 (プロット、1929.02、後の演劇同盟)、日本プロレタリア映画同盟 (プロキノ、1929.02)、日本プロレタリア美術家同盟 (ヤップ、1929.01、ナップから改組)、日本プロレタリア音楽家同盟 (PM、1929.04)、日本プロレタリア写真同盟 (プロフォト) など多くのプロレタリア文芸組織とかかわっていた。これらの組織の略称はすべてエスペラントで書いた名称の頭文字の略字から取ったものである。
 - 31 蔵原惟人、「プロレタリア文学運動」、28-32 頁。
 - 32 朝比賀昇、「日本のプロレタリア・エスペラント運動」、1994 年第 81 回日本エスペラント大会資料、東京：日本エスペラント協会、1994.10.22-23。
 - 33 許世楷、『日本統治下の台湾』、東京：東京大学出版会、1972.05、3 頁。
 - 34 許世楷、『日本統治下の台湾』、162 頁。
 - 35 1906 年以降、『台湾日日新報』に掲載されたエスペラントの関連文章は、例えば「エスペラント無用論」(1906.07.21)、「エスペラント語流行」(1906.7.22)、「魯魚焉馬」(1906.10.19)、「世界語」(1906.11.03)、「魯魚焉馬」(1906.11.10)、「エスペラント協会大会」(1906.11.10)、「所謂世界語」(1908.04.01)、「国際語に就て」(1909.1.1)、「万国エスペラント会議」(1910.10.15) などがある。筆者が確認した限り、『台湾日日新報』だけでも、1920 年以前に 30 篇以上があり、1920 年以降から 1940 年までには 70 篇以上の記事がある。
 - 36 「日本エスペラント協会会員名簿」、1909.05.15 現在。『Japana Esperantisto』、1909.05、68 頁。
 - 37 「日本エスペラント協会会員名簿」、68 頁。
 - 38 R. S.(杉本良)、「Esperanta Movado en Formoso : Vidanta el la fenestro de la Verda Domo (台湾エスペラント運動 : 「緑の家」の窓から見る)」、『La Formoso』第 1 号、1926.06、4-5 頁。
 - 39 武上耕一、「台湾に於けるエスペラント運動に就て」、『第一回台湾エスペラント大会 (大会記録)』、1931.09。
 - 40 連温卿、「台湾に於けるエスペラント運動年代記」、『Informo de F.E.S』第 1 号、1931.12.15。
 - 41 連温卿、「台湾エスペラント運動の回顧」、『La Revuo Orienta』、1936.06。
 - 42 武上耕一、「台湾に於けるエスペラント運動に就て」、22 頁。
 - 43 連温卿、「台湾に於けるエスペラント運動年代記」、9 頁。
 - 44 連温卿、「台湾エスペラント運動の回顧」、71 頁。

-
- 45 児玉四郎、「エスペラントに就て（上）、（中）、（下）」、『台湾日日新報』、1913.05.31、06.01、06.03。
- 46 『Japana Esperantisto』、1911.04、6頁。
- 47 『Japana Esperantisto』、1914.03、9頁。1913年12月に定めた「台湾支部規約」のエスペラント語版と漢文版が掲載された。
- 48 連温卿、「台湾に於けるエスペラント運動年代記」、10頁。
- 49 「内国消息：台湾支部」、『Japana Esperantisto』、1914.03、8頁。
- 50 「児玉氏歓迎会」、『Japana Esperantisto』、1914.06、3頁。日本エスペラント協会が児玉の歓迎会を開いた。
- 51 「児玉四郎氏歓迎会」、『台湾日日新報』、1935.02.17。
- 52 連温卿、「台湾に於けるエスペラント運動年代記」、10頁。
- 53 台湾新民報社編、『台湾人士鑑』、1937.09、38頁。
- 54 許雪姬主編、『台湾歴史辭典』、台北：遠流、2003.05、1295頁。
- 55 張福興、「向上への先駆として、音楽の有つ使命は重し」、『台湾日日新報』、1922.06.28、4頁。連憲升、「「文明之音」的変奏：明治晚期到昭和初期台湾的近代化音楽論述」、『台湾史研究』、台北：中央研究院台湾史研究所、2009.09、41頁。
- 56 連温卿、「台湾エスペラント運動の回顧」、『La Revuo Orienta』、1936.06、72頁。
- 57 武上耕一、「台湾に於けるエスペラント運動に就て」、『第一回台湾エスペラント大会（大会記録）』、1931.09、22頁。
- 58 蘇璧琮について、『台湾日日新報』では「内地遊歴」（1915.03.03）と「蘇氏帰台開業」（1915.09.06）の2つの記事を書いた。彼は総督府医学校を卒業したあと、台北医院で勤めた。1915年の時点で助手をやめ、内地に留学した。半年後帰台して開業したという。
- 59 蘇璧輝訳、「飢寒に泣く児童達（上）、（下）」、『台湾日日新報』、1921.02.26-27。S生（蘇璧輝）、「国際語の問題」、1922.06.28。
- 60 史可乗（連温卿）、「人類之家・台湾 ESP 学会」、『台北文物』、1954.05.01、92頁。
- 61 「Komerca Infomejo en Formoso（台湾に於ける商業仲介所）」、『La Revuo Orienta』、1920.01、4頁。
- 62 「文協消息 台湾近情」、『台湾民報』2(12)、1924.07.21、4頁。
- 63 連温卿、「台湾文化協会的発軀」、『台北文物』(2)3、1953.11.15、482頁。また、1924年10月1日の『台湾民報』に掲載した「台湾文化協会々報」に、1923年12月16日から発生した「治警事件」によって台北監獄に投獄された28名のうち、蘇璧輝を含めて11名が不起訴となり出獄することになったという記事がある。
- 64 『近代日本社会運動史人物大事典』(3)、東京：日外アソシエーツ株式会社、1997.01、124頁。
- 65 『La Revuo Orienta』、1938.09、40頁。
- 66 「インタビュー 柳田国男との出会い 比嘉春潮／（ききて）谷川健一」、『柳田国男研究資料集成』第15巻、東京：日本図書センター、1987.04、169頁（初出：『季刊柳田国男研究』第3号、1973.09）。
- 67 陳規懐、「日本帝国主義下の植民地台湾」、『大衆』1926.11。「台湾に於ける政治運動」、『大衆』、1926.12。「日本帝国主義下の植民地台湾」の内容から見れば、連温卿が『台湾大衆時報』に漢文で書いた「台湾殖民政策的演進（一～三）」（『台湾大衆時報』、1928.06.04、11、25）の原稿とも言えるため、陳規懐が連温卿であることがわかる。
- 68 1916年1月の『Japana Esperantisto』の「新入会員」に連温卿の名前があり、彼は1915年末に協会に入会したと推測できる。新入会員のなかには音楽家である張福興の名前もある。
- 69 郭杰（K.M. Тертицкий）・白安娜（A.Э. Белогурова）著、李隨安・陳進盛訳、『台湾共産主義運動與共産國際（1924-1932）研究档案』、台湾：中央研究院台湾史研究所、2010.06、56頁。
- 70 張炎憲、「社会民主主義者—連温卿（1895-1957）」、連温卿著、張炎憲・翁佳音編校『台湾政治運動史』、台北：稻郷、2003.11、362頁。
- 71 連温卿、「英国に於ける英語擁護運動とエスペラント」、『台湾青年』、1921.05.15。
- 72 連温卿、「言語之社会的性質」、『台湾民報』、1924.10.01。
- 73 温・連（連温卿）、「怎麼是世界語主義」、『台湾民報』、1926.10.24；10.31；11.14；1927.01.09。
- 74 Lepismo（連温卿）、「Kia estas Esperantismo ?」（エスペラント主義はどんなものなのか？）

- 『La Verda Ombro』、1923.05。
- 75 Lepismo (連温卿)、「Skizo de Parolado pri Esenco Lingva en socio」(「社会における言語の本質」に関する講演の要旨)、『La Verda Ombro』、1924.01。
- 76 史可乘、「人類之家・台湾 ESP 学会」、『台北文物』、1954.05.01、92 頁。
- 77 1918 年、台湾の士紳林猷堂と蔡惠如が東京の台湾留学生を集めて「啓発会」を設立し、翌年に「新民会」と改名した。台湾留学生が結成した初めての政治結社である。呉密察監修・遠流台湾館編著、『台湾史小事典』、台北：遠流、2011.12 (初版：2000.09)、126 頁。
- 78 台湾新民報社編、『台湾人士鑑』、1937.09、134 頁。
- 79 連温卿、「台湾に於けるエスペラント運動年代記」、10 頁。
- 80 「国際商業語協会会報第一号」、「国際商業語協会会員名簿」、『La Revuo Orienta』、1921.09、11、16 頁。
- 81 鄧慧恩、「日治時期台湾知識份子對於「世界主義」的实践：以基督教受容為中心」、台南：成功大学台湾文学系博士論文、2011.05、222-223 頁。
- 82 長谷川二葉亭、『教科用 独習用 世界語 (エスペラント)』、東京：彩雲閣、1906.07。
- 83 例えば、1920 年代前後の『種蒔く人』の中で、多くの「エスペラント」の講座やニュースが紹介された。また、1919 年の『改造』では「エスペラント語研究」というテーマで何篇かの論文が掲載された。
- 84 藤澤親雄、「エスペラントと国際連盟」、『台湾日日新報』、1921.03.06。
- 85 連温卿、「英国に於ける英語擁護運動とエスペラント」、『台湾青年』2(4)、1921.05.15。
- 86 「世界語概釈 (転載)」、『漢文時報』(『台湾時報』漢文版)、1912.12、64-65 頁。
- 87 温・連 (連温卿)、「怎麼是世界語主義」、『台湾民報』、128、129、131、139 期、1926.10.24、10.31、11.14、1927.01.09。
- 88 現在筆者の手元にある資料によると、戦前の中国のエスペラントについての雑誌や文章には、エスペラントで書かれたもの以外、漢文で書かれた雑誌や文章など、ほぼ「世界語」と表記されている。当時の台湾は、日本語教育の普及で、最初の「世界語」という表記も日本内地と同じように徐々に「エスペラント」になっていったと考えられる。
- 89 例えば、『組織的研究 エスペラント講習書』(1915)、『ラヂオ放送 エスペラントの夕 (JEAK)』(1929)、『第一回台湾エスペラント大会 (大会記録)』(1931) の書名や内容など。
- 90 L.L.ザメンホフ著・述、水野義明編・訳『国際共通語の思想 エスペラントの創始者ザメンホフ論説集』、新泉社、1997.06、24 頁。
- 91 例えば村井徳壽、「国際語に就て」、『台湾日日新報』、1909.01.01。
- 92 日本エスペラント学会編、『国語の擁護を論じて国際語に及ぶ』、日本エスペラント学会、1932.05、19-31 頁。
- 93 S 生 (蘇璧輝)、「国際語の問題 エスペラントの発達と研究過程」、『台湾日日新報』、1922.06.28。
- 94 「世界語概釈 (転載)」、『漢文時報』、1912.12、64 頁 (世界語。原 Esperanto 愛斯潑蘭多訳。即 (希望者) 初為原始家匠氏之隱名 (第一読本公布時匠氏自署名為愛斯潑蘭多博士)。後人遂以此字。名其所造之語 (在一千八百九十年)。日本人因斯語廣行世界。訳以今名。中国。因之。遂仍名為世界語。)
- 95 『Japana Esperantisto』、1914.03、9 頁。
- 96 『Japana Esperantisto』、1914.03、10 頁。
- 97 蘇璧輝、「余のエスペラント語研究に就ての感想」、児玉四郎編、『組織的研究 エスペラント講習書』、日本エスペラント協会横須賀支部会と台湾支部、1915.03、後半の 40 頁。
- 98 連温卿、「言語之社会的性質」、『台湾民報』、第 2 卷第 19 号、13 頁、1924.10.01 (原文：「這篇是從一九二三年十二月二十日在台北偕行社作的、又一九二四、五、一四日在東京受慶応大学「愛斯不難讀」宣傳講演会的招請在該校講演の講稿訳出的、因為這稿子和「将来的台湾話」有些干係、若是拿這篇當作那個問題的序論、読者一定容易能夠了解我的見地和論拠了、所以我掲出這篇來、是我的希望。」)
- 99 「万国語制定案屬懸案」、『台湾民報』2(19)、1924.10.01、2 頁 (松本亦太郎在今年之万国学士院會議、制定万国共通語之事及擴大文学之研究範圍、經有提出、前者為世界語 (埃斯批蘭杜) 以外制定特定之共通語、有贊否及中立之三說、結局為懸案、延次回之會議)。
- 100 「国際語與本邦」、『台湾日日新報』(漢文版)、1925.03.23、4 頁 (來五月中旬。且於比利時

- 武拉西。開万国学士聯合總會。万国共通之「國際補助語」。有無協定之必要。當為第一議題。在本邦代表学士院出席者有三人。一、駐北占安達大使。一、駐荷國海牙織田博士（萬）。一、東京商大福田博士（德三）。拋福田博士所言。日本学士院會員之意。多以為國際補助語。有協定之必要。方選「益斯伯蘭特語」。
- ¹⁰¹ 溫・連（連溫卿）、「怎麼是世界語主義」、『台灣民報』、128期、1926.10.24、11頁。原文：「自世界語（Esperanto – 愛斯不難讀、在中國或簡畧稱為『愛世語』）宣傳於世、迄今纔經過四十年間、而其共鳴者之中能會說話的人們、在環球上計有五百余萬以上。」
- ¹⁰² 周質平、「晚清改革中的語言烏托邦：從提倡世界語到廢滅漢字」、『二十一世紀』雙月刊 137 号、香港：香港中文大學、2013.06、29-30 頁。
- ¹⁰³ 連雅堂、「本土與世界」、『雅言』、台北：実學社、2002.08、頁 39-41。初出：『三六九小報』160 号、「雅言（三）」、1932.3.06。原文：「我輩處此文運交會之際、能用固有之華文可也、能用和文可也、能用英、法、俄、德之文尤可也；則用羅馬字以寫白話文亦無不可。但得彼此情素互相交通、雖愛世語吾亦學之。」
- ¹⁰⁴ 1930 年に黃石輝が『伍人報』で「怎樣不提倡鄉土文學」を發表し、台灣人に台灣語で文章を書こう、つまり台灣話文で台灣文學（鄉土文學）を書こうと唱えた。その後、「鄉土文學」を「台灣話文」で書くべきだと主張する者と、「中國白話文」を主張する者との間に激しい論争が起こった。それらの「台灣話文論争」とされる文章は、中島利郎編、『1930 年代台灣鄉土文學論戰資料彙編』（高雄：春暉、2003.03）に収録されている。
- ¹⁰⁵ 連溫卿、「エスペラント講座 I」、『台灣新文學』1(3)、1936.04；「エスペラント講座 II」、『台灣新文學』1(4)、1936.05。また、『台灣新文學』の表紙は創刊号からエスペラントでタイトルを「La Formosa Nov-Literaturo」と表記されている。このことについて、1936 年 5 月の『La Revuo Orienta』に「台灣新文學—— “La Formosa Nov-Literaturo” なる表題を付す」という記事がある。日本エスペラント学会、30 頁。
- ¹⁰⁶ 『組織的研究 エスペラント講習書』、台北：綠星社、1915.03、奥付。
- ¹⁰⁷ 『組織的研究 エスペラント講習書』、2 頁。
- ¹⁰⁸ 「エス語講習書發刊」、『台灣日日新報』、1914.08.08、7 頁。
- ¹⁰⁹ 連溫卿、「台灣エスペラント運動の回顧」、73 頁。
- ¹¹⁰ 伊藤潔、『台灣』、中公新書、2008.10、97-98 頁。「西來庵事件」は「噍吧嘰（ダパニー）事件」、「余清芳事件」、「玉井事件」などの異称がある。死刑を受けた人数については諸説がある。台灣總督府の檢察官上内恒三郎は『台灣刑事司法政策論』で余清芳革命党への判決に千百余の中に死刑者が千人を超え、世界裁判史でなかった大事件だと書いた。漢人（黃玉齋）編著、『台灣革命史』、泰東圖書局、1926.04、116 頁。
- ¹¹¹ 連溫卿、「台灣エスペラント運動の回顧」、『La Revuo Orienta』、1936.06、73 頁。
- ¹¹² 史可乘、「人類之家・台灣 ESP 学会」、780 頁。原文：「一九一三以來發生的世界語運動— Esp. movado 恰好為從嫌惡政治逃避出來之台灣人準備了一條出路、因為 Esperanto—世界語之內在思想是超越民族、信仰之 [引用者：反] 歧視的人類主義—Homaranismo、而且其實際上之利用不但可以增進智識、對商業上也有所幫助的。」
- ¹¹³ 連溫卿、「台灣エスペラント運動の回顧」、72-73 頁。
- ¹¹⁴ 田中克彦、『エスペラント—異端の言語』、岩波新書、2007.06、123 頁。大杉榮が協会の創始者であるがどうか異論がある（大島義夫・宮本正男『反体制エスペラント運動史』、東京：三省堂、1974.07、42-43 頁）。
- ¹¹⁵ 手塚登士雄、「日本の初期エスペラント運動と大杉榮らの活動（一）」、『トスキナア』、東京：トスキナアの会、2006.12、16 頁。
- ¹¹⁶ 「日本エスペラント運動史と社会史年表」、エ・ドレーゼン著、高木弘訳、『エスペラント運動史』、東京：鉄塔書院、1932.09、174 頁。
- ¹¹⁷ 「例えば蘇蘭士では従来小学校に二三年必ず仏語を教へたが日本の学校に於ける英語と同様実用にならぬ。然し一年間ラテン語のデモクラシイのエスペラントを課してみたところ世界のエスペランチストと交通することが出来そのお蔭で見聞を広め世界的智識を吸収することが得られる」と、連溫卿が「英国に於ける英語擁護運動とエスペラント」（『台灣青年』、1921.05.15、43 頁）で書いてある。
- ¹¹⁸ 連溫卿、「台灣エスペラント運動の回顧」、73 頁。
- ¹¹⁹ 『組織的研究 エスペラント講習書』、後半の 83 頁。

-
- ¹²⁰ 日本エスペラント運動 50 周年記念行事委員会編、『日本エスペラント運動史料』、東京：日本エスペラント学会、1956.11、23 頁。
- ¹²¹ 中村精男、「飛行機界（エスペラントの必要）（上）（下）」、『台湾日日新報』、1914.03.11-12。
- ¹²² 『Japana Esperantisto』、1915.08、1-7 頁。
- ¹²³ 『Japana Esperantisto』、1915.08、1-7 頁。
- ¹²⁴ 史可乗、「人類之家・台湾 ESP 学会」、780 頁。
- ¹²⁵ 連温卿、「台湾エスペラント運動の回顧」、74 頁。
- ¹²⁶ 『La Verda Ombro』、1922.04、13 頁。
- ¹²⁷ 『La Verda Ombro』、1922.04、13 頁。1922.12、4 頁、12 頁、1923.04、6 頁。
- ¹²⁸ 松下清、「エスペラント巡回講習の記」、『La Verda Ombro』、1923.11-12 号、6-7 頁。
- ¹²⁹ 連温卿、「台湾に於けるエスペラント運動年代記」、10-13 頁。
- ¹³⁰ 史可乗、「日拠時期台湾 ESP 運動」、53 頁。
- ¹³¹ 坂本栄二（上林会代表）編集発行、『上林熊雄翁 追悼録』、1979.05、8 頁。
- ¹³² 史可乗、「日拠時期台湾 ESP 運動」、53 頁。
- ¹³³ 連温卿、「台湾文化協会的発軀 台湾政治・文化・社会運動的第一頁」、『台北文物』、1953.11.15、68 頁。原文漢文、ただし「あの当時」以下最後まで日本語は、連温卿、「台湾エスペラント運動の回顧」（『La Revuo Orienta』、日本エスペラント学会、1936.06、74 頁）に拠った。
- ¹³⁴ 連温卿、「台湾エスペラント運動の回顧」、74 頁。
- ¹³⁵ 「台湾エスペラント学会規約」第十五条：「本会ノ事務所ヲ当分ノ間台北市緑町一之六番地ニ集会所ヲ台北市大稻埕春風得意楼ニ置ク（大正十一年三月五日改正）」、『La Verda Ombro』、1922.04。
- ¹³⁶ 台湾総督府警務局編・呉密察解題、『台湾総督府警察沿革誌（三）』（復刻版）[初版：1939.07]、台北：南天書局、1995.06、140-141 頁。
- ¹³⁷ 1921 年 5 月から、台湾エスペラント学会の機関誌『La Verda Ombro』に「学会規約」が載せられている。
- ¹³⁸ 連温卿、「台湾文化協会的発軀 台湾政治・文化・社会運動的第一頁」、71 頁。

第二章 台湾エスペラント運動の隆盛と終焉

第一章では日本エスペラント運動の概況と、1913年から始まった台湾エスペラント運動が児玉四郎の離台と西来庵事件の影響で一時休止したことを経て、1919年に再開したプロセス、またエスペランチストが台湾文化協会の創立に果たした役割について整理してきた。台湾のエスペラント運動は、宗主国日本の社会状況により誕生した宗教団体や福祉団体のエスペラント普及運動、あるいはプロレタリア・エスペラント運動の影響を受けて、1920年代初期の分裂から、いくつかの形で運動が続けられていった。また、満州事変の勃発後、台湾のエスペラント運動もまた島内の政治状況にによって文化戦線へ転換する姿勢を見せる。第二章では、1919年に再発足された台湾エスペラント運動が、どのように展開し、また1940年代以降にどのように終焉を迎えたのかを詳しく論じる。特に、運動のなかで重要な組織や、何人かの日本人エスペランチストを紹介しながら、それぞれ果たした役割を明らかにする。

第一節 台湾エスペラント運動に取り組んだ在台日本人たち

第一章で言及したように、台湾エスペラント学会が改組された後、多くの在台日本人が学会に入会し運動に参加することとなり、組織の規模が拡大していった。しかし台湾人のなかには、エスペラントを通じて社会主義などの思想を持つようになった者がいた。例えばのちに台湾文化協会を創立した蘇璧輝や連温卿らである。また学会内部には、そもそもアナキストや共産主義者という在台日本人も何人かいた。例えば蔣渭水が発会式で演説した「私は台湾人に生まれたことを神様に感謝します」との一句のヒントを与えた「人類の家」の主人稲垣藤兵衛や、山川均を連温卿に紹介し学会を「赤化」させた山口小静という女性である。

しかし学会のなかでは、稲垣藤兵衛や山口小静のような左翼より、官僚や学者を勤める在台日本人エスペランチストが多かった。彼らは左傾化した台湾エスペラント学会から脱退して「台北エスペラント会」を創立し、政治色が薄いエスペラント運動を続けていた。第一節では、台湾エスペラント学会にいた日本人社会主義者の稲垣藤兵衛と山口小静、また「台北エスペラント会」で活躍した台湾農業局参事の武上耕一、台湾専売局参事の杉本良、台北高等学校校長の甲斐三郎について論じる。

(一) 「人類の家」の創立者稲垣藤兵衛

第一章で触れたように、台湾文化協会の創立について連温卿は、「蔣渭水が台湾文化協会の発会式で演説した『私は台湾人に生まれたことを神様に感謝します』との一句は、あの当時東京旅行中でエロシエンコ、小坂狷二、高尾、熊谷諸氏に逢った私と一面識もない「人類の家」の主人稲垣藤兵衛から寄せられた私信によってヒントを得たものであった」と述べている。この「私は台湾人に生まれたことを神様に感謝します」の一句は、文化協会の発会式で使っただけではなく、1924年の「治警事件」(『治安警察法』違反検挙事件)の法廷弁論で、蔣渭水は再びこの言葉を用いた¹。これによってこの文句は、台湾人であ

ることを強調し、台湾人の民族意識を喚起し、新たな抗日運動を押し進める名句となった。この連温卿にヒントを与え、蔣渭水に言わせたナショナリズム的一句の「語源」は、稲垣藤兵衛（1885-1957）という人物からであった。

エスペランチスト同士の間には文通の習慣があるため、稲垣藤兵衛は台湾文化協会が創設される前ではまだ連温卿と面識はないが、エスペラントのネットワークを通じてつながっていた可能性もある。そして、ロシア出身で当時東京旅行中のエスペラント作家エロシエンコや、日本エスペラント学会の小坂狷二に会っていたことから、稲垣は文化協会設立前に、すでにエスペランチストになっていた可能性が高いと思われる²。また稲垣は、1921年11月以降や1930年以降も台湾エスペラント学会の要請を受け、自分が経営している福祉施設「稲江義塾（別名「人類の家」）」でエスペラント講習会を開き³、「人類の家」の看板もエスペラント「Domo de Homarano」で表記した⁴。彼は1922年に台湾エスペラント学会に加入し、同年3月に学会委員となった⁵。同年10月の日本エスペラント学会の機関誌に載せた「日本エスペラント名簿」（1922年8月現在まで）には稲垣藤兵衛の名前があり、肩書きは「伝道者」とある⁶。つまり1922年の時点で、稲垣は日本エスペラン学会の会員になっていた。

稲垣藤兵衛はどの時点でエスペランチストになったか判明できないが、『台湾新聞』や『台湾日日新聞』の記者を務めた泉風浪は彼について以下のように述べている。

台湾にいた変りだねの一人に、稲垣藤兵衛がいる。通称「稲藤」で通っているが、よく経世新報の稲垣孫兵衛と間違えられたものだ。[中略] 彼は台湾巡查の募集に応じて渡台したというが、頭脳のよさは他を圧していたという。無論彼の性格は台湾巡查、イヤ警察官の柄ではない。普文をとったという話だが、警察に見切りをつけて民間人となり、社会事業や社会運動に転身したものだ。⁷

稲垣は台湾巡查募集のため渡台したが、結局台湾で社会事業や社会運動に転身したという。警察向き性格ではないということよりは、彼が社会運動に移した背後には、彼の思想が果たしているのだろう。例えばかつて台湾の山地で伝道した井上伊之助は、稲垣が1957年に死去した後に『愛光新聞』で次のように語っている。

稲垣君は官僚主義一色ともいふべき台湾で、社会主義的な立場に立ち、貧しい者の友となって当局や富豪社会と戦いぬいてきた人だった。[中略] 大稲埕の六館街にあつた或商事会社の空家を借り受けて稲江義塾の看板を掲げ、台湾人の貧しい不就学児童を集めて教えていた。大正十二年であつたか芸娼妓の自由廃業運動をして平和な台湾に大波乱を起こした。⁸

井上伊之助が言及している稲江義塾は、エスペラント研究会の会場としても使われていた「人類の家」のことである。芸娼妓の自由廃業運動は、「廃娼運動」のことである。第一次世界大戦後の民族自決などの運動とともに、世界的な廃娼運動が起こって、日本内地

の救世軍や婦人矯風会が精力的に戦っていたが、台湾ではまだ運動が展開されていなかった。1922年8月に稲垣籐兵衛は、「虐げられたる姉妹たちへ」と題された自由廃業の宣伝ビラを艋舺廓内へ撒き、一部を娼妓たちへ郵送した。その結果、彼は検察局へ送検され、起訴された⁹。『台湾日日新報』でも報道されたため稲垣は一時有名人になり、警察の要注意人物となった¹⁰。すなわち、稲垣が社会事業や社会運動に取り組んだ背後には、社会主義的な思想を持つことや、内地での社会運動と連動している背景にあったからであろう。

いままでに稲垣籐兵衛に関する研究は乏しいが、2000年以降に日本のアナキズム研究者の手塚登士雄が稲垣が1927年に創刊した『非台湾』という雑誌を発掘し、稲垣と『非台湾』について論じた。稲垣の生年についてはいくつかの説があるが、手塚の考察によると1885年であり、大杉栄と同年となる¹¹。稲垣が『非台湾』で発表した文章から彼の経歴をうかがうことができる。

私は無産階級に生れて、子供のときに学校に行きたくも学校に行けなかつた。[中略] 併し18、9歳になつて、聖書を読むようになつてからほかの書籍はみんな捨てた。[中略] 聖書はずゐぶん読んだ、今でもまだ暗記してゐる。だが聖書を読んで、読んで読んで見た結果、聖書をも捨てた。何故か？私は人間を読むやうになつたからである。社会を読むやうになつたからである¹²。

すなわち「伝道者」¹³である稲垣の思想の源流の1つは聖書でありながら、社会主義者にもなった。手塚の言うように、当時の社会主義者と同様に稲垣もキリスト教を經由して社会問題に目覚めたのではないか¹⁴。また、社会主義者というよりは、アナキストのほうが精確であろう。稲垣はのちにアナキズム思想の影響を拡大するために、1927年に周合源、張維賢らとアナキズム組織「孤魂聯盟」を創立した¹⁵。彼が同年3月に創刊した『非台湾』の内容からも、アナキズム思想の濃い雑誌であったことがわかる。このような背景から見れば、台湾文化協会の発会式での「私は台湾人に生まれたことを神様に感謝します」という抗日的、ナショナリズム的な一句は、キリスト教的、社会主義的な意味を含むとても複雑な言葉だと言えよう。

稲垣が書いたエスペラント関連文章はまだ見当たらないが、上記の「人類の家」のエスペラント看板や講習会場所の提供だけを見ると、彼が果たした台湾エスペラント運動での歴史的意義は大きいであろう。またエスペランチストでもある稲垣は、キリスト教を經由して社会主義者となり、さらに人道主義を实践する「人類の家」や、アナキズム組織「孤魂聯盟」を創立し社会問題に力を注いでいた。彼の例から、当時のエスペランチストの持つ思想は単一ではなかつたと考えられるだろう。

(二) 山口小静と台湾エスペラント学会

台湾文化協会設立後、台湾エスペラント学会の運営は日本人の相次ぐ脱会によりますます困難になったが、山口小静が加入したことでエスペラント運動の共産主義化に大きな影響を与え、ついには学会の分裂を招いた。ここでは、山口小静の生い立ちや彼女と台湾エ

スペラント学会の関係について簡潔にまとめる。

山口小静（1900-1923）の父親山口透は、漢学者で新聞記者として日清戦争に従軍、北白川宮とともに台湾に入り、のちに台湾神社の宮司となった。母親は有名な国学者の娘であった¹⁶。山口小静は、「一婦人の声¹⁷」という文章で「私は最近エスペラントを学んだものである」と述べたが、一時日本エスペラント学会の理事を務めた東京女子高等師範学校教授の河崎なつ子の愛弟子で、在学中にすでにエスペラントを知っていたと考えられる。山口は、東京女子高等師範学校在学中に山川均夫婦の家にも出入しており、社会主義運動に接近したことによって学校を退学させられた。社会主義研究団体「水曜会」と婦人団体「赤瀾会」に参加するかたわら翻訳も行っていた¹⁸。吉田梅子という名前で「匈牙利の労働革命¹⁹」を『社会主義研究』に発表し、遺稿の「安部能成の平和論」は『種蒔く人』に、「独逸共産党と婦人」は『赤旗』に掲載された²⁰。

肺結核を患った山口小静は、休養のため1922年春に台北へ戻った²¹。台湾に戻るとすぐ台湾エスペラント学会に加入し、同年3月に学会委員となった²²。10月から学会の機関誌『La Verda Ombro（緑の蔭）』編集者の1人となり、「Alvoko de Virino - al la Esperantistino en la mondo（一婦人の声-世界の女性エスペランティストへ）」²³などのエスペラント文章を発表し、ロマン・ローランの「人類解放の武器はエスペラント²⁴」なども翻訳したが、1923年3月に病死した。連温卿らの協力で、遺著『匈牙利の労働革命』が6月に出版されたが、「安部能成の平和論」や「独逸共産党と婦人」は収録されなかった。



図：山口小静、「赤化か緑化か」、『La Verda Ombro』、1923年3・4月合併号、4頁。

1922年頃は、日本内地でもまだ「プロレタリア・エスペラント運動」が始められていない時期であったが、台湾エスペラント学会の共産主義化はすでに顕著である。このことは、山口小静の「赤化か緑化か」という文章からうかがえよう。

赤化と緑化とは、私の考へる所では同時に行われるべきものである。[中略]しかしながら今日の場合、[中略]私は、躊躇なく、赤化が主であり先であつて、

緑化は寧ろ従であり後であると答へざるを得ない。[中略] 私は最近台湾当局の某高等刑事とエスペラントに就いて二三問答する機会を持った。[中略]『[中略] 彼等は単に世界の一民としてこの世界語をやるのではなくて、一方に日本語排斥の意味を十分に含ませてあるのである。而して言語と思想との関係は密接であるから、日本語排斥は即ち日本そのものゝ排斥でなければならぬ。日本の植民政策は断じてかゝる反逆者を黙許する事は出来ない。[中略]』[中略] これを一読せられた本島人諸君は何と考へられるであらうか。赤化か緑化か。たとへ緑化のみに依つて進まれようとするにしても、既にこれ丈の執拗なる僻見迷妄と戦はなければならぬのである²⁵。

1923年3、4月合併号の『La Verda Ombro』に掲載された「赤化か緑化か」は、半分以上はもともと検閲で削除され、タイトルも「……緑化か」となっている。この段落は山口の遺著『匈牙利の労農革命』から引用した。第一章で言及したように、児玉四郎が月に1回警務課に出頭して台湾人会員の動静を申告することになっていた。そもそもエスペラント運動は政府に警戒されていたが、共産主義者山口小静の加入で、台湾エスペラント学会が総督府により厳しく監視されるようになったことは、この検閲の削除からもわかるだろう。またこの文章は、民族の相違によってエスペラントに対する態度が異なっていたと総督府が考えていたことや、「赤化か緑化か」という問いが1922年前後に学会で討論されたこと自体、学会の思想が転換し始めたことを物語っていよう。

『台湾総督府警察沿革誌』では、山口小静が帰台後に連温卿などと知り合い、共産主義の宣伝に努め、連温卿を山川均に紹介したことを記している²⁶。山口は山川をして、立派なマルキシスト、立派な共産主義者、熱烈な革命家²⁷と言わしめた。そこから考えると、山口が「赤化」を優先したのは当然とも言えよう。しかし彼女が赤化を先に行うべきだという発言をしたのは、共産主義者や熱烈な革命家だったからというよりは、帰台後に当時の台湾の状況を肌身に感じたことで、下位階級となった台湾人である「本島人」（被支配者）の立場に立つと、やはり先に「赤化」しないと植民地政策に対抗できないだろうと考えたからではないか。また、山口は帰台後死去するまでわずか1年での間に、連温卿や蘇璧輝らとともに「マルクス研究会²⁸」を組織し、学会の名義で連らと「ロシア飢饉救済運動²⁹」を行った。台湾のエスペラント運動の思想の転換と社会運動の左傾化は、山口の影響が大きいと言えよう。

台湾エスペラント学会の主導者である連温卿は、1919年頃にはすでに漢訳の「共産党宣言」を手に入れ、同志の間で共産主義を研究していた³⁰。山口小静の帰台前からエスペラント運動にかかわる過程で小坂狷二と知り合い、独習によってすでに多くの国際情勢、社会主義などの知識や思想を吸収し、エスペランチストのネットワークを通じて山川均や堺利彦らともつながりを持っていたと思われる。連温卿の日記には、東京旅行中に堺利彦や山川均夫婦を訪ねたことも記されている³¹。また、連は山川菊栄への手紙で、「東京の人々が餘り台湾に目を向けてゐないようですが、あらゆる機会を利用して少しでもあの方向に進むやうに、その動機を作つて頂きたい³²」と述べ、のちに台湾に関する資料を山川

均に提供している³³。これらのことから、山口小静の「赤化か緑化か」での植民地政策に対する批判は、連からの影響もあったのではないかと推測できる。1920年代前半の台湾エスペラント学会は、連温卿の主導および山口小静の加入によって、運動を共産主義化させることとなっただけではなく、植民地政策により批判的になったのではないか。

1920年代半ば、エスペラント運動に対して警察の監視はいつそう厳しくなったが、山口小静の死去や、連温卿らが台湾文化協会で忙しくなったことで、台湾エスペラント学会の活動はほぼ休止状態となった。学会から脱退した日本人は、別にエスペラントグループを作り、社会主義色彩のない普及運動を始めた。以下の第三小節では、同じ在台日本人が主催した「台北エスペラント会」とそのなかにいた重要な人物を紹介する。

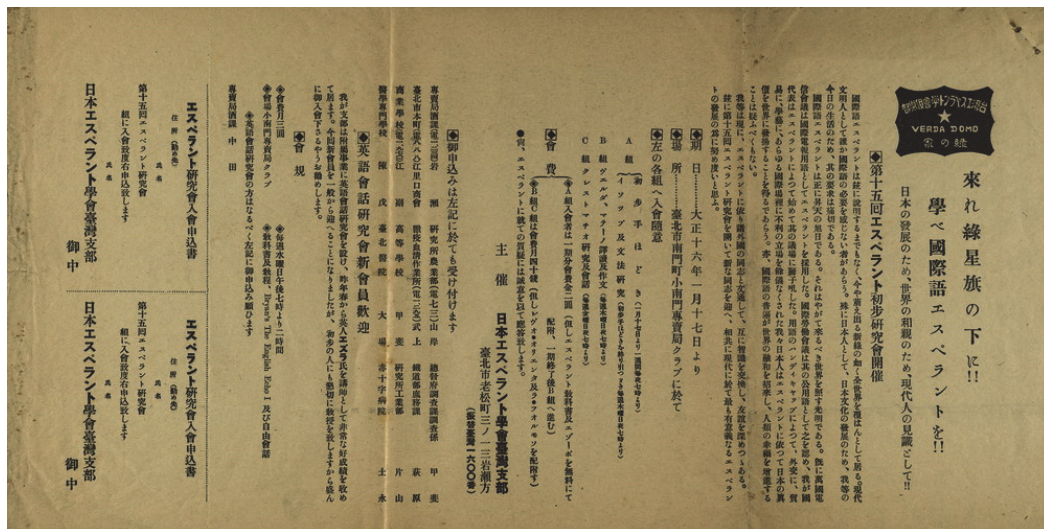
(三)「台北エスペラント会」の主催者たち

第一章で述べたように、台湾エスペラント学会が組織された当初の資金支援者は上林熊雄であり、武上耕一や杉本良など多くの総督府官僚が参加し、学会名簿に載った153名の会員の中の8割は日本人であった。こうしたことは、台湾エスペラント運動がその発展期に在台日本人と台湾人との連携のもとに行われていたことを示しているだろう。しかし被支配者である台湾人と支配者である日本人という二項対立的な立場によって、エスペラント運動に対する姿勢の相違が明確になり、ついには分裂に至った。

1931年の第1回台湾エスペラント大会で、武上耕一は1924年前後を指して「此の頃から私どもは、何となしに台湾エスペラント学会と自然分離の状態となりつゝありました。従つて是から申上げる事は、殆んど私の関係した団体に就てであります」と述べ、1925年5月に杉本良の発意で「台北エスペラントクラブ」が組織され、「ヴェルダ・ドーモ」と名付けた一戸を栄町一丁目に構え、同志3、4名合宿し1週2回位集合研究会を開き、その頃は定連が20名にも達していたことなどについて報告した³⁴。

「台北エスペラントクラブ」とは、1925年5月に組織された台湾エスペラント学会倶楽部「ヴェルダ・ドーモ」、つまり「La Verda Domo (緑の家)」のことであるが、下の1927年の「第十五回エスペラント初歩研究会開催」というチラシが示しているように、当初は「台湾エスペラント学会」の名称はまだ残している。この学会クラブは、1926年6月に月刊『La Formoso (台湾)』を刊行し、同年7月に「日本エスペラント学会台湾支部」と正式に改組されたが、1929年1月には「台北エスペラント会」と改称し、杉本良が会長に推挙された³⁵。何度か名称変更をしてきたが、「台北エス会」という組織名で報道されることのほうが多く、機関誌の発行所も「台北エスペラント会」となっているため、以下は便宜上で「台北エスペラント会」に統一する。

在台日本人を中心とする「台北エスペラント会」は創立以来、不定期の講習会や研究会を行い、『台湾日日新報』を通じてエスペラント運動の宣伝を続けていた。例えば甲斐虎太の「エスペラント物語」を1927年5月に10回連載したほか、登山活動、エスペラント講習会やエスペラント記念日のラジオ放送などを同紙で告知している³⁶。



図：日本エスペラント学会台湾支部のエスペラント研究会入会申込書

また新聞やラジオを通してだけではなく、研究会開催の前に申込書付のチラシも作った。この「第十五回エスペラント初步研究会」の主催者が「日本エスペラント学会台湾支部」であり、「台湾エスペラント学会倶楽部☆VERDA DOMO 緑の家」というマークがついており、「期日 大正十六年一月十七日より、場所 台北市南門町小南門専売局クラブに於て」、「英語会話研究会新会員歓迎」、「会期」などと記されている。研究会の申込先は、専売局酒課の岩瀬（通）、研究所農学部の山岸（喜久男）、総督府調査課調査係の甲斐（虎太）など12箇所である。このチラシからも、組織の中心メンバーがほとんど日本人の官僚や学者で、宣伝の資金も十分であったであろうことが推測される。

機関誌の『La Formoso』は1926年から1930年まで刊行したが、創刊号に記された会の役員は、「研究所農業部 山岸喜久男」、「台北商業学校 江副秀喜」、「殖産局獣疫血清製造所 武上耕一」、「専売局酒課 杉本良」、「総督府調査課 甲斐虎太」などの5名³⁷で、ほぼ政府機関の官僚であった。雑誌の内容については第三章で詳しく分析するが、文献や史料が限られるため、以下では台北エスペラント会に属する武上耕一、杉本良、甲斐虎太などの3人の重要な人物を簡単に紹介しておく。

1.台湾農業局参事—武上耕一

研究者として「殖産局獣疫血清製造所」で勤めていた武上耕一の生い立ちは、まだ詳しく把握できていないが、総督府職員録を見れば、1910年から台北庁警務課に勤め、1914年に殖産局農務課に移り、1919年からは獣疫血清製造所や殖産局獣疫血清製造所、台北州内務部勸業課などで技師として勤め、戦争期の1942年にも台北州産業部農林課や台北州種馬育成所などで働いていたようである³⁸。『La Formoso』に記した1931年の肩書きは「台湾農業局参事」であった。

武上耕一がいつからエスペランチストになったのかは判明できないが、彼のエスペラント語で書いた文章は少なくない。例えば台湾エスペラント学会の機関誌『La Verda Ombro』には、彼のエスペラントで書いた3篇の文章が掲載されている。3篇とも1921年に『La

raporto de Formosa Agrikulturo (農業研究)』の第179号で発表したものを訳したものである³⁹。また1929年4月号の『La Formoso』にも「Pork-bredo en Formoso (台湾の豚改良)」などが掲載された。1946年に武上は山根甚信と編集した『台湾の畜産獣医文献目録：1904年から1945年にいたる⁴⁰』が出版され、台湾の畜産業にも貢献がある人物だろうと思われる。

少し繰り返しになるが、武上が1931年の台湾エスペラント大会のために書いた「台湾に於けるエスペラント運動に就て」という文章は、まさに台湾のエスペラント運動の分裂を裏づけるものとなっている。

大正十三年(一九二四年)頃は、台北に於けるエス語熱の最もさめた時代であつて、一時は杉本、江副、武上の三名だけとなつた事さへあります。[中略]この頃から私どもは、何となしに台湾エスペラント学会と自然分離の状態となりつゝありました。従つて是から申上げる事は、殆ど私の関係した団体に就てであります。大正十四年(一九二五年)五月、杉本氏の発意で台北エスペラントクラブを組織し、「ヴェルダ・ドーモ」と名づけた一戸を榮町一丁目に構へ、同志三四名合宿し一週二回位集合研究会を開きました。その頃は定連が二十名にも達して居たと記憶します。六月にはラ・フォルモソ(La Formoso)が生まれ、七月に入り日本エスペラント学会台湾支部となり、支部長に杉村氏就任、事務所を台北市老松町三ノ一三岩瀬方に置くことになりました⁴¹。

武上は1924年が「台北に於けるエス語熱の最もさめた時代」だと言い、また「私どもは、何となしに台湾エスペラント学会と自然分離の状態となりつゝありました」と述べたが、第二小節で引用した山口小静の「赤化か緑化か」(1923.04)にある学会内部の論争と合わせて見れば、1923年前半から学会では運動に対するイデオロギー的な相違がすでに浮上し、総督府からエスペラント運動に対する監視もあり、最終的に1924年の時点で分裂するに至ったのではないか。そして1926年に創刊した『La Formoso』は、在台日本人エスペランチストと台湾エスペラント学会との分裂の象徴となった。後述するが、運動が分裂した後に、台湾エスペラント学会以外にいくつかの団体が設立された。それらの団体が武上耕一を代表として推挙し、連温卿と会談し、過去の誤解を解消しようとする台湾エスペラント大会を開催することになった。このことから、武上が台湾エスペラント界で最も尊重された人であったことを示しているだろう。

2.台湾専売局参事—杉本良

杉本良(1887-1988)についての先行研究もほぼない。総督府職員録を見ると、杉本が1921年から専売局庶務課や煙草課、酒課などで事務官や参事などを勤め、1927年から殖産局特産課や山林課に移り、1929年に総督府文教局局長を務め、また蕃地調査委員会や教科書調査会、史料編纂委員会など多くの政策委員会に関わっていたことがわかる⁴²。

1931年の第一回台湾大会で児玉四郎、連温卿、杉本良など3人が運動に貢献があるこ

とで特に表彰された⁴³ことから、杉本のエスペラント運動への貢献は見逃すことはできないだろう。杉本が1926年6月に『La Formoso』の創刊号で発表した「Esperanta Movado en Formoso : Vidanta el la fenestro de la Verda Domo⁴⁴」は、いまのところ最初のエスペラントで書かれた台湾エスペラント運動史である。短い文章だが、なかには簡単に加藤節と高橋邦太郎に言及している。

加藤さんは1904年に横須賀でエスペラント教科書を書いた。これは今現在学会でも使われているが、彼は公的な仕事で多忙なため、あまり学会に来られない。[中略]最初に緑の家を去ったのは高橋さんであった。彼はエスペラントを愛し、滞在中に普及運動に熱心に取り組んでいた。しかし、彼が東京に引越したため、彼の役目を果たせなかった。⁴⁵

ここで「加藤さん」と呼ばれているのは、第一章で言及した「日本エスペラント協会」の表札を掲げる協会の第一人者加藤節（1882-1938）という人物である。またこの教科書は、1906年に出版された『エスペラント獨修⁴⁶』のことであろう。1906年に商船学校の機関科実習生として横須賀海軍造船所に派遣されたある日、加藤節は旧友の山口美親と出会い、談話中にエスペラントが話題に上がり、その後エスペラント自習書を購入した。わずか三日間で手紙を書けるようになったことに自信を得て、英国エスペラント協会に入会した。そして「エス語が国際用語として理想的で、且つ又将来性を多分に持つて居ると確信し、先づエスペラント協会を設立してエス語の普及に努力する事こそ、ザーメンホフ博士のエス語を創始した主旨にも合致する一階段なりと考えた」ため、日本エスペラント協会を設立した⁴⁷。台湾総督府職員録から、加藤が1921年から1931年まで、逓信局海事課の海事官や技師、そして交通局高雄海事出張所の技師を勤めたことがわかる⁴⁸。彼は、台湾エスペラント学会にも入会し⁴⁹、1931年の第1回台湾大会にも参加した。

そして「高橋さん」と呼ばれているのは、高橋邦太郎（1866-1941）という人物である。『La Verda Ombro』や『La Formoso』の会員名簿、または台湾総督府職員録には、高橋の名前が見当たらないため、どのぐらい台湾に滞在したか判明できないが、1915年に台湾で出版された『組織的研究 エスペラント講習書』のなかに彼の「国際補助語エスペラントと国語の権威」⁵⁰という文章を収録した。彼は1921年に横浜に設立された「国際商業語協会」の会員であり（黄呈聰や浅井恵倫も会員）、また浅井恵倫らと横浜に日本エスペラント貿易商会を設立し、社長を務めた⁵¹。また、第五章で言及するが、高橋は満州国政府に国際用語としてエスペラントを採用させる運動を展開した。

杉本良の話に戻るが、杉本は『La Formoso』で語学の文章やエッセイを多くを發表し、また、1926年10月から出張で欧米に行き、そこでの見聞やアメリカのエスペラント関連事情を雑誌で紹介した⁵²。文章の内容は第三章で分析するが、さらに彼は、エスペラント運動基金を維持するために、台北エスペラント会の名義で『台北十二箇月⁵³』や『禁酒の国を見る⁵⁴』など2冊の書籍を出版した⁵⁵。このような貢献が第1回台湾大会で表彰されたのであろう。

特筆すべきは、杉本が1928年12月にUEA（世界エスペラント協会）の代表者に就任した⁵⁶ことである。また彼は1929年12月15日に台北放送局で、ザメンホフを記念するために計画した「ラヂオ放送 エスペラントの夕」という番組で指揮者（司会）を務めた⁵⁷。1931年6月に内地へ帰還したという記録があったが⁵⁸、日本敗戦以後、引揚者が組織した台湾協会会員⁵⁹となり、協会機関誌として発行された『台湾協会報』に杉本の文章も見られる⁶⁰。また、1932年に台湾酒類専売実施十週年祝賀記念のために『専売制度前の台湾の酒』⁶¹を出版した。なかには、台湾医学校の校長を務める高木友枝の序文を載せた。杉本が書いた家史『佐夜中山御林百年』⁶²でも、台湾のことに言及していた。

3. 台北高等学校校長一甲斐三郎

甲斐三郎（1894-1983）については、台湾研究でもほぼ言及されることがない。彼は、1925年から1942年までに台北高等学校、1942年から敗戦までは台中師範学校や台南工業専門学校で教諭や校長を務めた⁶³。兄の甲斐虎太は総督府調査課の役員であり、『台湾日日新報』や『La Formoso』で多くのエスペラント関連文章を掲載した⁶⁴。2人とも台湾エスペラント運動に力を注いだ人物であった。三郎は1928年12月にUEAの副代表者に就任し⁶⁵、また1930年のオックスフォードにおける第22回万国エスペラント大会に台湾代表として出席した⁶⁶。1931年の第1回台湾エスペラント大会では、甲斐三郎が教育者分科会を代表して決議を述べた。

最近にいたり本島に於ても台北高等学校、女子高等学院、商工学校等の男女学生がこの運動に正しき理解を持ち参加したるは吾等の最も喜びとする処なり。[中略] 島内の大学、専門学校、中等学校に大会分科会の名を以て書翰を發し、国際語問題に対する学生の覚醒を促さんとす。[中略] 吾等こゝに本分科会の名を以て、島内公私立図書館に書翰を發送し、エス語学習に必要な各種の図書を備付け、以て学習希望者の便宜を計られんことを依頼せんとす。⁶⁷

日本内地の学生へのエスペラント普及は運動初期から進んでいるが、台湾の学生への普及はおそらく1930年代以降だろうとこの発言からわかる。現在台湾大学（旧台北帝国大学）図書館に多くのエスペラントの関連書籍が所蔵されている⁶⁸。その一部は、この分科会の決議を実行した成果かもしれない。『La Formoso』の発行号数について、前述したように、連温卿によると1926年から1930年にかけて計14号を発行した⁶⁹が、いま現在9号しか確認できない。そのなかに甲斐三郎が発表した文章は見当たらないが、このように図書館にエスペラント書籍を寄贈することは、彼のような学校の教諭ではなければ發揮できない役割だと言えよう。

1926年9月の時点で、台北エスペラント会の会員人数は44名いた。そのなかに台湾人は5人しかいなかった⁷⁰。総じて言えば、台北エスペラント会の主催者やメンバーの構成は、官僚や研究者などの日本人が多かった。彼らはラヂオや研究・行政機関、あるいは学校の資源を通じてエスペラントを普及していた。1939年に台湾博物館創立三十周年のた

め、杉本良は論文集で以下のような祝辞を述べた。

願くば年代の進み進歩の跡を刻まるゝ毎に、その時代、時代の資料を蒐集せられて、わが光輝ある台湾統治の立派な足跡の保存におつくしあるやう切望して止まぬものであります。⁷¹

第三章で詳述するが、『La Formosa』は『La Verda Ombro』に比べると、総督府や植民地政策に批判する言論はほぼなかった。この杉本良の祝辞からも、官僚としての日本人エスペランチストは、日本の台湾統治に誇りを持ち、政府を擁護する立場が明らかであろう。このような立場からエスペラントを普及するのは、もちろん台湾人が中心となった台湾エスペラント学会の「抗日」姿勢とは異なるが、1920年代後半に杉本らは台湾のエスペランチストとして世界エスペラント協会の代表者に就任し、国際大会に台湾代表として出席した。それは、台湾エスペラント運動のなかの一種のコスモポリタニズムを示しているのではないか。

ちなみに、ザメンホフの誕生日を祝福するために、台北エスペラント会により計画されたラジオ番組「エスペラントの夕」が、1929年12月15日に台北放送局において放送された。2時間の番組では、杉本良が指揮者を務めながら、19世紀の中頃に作られた宗教の「バハイとエスペラント」⁷²について話した。また武上耕一が「希望運動とエスペラント」、甲斐三郎が「エスペランチスモに就て」を語った⁷³。これらの講演の内容には、実はエスペラントが宗教や福祉社会団体とつながっていることが反映されている。次の第三節で「大本教」と「希望社」について論じる。1920年代後半のエスペラント運動が、宗教を通じてまたは国家神道とも結び付いて普及運動をしていったことは興味深いことである。

第二節 ほかのエスペラント団体とその普及運動

台湾エスペラント運動は、1920年代前半から分裂状態になり、台湾エスペラント学会の活動は停滞してしまっていたが、官僚中心で主導した「台北エスペラント会」は小さな講習会やイベントを行い運動を続けていた。そして1920年代後半から1930年代前半にかけて、日本内地のエスペラント運動の動きにも影響され、第四章で論じるプロレタリア・エスペラント運動のほか、内地から導入された宗教や福祉団体なども運動に加わった。特に、1931年に開催された第1回台湾エスペラント大会の直前に創立された団体も多かった。例えば希望社エスペラント会、大本教エスペラント普及会、台湾学徒エスペラント会、台湾女子生徒エスペラント会など⁷⁴があり、学生の間でもエスペラント学習がブームになり、エスペラント運動に新たな形が見えてきた。この節では、1930年前後に立ち上がったグループや組織および各団体の出来事についてまとめる。

(一) 台湾エスペラント大会と台湾エスペラント連盟

1931年9月に行われた第1回台湾エスペラント大会は、まさに分裂したエスペラント運動の再統合という象徴的なイベントであった。連温卿は以下のように第1回の台湾大会

を開催するきっかけについて回想している。1920年代後半に台北エスペラント会が成立し、宗教団体の大本教と希望社が台湾大本エスペラント部と希望社エスペラント部を設立した。このことにより、台湾エスペラント運動は台湾エスペラント学会から完全に4つの団体に分裂した。そこで学会以外の3つの団体が武上耕一を代表として推挙し、連温卿と会談した結果、過去の誤解を解消するために台湾エスペラント大会を開催することになったという⁷⁵。

1931年9月18日から20日にかけて3日間行われた第1回大会は、浅井恵倫や小林鉄太郎の講演のほか、その夜にも浅井のラジオ放送があった。また、分科会・協議会・懇親会などのほか、連温卿が『La Verda Ombro』により交換した外国雑誌180種のエスペラント資料展覧会も開かれた。参加者は計121人であるが、そのうち台湾人は17名しかいなかった。誤解を解消するために行った大会だったが、大会協議会で、「プロレタ・エスペランチスト分科会」の代表者井上鉄男が「大会の席上に於て「言葉は神なり、言葉は神の創造なり」と言はぬことを要求す」、「階級闘争にエスペラントが関係なしと言はぬと要求す」と分科会の決議案2ヶ条を述べた。議長を務める小林鉄太郎が「これは決議と申すよりも希望と申すべきものであると思はれます。然し自己を尊重し、他人の誇を傷つけず、互に尊重し合ふことにして、謹んで聞きおくことにいたします。如何でせうか」と言っていた。大会記録ではその発言のあとに「(拍手)」が付いている⁷⁶。

連温卿が中心となった台湾エスペラント学会と異なる立場を代表して、武上が連と会談した。しかし、連が「プロレタ・エスペラント分科会」の主張に賛同したため、第1回台湾大会を開いても誤解を解消しないままの状態が続いた。そのため、大会の後に連温卿と1人の台湾人幹部(陳)、および13名の日本人幹部は「台湾エスペラント連盟」の結成会議を開き、連盟規約を提案した。同年11月7日の創立代表委員会に10条の連盟規約が制定され⁷⁷、第2回台湾エスペラント大会の準備会議も行われたが、日本人エスペランチストが台湾人の提出した方針について賛同できず、結成した記録は残っているのだが、実際の行動はなかったようである⁷⁸。

こうした第1回大会の衝突の影響もあったため、翌年の第2回大会は、日本人エスペランチストは台湾人と距離を置き、若いエスペランチストも運動から離れたため、台湾総督府医学校エスペラント部の協力の下で台湾エスペラント学会の主催によって、1932年12月4日に医学校の講堂で行われた。開会辞を述べたのは医学校エスペラント会の李偉雲という人物である。井上鉄男の講演や、M. WolfのPatrecoという演劇を行った。また展覧会で陳列した資料は計800種、1300点以上の書籍や雑誌などが展示され、130人の参加者のうち台湾人は62名いた⁷⁹。台湾人が第1回大会よりかなり増えたことがわかる。

第2回大会の記録小冊子は散逸したが、日本エスペラント学会の機関誌『La Revuo Orienta』には第2回台湾大会についての報道も見える⁸⁰。『台湾日日新報』では「エス語大会に内地から二名の出席者⁸¹」が報道された。この2人とは、京都エスペラント普及会の井上照月とハンガリー出身のヨセフ・マヨルという人物である。後述するがこの京都エスペラント普及会は、大本教が創立したエスペラント組織である。そして井上照月は普及会の機関誌『Verda Mondo (緑の世界)』で第2回大会参加で失望した感想を発表した。

自分は明るく朗らかなこの大会を想像し乍ら遙々亀岡からヨセフ・マヨール氏と共に掛けて来たのだ。然し吾等の予想は無惨にも打ちくだかれて了った。期待が大きかっただけ幻滅の悲しみは著しい。[中略] 二三をのぞいて悉くが赤化宣伝に始終してゐた。而もエス大会にも関らず悉く日本語を使用して例の宣伝用語を繰返してゐた⁸²。

井上の目から見ると、台湾大会にいた発言者がほぼ「赤化宣伝」、つまり共産主義の思想を宣伝しただけで、しかもエスペラントよりは日本語の発言が多かった。このことから、第2回の台湾大会はプロレタリア・エスペラント運動が進んでいたことがわかるだろう。第1回の大会でプロレタ・エスペランチスト分科会が設置され、代表者の井上鉄男が述べた決議、あるいは台湾エスペラント学会の階級闘争の方針が1932年以降にはある程度の影響を持ったと考えられる。この点については第四章で詳しく論じる。

(二)「大本教エスペラント部」と「希望社エスペラント部」

1931年の台湾大会直前に「大本教エスペラント部」や「希望社エスペラント部」など宗教や社会福祉団体のエスペラントグループが設立された。それはなぜだろうか。そもそも大本教と希望社とはどのようなものであろうか。

民俗学者鹿野政直によれば、大本教は創唱宗教の1つである。創唱宗教とは、幕末に封建制からの解放を希求し予見する形で民衆自身が作り出していった思想であり、特に1人の創唱者によって提唱された宗教を指す。伊藤六蔵の丸山教、黒住宗忠の黒住教、中山みきの天理教、川手文治郎の金光教など、いずれも「世直し」への民衆の期待を体現したものであった。こうした状況を背景として、1892年に京都府福知山に生まれ綾部の叔母の養女となった56才の農婦出口なお(1837-1918)は、「世直し」への内なる衝動にたえかねて、それを「大本教」という1つの宗教思想にまでまとめあげていった⁸³。

宗教学者の池田昭は、宗教的土俗的文脈から見れば、大本はこの世の「泥海」を告知し、「立替え立ち直し」を謳い、理想世の「松の世」・「ミロクの世界」を待望した「革新」的農民思想運動であったと述べた⁸⁴。社会学者の對馬路人は、「大本は世界の諸宗教の和合を通して本来の「日本精神」の復興や日本社会の変革を求める運動を教団の枠を超えて展開していった」と評価した⁸⁵。世界の諸宗教統一(万教同根、万教帰一)への志向、大救世主による世界救済への期待から発足した大本教は、日本全国で「人類愛善運動」を行っていた。1922年以降に大本教はエスペラントを本格的に普及していったことも、その具体的な動きの1つである。

大本教のもう1人の教祖は、出口王仁三郎(1871-1948、出口なおの娘婿)である。広瀬浩二郎は、王仁三郎の思想を新宗教の先駆とし、非近代・反近代を標榜する民衆宗教の決定版と考える⁸⁶。1922年にアメリカからのバハイ教⁸⁷の宣伝使が大本教を訪問した時、「世界の平和は世界語によってもたらされること。各国民は自国語のほかには世界共通語としてエスペラントを用うべきこと」と、バハイ教の信条の1つを王仁三郎に話したという。

王仁三郎はこの言葉を教義として採用することを決めた⁸⁸。大本教の精神とエスペラントとの共通点について、信者の井上留五郎は王仁三郎の言葉を以下のようにまとめた。

さて世界統一（道義的）、神人合一の大御神業に就てドコ迄も其本となり又末を全ふするに必要なものは人心の統一であつて、そして其人心の統一は先づ言語の共通的理解が第一の条件となるのであります。此点に向つてエスペラント語は実に理想的、共通的中立言語でありまして、詳しく言へば今度の御経綸のために予め準備されたる統一用語であります。此言語の完成は今より約四十年前、大本の開祖様神がりの少し前に出来上つたのでありまして、独り言語を学ぶだけではなく、エスペラント主義として「世界人類は皆神の子であり同胞である」との博愛和親の精神を根拠とし、世界永久平和を希望として居るのであります。⁸⁹

こうしたように、エスペラントの思想が大本教の教義とつながるようになり、王仁三郎は、「エスペラント主義と大本の精神とが似ている」、「今後はエス語でなければならぬ」、「今日のように世界各国が言葉が分かれては至難なことであるけれども世界共通語のエスペラントはわずか二十八文字で通用し世界へ行きわたっているから、この語を研究して神意を世界へ宣示するというのは神意にかなったことである」と述べ、自分もエスペラント語を受講した⁹⁰。1923年6月に「大本エスペラント研究会」が生まれた。さらに教団内にも「エスペラント普及会」を設立し、雑誌『Verda Mondo（緑の世界）』を発行した。第一小節で引用した井上照月の感想は、この雑誌で発表したものである。

大本教は1925年に『人類愛善新聞』を創刊し、一時百万部に達した。そこに載せた人類愛善会則には、「本会は国際補助語として、『エスペラント』を採用す⁹¹」という1ヶ条が見られる。雑誌のなかにもエスペラントとローマ字のコラムを開き、エスペラント関連の論文を多く載せた。井上照月も『人類愛善新聞』で多くの文章を発表した⁹²。大本教は短期間のうちに、日本国内における有力なエスペラント普及団体となった⁹³。

大本教の台湾への布教は早かった。第1回の布教は1919年に在台日本人を対象として行われ、第2回は1920年に台湾全島にわたる活動をした。しかし国家神道に違反するという理由で、日本本土でも台湾の総督府でも大本教の布教を警戒し、総督府は1920年7月に島内での布教と書籍の発売を禁止した⁹⁴。布教運動は弾圧されながらも徐々に広がり、王仁三郎は愛善運動のため朝鮮や満州、モンゴルにも渡り、1929年には台湾にも講演に行った⁹⁵。その影響もあるためか、日本統治時代の台湾には、大本教の集会所が200箇所以上設置されたようである⁹⁶。台湾の「大本エスペラント研究会」の設立は、おそらく王仁三郎の渡台とも関係があるだろう。

一方、1930年9月に「希望社台北エスペラント会⁹⁷」を創立した希望社は、1918年に大分県出身の後藤静香（1884-1971）により創立された社会運動団体であった。後藤静香は、点字の普及、ハンセン病患者救済、エスペラント運動、老人福祉、アイヌ救済、現代仮名遣いの普及など「希望社運動」と呼ばれる様々な社会活動を行った。エスペランティスト学者の後藤齊は、後藤静香がエスペラントとハンセン病との関係をつないだ人物でもあ

ったと評価している⁹⁸。

希望社は1918年6月1日に『希望』を創刊し、翌年の12月の時点で発行部数は2万6千部となり、1920年7月には4万2千部となった。1922年4月に日本印刷学校の母体となる希望社印刷部を設立した。1920年1月から『希望』にローマ字欄を設け、ローマ字普及運動を開始した⁹⁹。また後藤静香は日本各地で講演を行い、朝鮮や満州にも巡講しにいった。1928年4月25日に、後藤は蓬莱丸に乗って台湾へ向かった。阿里山、角板山の蕃地や最南端のガランビ（鵝鑾鼻）などにも足を延ばし、さらに同年「台湾高砂族への慰問活動」を起こした¹⁰⁰。こうしたことから見れば、希望社の台湾進出は、おそらく1928年からであろうと推測できる。だがそれ以前にも、希望社の雑誌『希望』と2種類目の雑誌『のぞみ』（1923.01）は、すでに台湾で購読できた¹⁰¹。

大本教の1923年と比べれば遅かったが、希望社は1930年3月から月刊誌『Esperanto kibosa』を発刊し、同年6月に後藤がエスペランチストの石黒修とヨーロッパ旅行に行き、8月に第2回万国エスペラント大会に参加した¹⁰²。後藤静香は『Esperanto kibosa』を発刊する前に以下のように述べている。

時がきた。もう人類に呼びかけぬばならぬ時がきた。全日本を風靡しているこの精神運動が、国境を越えることになんの不思議もない。[中略] われわれは、世界人として国際語エスペラントを学ぶ義務を感じる。少なくとも世界人としての意識に立つとき、この必要を感じる。しかし、英語に対してそんな義務も必要もない。エス語を日本に普及することの必要なわけは、今後毎号の「エスペラント」で論ずる¹⁰³。

すなわち、希望社は世界人の意識を持ちながら、希望運動や精神運動を世界へ進出させるため、普及手段としてエスペラントを採用した。興味深いのは、エスペランチストが諸民族語のローマ字化を世界のエスペラント化の第一歩と捉えることから、大本教も希望社もエスペラント運動だけではなく、ローマ字運動にも取り組んでいたことである。例えば、王仁三郎は、このように述べている。

祝詞のことばが真の善言美詞であつて、実は今の日本語も外国語を輸入した言葉が大部分であるから、中途半端の日本語は決して善いことばはないのであつて、外国語を排するならば現今の日本語も同様の意味で外国語として排斥せねばならぬ訳になつて了ふ。こんな訳でローマ字やエス語を学んで、早く五大洲に共通の言語を開くのが必要な事であるから、宗教はミロクの世になれば無用のものであつて、宗教が世界から全廃される時が来なければ駄目なのである。¹⁰⁴

エスペラントだけではなく、ローマ字の採用も世界統一のためだと、王仁三郎は考えた。また後藤静香は、ローマ字読本の序文で、「理論は兎も角、ローマ字を知らねば、常識の缺けたものと思われる時代になりました。世界の日本が世界の文字を使用し、日本の文化

を進めようとゆうことに何の不思議もありません」¹⁰⁵と述べた。つまり彼も日本語をローマ字化することを主張し、ローマ字が知識を手に入れることができ、世界とつながる手段だと考えていたことがわかる。このように団体を拡大するためにエスペラントを、世界とつながるためにローマ字を採用する考え方は大本教と似ている。

こうしたローマ字とともにエスペラントを推進することは、1920年代初期に特にブームとなった。哲学者の永野芳夫も1924年に『経験哲学を基礎としての新しい教育論』という著作で、ローマ字を国字とすることを望むと述べながら、その最も大きい理由はエスペラントの普及だと言っている。彼は、既成の国語はみな不完全な混乱を持っているもので、語法が簡単なエスペラントを一国語の共通語にすれば、外国語を容易に同化し、世界と交流しやすいと強調しながら、日本語をローマ字で現わすことになれば、エスペラント式にしたほうがよいと主張している¹⁰⁶。こうしたエスペラントとローマ字に関する国字問題における議論について第五章で詳述するが、つまり、日本語の国字をローマ字にすると同時に、エスペラントを普及するのは、1920年初期から、宗教団体や社会福祉団体のリーダー、またはさまざまな各分野で活躍している多くの知識人の共通的な考え方であったといえるだろう。

宗教団体や福祉運動団体が人類の共通語としてエスペラントを採用したことから見れば、エスペラント運動は、日本でも台湾でも1920年代から1930年代かけて盛んになり、各分野で影響を与えたと言えよう。そしてエスペラント普及運動に参加した団体の多くがローマ字運動にも取り組んでいたことは、当時の日本も世界と頻繁に交流するようになったことや、国語国字の問題や言文一致運動などへの一種の反応とも言えよう。また日本のエスペラント運動は、1930年代前後の文学や文芸活動ともつながっていた。これらの点については、第四章と第五章で詳しく分析する。

(三) エスペラント普及会と台湾全島「緑化運動」

一時どん底に沈んでいた台湾エスペラント学会の運動だが、1920年代後半から台北エスペラント会という組織により運動が続けられていた。組織自体はあまり拡大していなかったが、1930年前後に台湾各地のエスペラント運動が活発化した傾向が見られる。それには前述した日本内地から入って来た大本教のエスペラント普及運動の影響力も見逃せない。大本教の台湾での運動は史料が限られているため、明確に把握出来ないが、ここでは、大本教によって設立された「エスペラント普及会」とその台湾全島「緑化運動」を注目したい。

「エスペラント普及会」の広瀬武夫は、1931年9月の第1回台湾エスペラント大会に参加した後、6ヶ月間の「台湾全島緑化」の計画を立て、学校、医院、青果同業組合、街役所などさまざまな場所で講習会を行った。その影響を受けて成立した支部は台北、台中、南投、嘉義、基隆に置かれた¹⁰⁷。広瀬の台湾巡講の際の受講者からの挨拶の辞が普及会の機関誌『Verda Mondo (緑の世界)』に載せられている。例えば、大本教のエスペラント普及会であるが、広瀬の台湾巡講を受けた受講者のなかに、クリスチャンもいた。それは、嘉義の講習会に参加した謝萬安である。謝は真イエス教会の信者で、1930年代初期から

『台湾新民報』や『台湾文芸』で多くの歌謡を発表し、台湾語ローマ字を改革しようとした文化人である。1932年5月の『Verda Mondo』には、彼のエスペラント語と日本語の短い文章が載せられている。

これから日本語で話さして貰ひます。同志を作りたいと思つて居ましたが、色々の努力が無駄でありました。或る日人類愛善新聞で橋本さんのお家を訪ねて来て、木暮徳三さんと知り合ひになつたのです。そして共に研究して居ましたが、語学といふものは仲々努力が要ります。油断がなりません。決して容易なものでありません。根気が要るのです。[中略] 皆さまもそんなつもりで熱心に御勉強ください。音楽的なこの理想語しかも本当に役に立つのはエスペラントの他にありません。台湾オエ（語）もギリシヤ語も研究して見ましたが、それぞれの文法にギゴチナサがあります。何と云つてもエスペラントでなければなりません。幸いにこの意義ある講習会を御用意下さつた事を主催者の方々に厚くお礼申し上げるものであります。¹⁰⁸

ここから、クリスチャンである謝萬安は、大本教の『人類愛善新聞』の編集者とも付き合い¹⁰⁹、そして「緑化運動」の前にすでにエスペラントに興味を持ち、「緑化運動」の講習会をきっかけによりエスペラントを熱心に勉強したとわかるだろう。すなわち、謝のような文化人は、大本教の信者ではなく、つまり宗教のよしみを通じたのではなく、エスペラントという言語自体に興味を持ったと言えよう。

また、かつての台湾エスペラント学会の機関誌の編集者である江副秀喜のメッセージが残っている。

台北に居りました頃、連さんから指導を受けてエスペラントの勉強を始めたのですが、今まで長く中止して居りました。遇々広瀬さんの来基によつて放つておいた学習熱が再び湧いて来ましたので、寄せて貰ふやうになつたのです¹¹⁰。

ここから江副秀喜は連温卿の指導でエスペラントを始めたが、基隆に転勤してから学習を中止したことや、広瀬の「緑化運動」によって学習熱を再燃させたことがわかる。また広瀬の説明によれば、江副はのちに普及会の基隆支部を組織したという。この「緑化運動」の影響を受けて台湾各地で支部が組織されたが、そのなかに、最も見逃してはいけないのは、「台南支部」であろう。『Verda Mondo』に次のような記事が見られる。

台南田町キネマ世界館に本会台南支部が置かれたのは、余程以前の事であるが、同館内垣藤義雄氏等はその後懸命の努力をしてゐる。或は月刊雑誌 Verda Insulo の発刊或は諸種映画宣伝ビラを利用しては、エス語を交へ、或は講習会 研究会を催す等、地の利が良いのと背影があつらへ向きなので、充分の効果を収めてゐる¹¹¹。

1932年8月に掲載されたこの記事の「余程以前」とはいつのことか不明であるが、「本会台南支部」は「台湾全島緑化」講習会の前に創立された組織だろうと考えられる。またこの台南支部は月刊『Verda Insulo (緑の島)』を刊行したが、ほかの支部でも似た刊行物が発行された可能性がある。手元に『La Verda Insulo (緑の島)』の1934年7月に発行された第2号があるが、これは、1932年2月から「台湾全島緑化」講習会¹¹²を受けた王雨卿が創立した「啓南緑友会」によって1933年に創刊された雑誌であった¹¹³。そのなかにも広瀬武夫や井上照月の文章が掲載されている¹¹⁴。すなわち、王雨卿による『La Verda Insulo』は、月刊『Verda Insulo』を引き継いだものだろうと推測される。

ところが、階級闘争の主張に反対する広瀬が計画した「台湾全島緑化」運動の影響を受けて誕生した『La Verda Insulo』には、左翼作家の荘松林¹¹⁵がエスペラントに訳した台湾童話「La Malsaĝa Tigro (愚かな虎)¹¹⁶」や、古井仙一がエスペラントから日本語で訳した「Historio de Esp-Movado en Sovetio (ソビエトのエスペラント運動史)¹¹⁷」などの文章が掲載されている。創刊号はまだ見つからないが、第2号の『La Verda Insulo』から、1930年代のプロレタリア・エスペラント運動や台湾民間文学運動と連動していた側面も見えるであろう。この点については第三章で詳述する。

以上、台湾エスペラント運動の中に存在していたいくつかの組織や、何人かの在日日本人エスペランティストおよびその役割などをまとめてきた。時期区分をすれば、ちょうど第一節では1920年代、第二節では1930年代の台湾エスペラント運動の概況を整理したことになる。1930年代のプロレタリア・エスペラント運動については、第四章で詳しく分析するが、以下の第三節では、戦争期に入ったことによる運動の衰退について論じる。

第三節 台湾エスペラント運動の衰退

松田はるひによれば、1932年の第2回台湾エスペラント大会では、台湾人エスペランティストおよびプロレタリア・エスペラント運動系の日本人がイニシアチブをとり、運動の性質の相違をより鮮烈に反映していた。だが満州事変が勃発したため、エスペラント運動はここでピリオドが打たれた¹¹⁸。しかしながら第四章で詳しく論じるが、1932年5月に台湾エスペラン学会は、創立20周年記念として発行した『Elementaj Lecionoj de Esperanto (初級エスペラント教科書)』や、前述した大本教のエスペラント普及会による「台湾全島緑化」運動の影響を受けて誕生した『La Verda Insulo』、または1936年の『台湾新文学』に連載された「エスペラント講座」などから見れば、満州事変以降の運動は、小規模でありながらも何らかの形で進められていたとわかる。

とはいえ、エスペラント運動は確かに戦争によって大きな影響を受けた。特に太平洋戦争期に入ると、日本エスペラント学会の普及活動は、うまく行くことのできない状況が多くあった。日本エスペラント大会が中止されたのは1944年だけだが、それ以外の年でも参加者は戦争前に比べるとかなり減少していた。1940年代以降の台湾エスペラント運動も実際の活動はほぼなかった。もちろん戦争の影響もあるが、台湾では皇民化運動による国語教育の急進が、エスペラント運動を阻む大きな原因となったであろう。以下、満州事

変と太平洋事変前後のエスペラント事情、そして台湾における国語運動の展開などを簡単に紹介しながら、エスペラント運動の衰退についてまとめる。

(一) 満州事変と太平洋戦争の影響

1920年代に満蒙における日本の「特殊権益」の追求は、中国ナショナリズムの高揚と激しく衝突し、満蒙問題の解決は日本の死命にかかわる焦眉の課題として宣伝されていた。1928年10月に関東軍作戦主任参謀として赴任した石原莞爾は、「満蒙領有論」を主唱した。1931年9月に柳条湖事件に端を発した「満州事変」が勃発すると、関東軍により満洲全土が占領され、1932年3月「満洲国」が建国された¹¹⁹。ルイーゼ・ヤングによれば、満洲国建国前後に日本中は「戦争熱」に覆われた。陸軍やマス・メディアの宣伝を通じて、全国の町村に密着した戦争支援運動が行われ、満洲占領への民衆の支持は、地域・階級・性など国民より下位のグループに対する忠誠心に依拠した地方組織を通じて動員された。日本の帝国イデオロギーは、1920年代の「緩慢な帝国主義」から1930年代の「急速な帝国主義」へ転換していった¹²⁰。

こうした「急速な帝国主義」へ転換する時代のなかで、エスペラント普及運動に参加した「希望社」も愛国組織として動員された¹²¹。また大本教の「愛善報国運動」も一時期白熱化し、各地で「満蒙問題の重大さを知り日本国民の覚悟は如何」と絶叫して運動を進めていた¹²²。教祖の出口王仁三郎が「愛善運動」のため満洲やモンゴルに渡っただけではなく、大本教のエスペラント普及会がエスペラントを満洲国の公用語にしようと呼びかけた¹²³。また、1932年8月にポーランドで開催された世界エスペラント大会には、希望社の後藤静香、国際連盟前副書記官の新渡戸稲造、そして大本教の人類愛善会代表の志村光月らが出席した¹²⁴。つまり「満州事変」前後に、エスペラントの普及運動はまだ活発に行われていた。

だが、特に太平洋戦争期に入ると運動は厳しくなった。例えば日本エスペラント学会のほうでは、機関誌『La Revuo Orienta』が1942年1月号と2月号に宣戦に関する政府声明をエスペラントに訳して掲載した。戦争期で資源不足などの背景もあり、雑誌の表紙配給割当も減少したため、ページが薄くなり表紙の色彩も消えた。なおかつ日本エスペラント大会の参加者が減少したことからみれば、エスペラント普及事業もかなり戦争の影響を受けたと思われる¹²⁵。また、左翼的な知識人が参加した運動を除くと、『La Revuo Orienta』で1943年2月から「愛国百人一首」の翻訳募集を発表し、作品の発表は同年12月まで続いていた¹²⁶。こうした国策に応じたエスペラント運動が行われたため、戦争の影響を受けながらも、政府からの弾圧は特に受けていなかった。

一方、植民地台湾では、皇民化運動のなかで政治上、文化上でさまざまな動員がなされたが、『台湾日日新報』に掲載されたエスペラント関連の記事は、1930年代後半からほぼなくなった。もちろん、例えば台湾エスペラント学会が高砂食堂で開催したエスペラント誕生50周年記念イベント『エスペラントを語る夕』¹²⁷や、台北エスペラント会が久しぶりに例会を行った¹²⁸ことなどはまだ掲載されているが、台湾エスペラント会であれ、台北エスペラント会であれ、1940年代以降には実際の活動は行われなくなった。

第五章でまた詳述するが、太平洋戦争直前の1939年に、内地で「左翼ローマ字事件」が起こった。それはエスペランティスト齋藤秀一の検挙がきっかけとなり、1939年6月5日に治安維持法違反容疑で検挙された、唯物論研究会関連の事件であった¹²⁹。そうした影響もあってか、台湾のエスペラント運動は総督府により厳しく警戒されており、結局1940年以降の運動はほぼ休止した。だが最も大きな原因は、植民地で実施された皇民化運動、特に「国語運動」の急進化だと考えられる。

(二) 国語政策の急進

周知のように、日本領台初期から「国語（日本語）」の普及が始まった。そして1937年の日中戦争以降、植民地台湾では軍事動員が開始され、国語運動、改姓名、志願兵制度、宗教・社会風俗改革などさまざまな形での「皇民化運動」が行われてきた。この「国語運動」は日本語普及の究極の目標であり、あらゆる台湾人が日本語を話せるようにするためのものであった¹³⁰。この運動は、特に都会での言語環境を台湾語から日本語に変えさせた。例えば池田敏雄の「敗戦日記」では以下のように記している。

学生連盟で極端に台湾語常用を叫ぶ傾向あるも、今の若い台湾人は完全な台湾語は使えない。使ってもわざとらしく、しかも土語らしい下品さがある。急に日語を極端に排斥するなど、感情的にならなくてもいいと思う。¹³¹

これは池田敏雄の友人R（女）が言った言葉である。ここから敗戦直後に日本語を排斥する現象があったが、若い台湾人は台湾語を使えなくなっていた現実も読み取れるであろう。台湾語流失に拍車をかけたのは、戦争期に行われた国語運動だと思われる。その結果は戦後にも及ぶ日本語しか書けない「日本語世代」が誕生した。

皇民化運動にともない国語運動はいつそう強化されたため、島内にあるすべてのエスニックグループの言語が劣等化された。1937年以降、総督府は新聞の漢文欄を廃止したが、対中政策と共に島内の言語政策は微妙に変わってきた。『風月報』のような雑誌は中国語の文章を大量に掲載したが、それまで最も使用されていた「台湾話式的漢文¹³²」はますます使われなくなった。このような国語優先という状況で、台湾語が下位化され、エスペラントの普及もいつそう困難になったことであろう。

1930年代後半以降、台湾エスペラント学会や台北エスペラント会、またはエスペラント普及会台南支部などの実際の活動は見ることができないが、プロレタリア作家楊逵が1935年に創刊した雑誌『台湾新文学』にはエスペラントの題名が付いている。また『台湾新民報』にもエスペラントに関連する記事がある。これらの情報は日本エスペラント学会の機関誌『La Revuo Orienta』にも載っている。

*台湾新文学—“La Formosa Nov-Literaturo”なる表題を付す。

*台湾新民報（4月24日）—海外小語欄にエス語通信による結婚を紹介。¹³³

『La Revuo Orienta』に掲載されたことは、連温卿が仲介したものだと考えられるであろう。特に『台湾新文学』には連の「エスペラント講座」が2回連載されたほか、台湾童話を募集し、エスペラントに訳そうとした¹³⁴。ちなみに楊達は、『日本学芸新聞』の台中支部代表者を務め、『台湾新文学』雑誌を『日本学芸新聞』で「フランス『国際文学』の編集者が計画してゐる世界各民族の童話叢書刊行について台湾童話の紹介に参加する連温卿氏を援助」と伝えた¹³⁵。第四章で詳述するように、1930年代以降に連温卿のエスペラント運動がプロレタリア・エスペラント運動に移行したことは、台湾エスペラント学会が発行した通信や教科書の内容からわかる。『台湾新文学』の題名がエスペラント名であったことや、雑誌にエスペラント講座が開かれたことは、1930年代後半の台湾エスペラント運動は、社会運動よりは文化運動へ影響が強かったことを示しているであろう。

ちなみに、1935年11月から1942年7月まで発行し楊達も関わった『日本学芸新聞』は、当初から新聞の題名にエスペラントが付いており、エスペラント関連の記事も少なくなかったが、1942年9月1日の第318号からはエスペラント題名が消え、記事も大東亜共栄圏に関する文学活動の掲載が中心となった。これもエスペラントが戦争の影響を受けた1つの例であろう。

1940年代以降、台湾エスペラント運動は実際の活動が見当たらず、ほぼ終止符を打ったといえるが、連温卿と親交のあるアナキストの山鹿泰治は、1939年に台湾へ移住し、1945年に「台湾自由社」を立ち上げ、北京語、英語、エスペラント語教授の塾を開いた¹³⁶。規模はどのぐらいであったか不明だが、敗戦直前のエスペラント運動の痕跡と言えよう。

第一章で言及したように、山鹿泰治は15歳で上京し、出版社の有楽社に住み込み、事務所の雑務を手伝うことになった。1907年3月に社内で開かれたエスペラント講習会に参加し、そのときからエスペランティストになったという¹³⁷。日本エスペラント協会が麹町に移った後、二階には築地活版所の植字工となった山鹿が住み込みで会務の手伝いをした¹³⁸。その後、中国や台湾のエスペラント運動にも影響を与えたという。ちなみに山鹿は、日本敗戦後「多年集めたエスペラント文献は、全部、同志連温郷（卿）に引き渡した」¹³⁹と述べているが、1957年に連温卿が亡くなった後には、山鹿の文献はおろか、台湾エスペラント学会の機関誌や通信・教科書、または連の日記、機関誌で交換してきた世界各国のエスペラント資料などはすべて失われていた。

ところで、1954年に連温卿が改造社編集部に勤めたことのあるエスペランティスト比嘉春潮に送った私信の中に、以下のような箇所がある。

山鹿さんを通じてすゝめてきたことがあったが、今更 Esp.のために冒険的なことをする必要がないと思ってことわったのです。¹⁴⁰

戦後、大島義夫らは、「連の名をこうした種類の文章にだすことはどうかという蔣政権への顧慮から、菊栄の旧版『女二代の記』などにならって、比嘉春潮の『沖縄の歳月』などと同様、筆者も今まで控えていたのであるが、すでに故人になったことでもあるので、はばかることもないであろう¹⁴¹」と考えている。このことから見れば、連温卿が比嘉春潮

宛ての手紙で「今更 Esp.のために冒険的なことをする必要がない」と書いたのは、「蔣政権への顧慮」がゆえかもしれない。だがこの手紙からも、日本統治下の台湾で、連温卿を含め多くのエスペランチストは、命をかけてエスペラント運動をやっていたことがうかがえよう。

以上、日本統治下における台湾エスペラント運動の歴史を概観しながら、台湾人と在台日本人エスペランチストそれぞれの役割についてを考察した。また、台湾エスペラント学会以外の団体の創立した経緯の分析を通して、台湾のエスペラント運動はさまざまな思想や社会の潮流に影響されながら行われ、つまり多くの側面を持っていたとわかる。

¹ 蔣渭水著、王晓波編、『蔣渭水全集 増訂版上冊』、台湾：海峡学術出版社、1998.10、30 頁。

² エロシェンコは 1914 年 5 月から 1916 年 7 月まで東京に滞在し、その後東南アジアに向かった。1919 年 7 月再び日本に戻り、1921 年 6 月に日本から追放された（ア・ハリコウスキー著、山本直人訳、『盲目の詩人 エロシェンコ』、東京：桓文社、1983.09、317-319 頁）。1914 年 5 月、エスペランチスト中村精男の紹介で日本エスペラント協会の事務所になっている黒

- 板勝美の家で、エロシェンコは初めて小坂狷二に会った（高杉一郎、『夜あけ前の歌—盲目詩人エロシェンコの生涯—』、東京：岩波書店、1982.12、81頁）。
- 3 連温卿、「台湾に於けるエスペラント運動年代記」、『Informo de F.E.S (台湾エスペラント学会通信)』創刊号、1931.12.15、11、15頁。
 - 4 史可乘（連温卿）、「人類之家・台湾 ESP 学会」、『台北文物』(3)1、1954.05、93頁。
 - 5 『La Verda Ombro (緑の蔭)』、台湾エスペラント学会、1922.04、13頁。また、1922年の台湾エスペラント学会の会員録に稲垣の名前があった。『La Verda Ombro』、1922.12、12頁。
 - 6 『La Revuo Orienta (エスペラント)』、1922.10、付録「日本エスペラント名簿」の20頁。
 - 7 泉風浪、「今昔物語り(62) 稲垣藤兵衛」、『台湾同盟通信』、1959.12.01、1頁。
 - 8 井上伊之助、「街の奇人、稲垣藤兵衛氏」、『台湾山地伝道記』、東京：新教出版社、1960.09、304-305頁（初出：『愛光新聞』35号、1957.08.01、4頁）。
 - 9 竹中信子、『植民地台湾の日本女性生活史②大正篇』、東京：田畑、1996.10、227-228頁。
 - 10 漢文版『台湾日日新報』でも「自廢公判延期」(1922.08.11)、「自由廢業之余波(上、下)」(1923.03.08-09)など、多くの関連記事が出た。
 - 11 手塚登士雄、「稲垣藤兵衛の『非台湾』など」、『トスキナア』第8号、2009.10、111頁。
 - 12 稲垣藤兵衛、「非台湾の立場より」、『非台湾』創刊号、台湾：非台湾社、1927.03、4頁。
 - 13 付録「日本エスペラント名簿」、『La Revuo Orienta』、1922.10、20頁。「台湾エスペラント学会会員名簿」、『La Verda Ombro』、1922.11-12月合併号、12頁。
 - 14 手塚登士雄、「稲垣藤兵衛の『非台湾』など」、111頁。
 - 15 台湾総督府警務局編・呉密察解題、『台湾総督府警察沿革誌(三)』(復刻版)、台北：南天書局、1995.06、890-891頁。「孤魂聯盟」は、無政府主義の研究、宣伝により無産階級の解放を図ることを目的とする団体である。
 - 16 山川菊栄、『女二代の記』、東京：日本評論新社、1956.05、236頁。
 - 17 山口小静、「一婦人の声」、山口小静遺著『匈牙利の労農革命』、東京：水曜会、1923.06、30頁。この文章は元々エスペラントで発表された。「Alvoko de Virino – al la Esperantistino en la mondo-」、『La Verda Ombro』、1922.09。山口が自ら和訳したと連温卿が『匈牙利の労農革命』で記している。
 - 18 山川菊栄訳のペーベル『婦人論』の下訳と、山川菊栄訳で出版した『社会進化と婦人の地位』の前半は、山口小静によるものという。大島義夫・宮本正男、『反体制エスペラント運動史』、東京：三省堂、1974.07、96-102頁。
 - 19 吉田梅子（山口小静）、「匈牙利の労農革命」、『社会主義研究』、1922.03、80-92頁。
 - 20 山口小静、「安部能成の平和論(遺稿)」、『種蒔く人』4(19)、1923.06、338-346頁。「独逸共産党と婦人」、『赤旗』3(5)、1923.05、7頁。『赤旗』は、日本共産党の合法機関誌である(犬丸義一、「解説」、『日本社会運動史料 機関誌篇 日本共産党合法機関誌 赤旗・階級戦(全)』、東京：法政大学出版局、1973.02、479頁)。
 - 21 山川菊栄、「山口小静」、『山川菊栄集(8)』、東京：岩波書店、1982.01、18頁。貝原たいによると山口が台湾に帰ったのは1921年10月だった。貝原たい、「山口小静さんの思出」、山口小静遺著、『匈牙利の労農革命』、東京：水曜会、1923.06、付録5頁。
 - 22 「委員会成る」、『La Verda Ombro』、1922.3-4月合併号、13頁。
 - 23 K.Jamaguchi (山口小静)、『La Verda Ombro』、1922.09、3-4頁。
 - 24 ロマン・ローラン原著、K.Jamaguchi (山口小静) 訳、「人類解放の武器はエスペラント」、『La Verda Ombro』、1922.11-12月合併号、1-3頁。
 - 25 山口小静、「赤化か緑化か」、山口小静遺著、『匈牙利の労農革命』、32-33頁。
 - 26 台湾総督府警務局編、『台湾総督府警察沿革誌(三)』、183頁。
 - 27 山川均、「尊敬すべき同志山口小静氏」、山口小静遺著、『匈牙利の労農革命』、附録3頁。
 - 28 「マルクス研究会」は、1923年7月末に成立した「社会問題研究会」の先駆である(連温卿「過去台湾之社会運動」、『台湾民報』、1927.01.02。当時：「馬克斯研究会」)。
 - 29 このロシア飢饉救済運動は台湾史上初の社会主義的色彩のある活動だと言われる。邱士杰、『1924年以前台湾社会主義運動的萌芽』、台北：海峡学術、2009.10、105頁。
 - 30 「台湾の同志より その二(A氏)」、山口小静遺著、『匈牙利の労農革命』、付録15頁。A氏が連温卿であることは山川菊栄の『女二代の記』(261-262頁)からわかる。
 - 31 例えば、越無(連温卿)、「蠹魚的旅行日記」、1924、第81、103、104回。

- 32 「台湾の同志より その二 (A 氏)」、山口小静遺著、『匈牙利の労農革命』、付録 15 頁。
- 33 山川均、「植民政策下の台湾」、『山川均全集 (7)』、東京：勁草書房、1968 (初刊：『改造』、「弱小民族の悲哀」、1926.03)。「編注」に「本篇は山口小静氏の台湾におけるエスペランティストとしての同志連温卿氏の厚意によって入手した資料にもとづく部分が少なくない」という説明がある。
- 34 武上耕一、「台湾に於けるエスペラント運動に就て」、24-25 頁。
- 35 『La Formoso』創刊号、1926.06、2 頁。武上耕一、「台湾に於けるエスペラント運動に就て」、25-27 頁。
- 36 『台湾日日新報』の記事では、「大屯登山道に標高板をたてる台北エスペラント会で八日登山して決行」(1927.05.04)、「エスペラント講習」(1927.05.23)、「十二日から エス語 講習会 専賣局のクラブに於て」(1927.09.11)、「エスペラント 研究会」(1929.04.14、夕刊)などがある。また、甲斐三郎が書いた「エスペラント物語」が 1927 年 5 月中旬から下旬まで 10 回連載された。そして、放送局を通じてエスペラントを宣伝する記事「エス語記念日十五日夕のラヂオ放送」(1929.12.15)もあった。ラヂオ放送は、1929 年と 1930 年のザメンホフの誕生日を記念するために計画した、台北放送局で放送したラヂオ番組であり、『ラヂオ放送 エスペラントの夕』というプログラムの記録が残されている。
- 37 『La Formoso (台湾)』第 1 号、La Verda Domo、1926.06、3 頁。
- 38 台湾総督府職員録系統：<http://who.ith.sinica.edu.tw/mpView.action> (検索日：2014.10.28)。
- 39 K. Takegami (武上耕一)、「Biologia Esplorado pri Vermo “Stephanulus Dentatus”, Parazitanta en Porko (Por Detaloj vidu No.n 179 de “La raporto de Fomosa Agrikulturo” en 1921) I」(『La Verda Ombro』、1922.05)、「Biologia Esplorado pri Vermo “Stephanulus Dentatus”, Parazitanta en Porko (Por Detaloj vidu No.n 179 de “La raporto de Fomosa Agrikulturo” en 1921) II」(『La Verda Ombro』1922.09)、「Biologia Esplorado pri Vermo “Stephanulus Dentatus”, Parazitanta en Porko (Por Detaloj vidu No.n 179 de “La raporto de Fomosa Agrikulturo” en 1921) III」(『La Verda Ombro』1922.10)。タイトルの和訳：「寄生虫に関する生物学研究—豚に寄生する「ブタ腎虫」(1921 年『台湾農業彙報』179 期に掲載)」。この文章はのちに全文エスペラントで加筆して、台湾総督府中央研究所『農業部彙報』第 10 号 (1923.10) に掲載。武上は多くの研究文章を『農業部彙報』で発表した。近代デジタルライブラリー：<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1450047> (検索日：2014.10.28)。
- 40 山根甚信、武上耕一共編、『台湾の畜産獣医文献目録：1904 年から 1945 年にいたる』、1961.01。
- 41 『第一回台湾エスペラント大会 (大会記録)』、1931.09、24-25 頁。
- 42 台湾総督府職員録系統：<http://who.ith.sinica.edu.tw/mpView.action> (検索日：2014.10.28)。
- 43 『第一回台湾エスペラント大会 (大会記録)』、7-8 頁。「内地報道」、『La Revuo Orienta』、1929.11、327 頁。
- 44 R. S.(杉本良)、「Esperanta Movado en Formoso : Vidanta el la fenestro de la Verda Domo (台湾エスペラント運動：「緑の家」の窓から見る)」、『La Formoso』(1)、1926.06、4-5 頁。
- 45 R. S.(杉本良)、「Esperanta Movado en Formoso : Vidanta el la fenestro de la Verda Domo」、『La Formoso』(1)、1926.06、4 頁 (原文エスペラント、筆者和訳)。
- 46 加藤節、『全世界通用語 エスペラント獨修』、東京：岡崎屋書店、1906.10。国立国会図書館デジタルコレクション：<http://dl.ndl.go.jp/> (検索日：2014.11.20)。
- 47 加藤節、「横須賀に日本エスペラント協会を創立した当時の思ひ出」、『La Revuo Orienta』、1936.06、7-8 頁。
- 48 台湾総督府職員録系統：<http://who.ith.sinica.edu.tw/mpView.action> (検索日：2014.11.20)。
- 49 『La Verda Ombro』、1922.11-12 月合併号、4 頁。
- 50 高橋邦太郎、「国際補助語エスペラントと国語の権威」、児玉四郎編、『組織的研究 エスペラント講習書』、日本エスペラント協会横須賀支部会と台湾支部、1915.03、後半の 22-28 頁。
- 51 柴田巖・後藤斉編、峰芳隆監修、『日本エスペラント運動人名事典』、東京：ひつじ書房、2013.10、290 頁。
- 52 例えば R. Sugimoto (杉本良)、「米国通信」(『La Formoso』、1927.3-4 月合併号、4-5 頁)、「Esperanto Movado 見たまゝの便り」(『La Formoso』、1927.11、6-7 頁)。
- 53 杉本良、『台北十二箇月』、日本エスペラント学会台湾支部、1926.07。
- 54 杉本良、『禁酒の国を見る』、台北エスペラント会、1928.12。

- 55 『第一回台湾エスペラント大会 (大会記録)』、25、27 頁。
- 56 『第一回台湾エスペラント大会 (大会記録)』、27 頁。
- 57 『エスペラントの夕』、台北エスペラント会、1929.12。
- 58 『第一回台湾エスペラント大会 (大会記録)』、28 頁。
- 59 「台湾協会々員」、月刊『台湾協会報』、1963.12.15、4 頁。
- 60 例えば、杉本良、「椿.....花に寄する酒 専売の思出 (一〜四)」、『台湾協会報』、1967.05.15、06.15、07.15、08.15。杉本良、「清節の竹・味覚の筈—東宮殿下奉迎書事— (一〜二)」、『台湾協会報』、1967.09.15、10.15。
- 61 杉本良、『専売制度前の台湾の酒』、台北：台湾酒類売捌人組合、1932.06。
- 62 杉本良、『佐夜中山御林百年』、静岡：杉本周造、1979.05、98-101 頁。
- 63 台湾総督府職員録系統：<http://who.ith.sinica.edu.tw/mpView.action> (検索日：2014.11.20)。柴田巖ら監修、『日本エスペラント運動人名事典』、130 頁。
- 64 例えば甲斐虎太、「エスペラント物語 (一〜十)」、『台湾日日新報』、1927.05.19-30。甲斐虎太、「エスペランティストとしての意識及理論の問題(2)」、T. KAI、「現代世界の各国語 言語としての優劣及その勢力」、『La Formoso』、1927. 03-04 合併号、6 頁。
- 65 『第一回台湾エスペラント大会 (大会記録)』、27 頁。
- 66 『第一回台湾エスペラント大会 (大会記録)』、28 頁。
- 67 『第一回台湾エスペラント大会 (大会記録)』、11 頁。
- 68 すべて甲斐三郎の発言により寄贈されたものではないかもしれないが、台湾大学図書館に所蔵されている日本統治期のエスペラント関連書籍が数多くある (検索日：2015.08.30、<http://www.lib.ntu.edu.tw/>)。例えば、加藤節、『エスペラント独修：全世界通用語』(1906)、中村精男、黒板勝美、千布利雄、『大成エスペラント和訳辞典』(1921)、小坂狷二、『イソップ物語』(1923)、石黒修、『初等エスペラント教科書』(1923)、川原次吉郎、『エスペラントの話』(1923)、押田徳郎・佐田芳久、『羅典対照和訳エスペラント解剖学名辞彙』(1924)、八木日出雄述、『我国に於ける外国語問題とエスペラント』(1924)、石黒修、『エスペラントの学び方：独習三十日』(1925)、石黒修講述、『新エスペラント講座』(1927)、プロレタリア科学研究所エスペラント研究会編、『プロレタリアエスペラント講座』(1930)、エ.ドレーゼン著、高木弘訳、『エスペラント運動史』(1931)、武藤丸楠編、『日本エスペラント学事始：伊井迂氏談論集』(1932)、岡本好次編纂、『新撰エスと辞典』(1932) 下村芳司、『新撰エス文手紙の書方』(1932)、小野田幸雄、『エスペラント四週間』(1934)、トルストイ撰、川崎直一訳、『愛あるところ神あり』(1934) ……。
- 69 連温卿、「台湾に於けるエスペラント運動年代記」、14 頁。1926 年 7 号、1927 年 5 号、1929 年 1 号、1930 年 1 号。計 14 号。
- 70 「日本エスペラント学会台湾支部会員名簿」、『La Formoso』、1926.09、8 頁。勤務先から見れば、5 人のうち、2 人は台北医学専門学校、1 人は台北専売局酒課、2 人は樹林専売局酒工場であった。
- 71 杉本良、「創立三十周年を祝す」、『創立三十周年記念論文集』、台北：台湾博物館協会、1939.03、354 頁。
- 72 現在バハーイー教と称される。19 世紀半ばにイランでバハーウッラーが創始した宗教である。公式サイト：<http://www.bahai.org/>。次節で論じるが、大本教がエスペラントを導入することはバハーイー教と関係が深かった。
- 73 『ラヂオ放送 エスペラントの夕』、台北エスペラント会、1929.12.25、41-51 頁。
- 74 連温卿、「台湾に於けるエスペラント運動年代記」、15 頁。武上耕一の「台湾に於けるエスペラント運動に就て」では、台湾学徒エスペラント会を台湾男子学生エス会と、台湾女子生徒エスペラント会を台湾女子学生エス会と記する (29 頁)。
- 75 史可乗、「日抛時期台湾 ESP 運動」、54 頁。
- 76 『第一回台湾エスペラント大会 (記録)』、12-13 頁。またこの大会記録の小冊子に、「第二回台湾エスペラント大会 ラヂオ放送プログラモ 1932 年 12 月 3 日 18 時 30 分=19 時 30 分」が書いてある 2 枚の紙がはさまれている。内容はエスペラント歌合唱や、講演、エスペラントドラマ「父」の梗概などである。講演者の井上鉄男を除き、合唱やドラマの担当者たちは全員台湾人である。
- 77 「台湾エスペラント聯盟規約」、『Informo de F.E.S』(台湾エスペラント学会通信) 第 1 号、

- 1931.12.15、16-18 頁。
- 78 史可乗、「日抛時期台湾 ESP 運動」、55-56 頁。
- 79 史可乗、「日抛時期台湾 ESP 運動」、56-58 頁。
- 80 『La Revuo Orienta』、1932.11、430 頁。
- 81 「エス語大会内地から二名の出席者」、『台湾日日新報』、1932.12.01。
- 82 井上照月、「第二回台湾エス大会感想記」、『Verda Mondo (緑の世界)』、1933.01、21 頁。この文章の隣りには、「マヨール氏エス語の放送 台北 JFAK 放送局より」という記事もある。
- 83 鹿野政直、『大正デモクラシーの底流 "土俗"的精神への回帰』、東京：NHKブックス、1973.10、27-28 頁。
- 84 池田昭、「序文」、『大本史料集成 I 思想篇』、東京：三一書房、1982.06、2 頁。
- 85 對馬路人、『人類愛善新聞』解説、『復刻版 人類愛善新聞(別冊)』東京：不二出版 2013.11、4 頁。
- 86 広瀬浩二郎、「人類愛善運動の史的意義：大本教のエスペラント・芸術・武道・農業への取り組み」、『国立民族学博物館研究報告』27(1)、2002、3 頁。
- 87 バハイ教は、現在バハーイー教と称される。19 世紀半ばにイランでバハーウッラーが創始した宗教である(公式サイト：<http://www.bahai.org/>)。
- 88 藤代和成編、『大本えすぺらんと史』、京都：大本エスペラント友の会、1986.08、7-9 頁。
- 89 井上留五郎編、『暁の鳥』、京都：天声社、1925.06、83-84 頁。
- 90 藤代和成編、『大本えすぺらんと史』、14-17 頁。
- 91 『人類愛善新聞』創刊号、1925.10.01、1 頁。
- 92 例えば井上照月、「外国に対して日本国民の自覚(上、下)」(1929.06.02、06.13)、「些々たる感情から正しき理性へ」(1929.08.13、08.23)、「刹那主義」(1929.10.23)、「質を忘れた自由平等論」(1930.03.13)……など思想的な文章や、「Bonulo kaj Malbonulo (善人と悪人)」(1930.06.03)、「エスペラント独習講座」(1930.06.23、08.23)、「Justeco ĉiam venkas (正義は常に勝つ)」……などエスペラント関連文章も多くある。
- 93 對馬路人、『人類愛善新聞』解説、26-27 頁。『人類愛善新聞』を発行した「人類愛善会」は、実質的に宗教団体・大本を核にした運動で、いわばその対社会的活動を担う外郭団体ともいふべき性格を持っていた(對馬路人、『人類愛善新聞』解説、5-7 頁)。
- 94 鹿野政直、『大正デモクラシーの底流 "土俗"的精神への回帰』、76-78 頁。
- 95 『人類愛善新聞』、1929.01.03、3 頁
- 96 台湾のエスペランティスト卓照明氏の情報によると、ある大本教の女性教徒が 2010 年前後に台湾に旅行した際、卓氏を訪問したという。彼女によれば、日本統治時代の台湾には、大本教の集会所が 200 箇所以上設置されたという。
- 97 『第一回台湾エスペラント大会(大会記録)』、28 頁。
- 98 後藤斎、「エスペラントとハンセン病—歴史的考察—」。ここでは、『La Movado』第 707 号(2010.01)、708 号(2010.02)、709 号(2010.3)の掲載文に加筆したものを参考した。2014.10.17 閲覧：<http://www.sal.tohoku.ac.jp/~gothit/hansen/zensei.html>。
- 99 後藤静香著・後藤静香選集刊行会編集、『後藤静香選集(10) 実践運動編』、東京：善本社、1978.10、461、467、468、469、476 頁。
- 100 後藤静香、『後藤静香選集(10) 実践運動編』、492 頁。
- 101 後藤静香、『後藤静香選集(10) 実践運動編』、30 頁。
- 102 後藤静香、『後藤静香選集(10) 実践運動編』、500-501 頁。
- 103 後藤静香、「いよいよ世界的に進出——月刊「エスペラント」を発行」、『希望の日本』第 50 号、1930.02。ここは『後藤静香選集(10) 実践運動編』の 419-420 頁から引用。
- 104 井上留五郎編、『暁の鳥』、88-89 頁。
- 105 GOTÔ-SEIKÔ (後藤静香)、「序」、『RÔMAJI KÔGI』、東京：希望社、1929.10 (98 版[初版：1924.07])。
- 106 永野芳夫の『経験哲学を基礎としての新しい教育論』(東京：モナス、1924.07)の第 13 章「国語をローマ字にしてそれからエスペラントへ」(342-374 頁)を参考されたい。
- 107 『Verda Mondo』、1931 年 11 月以降、台湾の講習会に関するニュースがしばしば掲載された。
- 108 広瀬武夫、「緑光はかざやく」、『Verda Mondo』、1932.05、28 頁。

- 109 一時百万部の発行数を超えた『人類愛善新聞』は、台湾の知識人によく知られているのは、張深切の回想録（『張深切全集 2 里程碑（下）』、台北：文経、1998.01）からもうかがえる。回想録では、『人類愛善新聞』の分社社長賣間善兵衛が民族運動の指導者と言われる林献堂と揉めたことを言及している（616頁）。
- 110 広瀬武夫、「緑光はかゞやく(3)」、『Verda Mondo』、1932.06、23頁。
- 111 「内地報道」、『Verda Mondo』、1932.08、24頁。
- 112 広瀬武夫、「初試み集（台南の部）」、『Verda Mondo』、1932.04、14頁。
- 113 土師孝三郎、「地方会機関誌批判」、『エスペラント年鑑（1934）』、日本エスペラント学会、1934.04、99頁。
- 114 Hirose Takeo（広瀬武夫）、「Memprogresigo en Esperantujo（エスペラント界の自己発展）」、井上照月、「誠と魂とを以て荊棘の道を拓け」、『La Verda Insulo』、1934.07。
- 115 荘松林（1910-1974）、筆名は朱鋒、鷺生 TS、峰君、嚴純昆、KK、CH、彬彬、尚未央、赤嵌樓客、牛八庄猪八戒、己酉生、圓通子、進二、So-Ŝjo-Lin などがある。社会主義者、台湾民間文学運動者。荘は1928年に台南赤嵌労働青年会、台湾工友総聯盟に加入した。1929年に台湾民衆党に参加し、積極的に抗日運動をしていた。朱子文、「荘松林先生生平事蹟」、『台南文化』新55、2003.09。
- 116 So-Ŝjo-Lin（荘松林）、「La Malsaĝa Tigro」、『La Verda Insulo』、1934.07。「荘松林年表」の中にも台湾童話「恣虎」をエスペラントで訳し、『La Verda Insulo』に発表したということが記されている（王美恵、『1930年代台湾新文学作家的民間文学理念與実践』、台南：成功大学歴史系博士論文、2008.01、215頁）。また、荘は筆名の朱鋒を以てこの作品を台湾語で加筆して『台湾風物』として発表した（朱鋒、「恣虎」、『台湾風物』21(2)、1971.05、55-60頁）。
- 117 古井仙一訳、「Historio de Esp-Movado en Sovetio」（ソビエトのエスペラント運動史）、『La Verda Insulo』1934.07、17-18頁。最後の註では『Analiza Historio de Esp-movado』（解説的エスペラント運動史）から訳したと書いてある。
- 118 松田はるひ、「緑の蔭でー植民地台湾エスペラント運動史(5)」、『La Revuo Orienta（エスペラント）』、1977.11、17-20頁
- 119 山室信一、『キメラー満州国の肖像 増補版』、東京：中公新書、2004.07、20-21頁。
- 120 Louise Young（レイーズ・ヤング）著、加藤陽子ら訳、『総動員帝国 満州と戦時帝国主義の文化』、東京：岩波書店、2001.02、79頁、94-95頁。
- 121 例えば、1933年に希望社は解散し、それに代わって教育資料株式会社が創立される。希望社創立者後藤静香はその後、雑誌や通信など発行し、出征同士慰問や皇軍感謝運動などの活動を続けていた。『後藤静香選集(10) 実践運動編』、508-524頁。
- 122 「白熱化した愛善報国運動 各地とも捨身の大活動」、『人類愛善新聞』、1931.12.13、4頁。
- 123 西村保男、「満州事変とエスペラント」、『Verda Mondo』、1932.01、15頁。荒川銜二郎、「満州語公用語問題」、『Verda Mondo』、1932.08、1-4頁。
- 124 『人類愛善新聞』、1932.03.23。
- 125 初芝武美、『日本エスペラント運動史』、123-125頁。
- 126 初芝武美、『日本エスペラント運動史』、128頁。
- 127 「エスペラントの夕」、『台湾日日新報』夕刊、1936.04.16。
- 128 「台北エスペラント会」、『台湾日日新報』、1936.05.28。
- 129 安田敏朗「解説」、平井昌夫著、『国語国字問題の歴史（復刻版）』、東京：三元社、1998.02、596頁。
- 130 周婉窈著、石川豪・中西美貴訳、『図説台湾の歴史』、東京：平凡社、2007.02、144-146頁。
- 131 池田敏雄遺稿、「敗戦日記Ⅰ・Ⅱ」、台湾近現代史研究会編集、『台湾近現代史研究』第4号、東京：緑蔭書房、1982.10、80頁（1945年10月21日の日記）。
- 132 「台湾語式的漢文」は王詩琅の言葉である（王錦江、「一個試評—以「台湾新文学」為中心」、『台湾新文学』1(4)、1936.05、94-95頁）。関連研究は、拙論の「訓読、模倣、創造—「台湾白話文」：論日本時代台湾近代文体的形成與様貌」（『頼和・台湾魂的迴盪 2014 彰化研究學術研討會論文集』、彰化：彰化県文化局、2015.03、355-420頁）を参考されたい。
- 133 「内外報道」、『La Revuo Orienta』、1936.05、30頁。
- 134 連温卿、「エスペラント講座Ⅰ・Ⅱ」、『台湾新文学』(1) 3-4、1936.4-5。連温卿、「台湾童話の国際的紹介に参加せよ！！」、『台湾新文学』、1936.11、82頁。

-
- ¹³⁵ 「同人雑誌めぐり(六) 台湾新文学」、『日本学芸新聞』16号、1936.11.15、5頁。
- ¹³⁶ 向井孝、『山鹿泰治 人とその生涯』、東京：青蛾房、1974.05、159頁。
- ¹³⁷ 向井孝、『山鹿泰治 人とその生涯』、16-19頁。
- ¹³⁸ 初芝武美、『日本エスペラント運動史』、29-30頁。
- ¹³⁹ 向井孝、『山鹿泰治 人とその生涯』、159頁。
- ¹⁴⁰ この手紙の写しは日本エスペラント学会に所蔵している。封筒の裏には連温卿の名前、住所、日付と書いてあり、表には比嘉が書いた「一九五四年 十月十一日返」がある。
- ¹⁴¹ 大島義夫・宮本正男『反体制エスペラント運動史』、東京：三省堂、1974.07、95-96頁。

第三章 『La Verda Ombro』と『La Formoso』および『La Verda Insulo』

1935年の2月から12月まで、『台湾時報』に裏川大無の「台湾雑誌興亡史」が9回連載された。文芸雑誌をはじめとして、語学、美術、産業、工芸と科学、社会科学、宗教などさまざまな雑誌の発行やその内容について紹介されている¹。そのなかに、台北の大稲埕で創刊された『ヴェルダ・オムブロ』と『ラ・フォルモソ』が、語学雑誌の分野として言及されている。裏川は、特に台湾の一角から出た『ヴェルダ・オムブロ』という一小雑誌によって交換された外国雑誌が約二百余种以上あり、本誌が世界的に知られていったと述べている²。裏川の言う『ヴェルダ・オムブロ』と『ラ・フォルモソ』こそが、本章で分析するエスペラント雑誌『La Verda Ombro』と『La Formoso』である。これら世界的に知られていったエスペラント雑誌は、どのような内容を掲載していたのだろうか。

第一章から第二章までは台湾のエスペラント運動の歴史を概観した。運動はひとたび始まると、総督府の弾圧を受けながらも一時的な流行をみせた。日本内地はもちろん、台湾本島で発行されたエスペラント関連の雑誌や書籍あるいは教科書なども少なくなかった。第三章では、台湾エスペラント学会の機関誌『La Verda Ombro (緑の蔭、1919-1926)』と台北エスペラント会の機関誌『La Formoso (台湾、1926-1930)』、および台南エスペラント会の機関誌『La Verda Insulo (緑の島、1933-1934)』の台湾で発行された最も重要な3つのエスペラント雑誌を論じる。刊行時期を見れば、運動における発展期から衰退期まで順番に発行されたものとも言える。雑誌の内容をみると、さまざまな思想を帯びたエスペラント普及の動機、各組織の性格や方針、または内地の運動との連動、そして島内の社会運動や文化運動の変化との関連などさまざまな様相が垣間見える。以下、まず1919年に発行された台湾エスペラント学会の機関誌の内容から順に各雑誌を分析していく。

第一節 台湾エスペラント学会機関誌－『La Verda Ombro (緑の蔭)』(1919-1926)

日本統治期に台湾で発行されたエスペラント雑誌のなかで、発行部数が最も多く、刊行期間が最も長いのは、台湾エスペラント学会の月刊誌『La Verda Ombro』である。1919年10月に創刊され、当初は手書きのガリ版印刷であり、1921年3月号から活字版印刷に改められた³。現在確認できる号数は37号で、全部で約300頁があり、散逸した号を加えれば、発行号数は44号か45号だと推測できる⁴。そのほかに2冊の付録単行本がある。

『La Verda Ombro』は、約5年間に渡って発行され、さまざまな内容を掲載していた。以下第一節では5つの種類に分けて、代表的文章を紹介する。これら以外にも付録や単行本もあるが、なかでも特筆すべきは、1920年2月号から連載が始まり、1923年第3-4月合併号の付録として再刊された「La indigena Legendo en Formoso (台湾先住民物語)」と、雑誌付録の単行本として出版されたロシアの盲目の詩人であるエロシェンコの童話や小説である。

台湾人が創刊した雑誌『台湾青年』がまだ島内に移されず⁵、知識人もまだ先住民族にそれほど関心を抱いていない1920年前後に、台湾エスペラント学会の機関誌で連載された「台湾先住民物語」からは、その時期の台湾人の民族観が垣間見えるであろう。また、

エロシェンコの作品が掲載されたことは、台湾人がエスペラントを通じてロシアや日本、あるいは中国の知識人とどのように交流したかがうかがえよう。そこで以下、『La Verda Ombro』の内容について簡略にまとめ、雑誌に掲載された連温卿が執筆した「台湾先住民物語」とエロシェンコの作品を詳しく論じていきたい。

(一) 『La Verda Ombro』の内容概観

台湾エスペラント学会の機関誌『La Verda Ombro (緑の蔭)』は、1919年から1926年まで発行され、東京の『La Revuo Orienta (エスペラント)』、大阪の『La Verda Utopio (緑のユートピア)』とともに、かつては日本三大エスペラント雑誌と言われた⁶。これは、日本に支配されている台湾人が日本を通じて世界へ進出する積極性を見せていたということの意味しているであろう。発行部数が40号を超えた『La Verda Ombro』には、エスペラントの語学やザメンホフの思想はもちろん、台湾の民間伝説、先住民の器物や物語、台湾議会設置請願運動、ガンジーやタゴールの思想、中国、ソ連やヨーロッパの状況、国際連盟に関するもの、エロシェンコの小説、植民地における言語状況、世界文学の翻訳、世界のエスペラント普及の現状など、多様な文章が掲載されている。鄧慧恩は雑誌の内容を①「国際事情とエスペラント運動の推進」、②「台湾本島の民俗と社会時事」、③「文学作品」と④「科学知識」など4種類⁷に分けて論文の中で簡単に紹介している。しかしこの雑誌には社会主義関連の文章も多く存在する。例えば第二章で言及した山口小静の「緑化か赤化か」、「一婦人の声」などの議論である。そこから、台湾エスペラント運動が分裂した前後の背景や、普及運動と植民地政策に対する日台人の相違点がうかがえるため、それを含めて5種類に分けられる。

各種類の文章を以下に例示しよう。

1つ目の「国際事情とエスペラント運動の推進」では、例えば「D-ro NITOBE Kaj Esperanto」(新渡戸博士とエスペラント 1920.09)、「Internacia ligo kaj Esperanto (国際連盟とエスペラント)」(1920.12)、「Deklaracio de la Akademio」(学士院の宣言 I~IV, 1921.03-06)、「国際連盟への報告の概要」(1922.04、和文)などがある。そこではエスペラントの言語発展を見守る世界組織である学士院が決議した言語政策、あるいは国際連盟でエスペラントを国際語として採決したことなどが報道されている。また「Esperanta Movado en Siberio」(シベリアにおけるエスペラント運動 I~III, 1921.07-09)、あるいはザメンホフの文章「Esperanto en la Milito」(戦争のなかのエスペラント、1921.10)などからも、ヨーロッパや中東などでなぜエスペラントが流行っていたか、または戦争の状況でエスペラントがどのような役割を演じたかがうかがえる。

2つ目の「台湾本島の民俗と社会時事」では、例えば「Avino Tigro (Formosa popollegendo) I~II」(虎婆ちゃん [台湾民話]、1920.04、06)、「Peto pri Organizo de Formosa Parlamento」(台湾議会設置請願書、1922.3-4月合併号)、「Kion Volas la Insululoj?」(島民たちは何を求める?、1923.04)がある。また次節で詳述する1920年から連載を始めた台湾先住民の生活用品や器具の絵図、あるいは伝説などの物語は最も注目すべき文章であろう。これらの文章は、当時台湾の政治や文化の状況を世界に発信している。

3つ目は、「文学作品」である。特に翻訳小説が多い。例えば「La Silento (Novelo)」(1921.04、05、07、08、09) はイタリアの小説『沈黙』からエスペラントに翻訳して連載された。また、坪内逍遙がエスペラントで訳した「Hamleto akto 1」(ハムレット1、対訳、1922.05)の掲載や、プロレタリア小説「Krucumo : Aleksandro Drozdov」(磔刑 アレクサンドロ ドロズドヴ、対訳、1923.08)のエスペラントと和訳も存在する。編集者は積極的に西洋やロシアの文学作品を台湾に紹介している。2014年に『台湾日治時期翻訳文学作品集(全五冊)』⁸が出版された。そのなかに日本統治時代に発表された漢文、白話文、日本語、台湾語ローマ字によって翻訳された文学が数多く収録されているが、エスペラントによって翻訳されたものやエスペラント文学から翻訳されたものは収録されていない。エスペラントの翻訳文学はこれから注目されるべきであろう。また前述の通りエロシェンコの作品も多く掲載されている。これについては第三小節で詳しく論じる。

4つ目は、「科学知識」である。例えば武上耕一の研究「Biologia Esplorado pri Vermo “Stephanulus Dentatus”, Parazitanta en Porko」(寄生虫に関する生物学研究—豚に寄生する「ブタ腎虫」)は3回にわたって連載された⁹。また「Seroj kaj Vekcinado」(血清と種痘、1922.02)などは、台湾の最新の農業研究状況を紹介している。

最後の5つ目の「社会主義関連文章」では、山口小静の「赤化か緑化か」や、彼女が訳したロマン・ロランの文章がある。これらの文章は社会主義の思想を帯び、台湾島内の現状への反省も存在する。また「Socia Movado」(社会運動、1922.08)や、「Klasbatalo en Ĥina Socio」(支那社会における階級闘争、1923.02)、あるいは「Lernejo de Tria Kominterno I ~ II」(コミンテルンの学校、1923.05、07)などは、台湾の社会運動、ロシアや中国の社会主義関連組織や闘争について詳しく紹介している。その次の9月号にも、コミンテルン学校(東方勤労者共産大学)内のエスペラント普及状況が報道されている。さらに「Familiaj Budĝetoj de Rusaj Laboristoj」(ロシア労働者の家庭予算、1923.12)という文章は国際労働機関からの情報である。これらの文章からは、台湾エスペラント学会は共産主義や社会主義を島内に紹介する積極性がうかがえ、そして学会の「赤化」は1920年代初期から始まったということがわかるであろう。

以上、『La Verda Ombro』に掲載された5種類の文章について簡単に取り上げたが、特筆すべきは、連温卿が執筆した文章が多いことである。第二章でも触れたように、1922年11月以前の編集者は連温卿、蘇璧輝、黄鉄、山口小静、江副秀喜などがいたが、1923年1月からは連温卿1人となった。連は学会の主な事務と雑誌の編集者を務めたため、Lepisomo(蠹魚)、L、S. Renなどのほか、無署名の文章の大半は、彼によって執筆もしくは翻訳された可能性が高い。以下、「La Redakcio」、「Red.」(編集者)、「Lepismo」、「L」(蠹魚)などの署名のある文章を整理しておく。

年月	タイトル	作者	和訳・付注
1922.09	Grava Avizo!	Red. (編集者)	重要な公告
1922.09	Blinda Esperantisto kaj Policano	L	盲目のエスペランティストと警察官
1922.10	Rimedo Kontraŭ la Esperantismo	El “Fundamenta Krestomatio” 、L 和訳	エスペラント主義の対応策 (エスペラントと日本語対訳) *ザメンホフの『Fundamenta Krestomatio』(エスペラント基礎文集)から、連温卿和訳。

1922.10	Kontraŭmodulo kaj Perfidanto	Lepismo	反対運動者と裏切者
1923.01	Por 1923	La Redakcio (編集者)	1923 のため
1923.02	Klasbatalo en Ĥina Socio	Esperantigis L.. (エスペラント 訳：L.)	支那社会における階級闘争
1923.03-04	Kion Volas la Insululoj?	Lepismo	島民たちは何を求める？
1923.05	Kia estas Esperantismo?.....	Lepismo	エスペラント主義とは何か？
1923.05	タイトルなし	La Redakejo	*La Redakcio の誤植
1923.06-07	翻訳くらべ El “Parlamentisma Iluzio” de C. A. Laisant	Lepismo 訳	エスペラントと日本語対照 C. A. Laisant の『議会主義の幻覚』から
1923.09	Grava Avizo	Red. (編集者)	重要な公告
1923.09	Krucumo : Aleksandro Drozdov 磔刑 アレクサンドロ ドロズドヴ	Trd. N. Hohiov. Lepismo 訳	エスペラントと日本語対照
1923.09	お詫び		*8 月号は台北印刷工組合対台北製本印刷同業組合の労働争議のため、発行出来なかったことをお詫びします。
1923.10	エスペラントは自然語か人造語か	Lepismo 訳	(和文) *アメリカより出版したエスペラント独習書『Spoken Espranto』の巻末に輯録した「世界の言語とエスペラント」から訳したものの。
1923.10	Mia Pensaĉero	Lepismo	私の管見
1923.11-12	Kroniko: Kontraŭ Potenco, Intern Acia Komuniko, Novaj Gazetoj, El Hollando	「権力に対して」：(L.)	消息欄：権力に対して、アジア内部のコミュニケーション。新雑誌。オランダだより。
1924.01	Skizo de Parolado pri Esenco Lingva en socio	Lepismo	「社会における言語の本質」に関する講演の要旨 *Parolita de Sro S. Ren en la armea klubo je la 20a Dec. 1923 (S. Ren が 1923 年 12 月 20 日に陸軍倶楽部偕行社での講演)
1924.01	Gentaidea Valoro en Vivado	Esperantigas Lepismo (エスペラント 訳：Lepismo)	社会生活における民族意識の意義
1926.03	Kial ni silentas	La dam kaj Red.	なぜ我々は黙っているのか？ *「kaj」は「kaj」の誤植。La dam kaj Red.：発行人と編集者（蘇壁輝と連温卿）。
1926.03	Bildo Ideografa I	Esperantigis L (エスペラント訳：L)	表意文字の絵像 I (L⇒連温卿)
1926.03	Kroniko		消息欄

以上のように、約 20 篇の文章が連温卿の手によるものである。訳文を除けば、Lepismo という筆名で書いたエスペラントの文章は、「盲目のエスペランチストと警察官」、「反対運動者と裏切者」、「島民たちは何を求める?」、「エスペラント主義とは?」、「私の管見」、「社会における言語の本質」など 6 篇ある。第五章で詳しく分析するが、「エスペラント主義とは?」と「社会における言語の本質」は、漢文に訳して加筆し『台湾民報』で発表した。これらの文章からうかがえる連の思想の形成については、第六章で詳しく論じる。

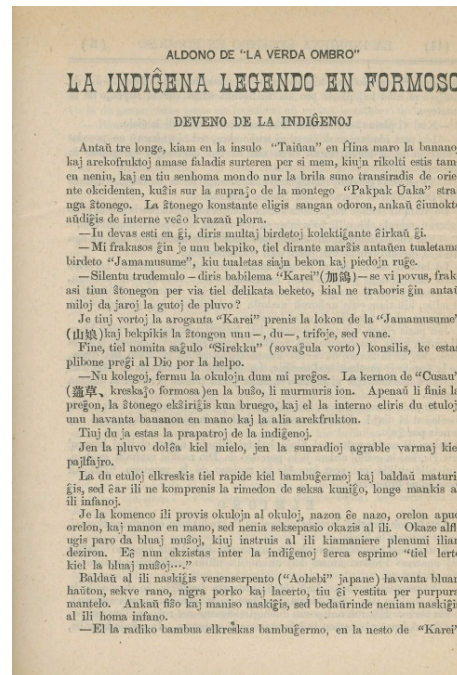
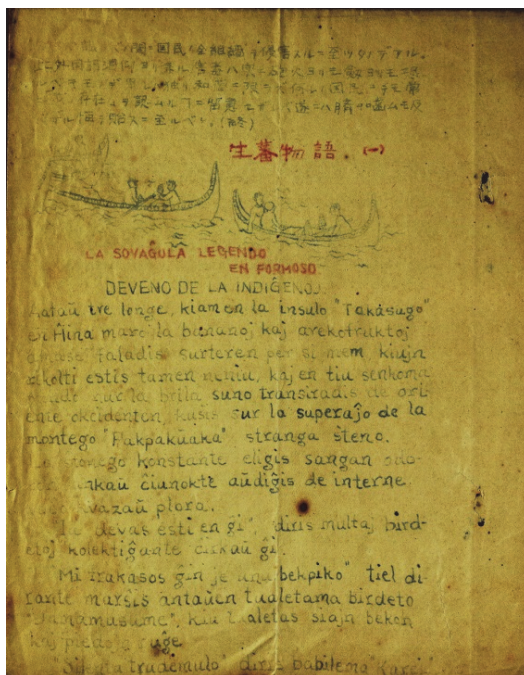
『La Verda Ombro』は 1924 年 3 月以降休刊したが、1926 年 3 月に復刊した。1926 年の復刊号の最後には、編集者が「本誌は巻頭で申上げた通り、この上台湾エスペラント学会

をして経済難に陥るに忍はずまた現在の台湾エス語運動の不振に直面して傍観することができない故、暫く私等の生活の許す限りに於て復活された次第であります¹⁰」と書いている。また、『La Verda Ombro』の復刊号に掲載された「Ĥino kaj Esperanto en Sovetrusujo (ソヴィエトロシアにおける中国人とエスペラント)」など、何篇かの文章は未完のままであるため、編集者は雑誌を発行し続ける意図があったと思われる。しかし、おそらく経済的な理由や台湾文化協会の活動で多忙であったためか、結局この号で廃刊となった。これは1926年の普及運動が低迷していることを裏付けるが、同年に在台日本人中心としての台北エスペラント会の『La Formoso』が創刊され、運動の不振を復活しようと試みている。

次の第二小節では、『La Verda Ombro』に掲載される「台湾先住民物語」を論じる。

(二)「生蕃物語」から「台湾先住民物語」へ

1919年に創刊した『La Verda Ombro』には、1920年の2月号より先住民の由来、プロレンデエヤ城、独楽と怠け者、稲妻と竜王の愛、移住、刺青の花嫁など6つの「La Sovaĝula Legendo en Formoso (生蕃物語)」が現在確認できる限り7回連載されている¹¹。そのほかに、多くの先住民の器物の絵図が掲載されている¹²。全文エスペラントで連載された「生蕃物語」の最初の2回には日本語による「生蕃物語」という字が書かれている。タイトルの「生蕃」は「sovaĝula (野蛮な、蕃人の)」を用いたが、3回目以降は野蛮の意味を持つ「sovaĝula」ではなく、土著的、先住民的という意味の「indigena」に変更された。



左：「生蕃物語 (一) La Sovaĝula Legendo en Formoso Deveno de la Indiĝenoj (生蕃物語 (一) 先住民の由来)」、1920.02、2-4 頁。

右：1923年3-4月合併号の付録として刊行された「La indigena Legendo en Formoso (台湾先住民物語)」。

作者が「生蕃」という差別的な用語を使わなくなったことから、台湾の先住民に対する民族観が変わったことがうかがえよう。そして1923年3-4月合併号の付録として刊行さ

れた際、タイトルは「La indiĝena Legendo en Formoso (台湾先住民物語)¹³」に統一された。最後の広告頁を除けば、全部で9頁存在する。この一連の先住民に関連する文章は、台湾人エスペランチストが『La Verda Ombro』を通じて世界に台湾の文化を発信しようとし、その際に長い歴史を持つ先住民族の存在を強調したことを示している。

ところが、連載されたものであれ、付録として発行されたものであれ、この「台湾先住民物語」の作者は記されていない。筆者はこれが連温卿によるものだと考える。前述したように、連は『La Verda Ombro』の創刊初期から廃刊までの主な編集者であり、戦後の回想に「実際的事務、概由連温卿負責(実際の事務は主に連温卿が勤める)¹⁴」とはっきり述べているため、多くの無署名の文章は彼が執筆したと考えられる。また、1924年の「蠹魚的旅行日記¹⁵」(例えば第25・59・68回など)、1925年の「婦女的地位和社会的關係」¹⁶などの文章から、連が1920年前後に「蕃社」を訪ねて滞在調査したことがわかる。さらに、日本エスペラント学会の事務長を務める石野良夫氏は宮本正男¹⁷が連の遺稿『Formosaj Legendoj (台湾の先住民)』を所蔵していたと筆者に教示してくれた。筆者は宮本が所蔵している『Formosaj Legendoj』の原稿は未見であるが、この「台湾先住民物語」は連温卿によって執筆されたと確認できよう。

ところで、1910年代末期から、『台湾日日新報』には台湾先住民関連の記事が連載されていた。例えば白石良の「生蕃古事記」(1917.01.17-1917.02.09、計20回)、秋澤烏川の「生蕃の伝説と童話」(1919.05.10-1919.08.07、計22回)がある。特に白石良の文章には、この「台湾先住民物語」と似た部分が存在する。また、1920年にも入江暁風の『神話 台湾生蕃人物語¹⁸』という本が出版された。この本の内容も「生蕃古事記」と「生蕃の伝説と童話」と類似するところがある。連は、「蕃地」まで調査に行ったものの、このような文献を参考にしながら、エスペラントで「台湾先住民物語」を書いた可能性もある。ただし「Kastelo Prorendeja¹⁹」(プロレンデェヤ城 [普羅蘭遮城]) という物語だけは、これらの資料のなかにはない。さらに言えば、『台湾日日新報』に掲載された「生蕃古事記」や「生蕃の伝説と童話」、あるいは「台湾先住民物語」に記されたのは「高砂族」の物語であるが、「Kastelo Prorendeja」で言及した先住民は、当時まだ存在し、漢化されつつあった「熟蕃」、つまり「平埔族」のことである。

Kastelo Prorendeja (プロレンデェヤ城) とは、1653年にオランダ人によって造られた城で、いまの台南市内にある「赤崁樓」である。「Kastelo Prorendeja」でもオランダ人が「一枚の牛革」によって先住民と広い土地を交換したことが触れられているが、これはオランダ人が布十五疋で「新港社(いま台南市新市区にある)」の平埔族から土地を買い、プロレンデェヤ城を建て、「一枚の牛革」で土地を騙した物語として伝えられてきた「歴史」²⁰であり、伝説ではなかったのだ。先住民の伝説は数え切れないほど多くあるが、オランダ時代の「熟蕃」のことを1つの物語として「台湾先住民物語」に入れたこの文章では、先住民の土地を略奪してプロレンデェヤ城を造ったオランダ人を「invadantoj (侵入者)」と称している。このことは、連温卿の「民族観」だけではなく、同じ植民者である日本帝国に抗議する彼の意図や歴史観がうかがえよう。

1920年7月に東京で創刊され『台湾青年』(のちの「台湾人唯一の口舌」といわれる『台

湾民報』がまだ台湾島内に移されていない1920年初期は、まだ台湾の知識人が先住民のことを重視していなかった時代であった。その時の台湾エスペラント学会がエスペラントによって広義の「台湾文学」や「翻訳文学」とも言える「台湾先住民物語」を日本や世界に紹介したことは、大きな意味を持っている。

また、『La Verda Ombro』には、外国の文学作品も多く掲載されている。そのなかでもロシア作家のエロシェンコの童話は特筆すべきだろう。続いてエロシェンコと『La Verda Ombro』に掲載される彼の作品を紹介する。

(三) エロシェンコの作品

『La Verda Ombro』には、日本から追放されて中国に渡ったロシアの盲目の詩人エロシェンコの「El Fabelaj Skezoj pri Ĥina vivo de Sro. V. Eroshenko (童話の写生：エロシェンコの中国生活について)」²¹が、1922年7月から9月まで3回連載されている。また、1923年2月と7月に、「Unu Paĝeto en Mia Lerneja vivo (私の学校生活の一頁)」と「Toro por Fali (墜ちる為めの塔)」²²の2篇の童話を付録の単行本として発行した。エロシェンコと彼の作品を紹介する前に、ここで筆者が考えたいのは、台湾のエスペランチストはいつからエスペラントを通じて中国の知識人と接触し始めたのかという点である。

連温卿の「台湾に於けるエスペラント運動年代記」には、U.E.A (世界エスペラント協会)の支那委員 S-ro Ken Wong (涓生) が来台したという記事がある。この S-ro Ken Wong は、中国エスペラント運動に最も力を注いだ1人である黄尊生²³だと推測できる。黄氏は世界エスペラント協会の支那委員として1920年7月10日に台湾に渡り、講演会などを行った。その前後に『La Verda Ombro』では、中国のエスペラント運動や社会運動などの関連文章が数多く掲載された。例えば「Ĥina Esperantio」(支那エスペラント界、1920.05)、「Ĥino kaj Esperanto」(支那人とエスペラント、1921.07)、「En Hinajo」(支那だより、1922.04)、「Movado en Hhinujo」(支那における運動、1922.05)、「La Verda Lumo」(緑の光、上海エスペラント協会雑誌、1922.09)の紹介、「Klasbatalo en Ĥina Socio」(支那社会における階級闘争、1923.02)などである。つまり、台湾人がエスペラントを通じて中国知識人と接触し始めたのは1920年からだと言えよう。では、なぜ編集者がエロシェンコの作品を台湾で紹介したのだろうか。それは、エロシェンコが当時の日本や中国のエスペランチストにも注目された作家だからであろう。

盲目の詩人として知られるエロシェンコ (Vasili Eroŝenko, 1890-1952) は、ロシアのオブホーフカ村に生まれ、4才のとき失明した。1908年にモスクワ盲学校を卒業し、著名なエスペランチストのアンナ・シャラーポワに勧められてエスペラントを勉強した。その後、イギリスに渡り音楽と英語を学ぶ²⁴。1914年日本に渡り東京盲人学校に入学、1915年の春に秋田雨雀と親交を結び、相馬黒光などの援助を得て詩や小説などの創作活動を行い、社会主義運動や反戦運動に積極的に参加した。1916年4月には日本エスペランチスト大会で発言。また、エスペランチストとして東南アジア各地にも足を伸ばし、1919年にはインドで国外追放を受けて再び日本に戻った。社会主義同盟に出席し、雑誌『種蒔く人』の準備にも参加した。1921年には日本で3度目の逮捕によって、日本から追放されたが、

この年に『夜明け前の歌』が東京で発行された。その後、ハルビンや上海に滞在し、魯迅に招かれて北京に渡る。校長蔡元培を通じて北京大学で教鞭をとり、エスペラントでロシア文学を講義し演劇活動にも参加した。魯迅の小説「あひるの喜劇」にはエロシェンコのこと触れられている。1922年に東京で第二の選集『孤独な魂のうめき声』を発行。1923年にロシアに戻り、盲人学校で教鞭をとるかたわら、各地を旅し創作活動を続けた²⁵。

第二次世界大戦までに、エロシェンコは日本で『夜明け前の歌』(1921.07)、『最後の溜息』(1921.12)、『人類の為に』(1924.10)などの作品集を出版し、1923年にも上海でエスペラントによる創作集『Ĝemo de unu Soleca Animo (ある孤独な魂のうめき)』が出版された²⁶。また、魯迅や胡愈之によって翻訳された中国語版のエロシェンコ作品集として、『愛羅先珂童話集』(1922.07)、『桃色の雲』(1922)、『過去の幽霊及其他』(講演集、1924)、『枯葉雑記』(1924.04)、『世界的火災』(1924.12)、『幸福的船』(1931.03)が出版された。日本や中国で多くの作品を発表し、知識人に大きな影響を与えたエロシェンコを初めて台湾で紹介したのは、エスペラント雑誌である。

ところで、第二章で言及したように、台湾エスペラント学会会員でもあった稲垣藤兵衛は、1921年以前に東京でエロシェンコや小坂狷二らに会ったことがある。そのことを考えると、『La Verda Ombro』にエロシェンコ作品を掲載したのは、稲垣か小坂の紹介という可能性もあるだろう。そうでなくても、『La Verda Ombro』のエロシェンコ作品は、台湾人と中国の知識人がつながる1つのルートにエスペラントがあったことを裏付ける。特に連温卿は戦後の回想文で、『La Verda Ombro』に掲載されたエロシェンコ作品の著作権をめぐって、中国エスペランチストの胡愈之²⁷と揉め事が起こり、『リーダーズ・ダイジェスト』編集者の福岡誠一の調停によって解決されたと述べている²⁸。のちに詳述するが、『La Verda Ombro』にある3篇のエロシェンコ作品のエスペラント版は、すでに胡愈之によって1922年に翻訳され、中国で刊行されたものと確認できた。

まず、筆者が確認したこの3篇の作品の掲載ルートを整理すると、以下の表となる。

作品名	「El Fabelaj Skezoj pri Ĥina vivo de Sro. V. Eroshenko」 (童話の写生：エロシェンコの中国生活について)	「Unu Paĝeto en Mia Lerneja vivo」 (私の学校生活の一頁)	「Toro por Fali」 (墜ちる為めの塔)
台湾	☐エス語原文☐：『La Verda Ombro』、1922.07、08、09。3回連載	☐エス語原文☐：『La Verda Ombro』、1923年1-2月合併号付録	☐エス語原文☐：『La Verda Ombro』、1923年6-7月合併号付録
中国	①☐中訳☐：『枯葉雑記』、『東方雑誌』、1922.03、2回連載。 ②☐エス語原文☐：『Ĝemo de unu Soleca Animo (ある孤独な魂のうめき)』、上海、1923。 ③☐中訳☐：『枯葉雑記』、『枯葉雑記』、上海：商務、1924.04。	①☐中訳☐：『我的学校生活の一断片』、『愛羅先珂童話集』、上海：商務、1922.07 ②☐エス語原文☐：『Ĝemo de unu Soleca Animo (ある孤独な魂のうめき)』、上海、1923。 ③☐アモイ語訳☐：『Góa Hák-häu	①☐中訳☐：『為跌下而造的塔』、『東方雑誌』、1922.1.10 ②☐中訳☐：『為跌下而造的塔』、『愛羅先珂童話集』、上海：商務、1922.07

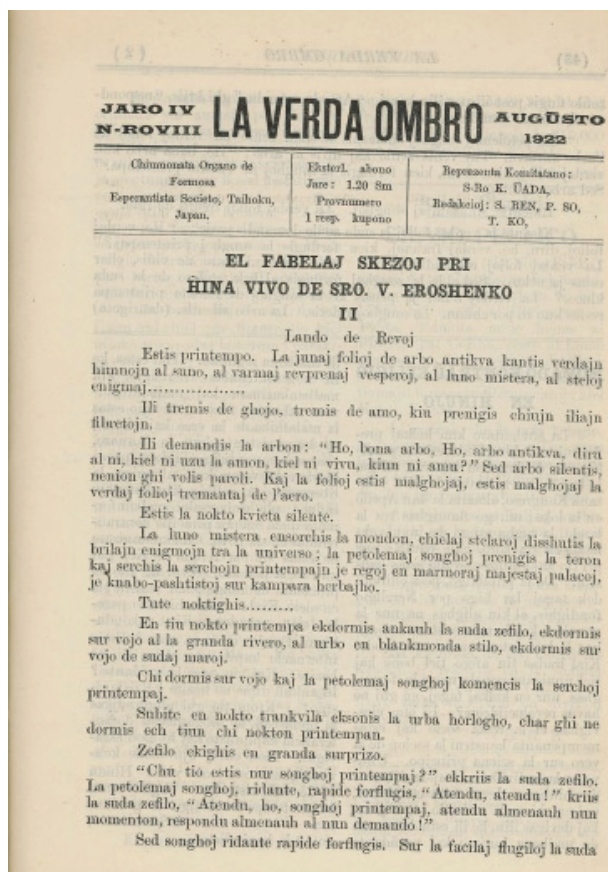
		Seng-hoat ê Chit Toân-phian」、 『廈語短篇小説 第一集』、ア モイ：廈語社、1922（原文ロー ーマ字）。	
日本	①『エス語と和訳』：「枯葉の物語（上海生活の童話的スケッチ）」、『我等』、1925年1月号から9月号まで連載。	①『和訳』：「私の盲学校生活の一頁」、『我等』、1922.06。 ②『和訳』：『人類の為に』、東京刊行社、1924.10	①『和訳』：「墜ちる為めの塔」、『解放』、1923.05。 ②『和訳』：『人類の為に』、東京刊行社、1924.10。

以下は、この表を対照しながらこの3篇の作品の掲載ルートを説明し、作品の内容を簡潔に紹介する。

1. 「童話の写生：エロシエンコの中国生活について」

1922年7月から9月まで『La Verda Ombro』に掲載された「童話の写生」は、同年3月にすでに中国エスペランティストの胡愈之によって中国語に翻訳され、『東方雑誌』で2回連載された。東方雑誌社は、1924年に同社の雑誌に発表されたエロシエンコの作品を『枯葉雑記』²⁹に収録した。『枯葉雑記』は序文を含めて全部で7節あるが、『La Verda Ombro』の「童話の写生」に収められたのは、その「序文」と「街路樹」および「幻の国」の3節だけであった。

右図：「El Fabelaj Skezoj pri Ĥina vivo de Sro. V. Eroshenko II Lando de Revoj (童話の写生：エロシエンコの中国生活について II 夢の国)」、1922.08、1頁。



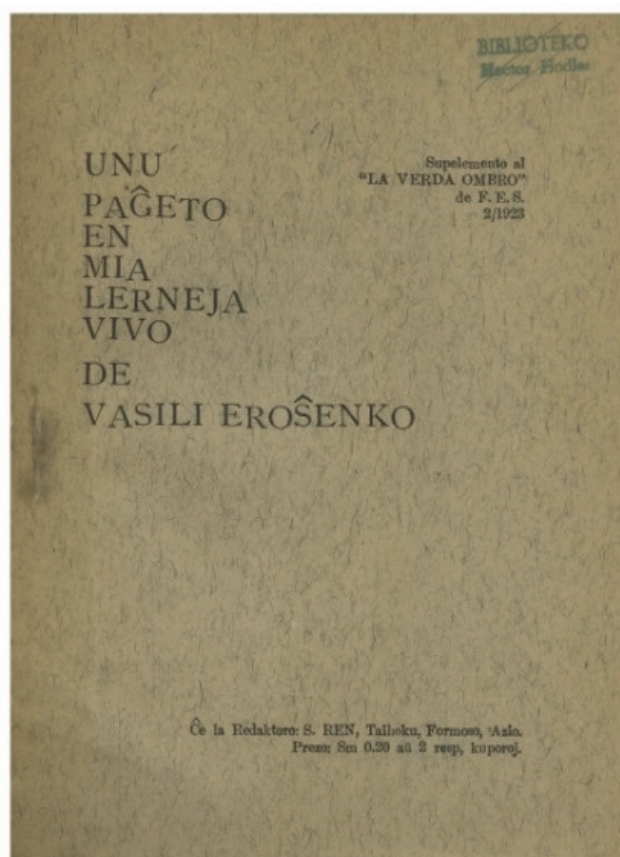
この作品のエスペラント語の原文は、中国の新聞や刊行物に掲載されたのかどうかは確認できないが、中国で出版されたエスペラントによるエロシエンコの作品集『Ĝemo de unu Soleca Animo（ある孤独な魂のうめき）』は、1923年に出版され、そこには「枯葉雑記」、つまりこの「童話の写生」を収録している³⁰。日本の雑誌『我等』がエスペラントと日本語対訳の「枯葉の物語」（詳細版）を連載したのは1925年のことであった³¹。のちに「墜ちる為めの塔」を紹介する際により詳しく説明するが、「童話の写生」のエスペラント語の原文が最初に掲載されたのは『La Verda Ombro』だと筆者は推測する。

前述したように、エロシエンコは1921年6月に日本から追放され、1921年10月からハルビンや上海に滞在し、1922年2月から1923年4月までは魯迅宅に住み、北京大学で教鞭をとった³²。「童話の写生」は、エロシエンコの上海での生活の記録である。次に単行本として出版された「私の学校生活の一頁」と「墜ちる為めの塔」を紹介する。

2. 「私の学校生活の一頁」

「私の学校生活の一頁」は、1923年2月に『La Verda Ombro』の別冊（第6巻第1-2月合併号付録）として出版された。

しかしこのエロシエンコの「自叙伝」ともいえる作品は、すでに1922年7月に胡愈之によって中国語に翻訳され、魯迅や馥泉が翻訳したほかの作品と合わせて『愛羅先珂童話集』（エロシエンコ童話集）³³に収録された。エスペラントの原文は、前述の作品集『Ĝemo de unu Soleca Animo（ある孤独な魂のうめき）』に収録されており、そのなかにも「枯葉物語（童話の写生）」が存在する³⁴。つまり、エスペラント版の「童話の写生」と「私の学校生活の一頁」のエスペラント原稿は、1923年に中国で刊行されたことがわかる。



右図：「Unu Paĝeto en Mia Lerneja vivo」

（私の学校生活の一頁）、『La Verda Ombro』、1923年1-2月合併号の付録の表紙。

一方、『La Verda Ombro』が1923年2月に別冊として出版した「私の学校生活の一頁」の裏表紙には、「Sro S. Higa」経由で入手し、日本語訳が『我等』に掲載されたことがエスペラントで書かれている。「Sro S. Higa」は沖縄出身で、当時『改造』社で記者を務めているエスペランチストの比嘉春潮³⁵である。比嘉は第四章で詳述するように、日本のプロレタリア・エスペラント運動を始めた1人である。すなわちこの作品のエスペラント原文は、胡愈之ではなく、比嘉春潮から譲られたものである。また、1922年6月に『我等』に掲載された日本語訳は、福岡誠一によるものである³⁶。つまり、のちに紹介する「墜ちる為めの塔」と同じように、エロシエンコは、胡愈之に頼まれて「童話の写生」や「私の学校生活の一頁」のエスペラント原稿を書き、胡の中国語訳が出版されたと同時に、日本にも投稿した。そしてエスペラントの原文は、比嘉の紹介で『La Verda Ombro』に掲載

されたのである。

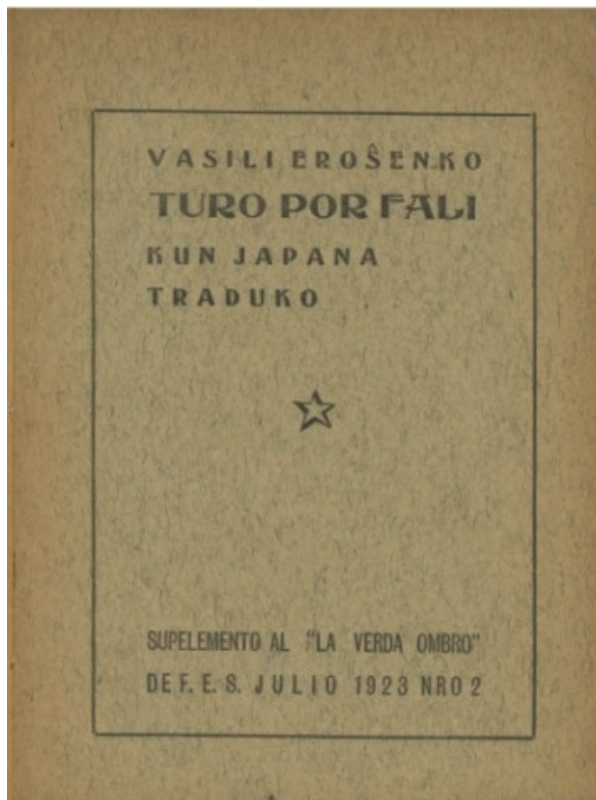
興味深いのは、「私の学校生活の一頁」は1924年にローマ字のアモイ語に翻訳され、台湾人も入手できる『廈語短篇小説 第一集』に収録されていることである。訳文のあとがきに次のような説明がある。

この小説は、彼の自伝であり、中国に滞在した時に、上海の民国日報のために書いたものである。胡愈之氏が中国語に翻訳した後、魯迅氏が彼の作品を編集し、『愛羅先珂童話集』という題名で出版した。この小説は、第1篇の作品である³⁷。

この説明から、この作品は『上海民国日報』に原稿を依頼されて書かれた作品だとわかる³⁸。このローマ字版を出版した廈語社が発行した本は、閩南、台湾、フィリピンなど多くのアモイ語が使われる地方に流通していた³⁹。『愛羅先珂童話集』は1922年の出版後、1925年7月に『台湾民報』に転載され⁴⁰、民報の編集者であった葉榮鐘が持っていたのも1925年の再版である⁴¹。すなわちエロシェンコの童話、とりわけ「私の学校生活の一頁目」が台湾で受容されるプロセスは、1923年に『La Verda Ombro』に掲載されたものに始まり、1924年のローマ字版がこれに続き、1925年の民報と再版の中国語版に続くのではないかと考えられる。

3. 「墜ちる為めの塔」

「墜ちる為めの塔」は、『La Verda Ombro』の第5巻第6-7月合併号付録(1923.07)として出版され、和訳も付いている。この小説は、中国における軍閥相互の抗争に対する諷刺と批評を作品化したものである。編集者の連温卿は文末に、和訳は『解放』雑誌の5月号から転載したと説明している。この作品の和訳は1993年に『エロシェンコ童話集』に収録された。編集者の高杉一郎は、この作品のエスペラント原文が1923年7月の『La Verda Ombro』に発表されたもので、和訳は連の親友であった沖縄出身の比嘉春潮から借りた発表誌から書き写してあったテキストであると述べている⁴²。



図：「Toro por Fali (墜ちる為めの塔)」、『La Verda Ombro』、1923年6-7月合併号付録の表紙。

胡愈之によって翻訳された中国語版は、すでに1922年1月に『東方雑誌』に掲載されている⁴³。魯迅は『愛羅先珂童話集』の序文で、「本集的十二篇文章中、自叙伝和為跌下而造的塔是由胡愈之先生訳的⁴⁴」と述べている。「自叙伝」は「私の学校生活の一頁」のことで、「為跌下而造的塔」は「墜ちる為めの塔」のことである。しかし、エロシェンコが上海で出版したエスペラント創作集『*Ĝemo de unu Soleca Animo*（ある孤独な魂のうめき）』には、この文章は収録されていない⁴⁵。高杉一郎による「エロシェンコ著作集（表）」にも、1923年7月連温卿発行の『*La Verda Ombro*』が初版であると記している。言い換えれば、この作品のエスペラント原稿は、『*La Verda Ombro*』に初めて掲載された可能性が高いと思われる。

連温卿は胡愈之との揉め事や福岡誠一の調停について詳細に書いていなかったが、その原因について、松田はるひは、「私の学校生活の一頁」の著作権によると述べている⁴⁶。しかし、前述したように、胡愈之が中国語に翻訳した「枯葉の物語（童話の写生）」と「墜ちる為めの塔」は、『*La Verda Ombro*』での掲載より早かった。また、「童話の写生」と「私の学校生活の一頁」の原文は胡愈之が編集した『*Ĝemo de unu Soleca Animo*（ある孤独な魂のうめき）』に収録された。そしてこの3篇のエロシェンコの作品のエスペラント原文は、連温卿が比嘉からもたらしたものである。エロシェンコが日本で出版した3冊目の創作集『*人類の為に*』は、1922年改造社から発売の準備がととのったところ、関東大震災のため、校正刷一部を残し全焼してしまった。その後、福岡誠一が編集者となって東京刊行社から1924年10月に出版された。『*人類の為に*』には、「私の盲学校生活の一頁」と「墜ちる為の塔」が収録されている⁴⁷。

すなわち、胡愈之と連温卿との著作権をめぐる揉め事は、3篇の作品が原因と考えられるだろう。特に「墜ちる為めの塔」はエロシェンコが『東方雑誌』のために書いたものであり、最初は「*La Rakonto de Suda Kaj Noruda*（南と北の物語）」というタイトルであったが、胡愈之と作者のエロシェンコとの議論によって改題したため⁴⁸、揉め事の最大の起因となったと考えられる。

以上、『*La Verda Ombro*』雑誌に掲載されたエロシェンコの作品とその掲載ルートについて考察した。編集者は、エスペラント運動を通じて日本や中国からエロシェンコの作品を翻訳して台湾へ紹介した。著作権の問題で揉め事も起きたが、台湾人と中国知識人との接触は、エスペラント運動が1つの重要な場となっていたのである。

総じて言えば、『台湾青年』より早く台湾島内で発行された台湾人による雑誌『*La Verda Ombro*』は、台湾で最も重要なエスペラント雑誌であった。1920年代初期に国際事情や近代的知識、さらに世界文学作品、世界のエスペラント運動を紹介した。雑誌がエスペラントのコスモポリタニズム、人類平等の主張、また社会主義的な思想に関連する文章を多く掲載したことは、台湾の雑誌史上に大きな意味を持っていた。また、当時の台湾エスペランティストは、台湾の歴史や文化、民族の特殊性、植民地の現状などをエスペラントを通じて世界に発信し、世界的視野を広げながら、世界の国々との連携を企図したのではないだろうか。

第二節 台北エスペラント会—『La Formoso (台湾)』(1926-1930)

松田はるひによると、1920年代後半から1930年前後にかけて、島内の民族主義の高潮を背景として、「台湾話文運動」などの言語ナショナリズムが発生し、エスペラント運動も民族主義運動に変質した⁴⁹とされる。しかしながら、第二章で述べたように、台湾エスペラント学会は、1920年代初期から植民地政策を反対しながら民族運動とかわるようになり、1922年以降、警察が学会を厳しく監視していた。機関誌も1926年に廃刊している。また、第四章で詳述するが、学会は1930年前後に運動を再開したが、ナショナリズムの性質を持ちながらプロレタリア・エスペラント運動の方向に傾いた。一方で、1920年代後半のエスペラント運動は、学会から脱退していった日本人エスペランティストが中心として行っていたのである。第二章で述べたように、彼らは台湾エスペラント学会倶楽部「La Verda Domo」(緑の家)を組織し、「台北エスペラント会」を経て、のちに「日本エスペラント学会台湾支部」に改組し、1926年6月に月刊『La Formoso (台湾)』を発刊した。それ以来、日本エスペラント学会の機関誌の「内地報道」に載った台湾の消息は、この「台湾支部」によるものになった。だが、「台北エス会」という組織名で報道されることのほうが多く、機関誌の発行所も「台北エスペラント会」となっているため、以下は第二章と同じように「台北エスペラント会」と称する。

台北エスペラント会の機関誌『La Formoso』は、1926年から1930年にかけて計14号を発行された⁵⁰が、現在では9号(合計68頁)しか確認できない⁵¹。創刊号からすべて活字印刷である。以下、まず雑誌の内容を簡単に紹介する。

(一)『La Formoso』の内容概観

『La Formoso (台湾)』の発行人は、創刊号から岩瀬通であったが、最後の1930年6月号だけは武上耕一となっている。言語使用については、1929年の4月号と1930年の6月号だけは全てエスペラントで掲載しているが、それ以外はエスペラントと日本語が併用されている。第二章で論じたように、1920年代後半の台湾エスペラント運動は、国語を擁護し日本のナショナリズムを手放せなかった在台日本人が主導した台北エスペラント会によって行われてきたものであった。機関誌の執筆者を見ると、岩瀬通、杉本良(台北専売局酒課)、武上耕一(殖産局獣疫血清製造所)、江副秀喜(台北商業学校)などは、ほぼ官僚や学者である⁵²。当時、エスペラント運動は分裂していたとはいえ、雑誌の創刊号に掲載された「本年第二期講習開始」によると、1926年5月に開始した講習会の最初の講師は連温卿であった⁵³ことがわかる。つまり台北エスペラント会が作られた当初は、連との関係はまだそれほど悪化していなかったと考えられるだろう。

雑誌の内容は、エスペラントの思想や論理、文法や特徴、「緑の家」の活動、内地や海外からの通信やエッセイなど充実したものとなっている。しかしこの雑誌は『La Verda Ombro (緑の蔭)』のような左翼色はなく、エスペラントという国際共通語を推進し、エスペランティストが交流するための雑誌として発行されたものだと言えよう。現在9号しか確認できないが、その内容は広告などを除くと、①「支部内部の交流や活動」、②「エスペラントの語学やその重要性について」、③「外国や日本内地の便り」、そして④「在台

日本人が見た台湾」の4種類に分けられる。

まず、「支部内部の交流や活動」である。例えば「六月一日の会合」、「本年第二期講習開始」(1926.06)、「日本エスペラント学会台湾支部の誕生」(1926.07)、「秋期エスペラント研究会」(1926.08)、「当支部の近況報告」、「日本エスペラント学会台湾支部会員名簿」(1926.09)、「回顧一年」(1927.11)、「Esperanta Vespero」(エスペラントの夕、1930.06)などには、台湾支部成立の経緯や講習会または研究会の日程が詳しく書いてあり、組織の運営のあり方などがうかがえよう。

次に、「エスペラントの語学やその重要性について」に関する文章としては、例えば「エスペラント雑話」(1926.06)、「エスペラントに対する誤解」(1926.07)、「国際語の意義とエスペラント(一～二)」(1926.07、08)、「エスペラント十六則に就て」(1926.09)、「Al Kontraŭstarantoj al Esp. (3)(4)(エスペラント反对者に与ふ(3)(4)、1927.3-4月合併号、1927.11)」、「エスペンテイストとしての意識及理論の問題(2)」、「言語として優秀な日本語と其の現状(1)」、「エスペラント初歩講義(5)(6)(7)」(1927.3-4月合併号、5-6月合併号、11)、「Angla lingvo aŭ Esperanto」(英語あるいはエスペラント、1927.5-6月合併号)などがあり、エスペラントの意義や特徴、あるいはメリットなどを強調している。これらの文章を通じて台北エスペラント会や在台日本人エスペランティストの言語観がうかがえよう。この点について以下の第二小節で論じる。

3つ目は、「外国や日本内地の便り」である。例えば「ドイツ・ライプチヒ市の定期市の春期開市状況」(1926.06)、「各地よりの通信」(1926.07)、「通信消息欄」(1926.08)、「米国通信」(1927.3-4月合併号)、「Alvoko tutmondaj Arĥitektoj-Esperantistoj」(全世界の建築家エスペランティストの呼びかけ、1929.04)などがある。また、石黒修や長谷川理衛、または朝鮮の釜山府にいた日本人、中国のエスペランティスト張鐘鈴、高橋邦太郎、中原脩司らの便り、あるいは長崎や京都のエスペラント会からのメッセージ、さらにアメリカに出張中の杉本良による「米国通信」が掲載されているが、外国に関する記事は『La Verda Ombro』ほど多くなかった。

4つ目は、「在台日本人が見た台湾」である。例えば「Esperanta Movado en Formoso (台湾エスペラント運動、1926.06)」、「Ekspediciado al du sunoj (El legendoj de sovaĝento en Formoso)」(2つの太陽への探険 [台湾の蕃族物語より]、1926.08)、「Okcidenta Formoso al Takao (1)Lando d Trezoro」(西台湾—高雄に向かう (1)宝の島、1926.09)、「La Malĝojo de juna sovaĝulo」(若い生蕃の悲しみ)、「大屯山行記 登山の汗」、「大屯山行記 標高板及巢箱建設」(1927.5-6合併号)、「La vivo en Formoso.....Mi Amas Ĝin」(私は台湾の生活が好きだ、1927.11)、「Pork-bredo en Formoso」(台湾の豚の品種、1929.04)などがある。第二章で言及したように、杉本良の「Esperanta Movado en Formoso」は短い文章だが、いまのところ最初のエスペラントで書かれた台湾エスペラント運動史である。そして在台日本人が紹介した「生蕃」の物語、体験した台湾の生活、または台湾の景色を描写する文章からは、彼らの台湾に対する思いや考え方がうかがえよう。この点について、以下の第三小節で分析する。

ちなみに、『La Formoso』創刊号に1枚の両面印刷の紙が挟まれた⁵⁴。その片面には、エ

スペラントで書かれた「Alvoko de Itala Ĉefministro (イタリア首相ムッソリーニの呼びかけ)」という一文が掲載され、『台湾日日新報』の社説からの翻訳である。この文章は、ムッソリーニを讃え、彼のファシズム理論を日本の武士道精神に例え、日本が外敵の侵略に抵抗できるのは、二千六百年の光栄なる歴史を持ち、天皇を尊敬し国を愛し、命令に服従し、紀律を守る所以であると論じている。さらに、日本人はムッソリーニと彼のファシズム理論から示唆を受け、そのような示唆を与えてくれたムッソリーニに感謝すると述べている。もう一面には、「日本の青年男女諸君(イタリア首脳ムッソリーニ氏のメツセージ)」という日本語の訳文があり、最後にムッソリーニの署名と1926年3月の日付がある。この記事はおそらく『La Formoso』の創刊号が発行寸前に印刷したものだろう。『台湾日日新報』の社説から訳されたものだが、『La Formoso』の国家を擁護する立場やファシズムを支持する立場は、この記事からわかるだろう。

以上、『La Formoso』に掲載された記事を簡単に紹介した。タイトルを見れば、『La Verda Ombro』には、「文学作品」や「社会主義関連文章」を多く掲載する一方、『La Formoso』は、エスペラントの国際上の実用性や生活上で活かすことが重要視されている。同じエスペラントの語学に関する文章だとしても、両者の考え方はかなり離れている。以下、雑誌に掲載されたいくつかの文章を例として、在台日本人のエスペラント観を分析する。

(二) 在台日本人のエスペラント観

まず、台北エスペラント会の言論と在台日本人エスペランチストの言論を同一視することははたして妥当であろうか。第二章で言及したように、1926年9月号に掲載される「日本エスペラント学会台湾支部会員名簿⁵⁵」を見れば、44名の会員の中に台湾人は5名いるが、『La Formoso』のなかに、台湾人による文章は見当たらない。また同じく9月号で載せられた「当支部秋季研究会」(10人)や「秋季懇親会」(26人)⁵⁶に出席した名前を見れば、すべて日本人だとわかる。そのため、『La Formoso』での言論は、在台日本人エスペランチストの視点を代表できると言えよう。

前述したように、『La Formoso』には「エスペラントの語学やその重要性について」に分類される文章を多く掲載している。これらの文章は、『La Verda Ombro』のような社会主義や政治批判など左翼的な思想を持たず、国際共通語としてのエスペラントの意義や実用性、メリットなどを説明している。単なる語学上の議論なるものに見えるが、そこには在台日本人の具体的な「エスペラント観」がうかがえる。

例えば、「国際語の意義とエスペラント」という文章を見てみよう。無署名の文章だが、杉本良によるものだと確認できる⁵⁷。この文章は、「国際語の意義と其の必要」、「人造語の沿革」、「ザメンホフ博士」、「エスペラント創造の動機」、「エスペラントの構造」、「エスペラントの発達」、「エスペラントの現在及将来」、「台湾に於けるエスペラントの沿革及現状」の8節からなり2回に分けて連載された長い文章である⁵⁸。第7節の「エスペラントの現在及将来」では、杉本は以下のように述べている。

国際聯盟に在つても其の創立以来、民族間の直接の交通を阻害する言語上の困難を

認め此の障害を除去し各国民間の充分なる了解を助くべき何等かの実際的手段を見出す緊急の必要を認め聯盟国の二三が公立学校に於てエスペラントを教授せる試みに対して興味を抱き、エスペラント教授の実際に関する調査を為した。[中略] 僅に小国のみでない、仏国然り、米國然り、言語に対し最も自信力の強いと称せられる英國に於てさへも、非常なる熱心を以てエスペラントを研究し、学校に於ても之を教授して居るものがあるの状況である、エスペラントが危険思想を伝播すると云ふが如き疑念は勿論今日に於ては一掃せられた、一九二二年には仏國では公立学校でエスペラントを学習することを禁止したことがあつたが、一九二五年六月十九日之を解除したと云ふことである。今日に於ては商業用語として普及せしむる為に英米を初め諸國の商業會議所其の他の団体に於て特別の手段を講じて居る。即ち漸次國際商業用語として使用せられんとするのである。⁵⁹ (太字：引用者)

杉本は、エスペラントが國際連盟に認められようとしていることや、連盟に参加した國のなかには学校においてエスペラントを教授させようとしていること、またはフランスやアメリカ、イギリスなどの強國でもエスペラントを重視していることなどを強調し、エスペラントを國際商業用語として普及させようとしていることを紹介した。また、「エスペラントが危険思想を伝播すると云ふが如き疑念は勿論今日に於ては一掃せられた」ということも言及している。第一章と第二章で述べたように、1910年代から1930年代後半にかけて、日本内地でも植民地台湾でも、エスペラントは政府から危険視され監視されていたのである。こうした背景があり、台北エスペラント会のエスペラント運動は、國際上の使用状況や商業上の実用性、「中立性」などを唱え、政府の政策や方針を批判することを避けていたのではないかと考えられる。

また、杉本良は本文の第8節「台湾に於けるエスペラントの沿革及現状」で、児玉四郎や連温卿、武上耕一らの貢献に触れながら、台北エスペラント会の前身である「台湾エスペラント学会俱樂部 La Verda Domo (緑の家)」を持ち出し、運動の現状について述べている。

児玉氏の東京帰還以後に於ても、以上諸氏の熱心なる努力によりて屢講習会を開催せられ、学習をした人は二百人以上に上つて居る、而し現在迄講学を続けて居る人はそんなに多くない現今に在つては毎週木曜日及金曜日午後七時より約三十人の人々が小南門外専売局クラブに於て講学研究を続けて居る。これらの人々はヴェルダ・ドモと云う団体を作り、共同して研学の便宜を図つて居るのである。エスペラントは入るに割合に容易であるが如くであるが、もとよりこれなくとも日常の生活に支障のある訳でないから、一旦講習を催しても、之が済んでしまへば往々にして廃学してしまい、研究を継続することは容易でない。[中略] 折角世界の太勢とならうとして居るこのエスペラント語の研究竝に活用に於て我が台湾が人後に墜ちなきやう協力せられたく希望する次第である。⁶⁰

ここからは、台北エスペラント会は 1920 年代後半にも運動を続けていたが、普及の状況は運動の初期に比べてかなり衰退した状況になっていたとわかるであろう。また、エスペラントを以て「台湾」を世界に見せる意図も見える。しかし、外国におけるエスペラントの普及や言語状況を丁寧に説明している一方で、結論としての第 8 節において、「我が台湾」と言いながら、植民地台湾の国語政策や言語状況についての関心や配慮は一切見えなかった。

こうした在台日本人のエスペラント観は、江副秀喜が書いた「エスペラントに対する誤解」からもうかがえる。江副は、「エスペラントは国語を否定すると云ふ説」、「エスペラントは世界の弱小国のみの主張する言語であるとの誤解」、「国際語では他国の真相は不明だと云ふ誤解」、「外国語学習の必要を否定すると云ふ誤解」、「人造語には生命はないとの説」など 5 つの誤解に対して反論を提出した。この文章は、九州帝国大学教授の大島廣が熊本市の公会堂で講演した論旨を要約したものであるが、江副のエスペラントに対する考え方も示しているであろう。例えばエスペラントは「国語を否定する説」に対して、江副は以下のように述べている。

エスペラントを世界語と称するとすれば或は国語を否定することになるかも知れないが、世界のエスペラント会員はこれを国際補助語と称して、世界語とは称へないのである。即ち各国人は其の自国語を尊重すると同時に、また他国語をも尊重するのである。⁶¹

エスペラントは、漢字文化圏では世界語と訳されたが、国際上では国際補助語と称する。1920 年代の日本ではまだ「世界語」という名称を使っていたためか、国語を否定する意味に取られてしまう誤解が生じたのであろう。それに対して江副は、「即ち各国人は其の自国語を尊重すると同時に、また他国語をも尊重するのである」と説明するが、この言い方は、ザメンホフが 1905 年に「ブローニュー宣言」で掲げた「エスペラント主義⁶²」を支持していることがわかる。

真の「エスペラント主義」を議論する「ホマラニスム論争」については、第六章で詳述するが、「ホマラニスム論争」は 1922 年 11 月から日本エスペラント学会の内部で始まり、「ホマラニスム」を支持する小坂狷二は学会のアジテーターとみなされ、それに抗議する千布利雄は 1923 年 9 月に学会委員を辞任した⁶³。論争のなかで、小坂らは「ホマラニスム派」、千布らは「ブローニュー派」と呼ばれ、国語を批判するか擁護するかに関する議論も存在した。興味深いのは、かつて台湾エスペラント学会の編集者を務めた江副が、1920 年代初期に学会が分裂した原因の 1 つで、エスペラント観に対する異なった意見であった「国語を否定する説」に反対の意見を出したことである。ここからも、1926 年の時点で、エスペラントと国語との問題が、エスペランチストの間で議論されていたこともわかる。しかし、江副は「また他国語をも尊重するのである」と述べながらも、植民地における国語政策が台湾島内の言語を圧迫している現状を無視していたこともうかがえるのではないだろうか。

こうした在台日本人エスペランチストの言語観は、甲斐虎太の「現代世界の各国語 言語としての優劣及その勢力」からもうかがえよう。甲斐は文章の冒頭で、「**現在いかなる野蛮人でも各その言語を有つて居る十七億の人類が有つ言語は眞に二百乃至九百の多様に達する**、それ等の中、我々の関心すべき有力な文明国及民族の言語についてその言語としての優劣及勢力を調べて見やう⁶⁴（太字：引用者）」と述べる。彼は「日本語は今や混乱の過程にある」としながらも日本語の優秀さを強調し、「日本語をして眞価を発せしむることは今後の我々の義務である、日本語で複雑な思想が表せない等を思ふ人は、日本語の用法を知らぬ者だ。日本語の語彙の整理と文法の統一と、アルファベット綴字採用とは現在日本人の実行すべき急務と信ずる。⁶⁵」と**日本語のローマ字化**を建言するのである。こうしたように、在台日本人は日本語を優位に思っていたために、国語政策が植民地の言語に対する抑圧が見えなくなっていたのではないか。

エスペラントと国語国字問題にする問題は第五章で詳述するが、第二章で述べたように、エスペランチストのなかには日本語をローマ字化しようという主張を持つ人は多い。甲斐の文章の冒頭で言う「**現在いかなる野蛮人でも各その言語を有つて居る十七億の人類が有つ言語は眞に二百乃至九百の多様に達する**」ことや、優秀さを持つ「日本語は今や混乱の過程にある」という考えからは、彼は「野蛮人」の言葉を劣等視し、日本語の近代化に意見を持っていたことや国語擁護の考えを持っていたことが多少なりとも感じられる。そういった考え方を持つためか、江副と同じように植民地における抑圧性のある国語政策を批判せずに国語の優秀さや、エスペラントの中立性を唱え続けられるのであろう。

以上、杉本良と江副秀喜および甲斐虎太の文章を取上げながら、在台日本人の「エスペラント観」について論じた。第二章で述べたように、1920年代後半に日本エスペラント学会機関誌に掲載される台湾の運動についての記事は、台北エスペラント会の活動が中心となっており、世界エスペラント学会の台湾代表となり理事を務めていたのは杉本良や甲斐三郎であった。また雑誌での通信消息欄や海外の便りからも、日本内地や海外の運動とつながっているのは在台日本人による台北エスペラント会であった。このことから、彼らの運動とエスペラント観は、当時の台湾エスペラント運動の主流であったと考えられるだろう。こうした在台日本人エスペランチストだが、彼らの文章にも台湾に対する深い感情が見られる。以下、『La Formoso』で現れた「台湾」を分析する。

(三) 『La Formoso』がみた「台湾」

前述の杉本良が書いた「国際語の意義とエスペラント（続）」の最後には、「折角世界の**大勢とならうとして居るこのエスペラント語の研究竝に活用**に於て我が台湾が人後に墜ちなきやう協力せられたく希望する次第である」と結ばれている。そこには「我が台湾」ということばが出ている。在台日本人にとって、「台湾」はどのようなものであったのだろうか。

まず、1926年9月号の表紙にある台湾の地図を見てみよう。地図について、雑誌のなかにはこのような解説がある。

本号に掲げた地図は外国の方々に台湾の位置を示したいと思ったものです。Formoso と云つても一寸地図で見付からないと見えて、“お前の処はどこか”と云つて来られた方がありますのです。一人でもそう云う人に行きあつて、私のところはこゝだと示すことの出来るのは幸です。喜びであります。⁶⁶

右図：『La Formoso』、1926.09、表紙。

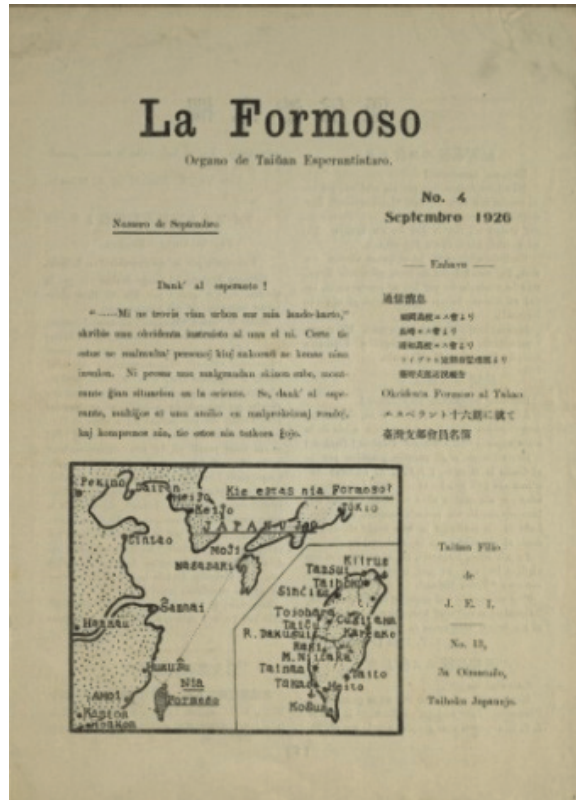
つまり海外のエスペランチストに台湾の位置を示すために、雑誌の表紙に台湾地図を載せたのである。外国人に「お前の処はどこか」と聞かれる際、地図があれば説明しやすくなる、これはアメリカに出張した杉本良による発想かもしれない。また、こういった説明も、1926年の時点で台湾という地域や場所については、あまり世界に知られていないことを示しているのではないだろうか。

杉本良は、台湾エスペラント運動史や米国での見聞、または語学に関する文章を数多く発表した。それだけでなく、「Okcidenta Formoso al Takao (1)Lando d Trezoro」(西台湾—高雄に向かう (1)宝の島、1926.09)と「La vivo en Formoso.....Mi Amas Ĝin」(私は台湾の生活が好きだ、1927.11)と2篇のエッセイを掲載した。

「西台湾」は杉本良の台湾半周旅行記で、もともとは長い文章だと思われるが、1926年10月以降の号は未見であるため、9月号の「(1)宝の島」だけが現存する。杉本は、台湾中部の山地に入り、多くの新しい計画が始まっているのを見学し、また樟腦の工業が当時世界で最大級の計画であることや、阿里山、太平山、八仙山などで発展しつつある木造工業の偉大さ、そして茶産業などを紹介して褒め称えている。多くの山地に住んでいる先住民のことを見て、杉本は以下のように述べている。

この山の多くの地域には多民族の生蕃が棲んでいる。タイヤル族とサイシャット族は北部に、ブヌン族とツウオ族は中部に、パイワン族は南部に、アミ族は東部の海辺に、ヤミ族は台湾南部の2つの小さい島にいる。彼らはそれぞれの文化や生活習俗を持っており、部落の伝説については、いくら語っても語りきれない。近代化的な改革によって、彼らの旧習はだいぶ改められた。いまは生蕃という言葉で彼らのことを呼ぶのは、いささか不適當であろう。⁶⁷

ここから、杉本良が台湾の先住民に対して大まかな知識を持っているとわかる。また



1926年の時点で、前述した建設や開発の工事が同化政策とともに進められ、山地ではますます近代化になりつつあり、「生蕃」の旧習もだいぶ改められたため、杉本は生蕃という言葉が不相当だと考えた。とはいえ、彼は文章のなかにやはり「sovaġulo」（生蕃）を用いて先住民のことを呼んでいる。また文章では、政府の植民地政策に対しては、それが台湾社会を近代化させたため、肯定すべき、誇りを持つべきだという杉本の考えが現われている。

もう1篇の「私は台湾の生活が好きだ」では、「Mia Unua Impreso」（第一印象）と「Bela Printempo」（美しい春）に分けて語っている。杉本良は、台湾は大きな海にある小さな島で、気候は暑いが、しかし自分が台湾が好きだと冒頭⁶⁸で述べながら、台湾に対する第一印象を以下のように語っている。

この島に引越ししてからもう6年経った。その前は朝鮮で6年間住んでいた。朝鮮を離れた時は11月末であり、その後12月に内地に戻った。初めて台湾に来たのは1921年1月であった。台湾は母国の西南方から約600マイルの距離にある。航行の海では1日目より熱くなった気がした。台湾に到着した際に、ちょうど雨季であり、湿気が多く、ムツとする空気を感じた。毎日、前日より湿度が高い気がして、靴や衣服、お菓子にはカビが生えやすい。故郷を離れたときはちょうどお正月であったので、かばんに少しお餅を入れたが、カビが生えて食べられなくなった。島には湿気が多くため、椰子の甘い匂いにもうんざりに感じる。⁶⁹

杉本は台湾に来たのは1921年であった。第二章で言及したように、彼が最初は専売局庶務課で事務官を務めた。そのため、おそらく朝鮮での6年間も官僚として勤務したのではないか。台湾は湿気が多く、カビが生えやすいところだと彼の第一印象であった。それは雨季のせいではなく、日本や朝鮮との気候や風土がかなり違い、また転勤したばかりの鬱陶しい気持ちを南国のせいにしたのではないか。しかし生活に徐々に慣れてくると、杉本は台湾を好きになった。次の段落の「美しい春」には、彼はこのように語っている。

台湾はオレンジの産地である。私が台湾のオレンジが好きだ。オレンジの甘みだけではなく、オレンジの花の匂いも好きだ。オレンジの花は4月に咲く。田舎の道路で散策する際に、その香りを嗅いだら、やむをえず近くにあるオレンジの花を探しに行く。台湾の1月と2月には、さまざまな花が咲くのを楽しめるが、日本内地では灰色が広がってよく雪が降っている。しかし、台湾の最も美しい花の季節は3月と4月だ。⁷⁰

杉本は、台湾旅行中で見たさまざまな台湾と母国日本との違いに言及し、日本内地ではあまり生産されないオレンジの木や花の香りが好きだと述べ、また台湾の季節を田舎の風景で描写する。こうした華やかで南国の雰囲気や溢れ、異国の香りの漂うエキゾチックな描写は、当時台湾に旅行した日本人作家の作品からも見えるが、6年間台湾に移住し、台

湾でエスペラント運動を行ってきた杉本にとっては、文章の最後に台湾では日本のような五葉松がほとんどないため、その代わりに楠木を植えている⁷¹と述べたように、灰色や雪が降る日本内地は遥かにあって、ここ台湾はもう第二の故郷になったのではないか。

官僚ではあるが、杉本は台湾の風土に慣れ、台湾の生活を楽しんでいることや、台湾で根を下ろそうとしていることが、この2篇のエッセイからわかるであろう。その一方、前述したように、日本母国との違いも多くあるが、杉本は旅行を通じて台湾の庶民の生活を深く感じながら、山地にも入り、多くの近代的な建設や開発の事業や工事を見て、植民地政策への賞賛や日本人としての誇りを持っているのが強く感じられる。

1927年5、6月合併号に掲載される武上耕一の「登山の汗」と多々良の「標高板及巣箱建設」の2篇の「大屯山行記」⁷²も興味深いエッセイである。大屯山登山道標高板建設の活動は、台北エスペラント会によって開催され、台北工業学校の教諭多々良が考案したもので、1927年5月4日『台湾日日新報』や5月7日の『台湾日日新報』夕刊にも報道されている⁷³。同人たちは大屯山に登りながら、多々が作製した標高鉄板を建て、また登山道に何ヶ所もの巣箱を置き、小鳥に安息所を与えることにしたという。雑誌のこの号の表紙には登山参加者の集合写真も付いている。武上の「登山の汗」を見てみよう。

台北の郊外北方にスナリと聳え、いかにも人を魅する柔かな緑の線をあらはす山それは吾が大屯山である。台北にすむ者のまづ山と言ふ觀念の初まりが此山にあること程吾々になつかしい山、未だ此山に登つた事のない者は台北住民として資格の一を缺くと言つてもいゝ位有名な代表的山岳である。[中略]鳥の巣箱は登山道傍の二本の大きな台湾楓に多々良氏と横田氏によつて取付けられ樹下に「鳥のおやど」の標札を建て一同記念撮影し巷談に花が咲く。[中略]涼風に身を任せ脚下の台北平野を鳥瞰し近くは観音山から桃園高台遠くは蕃山の連峯を一眸におさめ用意の握り飯をパク付く、サテ十時頃から腹が空いたのは豈夫れ乃公のみならんやであらう、[中略]此処数万坪の広々とした芝生で水牛群がノラリクマリ悠々自適してゐる図は実に静かな平和さである自然の美に酔ひ天地の懷に抱かれて心行く迄呼吸する者の如何に恵まれたる事よ。⁷⁴

大屯山は、現在は台北市北投区に属し、日本時代から「未だ此山に登つた事のない者は台北住民として資格の一を缺くと言つてもいゝ位有名な代表的山岳」だといわれる。この台北住民はもちろん台湾人も日本人も含まれているが、大屯山に標高鉄板を建てる発想はこれらの在台日本人たちの壮挙とも言えよう。また、このイベントは台北エスペラント会によって主催したものだが、台北の美しい景色に酔ったことや、台湾の山に標高板や巣箱を設置したことから、まだそれほど根を下ろしていないであろうが、「台北にすむ者」たる在台日本人の「郷土意識」が少し見えるだろう。

最後に、『La Formoso』に掲載された2篇の先住民についての文章に少し触れてみたい。まず、山岸喜久男の「Ekspediciado al du sunoj」（2つの太陽への探険）⁷⁵は、サブタイトルで「El legendoj de sovaĝento en Formoso（台湾の蕃族物語より）」と書かれており、出典は

明記されていないが、タイヤル族かセデック族の伝説から訳されたものと思われる。また甲斐虎太が翻訳した S. Ando の「La Malĝojo de juna sovaĝulo (1)(2)」(若い生蕃の悲しみ (1)(2))⁷⁶は、最後に「daŭrigota (つづく)」と記述されているが、1927年12月号は散逸したため読むことはできない。この2篇は、在台日本人が台湾の先住民族に興味を持ち、彼らの生活に同情を示していることをうかがわせるものだが、ここで特筆すべきは、「生蕃」の表記に関してである。

第一節で述べたように、連温卿が1920年代初期にエスペラントで書いた「台湾先住民伝説」は、最初の2回は日本語漢字の「生蕃物語」が付いており、タイトルの「生蕃」を「sovaĝula (野蛮な、蕃人の)」で表したが、3回目以降は、野蛮を意味する「sovaĝula」ではなく、土著的、先住民的、という意味の「indigena」に変更した。しかし1920年代後半の山岸も甲斐も、または前述した杉本良の「西台湾」でも、まだ「sovaĝento」(野蛮な種族、蕃族)や「sovaĝula」(野蛮な)、「sovaĝulo」(生蕃)という言葉を使っている。このことから、在台日本人エスペランティストが当時台湾の先住民を野蛮な民族だと見ていたと考えられるだろう。

ちなみに、1930年6月に発行された最後の1号には、「Esperanta Vespero」(エスペラントの夕)⁷⁷という長い文章が掲載されている。それは、1929年12月15日で行われた「エスペラントの夕」というラジオ放送の記録である。台北エスペラント会は、1929年と1930年に『ラジオ放送 エスペラントの夕』という小冊子を発行した。このラジオ番組は、ザメンホフの誕生日を祝福するためのものであり、台北放送局で制作された約2時間のイベントである。雑誌の「Esperanta Vespero」では、エスペラントで番組プログラムや内容を記録したが、小冊子の『ラジオ放送 エスペラントの夕』は、それを和訳したものである。番組の内容は、ザメンホフの生い立ち、言語としてのエスペラント、世界各国の言語、エスペラント対話、エスペランチスモ(エスペラント主義)、希望運動とエスペラントなどについてであった。主催者は台北エスペラント会であるため、講演者はもちろん日本人エスペランティストであり、エスペラントの思想やその重要性などを中心として紹介した。この番組は1930年のザメンホフの誕生日でも再び行われた⁷⁸が、このとき発行された小冊子は未見で、『La Formoso』もすでに廃刊していたため、知ることができない。

第三節 台南エスペラント会の『La Verda Insulo (緑の島)』(1933-1934)

第二章で述べたように、1930年以降の台湾エスペラント運動は、日本内地からの影響を大きく受けている。例えば1931年に開催された第1回台湾エスペラント大会の前後に、大本教や希望社によってエスペラント研究会が設置された。特に大本教の「エスペラント普及会」の代表として台湾大会に参加した広瀬武夫は、大会後に6ヶ月間の「台湾全島緑化」の計画を立て、学校、医院、青果同業組合、街役所などさまざまな場所で講習会を開いた。その影響を受け台北、基隆、台中、南投、嘉義など多くの地域で支部が設置された⁷⁹。しかし1932年8月のエスペラント普及会の機関誌『Verda Mondo (緑の世界)』には、「台南田町キネマ世界館に本会台南支部が置かれたのは、余程以前の事であるが、同館内垣藤義雄氏等はその後懸命の努力をしてゐる。或は月刊雑誌 Verda Insulo の発刊或は諸種

映画宣伝ビラを利用しては、エス語を交へ、或は講習会研究会を催す等、地の利が良いのと背影があつらへ向きなので、充分の効果収めてある⁸⁰との記述がある。すなわち「台湾全島緑化」講習会の前に、台南支部はすでに創立され、月刊雑誌『Verda Insulo（緑の島）』も発刊されていた。それは1931年の大会直前に立ち上がった「台湾大本エスペラント部」と同じ頃に設立されたと考えられる。

月刊雑誌の『Verda Insulo』は見つかっていないが、手元にある『La Verda Insulo（緑の島）』は、1934年7月に発行された第2号であり、それは王雨卿が広瀬武夫の「台湾全島緑化」講習会を受けて創立した「啓南緑友会」の機関誌であった⁸¹。1933年に発行された創刊号は散逸したが、1934年の第2号から見れば、その前に設立された「台南支部」の『Verda Insulo』を引き継いだものだと考えられる。

日本エスペラント学会が発行した『エスペラント年鑑（1934）』によれば、「啓南緑友会（Keinan Esperantisita Societo）」は、当時の「台南師範学校博物室」に設置され、中心メンバーは林師喜、陳景西、王雨卿（引用者：王雨卿）であり、3人とも台南師範学校出身の人であった⁸²。以下、1931年以降の「台湾全島緑化」講習会と「啓南緑友会」との関係、そして雑誌『La Verda Insulo（緑の島）』の内容について論じる。

（一）「台湾全島緑化」講習会と王雨卿の「啓南緑友会」

京都にある大本教のエスペラント普及会の広瀬武夫は、普及会の「特派」として、1931年9月18日から20日まで3日間の第1回台湾エスペラント大会に出席し、「新精神運動とエスペラント」という講演を行った。大会後、彼は約半年間の予定で台湾全島の「緑化運動」を計画した。まず、9月下旬から台北（以文堂40名、第一教育会館15名）、基隆（基隆第一小学校50名以上）を手始めに、花蓮港、宜蘭方面に向かった⁸³。また11月以降に南投（南投街役場80名）、台中（新富町青果同業組合、40名、半数以上台湾人）などでも講習会を開催した⁸⁴。講習会で使用した教材は普及会編集の『基本エスペラント教科書』であった。また台中での宣伝講演会には、台中第一中学校30名、台中商業学校130名、台中医院50名、台中女学校450名、台中師範学校150名、通信局台中倶楽部20名など多くの参加者がおり大盛況であった⁸⁵。

同年12月に広瀬は南に向い、嘉義市農林学校（200名）や嘉義専売局（12名）で宣伝講演会を行った。また、嘉義市大通りの呉服店で開かれた講習会（25名）が終わった日に「嘉義エスペラント会」が組織された。同月中旬以降、台南へ南下した。台南師範学校での宣伝講演会は、全校生徒および教員が参加した。また台南市高等小学校でも講習会を行い、その時点では会員は80名に達していた⁸⁶。さらに翌年の1月下旬、高雄市湊会事務所でも1週間の講習会を開き、受講生は57名であった。2月以降もまた台中などで2回目の講習会を開催した⁸⁷。こうしたおよそ半年間の「緑化運動」が収めた成果は、台湾エスペラント学会や台北エスペラント会の活動よりも多かったようである。ちなみに、第二章で第2回台湾大会におけるプロレタリア・エスペランチストによる「赤化宣伝」を批判した井上照月に言及したが、井上はエスペラント普及会の幹事を務め、1933年以降にも『新高新報』で「エスペラントを学べ＝時代は要求する＝」⁸⁸という文章を連載し、さら

に台北、基隆、台中、台南、澎湖などで講習会を行い⁸⁹、台湾で積極的にエスペラントを普及していた。

1932年4月のエスペラント普及会機関誌には、広瀬武夫の講習会を受けた後に、広瀬に送られた何通かのエスペラントの手紙が掲載されている。広瀬は前書きとして、「本年二月一週間の私の講習を受けた後初試みとして書き送られた初心者のお手すさびです。お土産として集めて見ました殆んど訂正しておりません」と、簡単にこれらの手紙を紹介している。そのなかには、王雨卿が書いたものが掲載され、何年か前から石黒修のエスペラント著作を読んだという記述がある⁹⁰。おそらく王は、1930年前後にすでに石黒修の著作でエスペラントを自習していたであろう。また広瀬はこの手紙の最後の「記者註」で「氏は少壮有為の而も紅顔美青年にして、目下台南師範学校博物教室に於て助教授の勞をとつて居られる至つてなつかしい方である。氏のお世話で同師範校に36名の本誌読者が出来たことは感謝に絶えぬ⁹¹」と記している。ここから、エスペラント普及会の機関誌も啓南緑友会の読物として読まれていたことや、王雨卿が普及運動に貢献をしたと評価されていたことがわかる。エスペラント普及会台南支部の事務所は、台南の世界館に置かれているが⁹²、王雨卿は緑化運動の講習会を受けた後、台南師範学校校内に「啓南緑友会」を組織し、『La Verda Insulo (緑の島)』を発行し、本格的にエスペラント活動を始めたと考えられる。では、王雨卿とは、どのような人であろうか。

台南師範学校博物教室の助教授を勤める王雨卿(1907-1938)は、台南神農街に生まれ、台湾生物研究の先駆と言われる。自習を通じて日本文部省中等教員の検定に合格した。当時、台湾人は王雨卿と鄧火土(のちの台湾水産試験所所長)の2人しか合格者はいない⁹³。王は高島春雄と「日本産翼手目資料」を作成し、『台湾博物学会会報』で発表、タイトルと著者名が日本語とエスペラントで記されたことが、鄧慧恩の考察を通じてわかる⁹⁴。王雨卿は台南エスペラント会の設置によって、台南で活発な普及運動を行っていた。しかし、1938年9月の日本エスペラント学会の機関誌では、同じ台南エスペラント会のメンバーである呂聡田が書いた王の追悼文と、彼の写真が掲載されている。

吾々の最も尊敬する同志王雨卿君は不幸にして三十二歳を一期として、昭和十三年六月十六日午前七時三十分遂に帰らぬ旅に上られた。その時その枕辺には最愛の操夫人以外には誰も居なかった。[中略]大きな希望を以て君とEsp.を学び始めたのは昭和四年の夏だったがまだ二三日前の様な気がしてならない。君は大なるザメンホフ博士の崇拜者であつた。優秀なる少壮博物学研究的の学徒にして長老教中学の教師をしてゐられたが、多忙なる日常生活の余暇を見出してはEsp.の研究に耽つて来られたのである。君の物事に対する研究心たるや実に驚異の外なく、わづか書道教育しか受けなかつた君が、独学を以てよく中等教員の免状を獲得出来得たのを見てもその一端をうかゞふ事が出来るであらう。従つてEsp.に関して幾年ならずして自他ともに許す一かどのEsp-istoとなり得たのであつた。又自ら研究をなすと共にその普及奨励を忘れなかつた。台南エス会には多大の努力を払はれ常に同志の糾合に、指導に骨を折られたのである。同会を今日あらしめたの

も実に君一人の力であつたと云ふも敢へて過言ではなからうと思ふ。又台南師範学校内の啓南緑友会は実に君がその生みの母であり、育ての親であつた。多数優秀なる学生 Esp-isto をこゝに於て育てられ、初等教育者として台湾全島にちらばつて行く彼等の手に緑星旗を托してはその宣伝普及に協力を乞ふたものであつた。⁹⁵

王雨卿は、昭和四年の夏に、つまり 1929 年の夏にエスペラントを学び始めたということになる。前述した手紙の内容で石黒修の本で自習したと言ったが、王が熱心に運動に取り組んだ 1 つのきっかけはザメンホフであろう。ザメンホフのエスペラント主義などの思想の影響も受けたと思われるが、32 才の若さで死去してしまったため、1930 年代前後のエスペラント運動に対する考え方や、議論されていた「エスペラント主義」についての思考は判明できない。しかし、「台湾生物研究の先駆」と言われる王が、エスペラント運動に力を入れたことは、台湾エスペラント運動史のなかに記されるべき重要な人物であると考える。

ここで 1 つ面白いことを紹介しよう。広瀬は緑化運動を終えた翌年に、エスペラント普及会の機関誌で台湾の受講者からの挨拶を紹介し、ローマ字で台湾語を書いた。

Tin amaa! Goa hôtzo Hirose. Goa tin howa hi, e kaarin takke tzo hoi. Goa Taiwan-oe mutzai, tin aibe o, manlin kaaka!! (Keiko no tameni Taiwango de hanasita no wo Rômazi de simesita no desu.)⁹⁶

2 行目までを訳すると、「こんばんは！広瀬と申します。皆さんにお会いできたことをとても嬉しく思います。私は台湾語がわからないが、勉強したいと思います。よろしくお願ひします」となる。発音はずれているが、広瀬が台湾語を勉強しようとしていたことや、エスペランチストとしてローマ字で方言を表記することを支持していたことがわかる。

第二章で言及したように、大本教のローマ字運動は 1920 年代半ばから始まり、機関誌の『人類愛新聞』でエスペラントを採用することを明言しただけでなく、エスペラントとローマ字によるコラムを設けていた。また、普及会の機関誌にも、ローマ字に関する記事が出てくる。例えば 1935 年 1 月号に、多田齋司が、「外国人にはエスペラントで！日本人にはローマ字国語で！」⁹⁷ というスローガンを出し、自身の『万葉集』のローマ字がきに就いて、「仮名と国語」、「国語精神と国字問題」など多くの国語国字問題、ローマ字に関する文章を紹介している。つまり、1932 年の広瀬の台湾語ローマ字書きは、大本教がエスペラントを推進するとともにローマ字を普及しようとしていたことが関係し、「日本人にはローマ字国語で！」というスローガンに応じたものだと言えよう。

続いて、『La Verda Insulo (緑の島)』の執筆者や内容について分析する。

(二) 『La Verda Insulo』の内容について

雑誌『La Verda Insulo (緑の島)』は、手書きのガリ版刷りで、計 2 号刊行された。創刊号は散逸したため、現在確認できるのは 1934 年 7 月に発行された第 2 号しかない。第 2

号は表紙と目次を含めて 28 頁で、『La Verda Ombro』や『La Formoso』に比べるとかなり充実したものだと言えよう。表紙には東アジアの地図があり、誌名と台湾の地図を緑色に染め、日本列島の上にエスペラントの象徴である緑の星が付いている。それは日本内地から、普及運動で台湾を緑化する意味を持つことが伺える。



図：『La Verda Insulo』第2号、1934.07、表紙と目次。

ところが、王雨卿らによって台南師範学校博物室に設置されたのは、「啓南緑友会 (Keinan Esperantisita Societo)」であるが、雑誌を発行する機関名は、「台南エスペラント会 (Tainan Esperanta Societo)」となっている。つまり世界館にある「エスペラント普及会 台南支部」と連携し、台南にあるエスペランチストを集めようとした意図もあったであろう。台南エスペラント会創立後、さまざまなイベントが行われ、エスペラント普及会の機関誌でも、例えば1月の「新年広告」は「台南エスペラント会」の名義で掲載され、4月の「エスペラント展覧会」を報道している⁹⁸。また、1935年以降、日本エスペラント学会の機関誌に載せられた台湾の普及運動についての報道も、ほぼこの「台南エス会」が行う講習会や展覧会などに関する記事であった⁹⁹。

そして、目次の頁には、日本語で「緑の島」と書かれ、台南の風景を象徴する「赤嵌夕照」の絵が描かれている。その「赤嵌」とは古跡の「赤嵌楼」であり、台南の代表的な観光地でもある。つまり前述した連温卿が書いた「台湾先住民物語」にあるオランダ人が建てたプロレンデェヤ城 (普羅蘭遮城) という建物である。ガリ版の雑誌ではあるが、少し緑や赤い色を添えて、南国色の濃さを感じられる。

では、1930年以降、唯一残された台湾のエスペラント雑誌は、どのような内容だったのであろうか。まず、この第2号の目次をみてみよう。

Memprogreso en Esperantujo (エスペラント界の自己発展)	Hirose Takeo (広瀬武夫)
誠と魂とを以て荆棘の道を拓け	井上照月
類語Ⅱ	曄星 (王雨卿)
La Malsaĝa Tigro (愚かな虎)	So-Ŝio-Lin (荘松林)
思い出	落花屯虫
長崎に先輩を訪ね	大の生
Historio de Esp-Movado en Sovetio (ソビエトのエスペラント運動史)	古井仙一
エスペラントの真価を文通によりて知る	呂聡田
変換法に依る単語 暗記法(2)	健忘生
La Leteroj al Redaktoro (編集者への手紙)	
編集後記	曄星 (王雨卿)

「La Leteroj al Redaktoro (編集者への手紙)」に、淡水の張基全の「その中で曄星=王雨卿=健忘生(?)ではないでせうか¹⁰⁰」という疑問が載せられる。編集後記の最後には、「類語Ⅱ」の作者「曄星」の署名がある。目次の下に、「Redaktoro: Oo-U-Kio」と記し、奥付にも「編集発行兼印刷人 王雨卿」と書いてある。主編者が王雨卿であることから、「曄星」は王雨卿だと確認できよう。また、広瀬武夫と井上照月の文章を見れば、大本教のエスペラント普及会との関係や広瀬の緑化運動の影響を受けていたことが裏付けられる。

内容では、広瀬や井上が台湾でのエスペラント運動に期待していることや語学についての議論、あるいはエスペラント学習の感想などがある。また、「大の生」の「長崎に先輩を訪ね」という文章は、エスペラント普及会の機関誌¹⁰¹でも発表したものである。本名大野愛策である「大の生」については全く手がかりがないが、この文章が同じ1934年に『La Verda Insulo』(7月)や『Verda Mondo』(10月)に掲載されたことや、雑誌に載せられた広瀬武夫と井上照月の文章から、台南エスペラント会と大本教のエスペラント普及会が密接に連携した関係を持っていたことが裏付けられる。

興味深いのは、「緑化運動」に影響されて発行した雑誌であるため、1930年代に日本内地でも台湾島内でも行われていたプロレタリア・エスペラント運動のような階級的な色彩は、それほど濃くはなかったということである。特に前述したように、井上照月は台湾エスペラント学会の「赤化宣伝」に対して強く批判していた。しかしながら、この『La Verda Insulo』には、古井仙一がエスペラント文から日本語で訳した「Historio de Esp-Movado en Sovetio¹⁰²」(ソビエトのエスペラント運動史)や、左翼作家 So-Ŝio-Lin (荘松林)がエスペラントに訳した「Formosa fabelo - La Malsaĝa Tigro (台湾童話-愚かな虎)」という台湾民話が掲載されている。そこから、大本教のエスペラント普及会に影響を受けた雑誌ではあるが、1930年代のプロレタリア・エスペラント運動や、台湾民間文学運動との連動性もうかがえよう。

古井仙一が誰なのかは判明できないが、「ソビエトのエスペラント運動史」という文章は、ラトビア出身の Ernest Drezen が1931年に出版した本『Analiza Historio de la Esperanto-Movado (解説的エスペラント運動史)』から訳した一節である。訳者の前書き

に以下のように述べている。

この数年来日本に於ける Esp-movado が変な方向に傾きだして以来 Esp-istoj の多くは Zamenhof の思想の発展線上から、およそ異なる方向に Esp.を引きずって行つて了つて居る。この際 Jut-mondo でもつとも華かに、そうして正しく育てられて来た Sovetio (引用者：ソビエト) に於ける Esp.の歴史を紹介して、歴史が示す偽りなき将来への見透しを諸君が会得するであらう事を希む¹⁰³。

第四章で詳述するが、1932年6月に発行された台湾エスペラント学会通信では、蟾青 (Lunino) が書いた「エスペラントと婦人」¹⁰⁴という文章でドレーゼン (Ernest Drezen) による運動史に言及している。つまりこの運動史はプロレタリア・エスペランチストがよく参考した著作なのである。古井はここで「この数年来日本に於ける Esp-movado が変な方向に傾きだし」と言いながら、ドレーゼンの著作を訳し『La Verda Insulo』に発表したその背後の意図はなんであったのか、実に興味深い。

また、「La Malsağa Tigro (愚かな虎)」の作者「So-Ŝjo-Lin」は、左翼作家の荘松林 (1910-1974) である。台南生まれの荘は、朱鋒という筆名で多くの文学作品を発表する。また峰君、嚴純昆、KK、CH、彬彬、尚未央、赤嵌樓客、牛八庄猪八戒、己酉生、圓通子、進二などのペンネームがあり、台湾文化協会や台湾民衆党に参加した経験を持つ。そのほか、台南赤嵌労働青年会や、連温卿が主導した台湾労働者総聯盟にも加入した。1931年に林秋梧、盧丙丁、趙啓明らと左翼誌の『赤道報』を創刊したが、検閲のため、第6号で停刊。さらに1931年のメーデーでは、赤道報社と「赤嵌労働青年会」および「台湾労働者総聯盟台南支部」が共催した講演会で「メーデーは国際労働者が立ち上がってXXする日だ」という講演を行った。左翼運動にもかかわった荘松林は、1935年前後の台湾民間文学運動に参加し、多くの民間文学作品を執筆し¹⁰⁵、また連温卿の同じように1940年代以降、民俗研究に力を入れ、『民俗台湾』に習俗・言語に関する考察など多くの文章を発表した¹⁰⁶。戦後、彼はまた多くの民俗研究を『台南文化』¹⁰⁷に発表し、この「La Malsağa Tigro」も1971年に台湾語に書き直して『台湾風物』で発表した¹⁰⁸。

ここで、筆者は1つの推測を提起したい。第四章でプロレタリア・エスペラント運動を論じるが、1932年の台湾エスペラント学会の通信『Informo de F.E.S』第2号に、「S. S.」という人物によって執筆された「エスペラントをかく視る」¹⁰⁹が掲載される。文章には、「国際的恐慌の深刻化から、いまやXXXXXXXXのXXに逼迫した今日に於いて、我々は一層エス語の必要を感じずる」といった8文字の伏字があり、「プロレタ・エスペラント運動は、いまや悪戦苦闘の中に於いて強大に発展を続けてゐる。その発展はけつしてプチブル層に於いてはではなく、すべての勤労大衆並に農村青年層に於いて極めて克明にその足跡を認めうるのである」とエスペラントの勤労大衆や農村青年層への普及の重要性を強調した。荘松林は連温卿が主導した台湾労働者総聯盟に参加し、また左翼誌を発行し、メーデーの講演会でも講演したため、筆者は、台湾エスペラント学会の通信で文章を発表した「S. S.」とは、「So-Ŝjo-Lin」、つまり荘松林だと推測する。すなわち、大本教のエスペラント普及

会に影響を受けて発行された『La Verda Insulo』であるが、単なる国策を支持しながらエスペラントを普及するのではなく、台湾の社会運動やプロレタリア・エスペラント運動とも連動していたと考えられる。

1935年1月に『Verda Mondo (緑の世界)』の「新年広告」や4月の「エスペラント展覧会」の記事に荘松林の名前があり、写真にも写っている。ところが、王雨卿の死や第二章で論じた戦争や国語政策などが原因となり、1930年代後半以降の台湾エスペラント運動がほぼ沈滞化したこと関係があるのか、民間文学や民俗文化の研究に取り組んでいた荘松林の、1936年以降エスペラントに関する活動はほぼ見当たらない。

以上、日本統治下における台湾で発行された3つの重要なエスペラント雑誌を分析した。1919年に台湾人が運動を継いで改組した「台湾エスペラント学会」、1926年に学会から脱退した在台日本人が設立した「台北エスペラント会」、また日本内地の大本教によるエスペラント普及会の「緑化運動」の影響を受けて立ち上がった「台南エスペラント会」は、それぞれ時代に応じ、また出身やその受けた思想によってそれぞれの機関誌を発行し、エスペラント運動を行ってきた。これらの雑誌から、エスペランチストとして、台湾人による植民地政策への批判や左翼の国際連帯などもあれば、在台日本人による国語擁護の言語観や台湾に住むものとしての「郷土意識」も見られる。そしてエスペラント運動は、全島への影響が大きかったとは言えないが、台北だけではなく、地方色の濃い南国的な雰囲気濃厚なエスペラント雑誌も1930年代以降に台南で誕生し、日本内地のエスペラント運動と密接に連動し、さまざまなイベントによって低迷した島内の運動を復活させようとした。

ところで、1930年代以降に発行された刊行物は、台南エスペラント会の『La Verda Insulo』だけではない。1931年と1932年の第1、2回台湾エスペラント大会が行われた後に、台湾エスペラント学会がプロレタリア・エスペラント運動を進めようとして、2号の『Informo de F.E.S (台湾エスペラント学会通信)』を発行した。以下の第四章では、日本内地のプロレタリア・エスペラント運動の沿革や、その運動が台湾に導入された経緯、そして『Informo de F.E.S』の内容を分析し、台湾におけるプロレタリア・エスペラント運動の発展や影響などを論じていきたい。

¹ 裏川大無、「台湾雑誌興亡史(一～九)」、『台湾時報』、1935.02-12。

² 裏川大無、「台湾雑誌興亡史(三)」、『台湾時報』、1935.04、108、116頁。

³ 連温卿、「台湾に於けるエスペラント運動年代記」、『Informo de F.E.S (台湾エスペラント学会通信)』創刊号、1931.12.15、11頁。

⁴ 現在計37号が確認できる。1919年：10月号の創刊号と11月号および12月号(あるいは合併号)が散逸。1920年：1月号、2月号、3月号、4月号、5-6月合併号、9月号、10月号、11月号、12月号(7-8月合併号が散逸)1921年：3月号、4月号、5月号、6月号、7月号、8月号、9月号、10月号、11月号(1-2月号休刊、12月号散逸)。1922年：1月号、2月号、3-4月合併号、5月号、7月号、8月号、9月号、10月号、11-12月合併号(6月号散逸)。1923

- 年：1-2月合併号、3-4月合併号、5月号、6-7月合併号、9月号、10月号、11-12月合併号（8月号散逸）。1924年：1月号と2月号のみ発行。1925年：休刊。1926年：3月号のみ発行。
- 5 雑誌『台湾青年』は1920年に東京で発行され、のちに『台湾』や『台湾民報』に改題し、やがて1927年に台湾で発行できるようになった。
- 6 史可乗（連温卿）、「日抛時期台湾 ESP 運動」、『台湾風物』（17）4、1967.08、53頁。
- 7 鄧慧恩、「日治時期台湾知識份子對於「世界主義」的實踐：以基督教受容為中心」、台南：成功大学台湾文学系博士論文、2011.05、218-221頁。鄧論文が使った文献は筆者が発掘して提供したものである。その後、筆者がまたいくつかの号を発見した。しかし、創刊号はまだ見つかっていない。
- 8 許俊雅主編、『台湾日治時期翻譯文学作品集（全五冊）』、台北：萬卷樓、2014.10。
- 9 K. Takegami（武上耕一）、「Biologia Esplorado pri Vermo “Stephanulus Dentatus”, Parazitanta en Porko (Por Detaloj vidu No.n 179 de “La raporto de Fomosa Agrikulturo” en 1921) I」（『La Verda Ombro』、1922.05）、「Biologia Esplorado pri Vermo “Stephanulus Dentatus”, Parazitanta en Porko (Por Detaloj vidu No.n 179 de “La raporto de Fomosa Agrikulturo” en 1921) II」（『La Verda Ombro』1922.09）、「Biologia Esplorado pri Vermo “Stephanulus Dentatus”, Parazitanta en Porko (Por Detaloj vidu No.n 179 de “La raporto de Fomosa Agrikulturo” en 1921) III」（『La Verda Ombro』1922.10）。タイトルの和訳は：「寄生虫に関する生物学研究—豚に寄生する「ブタ腎虫」（1921年『台湾農業彙報』179期に掲載）」となる。
- 10 『La Verda Ombro』、1926.03、11頁。
- 11 散逸の号もあるが、いま確認できるのは以下の7篇である。①「生蕃物語（一）La Sovaĝula Legendo en Formoso Deveno de la Indiĝenoj（生蕃物語（一）先住民の由来）」、1920.02、2-4頁。②「生蕃物語2 La Sovaĝula Legendo en Formoso Deveno de la Indiĝenoj II（生蕃物語2先住民の由来II）」、1920.03、3-4頁。③「Kastelo Prorendeĵa : Rakonto de la indiĝenoj Formosa（プロレンデェヤ城 [普羅蘭遮城]：台湾先住民物語）」、1920.06、3-6頁。④「Turbo kaj Mallaboremulo Rakonto de la indiĝenoj Formosa（独楽と怠け者：台湾先住民物語）」、1920.09、1-4頁。⑤「La indiĝena Legendo en Formoso VII La Fulmo kaj la Amo de Drak=Dio（台湾先住民物語（七）稲妻と竜王の愛）」、1921.06、2-3頁。⑥「La indiĝena Legendo en Formoso VIII Elmigro（台湾先住民の物語（八）移住）」、1921.10、1-2頁。⑦「La indiĝena Legendo en Formoso IX La Tatuata Edziĝino（台湾先住民物語（九）刺青の花嫁）」、1921.11、1-2頁。連載の時に順番が誤りなどもあったが、1923年第3-4月合併号の付録として刊行された「La indiĝena Legendo en Formoso（台湾先住民物語）」に載せられた6つのテーマと一致している。
- 12 いま確認できる器物絵図は、①「La Sovaĝulaj Uziloj (1)（蕃人的器物（1）」、1920.02、4頁、酒器の絵図である。②「La Sovaĝulaj Uziloj 2（蕃人的器物2）」、1920.03、6頁、楯と矢の絵図。③「La Sovaĝulaj Uziloj 3（蕃人的器物3）」、1920.04、2頁、雨帽、蕃帽などの絵図。④「La uzilaro de indiĝeno en Formoso (sovaĝulo) 4（台湾先住民（生蕃）の器物4）」、1920.06、6-7頁、石牌、杵と臼、蕃刀、銭幣などの絵図。原文の器物名はすべてエスペラントで表記している。
- 13 この付録の「La indiĝena Legendo en Formoso（台湾先住民物語）」の中国語訳および解説は、拙論の「關於連温卿的〈台湾原住民伝説〉」（『経眼・辨析・苦行 台湾文学史料集刊』第三輯、台南：国家台湾文学館、2013.07、87-111頁）を参照されたい。
- 14 史可乗（連温卿）、「人類之家・台湾 ESP 学会」、『台北文物』、1954.05、92頁。
- 15 1924年に連温卿は「蠹魚的旅行日記」を中国の新聞紙で105回発表した。（戴国輝校訂「連温卿日記—1930年の33日間」、『史苑』第39巻第1号、立教大学史学会、1978.11、99頁。）
- 16 連温卿、「婦女的地位和社会的關係」、『台湾民報』、第67号、1925.08.26。なかには、「数年前我曾遊卑南，得訪瑪蘭社二次，略知大概。（頁22）」、「我在卑南逗留時候恰適從宜蘭和我全船來的一個青年女子——說是製腦的丁——到了卑南五六日後，滿街的蜂蝶大都為這個鮮花傾倒的樣子。（頁26）」などの記述があり、「蕃社」の習俗についての分析も少なくない。
- 17 宮本正男（1913-1989）、エスペランティストであり、社会運動家でもあった。エスペランティストの大島義夫と『反体制エスペラント運動史』（東京：三省堂、1974.07）を共著し、『日本語エスペラント辞典』（東京：日本エスペラント協会、1983）や『日本エスペラント運動人名小事典』（東京：日本エスペラント図書刊行会、1984.11）など多くのエスペラント関連書籍

- を編著した。主な作品が『宮本正男作品集』（全4巻、東京：日本エスペラント図書刊行会、1993-1994）に収録されている。
- 18 入江暁風、『神話 台湾生蕃人物語』、台北：台北印刷株式会社、1920.07。
- 19 「Kastelo Prorendeja : Rakonto de la indiĝenoj Formosa (プロレンデェヤ城 [普羅蘭遮城]: 台湾先住民物語)」、『La Verda Ombro』、1920.06、3-6頁。
- 20 村上直次郎訳注、中村孝志校注、『バタヴィア城日誌 I』、東京：平凡社、1970.09、73頁。
17世紀頃、台湾の平埔族のなかで最も大きなエスニックは西拉雅族であった。新港社は西拉雅族に属した4つのグループ（新港社、蕭壠社、目加溜湾社、麻豆社）の1つであった。
- 21 「El Fabelaj Skezoj pri Ĥina vivo de Sro. V. Eroshenko I La Strata Arbo (童話の写生：エロシエンコの中国生活について I 街路樹)」、1922.07、「El Fabelaj Skezoj pri Ĥina vivo de Sro. V. Eroshenko II Lando de Revoj (童話の写生：エロシエンコの中国生活について II 幻の国)」、1922.08、「El Fabelaj Skezoj pri Ĥina vivo de Sro. V. Eroshenko III Lando de Revoj (III 幻の国)」1922.09。この2篇は、胡愈之が中国語で訳し、『枯葉雜記及其他』（愛羅先珂著、上海商務發行、1924.04）に収録。
- 22 「Unu Paĝeto en Mia Lerneja vivo (私の学校生活の一頁)」、『La Verda Ombro』1923年1-2月合併号の付録、「Toro por Fali (墜ちる為めの塔)」、『La Verda Ombro』1923年6-7月合併号の付録。この2冊の付録はドイツの歴史学者 Ulrich LINS 氏から提供していただいたものである。ここに感謝の意を表す。Ulrich LINS (1943-)、1973年にエスペラント語で書いた *La danĝera lingvo* を出版した。ドイツ語、イタリア語、英語、ロシア語などで訳され、日本語版の『危険な言語—迫害のなかのエスペラント—』（東京：岩波書店、1975.11）は栗栖継によって翻訳された。この2篇は前述した鄧論文が執筆された後に発掘されたものである。
- 23 連温卿、「台湾に於けるエスペラント運動年代記」、『Informo de F.E.S.』、1931.12.15、11頁。
連の「日拠時期台湾 ESP 運動」（『台湾風物』（17）4、1967.08、53頁）には「黄雲白」と書いてある。「S-ro Ken Wong」という人が中国のアナキストの黄尊生（1894-1990、本名涓生）である。黄尊生が『中國問題之綜合的研究』（天津：啓明書社、1935.05）などの本を出版し、「中国與世界語問題」（『広州民国日報』、1926.04.07、08）など多くのエスペラント関連文章を発表した。また彼らによって結成された広州大学世界語学会が1926年6月1日に集会を行ったという記事が『広州民国日報』（1926.06.02）に掲載されている。記事の署名は「K」である。そのKはKenで、つまり黄尊生本人だと推測する。
- 24 高杉一郎編訳、『エロシエンコ童話集』、東京：偕成社、1993.11、210-211頁。
- 25 ア・ハリコウスキー著、山本直人訳、『盲目の詩人 エロシエンコ』、東京：桓文社、1983.09、212-213、317-319頁。
- 26 高杉一郎編、『夜あけ前の歌—盲目詩人エロシエンコの生涯』、東京：岩波書店、1982.12、395-396頁。
- 27 胡愈之（1896-1986）、中国の有名なエスペランチスト、出版家、社会運動家、エスペラントの普及運動に熱心であった。五四運動期に『東方雑誌』の編集者を務め、1932年に総編集者となった。魯迅らとエロシエンコの童話などを翻訳して中国に紹介した。1933年に密かに中国共産党に参加し、1946年に中国民主同盟に加入した。主な著書は『胡愈之文集（1-6）』、『胡愈之出版文集』などに収められている。
- 28 史可乗、「人類之家・台湾 ESP 学会」、『台北文物』、1954.05.01、92頁。
- 29 愛羅先珂著、愉之（胡愈之）訳、「枯葉雜記」、『東方雑誌』19（5-6）、1922.3.10、105-115頁、1922.3.25、101-114頁。その後、愛羅先珂著、胡愈之訳、『枯葉雜記』（上海：商務、1924.4、5-13頁）に収録する。胡がこの2篇のタイトルを「街之路」と「幻想之國」と訳した。
- 30 高杉一郎編、『エロシエンコ全集Ⅲ』、東京：みすず書房、1959.11、276頁。
- 31 エロシエンコ、「枯葉の物語（上海生活の童話的スケッチ）」（エスペラントと日本語対訳）、『我等』（エスペラントの頁）、東京：我等社、1925年1月号から9月号まで連載。
- 32 ア・ハリコウスキー著、山本直人訳、『盲目の詩人 エロシエンコ』、東京：桓文社、1983.09、318-319頁。
- 33 愛羅先珂著、魯迅等訳、『愛羅先珂童話集』、上海商務、1922.07。『魯迅全集 12』にも説明がある（北京：人民文学、1973、289頁）。
- 34 高杉一郎編、『エロシエンコ全集Ⅲ』、276頁。
- 35 比嘉春潮が1916年に台北博覧会のために台湾に行った際に、蘇璧輝を訪ね、蘇氏の勧めで

- 沖縄でエスペラント運動を始めた。比嘉春潮、「琉球のエスペラント運動回顧」、『La Revuo Orienta』、日本エスペラント学会、1936.6、75-76 頁。比嘉春潮、『沖縄の歲月 自伝的回想から』、東京：日本図書センター、1997.12、134 頁（ただし、同書には編集のミスがある。1916 年の博覧会は「始政四十年記念博覧会ではなく、「台北博覧会」であった）。
- 36 ワシリー・エロシエンコ著、S. F 生（福岡誠一）訳、「私の盲学校生活の一頁」、『我等』、1922.06、84-95 頁。
- 37 V. Eroshenko(Ài-lô-sian-kho)、「Góa Hák-hâu Seng-hoat ê Chit Toān-phian」（我的學校生的一段片）、『廈語短篇小説 第一集』、廈門（アモイ）：廈語社、1922、28 頁（原文ローマ字）。
- 38 『上海民国日報』には「私の学校生活の一頁」を見つけられなかったが、関連紙の『覚悟民国日報』や『晨报副鐫』などにはエロシエンコの紹介や彼の作品が多く掲載されている。
- 39 『廈語短篇小説 第一集』、奥付。
- 40 愛羅先珂著、愈之訳、「我的学校生活の一断片」、『台湾民報』、1925.07.05、1925.07.12。
- 41 葉榮鐘の蔵書は、現在台湾清華大学図書館に所蔵されている。その中の『愛羅先珂童話集』は 1925 年の第 5 版である。
- 42 高杉一郎編訳、『エロシエンコ童話集』、東京：偕成社文庫、1993.11、224 頁。
- 43 愛羅先珂著、愉之訳、「為跌下而造的塔」、『東方雜誌』19(1)、1922.1.10、123-130 頁。
- 44 愛羅先珂著、魯迅ら訳、『愛羅先珂童話集』、上海：商務、1922.07、1 頁。
- 45 高杉一郎編訳、『エロシエンコ童話集』、222 頁。
- 46 松田はるひ、「緑の蔭で—植民地台湾エスペラント運動史(4)」、『La Revuo Orienta』、1977.09、13 頁。
- 47 高杉一郎編、『エロシエンコ全集Ⅲ』、275 頁。
- 48 愛羅先珂著、愉之訳、「為跌下而造的塔」、『東方雜誌』19(1)、1922.1.10、123、129 頁。
- 49 松田はるひ、「緑の蔭で—植民地台湾エスペラント運動史(2)」、25 頁。
- 50 連温卿、「台湾に於けるエスペラント運動年代記」、14 頁。1926 年 7 号、1927 年 5 号、1929 年 1 号、1930 年 1 号。計 14 号。
- 51 今確認できる号は、1926 年の 6 月号、7 月号、8 月号、9 月号、1927 年 3-4 月合併号、5-6 月合併号、11 月号、1929 年の 4 月号、1930 年の 6 月号など、計 9 号である。ちなみに 1929 年の 4 月号は、世界エスペラント協会の中央事務室から取り寄せたものであり、そのほかは日本エスペラント学会に所蔵されている。世界エスペラント協会（UEA）は 1908 年にスイスに設置された。現在協会本部の中央事務所は、1955 年からオランダのロッテルダムに置かれている。この 1929 年 4 月号は、「 Rondó・コルノ Rondo Korno」（視覚障害者と晴眼者とがともに活動するエスペラント会）の代表者菊島和子先生に世界エスペラント協会から取り寄せていただいたもので、ここに感謝の意を表す。
- 52 「日本エスペラント学会台湾支部会員名簿」、『La Formoso』第 4 号、1926.09、8 頁。
- 53 「本年第二期講習開始」、『La Formoso』創刊号、1926.06、3 頁。この時点で講習を受ける 33 人のなかに、台湾人が 6 人しかいなかった。
- 54 ちょうど筆者が論文を修正しているとき（2015 年 10 月 7 日）、台湾エスペランティストの卓照明氏から、彼が最近入手したという『La Formoso』創刊号に挟まれた両面印刷の 1 枚の資料を画像でいただいた。ここに感謝の意を表す。
- 55 「日本エスペラント学会台湾支部会員名簿」、『La Formoso』1926.09、8 頁。勤務先から見れば、2 人は台北医学専門学校、1 人は台北専売局酒課、2 人は樹林専売局酒工場であった。
- 56 「当支部の近況報告」、『La Formoso』1926.09、3 頁。
- 57 杉本良、「新版大英百科全書の“Universal Language”」、『La Formoso』、1927.5-6 合併号、5 頁。杉本は、この文章の冒頭で「私は曩に国際語の意義とエスペラントと云ふ見出で本誌第二号及第三号にエスペラントと国際語に就ての記録を蒐録しました」と述べている。
- 58 無署名（杉本良）、「国際語の意義とエスペラント」、『La Formoso』、1926.07、5-7 頁。「国際語の意義とエスペラント（続）」、『La Formoso』、1926.08、6-7 頁。
- 59 「国際語の意義とエスペラント（続）」、『La Formoso』、1926.08、6-7 頁。
- 60 「国際語の意義とエスペラント（続）」、『La Formoso』、1926.08、7 頁。
- 61 江副秀喜、「エスペラントに対する誤解」、『La Formoso』、1926.07、3 頁。
- 62 エスペラント主義とは、国民の内生活に立入ることなく、又毫も現在の国語を駆逐することを目的とせずして異なる国民に相合了解の可能を與へ、且つ諸種の民族が言語に関して相

- 争へる国内に於ては公共機関の和解用語として用ひ得べく、尚之を以て各国民に対して平等の利益を有する著作物を発表し得べき、人類共有の言語の使用を全世界に普及する努力なり。千布利雄編著、「ブローニュー宣言の由来」、『エスペラント主義 ブローニュー宣言』、日本エスペラント社、1923.08、7頁。
- 63 初芝武美、『日本エスペラント運動史』、60頁。
- 64 T. KAI (甲斐虎太)、「現代世界の各国語 言語としての優劣及其の勢力(1)」、『La Formoso』、1927.3-4 合併号、6頁。
- 65 T. KAI、「現代世界の各国語 言語としての優劣及其の勢力(1)」、6頁。
- 66 「当支部の近況報告」、『La Formoso』、1926.06、3頁。
- 67 R. Sugimoto (杉本良)、「Okcidenta Formoso al Takao (1)Lando d Trezoro」(西台湾——高雄に向かう (1)宝の島)、『La Formoso』、1926.09、5頁。原文エスペラント、筆者和訳。
- 68 R. Sugimoto、「La vivo en Formoso.....Mi Amas Ĝin」(私は台湾の生活が好きだ)、『La Formoso』、1927.11、1頁。
- 69 R. Sugimoto、「La vivo en Formoso.....Mi Amas Ĝin」、1頁。原文エスペラント、筆者和訳。
- 70 R. Sugimoto、「La vivo en Formoso.....Mi Amas Ĝin」、2頁。原文エスペラント、筆者和訳。
- 71 R. Sugimoto、「La vivo en Formoso.....Mi Amas Ĝin」、2頁。
- 72 こういち(武上耕一)、「登山の汗」、多々良生(多々良)の「標高板及巣箱建設」、『La Formoso』、1927.5-6 月合併号、6、8頁。
- 73 「大屯登山道に標高板をたてる 台北エスペラン会で八日登山して決行」、『台湾日日新報』、1927.05.04、5頁。「大屯山 標高板建設 無事に終了」、『台湾日日新報』夕刊、1927.05.17、5頁。
- 74 こういち(武上耕一)、「大屯山行記 登山の汗」、『La Formoso』、1927.5-6 月合併号、6頁。
- 75 K. Jamagiŝi (山岸喜久男)、「Ekspediciado al du sunoj (El legendoj de sovaĝento en Formoso)」(二つの太陽への探険 (台湾の蕃族物語より))、『La Formoso』、1926.08、4-5頁。
- 76 S. Ando 著、Torata Kai (甲斐虎太) 訳、「La Malĝojo de juna sovaĝulo (1)、(2)」(若い生蕃の悲しみ(1)、(2))、1927.5-6 月合併号、4頁、1927.11、3頁。
- 77 「Esperanta Vespero」(エスペラントの夕)、『La Formoso』、1930.06、1-4頁。
- 78 武上耕一、「台湾に於けるエスペラント運動に就て」、28頁。
- 79 1931年11月以降、『Verda Mondo (緑の世界)』(京都：エスペラント普及会)には、台湾の講習会に関するニュースがよく掲載された。
- 80 「内地報道」、『Verda Mondo』、1932.08、24頁。
- 81 土師孝三郎、「地方会機関誌批判」、『エスペラント年鑑 (1934)』、東京：日本エスペラント学会、1934.04.01、99頁。
- 82 「地方会名簿」、『エスペラント年鑑 (1934)』、前掲書、94頁。
- 83 「内地報道」、『Verda Mondo』、1931.11、14頁。
- 84 「内地報道」、『Verda Mondo』、1931.12、13頁。
- 85 「内地報道」、『Verda Mondo』、1932.01、17-18頁。
- 86 「内地報道」、『Verda Mondo』、1932.02、12頁。
- 87 「内地報道」、『Verda Mondo』、1932.04、17頁。
- 88 京都エスペラント普及会幹事 井上照月、「エスペラントを学べ =時代は要求する=」、『新高新報』、1933.01.27、02.03。
- 89 「エスペラント普及会略歴」、『Verda Mondo』、1933.11、8頁。
- 90 広瀬武夫、「初試み集 (台南の部)」、『Verda Mondo』、1932.04、14頁。手紙の作者の名前が「S-ro Ou-ukjoo (王雨郷)」と間違えた。
- 91 広瀬武夫、「初試み集 (台南の部)」、14頁。
- 92 「内地報道」、『Verda Mondo』、1932.04、19頁。
- 93 何耀坤、「台南郷土生物研究的先河—王雨卿先生」、『台南文化』新15、1983.06、100頁。
- 94 鄧慧恩、「日治時期台湾知識份子對於「世界主義」的实践：以基督教受容為中心」、台南：成功大学台湾文学系博士論文、2011.05、122頁。王雨卿、高島春雄 (Ou-U-Kijo kaj Haruo Takaŝima)、「日本産翼手目資料 (La Materialoj por Japanuja Kioptero(Chiroptera))」、『台湾博物学会会報』(1938.01、162頁)。
- 95 台南エスペラント会 呂聡田、「王雨卿君を惜む」、『La Revuo Orienta』、1938.09、33頁。

-
- ⁹⁶ 広瀬武夫、「緑光はかゞやく」、『Verda Mondo』、1932.06、25 頁。
- ⁹⁷ 多田齋司、「外国人にはエスペラントで！日本人にはローマ字国語で！」、『Verda Mondo』、1935.01、広告頁。
- ⁹⁸ 「新年広告」、『Verda Mondo』、1935.01、広告頁。王雨卿、「陳列窓利用 エス語展覧会」、『Verda Mondo』、1935.04、38-39 頁。「主催 台南エスペラント会」と書いてある横段幕が掲げられる展覧会の写真も付いている。
- ⁹⁹ 例えば、『La Revuo Orienta』、1935.02、59 頁。1935.03、86 頁。1935.07、207 頁。1935.08、236 頁。1935.10、291、292 頁。これらの記事の多くは、講習会や展覧会の写真が付いている。
- ¹⁰⁰ 「La Leteroj al Redaktoro (編集者への手紙)」、『La Verda Insulo』、1934.07、23 頁。
- ¹⁰¹ 大野愛策、「長崎に先輩を訪ね」、『Verda Mondo』、1934.10、26-27 頁。
- ¹⁰² 古井仙一訳、「Historio de Esp-Movado en Sovetio」(ソビエトのエスペラント運動史)、『La Verda Insulo』第2年第2号、1934.07、17-18 頁。最後の註では『Analiza Historio de Esp-movado』(解説的エスペラント運動史)から訳したと記してある。
- ¹⁰³ 古井仙一訳、「Historio de Esp-Movado en Sovetio」、『La Verda Insulo』、1934.07、17 頁。
- ¹⁰⁴ 蟾青、「エスペラントと婦人—婦人エスペランティストへ寄す」、『Informo de F.E.S』第2号、1932.06.16、1-8 頁。
- ¹⁰⁵ 朱子文、「莊松林先生生平事蹟」、『台南文化』新55、2003.09、10-13 頁。また、「莊松林年表」では、莊が台湾童話の「恣虎」をエスペラントとで訳して『La Verda Insulo』第2年第2号で発表したという記事がある。王美恵『1930年代台湾新文学作家的民間文学理念與実践』、台南:成功大学歴史系博士論文、2008.01、215 頁。
- ¹⁰⁶ 莊松林は朱鋒という筆名を以て「台南年中行事記(上、中、下)」、「語元とあて字(一〜七)」、「台湾神誕表(上、下)」、「水仙花」、「三日節と太陽公主」など、多くの文章を『民俗台湾』で発表した。
- ¹⁰⁷ 莊松林が戦後発表したものの多くは『文史薈刊 復刊第七輯 莊松林先生台南專輯』(台南:台南市文史協会、2005.06)に収録されている。
- ¹⁰⁸ 朱鋒、「恣虎」、『台湾風物』21(2)、55-60 頁。「莊松林年表」の中にも台湾童話「恣虎」をエスペラントで訳し、『La Verda Insulo』に発表したことを記されている(王美恵、『1930年代台湾新文学作家的民間文学理念與実践』、台南:成功大学歴史系博士論文、2008.01、215 頁)。
- ¹⁰⁹ S. S.、「エスペラントをかく見る」、『Informo de F.E.S』第2号、1932.06.16、13-15 頁。

第四章 プロレタリア・エスペラント運動への移行

第一章で言及したように、日本のプロレタリア・エスペラント運動の源流は、堺利彦が1905年に『直言』でエスペラントを紹介したことにあるという説もあるが、直接のきっかけとしては、1924年7月に第12回日本エスペラント大会において、「サート (SAT)」分科会が設けられ、3年後の1927年に「柏木ロンド」という「サート」の機関誌『Sennaciulo (無民族者／無国籍者)』を輪読するエスペラント研究会が開かれたことに始まる。3年後の1930年に日本プロレタリア・エスペランティスト協会 (PEA) が結成され、翌年に1931年全国的組織の日本プロレタリア・エスペランティスト同盟 (PEU) へと改組された。関連雑誌として、『AVANGARDO (前衛)』(日本プロレタリア・エスペランティスト協会会報)、『ポエウ (PEU)』(日本プロレタリア・エスペランティスト同盟中央機関誌)、『ペーク (PEK)』(プロレタリア・エスペラント通信)、『無産者エスペランティスト』(日本無産者エスペランティスト会会報)などが次々と創刊された。日本のプロレタリア・エスペラント運動は、1930年代以降、本格的に進められたのである。

一方、第二章で述べたように、台湾エスペラント学会の左傾化は、1920年代初期から始まった。学会内部の分裂や植民地政策という外部の政治背景などの影響で、1920年代後半から台湾人エスペランティストを中心に運営された「台湾エスペラント学会」と、在日日本人の「台北エスペラント会」は、いずれも活動の規模を縮小した。ところが、1930年に台湾における大本教と希望社のエスペラント会なども含めて、各エスペラント団体のリーダーが集まって協議を行い運動を再発足しようとし、1931年に第1回台湾エスペラント大会を開催した。大会の記録によると、科学者、教育者、宗教家、実業家、希望社、プロレタ・エスペランティスト、学生の7つの分科会が設けられた¹。日本内地のプロレタリア・エスペラント運動の始まりよりは少し遅れるが、この「プロレタ・エスペランティスト」分科会の設置は、台湾のプロレタリア・エスペラント運動の発端を示す象徴的な出来事と言えよう。

1931年の台湾第1回大会において、台北エスペラント会の武上耕一は「台湾に於けるエスペラント運動に就て²」というテーマで講演をした。それに対して台湾エスペラント学会の連温卿は、大会の後に「臨時発行」した台湾エスペラント学会通信『Informo de F.E.S』において、「台湾に於けるエスペラント運動年代記」を發表し、それまでの19年間の台湾におけるエスペラント運動を、第1期 (1913年から1926年まで)、第2期 (1927年から1930年まで)、第3期 (1931年から以後) と分けている³。連は、1913年に在台日本人が台湾エスペラント運動の序幕を開いてから、1919年以降台湾人が運動を引き継ぎ、そして機関誌『La Verda Ombro』が廃刊するまでを「台湾エスペラント学会の絶ざる努力」時期とみなし、また、台湾エスペラント学会の活動がほぼ停止した1927年から30年までを「潜勢時期」とみなした。とはいえ、この頃、左傾化した学会から脱退した在日日本人らは「台北エスペラント会」を組織し、1929年から1930年まで機関誌の『La Formoso (台湾)』を発行し、講演会や講習会を行い、台北放送局でエスペラントのラジオ番組を作り、エスペラントの宣伝を続けた。つまり、1927年から1930年までは台湾エスペラント学会

の「潜勢時期」ではあったものの、台北エスペラント会の普及活動は続けられていた。

言い換えれば、連温卿の時期区分は、台湾エスペラント運動の全体的な歴史観ではなく、台湾エスペラント学会の視点をそのまま導入したものにすぎない。とはいうものの、在日日本人の台北エスペラント会の機関誌も 1930 年には休刊し、台湾エスペラント学会の機関誌も休刊状態であった。それ以降発行されたエスペラント雑誌は、台湾エスペラント学会の通信『*Informe de F.E.S.*』(1931-1932) と台南エスペラント会の『*Verda Insulo (緑の島)*』(1933-1934) しかなかった。

では、連温卿のいう第 3 期の台湾エスペラント運動、あるいは 1930 年代の台湾エスペラント学会の運動は、どのような性質を持ち、どのように進められたのだろうか。台湾エスペラント学会の通信を見ると、階級闘争や農村青年への呼びかけなどについての議論が多く、プロレタリア・エスペラント運動へ移行した姿勢がうかがえる。ところが 1930 年代以降、台湾の知識人は政治的抑圧からの解放を目指した新たな文化運動に転換していった。本章では、まず、当時の政治や社会的な状況を振り返りながら、日本のプロレタリア・エスペラント運動の発展と理論化の経緯を簡潔にまとめる。特に台湾の運動に影響をもたらした小坂狷二、比嘉春潮、伊東三郎などの人物や、「PEU」とプロレタリア・エスペラント運動の綱領について紹介し、運動がどのように台湾へ移入したかを検討する。また、1931 年に設置された「プロレタ・エスペランチスト分科会」の歴史的意義を述べ、再発足した台湾エスペラント学会が発行した通信や教科書の内容などを分析する。それを通じて 1930 年代以降の運動の「第 3 期」の輪郭や性質を描き出し、台湾の社会運動や文化運動におけるエスペラント運動の位置づけを明確にする。最後に、この運動が 1930 年代前後の台湾の農民運動や文化運動にどのような影響を与えたのかについて簡単に触れる。

第一節 1930 年代初期の台湾：政治運動から文化運動へ

1930 年代の台湾エスペラント運動を論じる前に、まず、その前後の台湾の社会や政治状況を簡潔にまとめる。1920 年代後半の台湾社会では、台湾文化協会の啓蒙運動が都市から農村まで次第に普及し、社会主義の影響が拡大した。特に農民と直接の利害関係で結ばれた製糖業者の利益独占、総督府糖業政策の糖業家に対する保護、そして総督府の土地政策が地元農民の利益や生活を無視し一部の資本家、地主、退職官吏への特権の附与などが原因で、民族的、階級的反感と闘争心が高まり、農民争議勃興の機運をかもした⁴。1925 年の「二林蔗農事件」をはじめ、農民抗争運動が頻発し、「二林蔗農組合」や「鳳山農民組合」などの社会運動団体が組織された。特にこれらの農民組合はその結成や運動を行った際に、日本農民組合、労働農民党などと連絡をとっていた。また二林事件の弁護のために台湾に来た麻生久や布施辰治の指導や啓蒙を受け、漸次左翼農民運動の形態に変化し、1928 年 1 月、全島の統一農民団体の「台湾農民組合」が結成された⁵。

一方、政治運動では、連温卿の指導で左傾化した台湾文化協会が 1927 年に分裂した。旧幹部は「台湾民衆党」を組織し、政治改革を図ろうとした。また 1928 年に台湾初めての労働組合である「台湾労働者総聯盟」が設置され、「台湾共産党」もコミンテルンの指示を受けて設立された。その前後にも多くのより組織化された農民運動や政治的団体が創

立されたが、1930年前後に当局による弾圧で主要幹部が逮捕され、抵抗運動は挫折した。後述するように、1930年代以降、知識人は文化再建運動へと方向転換を図ったのである。

台湾エスペラント運動がこの時期に再出発したことは、このような島内の社会情勢や政治環境と無関係ではない。本節では、1930年代初期の台湾の政治運動から文化運動への転換、そして同時代の社会的プロレタリア運動の潮流、とりわけプロレタリア文芸運動の動向などを整理しながら、このような背景の下で台湾エスペラント学会がどのように普及運動を行ったのかを論じる。

(一) 政治運動の挫折と文化運動への転換

1920年代後半から1930年代初期にかけて、地方で局地的に残存した抵抗運動はまだあったが、相次ぐ検挙によって多くの知識人が逮捕され、言論の自由も制限され、台湾共産党をはじめ、台湾農民組合・台湾文化協会などの組織はほとんど壊滅状態にあった⁶。政治、経済、社会のいずれにおいても、当時の文化人葉榮鐘の言うように「八面碰壁」⁷であった。このような状況のなかで、頼和や葉榮鐘などの文化人たちは文学雑誌『南音』を創刊した。呉叡人の言うように、「1931年は台湾民族運動が政治戦線から全面的に撤退した重要な時期であり」、「政治の戦場から撤退した多くの民族運動者が、植民地統治に反抗するパワーや発想力がほぼ忘れられてしまった文化戦線へ移った」⁸。すなわち、1930年代以降、台湾の知識人は、政治的抑圧からの解放を目指した新たな文化運動に転換していったのである。

文化戦線への転換について、例として多く議論されるのは、1931年から1933年までの「郷土文学」と「台湾話文」の論争、あるいは1935年の『台湾民間文学集』の出版をはじめとする「民間文学採集運動」であろう⁹。また、1930年から1935年にかけて『洪水報』、『赤道』、『南音』、『台湾文芸』、『台湾新文学』など多くの文芸雑誌が発刊され、いずれも左翼色を帯びていた。編集者や執筆者のなかには、台湾文化協会をはじめとする社会運動や農民運動に参加した人が多かった。台湾文学研究者の陳建忠は、この時期の文化運動や文学運動は、「啓蒙性」や「本土性」などの性質をもち、新たな抵抗姿勢を示したものであると言っている¹⁰。

ところが、1930年代に政治戦線から撤退した知識人や作家たちの文化戦線への転換は、1920年代の社会運動や政治運動と同じように、単純に島内だけで行われたものではなく、世界的な動向とつながりを持ったものであり、とりわけ日本や中国からの影響を受けて展開されたものと考えられる。いかでは、1930年前後の日本の文芸運動、特にプロレタリア文芸運動の形成背景を簡潔に振り返る。

(二) プロレタリア文芸運動の潮流

第一章で言及するように、1925年11月、当時の進歩的な革命作家やプロレタリア作家の統一戦線組織「日本プロレタリア文芸聯盟」が結成された。文芸聯盟はのちに「日本プロレタリア芸術聯盟」と改められ、文学、演劇、美術などの専門部門が設けられた。また、1926年の「山川イズム」と「福本イズム」との対立も「芸術連盟」に持ち込まれたため、

日本のプロレタリア文芸運動は分裂し、労農芸術家聯盟、前衛芸術家同盟、そしてプロレタリア芸術連盟、という3つの団体が鼎立した。そして蔵原惟人の呼びかけで、1928年3月に「日本左翼文芸家総連合」が結成された。のちに左翼運動に対する空前の弾圧である三・一五事件が起き、共産党と距離をおく「労芸（労農芸術家聯盟）」は連携に消極的になった。そして、「プロ芸（プロレタリア芸術連盟）」と「前芸（前衛芸術家同盟）」は連携して「全日本無産者芸術連盟」を結成した。

この「全日本無産者芸術連盟」の別称である「NAPF」は、エスペラントで書いた *Nippona Artista Proleta Federatio* の頭文字を並べた略語であり、同年12月に全日本無産者芸術団体協議会と改名した後も、「ナップ」と呼ばれた¹¹。「ナップ」は機関誌『戦旗』を刊行し、文学、演劇、美術、映画など各方面で広くプロレタリア文化運動を推進していた¹²が、内部では「大衆化の論争」、「形式主義論争」、「芸術価値論争」などの議論や運動に対する思想的相違が起こったため、蔵原惟人は芸術運動の再組織を再び呼びかけ、1931年11月に日本プロレタリア文化連盟「コップ」(*Federacio de Proletaj Kultur Organizoj Japanaj, KOPF*)を立ち上げた¹³。同年12月中央協議会機関誌『プロレタリア文化』を発行し、また、1933年4月に『コップ』を刊行した。

第一章でも触れたように、左翼系の刊行物にエスペラント名が付けられたのは、「ナップ」が初めてではなかった。1921年に創刊された『種蒔く人』(*La Semanto*)や、それを引き継いだ日本プロレタリア文芸連盟機関誌『文芸戦線』(*La Fronto*)などの雑誌もエスペラントで誌名を表記している。特に「柏木ロンド」が設置された前後は、国際的プロレタリア戦線が攻勢に転じて、労働者農民の闘争が世界各地で激化した時期であった。またロシア革命10周年記念祭の影響や、ソビエト対外文化連絡協会や世界各国のソビエト友会の会の活動に刺激され、1928年に秋田雨雀らが日本で「国際文化研究所」を立ち上げ、機関誌『国際文化』(*La internacia kulturo*)を発行し、エスペラント運動に拍車を掛けた。さらに、国際文化研究所の人達がさらに広くプロレタリア的文化・科学などを研究するため、1929年10月に「プロレタリア科学研究所」が創立された¹⁴。その所長を務めた秋田雨雀は、プロレタリア作家として活躍し、エスペラント運動に大きな力を注いだ人物であった。彼は『国際文化』の時代からエスペラント講座を開き、「プロレタリア科学研究所」の設立後もエスペラント関連書籍を多く出版した。また彼の執筆したものだけではなく、同時代の左翼誌のなかで連載されたエスペラント関連記事などが多数あった。これらのことから、エスペラントは日本の1930年代前後の文化運動の1つの象徴的な存在であり、エスペラント運動はその時期のプロレタリア文芸運動と強く結びついていたと言えよう。

では、台湾のプロレタリア文化運動は、いつから展開され始めたのか。『台湾総督府警察沿革誌』によれば、東京在住の台湾人らの手により「KOPF（コップ）」と連絡を取りながら文化運動などを展開したという。1928年に組織された台湾共産党中央は、日本共産党との連携の下、徐々に勢力を伸ばした。政府からの抑圧を受けながら、1930年6月に党員の王萬得、周合源らが出資して『伍人報』という文芸雑誌を発行した。『伍人報』は15号から『工農先鋒』と改題し、のちに『台湾戦線』に合併され、1930年12月に消滅したが、台湾共産党員、台湾左翼青年らの支持並びに寄稿を受け、漸次全島70余ヶ所

の配布網を完成させる。共産党の連絡網をたどって、「ナツプ」、戦旗社、法律戦線社、農民戦線社、プロレタリア科学同盟などをはじめ、東京にある「台湾大衆時報社」(1930-1931)などと密接な連絡を保ち、本島のプロレタリア文芸運動の先駆となったという¹⁵。

台湾プロレタリア文芸運動の先駆である『伍人報』は復刻版がなく、閲覧するのは難しいが、そのなかに掲載された1930年代初期の「郷土文学」と「台湾話文」論争に関連する文章は、『1930年代台湾郷土文学論戦資料彙編』¹⁶に収録されている。前述したように、台湾の知識人が政治戦線から撤退し文化戦線へ転換した例として、「郷土文学」と「台湾話文」論争がよくとりあげられる。論争に火を付けた黄石輝の「怎樣不提唱郷土文学」は『伍人報』に発表され、黄石輝自身も伍人報社の地方委員であった。このように、郷土文学と台湾話文論争は、プロレタリア文芸運動とつながった側面もあった。東京在住の台湾人らの手により「コップ」と連絡を取りながら行われた文化運動は、エスペラントと間接的な関連があったが、このことは『台湾総督府警察沿革誌』に記されている。ここでは、陳規懐（連温卿）と蘇慕紅（蘇新）との2人を例に挙げよう。

陳規懐は、1926年の日本の左翼誌『大衆』に「日本帝国主義下の植民地台湾」と「台湾に於ける政治運動」¹⁷を発表した。「日本帝国主義下の植民地台湾」の内容は、1928年に連温卿が東京で発行した『台湾大衆時報』に連載された「台湾殖民政策的演進—日本資本主義的發達及其發展」¹⁸とほぼ同じであるため、陳規懐は連温卿のペンネームと推測できる。台湾文化協会を分裂に導き、「新文協」の主導者となった連温卿は、第一章で論じたように、エスペラントを通じて1920年代初期から堺利彦や山川均らと接触した。新文協と日本労農党や日本の左翼団体とのつながりは、新文協の機関誌『台湾大衆時報』に掲載された「労働農民新聞社」の祝辞¹⁹からもうかがい知ることができる。

一方、1931年の『プロレタリア科学』に「台湾における民族革命」²⁰を発表した蘇慕紅は、1928年に設立された台湾共産党に関わった蘇新ではないかと筆者は推測する。蘇新(1907-1981)は、1925年4月から東京の大成尋常中学校に入学し、在学中は日本共産党の学生運動の幹部と知り合い、彼らの影響で学生連合会に参加した。1926年に東京外国語学校に入り、「社会科学研究会」に参加し、さらに「東京台湾社会科学研究会」を設立した。そしてエスペラントを通じて、連温卿と関わり合い始めた²¹。おそらく彼は、「東京台湾社会科学研究会」に参加したとき、エスペラントを学んだことをきっかけに連と知り合ったのだろう。彼は、新文協の機関誌『台湾大衆時報』の「東京駐在」の嘱託記者²²として編集者を務めた²³。台湾文化協会や台湾農民組合の幹部は、東京で蘇新らと接触したことを機に、日本労働農民党との関係をさらに深めた。そのため、『プロレタリア科学』で文章を発表した「蘇慕紅」という人物は、当時東京にいた蘇新と思われる。蘇新はのちに台湾共産党の宣伝部長を務めたが、1931年9月逮捕され、1943年9月に出獄した。獄中で計約百万字余りの『台湾話文法』、『台湾話研究』²⁴を書いたが、出版されないまま原稿は散逸した。戦後初期には、『政経報』、『人民導報』、『台湾文化』などの編集に関わった。

このように、台湾のプロレタリア文化運動は、東京在住の台湾人らの手により「コップ」と連絡を取りつなされたのであった。とすれば、彼らが共産主義の思想を持つことは当

然であろうが、連温卿や蘇新の例から見ても、間接的ではあるが、エスペラント運動と無関係ではないだろう。

(三) 台湾大会の「プロレタ・エスペランチスト分科会」

では、台湾のプロレタリア・エスペラント運動への移行は、いつから始まったのだろうか。前述したように、1927年から30年までの台湾エスペラント学会の活動は「潜勢時期」となり、休止状態であったが、学会から脱退した在台日本人らは「台北エスペラント会」を組織し、機関誌を1926年から1930年まで発行し、『台湾日日新報』やラジオ番組などの宣伝を通じて運動を続けた。分裂した運動は、1930年頃から新たな動きを見せる。すなわち連温卿の言う1931年以後の「第3期」である。

台湾エスペラント学会は1930年6月から再発足した。1930年6月から9月末まで連温卿の自宅で研究会が開かれ、10月から11月までは稲江義塾で、31年2月からは赤光宅で講習会が続けられた²⁵。そして台湾エスペラント学会は、「台北エスペラント会」や「台湾大本エスペラント部」、「希望社エスペラント部」など3つの団体と連携して、1931年9月18日から20日まで第1回台湾エスペラント大会を開催した。大会の記録によれば、4つの連携団体のほか、台湾女子学生エスペランチスト聯盟と台湾男子学生エスペランチスト聯盟などの学生団体も参加したという。

特に、第1回の台湾大会では「プロレタ・エスペランチスト分科会」が設けられた。ところが、大会記録やのちに臨時発行された台湾エスペラント学会通信によれば、この分科会の代表者井上鉄男の報告で「紛争」が起こった。井上鉄男は、「大会の席上において『言葉は神なり、言葉は神の創造なり』と言わぬことを要求す」、「階級闘争にエスペラントが関係なしと言わぬを要求す」、という2ヶ条の決議案を述べた。この2ヶ条の決議を見る限り、神を否定し、階級闘争理論を一貫して唱えたマルクス思想の影響が強いと言えよう。それに対して、議長の小林鉄太郎が「これは決議と申すよりも希望と申すべきものであると思われます。しかし自己を尊重し、他人の誇りを傷つけず、互いに尊重し合うことにして、謹んで聞きおくことにいたします。如何でせうか」と発言し、参加者から拍手が起こったという²⁶。つまり、エスペラントを用いて階級闘争を行うかどうかについて、大会前からエスペラント界で議論されていたのではないか。だが、大会に参加したエスペランチストの多くは、エスペラント運動をマルクス主義やプロレタリア運動に関わらせることには賛同しなかった。

ところが、主催者代表としての連温卿は、大会の挨拶でプロレタリア・エスペラント運動の旗を掲げようとした。

従来有産階級によりて宣伝されてきたこの言語の運動がいまや、無産階級によりて更にその發達を招来せしめてある事実であります。それは世界の平和、即ち闘争なき人類の平和を期待する点に於ては、無産階級が決して有産階級に落ちないものであります。否真の闘争なき人類の平和には決して有産階級によつてなすべきものでないと云つた方が本当である。何故ならば、有産階級が存在してある

以上は階級闘争が消えない、階級闘争が存在してゐる間は闘争なき社会を期待し得ないのである。[中略] 実際この言語と云ふ武器が無産階級の手収めてゐるこそ、この言語の持つ偉大なる優秀性を始めて發揮しうると私は信じて居ます。何故ならば、この言語を趣味や社交などのために使用するのではなく、永久の闘争なき人類の平和に生きんがために、それを実現するがために使用するからであります。であるからエスペラント運動が階級的性質を帯びてくるのが当然である。[中略] 私はかゝる確信の下に於て 1926 年に成立した台北エスペラント会と分れても失望なく、この言語の運動を続けてきたのであります。今後もこの確信を以て進むつもりであります。といふのは――我々は闘争なき人類の平和に生きねばならぬ――有産階級が闘争なき人類の平和をなし得ないことを余りにも知ってゐるからであります。²⁷。

連温卿は、プロレタリア・エスペランチストの計画者ではないが、大会で官僚や学者の在日日本人エスペランチストがいるにもかかわらず、「従来有産階級によりて宣伝されてきたこの言語の運動がいまや、無産階級によりて更にその発達を招来せしめてゐる事実であります」と意識的に彼らを批判しながら、エスペラント運動が階級的性質を持つことや「階級闘争」を強調し、プロレタリア・エスペラント運動に対する姿勢を明確に示した。大会後、連温卿と 1 人の台湾人幹部（陳）および 13 名の日本人幹部は、「台湾エスペラント聯盟」の結成会議を開き、聯盟規約を提案し、のちに聯盟規約をも制定した。しかしながら実際の活動はなかった。台湾のエスペランチストたちの間の立場が異なっていたため、連携して聯盟を運営することができなかった。そのことは、連の挨拶や井上鉄男の報告による紛争からも想像できる。

第三節で詳述するが、大会後、台湾エスペラント学会が発行した通信の内容からは、台湾のプロレタリア・エスペラント運動に理論を構築しようとしたことがうかがえる。運動に関する記録は少ないが、翌年の 1932 年 2 月、日本エスペラント学会の機関誌には、「台湾エス学会主催の講習会 10 月 30 日より 12 月 14 日まで稲江義塾に於て開催、73 名。その半数は労働者で毎週月水金の三回²⁸」、また 3 月号には、「台北の新店に「農村青年のために 1 月 0 日から毎夜開かれた講習会 2 月 4 日に終了したが引続き常設講習会を設置した²⁹」などの記録が残されている。つまり、理論の構築だけではなく、実際に農村青年向けのエスペラント講座が開かれ、農民運動にエスペラントを結び付けようとした意図が鮮明に表れている。

第 2 回の台湾大会は 1932 年 12 月 4 日に行われた。連温卿の回想録によれば、そもそも普及運動に熱心に取り組んでいる在日日本人は、あまり第 2 回大会に興味を持たず、準備会議も大会当日も積極的に参加しなかった。それは在日日本人エスペランチストがプロレタリア・エスペラント運動に移行する台湾人側の運動を回避したからであろう。とはいえ、大会当日の代表者挨拶は、台北エスペラント会 阪東一郎、希望社 松尾寅吉、大本教 井上照月、台湾エスペラント学会 井上鉄男、台北医学専門学校エスペラント会 徐銀格などで、参加者は第 1 回大会より多く、台湾人も半数を占めたという³⁰。

第2回大会の台湾エスペラント学会代表者が、第1回大会での「プロレタ・エスペラント分科会」の報告者井上鉄男であったことは、台湾エスペラント学会がプロレタリア・エスペラント運動の立場に立ったことを裏付けるものではないか。第2回の大会記録は未見のため、詳細を見ることはできないが、第二章でも引用したように、大本教のエスペラント普及会の代表として、内地から台湾に来て大会に参加した井上照月は、「[省略] 劈頭大會長の宣言があつたにも拘らず、二三を除いて悉くが赤化宣傳に終始してゐた。而もエス大会にも關らず悉く日本語を使用して例の宣傳用語を繰返してゐた。吾等はもとより彼等の熱、その信念に敢なる點に敬意を持つものであるが、時處位を無視せる彼等の狂熱振りにはひんしゆくを禁じ得なかつた³¹」という不満をエスペラント普及会の機関誌で発表した。

1931年以降、台湾エスペラント学会は新たに通信『*Informo de F.E.S.*』を発行し、講習会や初等講座を開いた。また1932年には、学会教育部の名義で学会創立20周年を記念する『*Elmentaj Lecionoj de Esperanto*』（初級エスペラント教科書）を出版し、プロレタリア・エスペラント運動に取り組む積極性を見せた。第三節で詳述するが、このプロレタリア・エスペラント運動は、1930年代の文化運動や農民運動で活躍した知識人にも影響を与えたのである。ここまで、1930年以降の台湾の文化運動や文化戦線における、日本の共産党やプロレタリア文芸運動との関連性を整理し、エスペラントとの間接的なつながりについて言及したが、以下の第二節では、日本のプロレタリア・エスペラント運動がどのように台湾に移入されたのかを分析する。

第二節 日本プロレタリア・エスペラント運動の台湾移入

1931年以降、在台日本人が主導した台北エスペラント会は、小さな講座などを開いたりしたが、機関誌は刊行されず大きな影響も見られない。一方で台湾エスペラント学会のほうは、プロレタリア・エスペラント運動の方向に移っていった。大会での「プロレタ・エスペラント分科会」の設置や、次の第三節で詳述するように、台湾エスペラント学会が発行した通信や教科書などを見れば、1930年代以降の台湾エスペラント運動は、プロレタリア運動の一環として推進され、日本のプロレタリア運動やプロレタリア・エスペラント運動と連動し、台湾の左翼知識人への普及を目的としていた、などの特徴を持っていた。

以下では、日本のプロレタリア・エスペラント運動が台湾に移入されたルートを検討する。まず、1927年に「サート」の機関誌を輪読する「柏木ロンド」というエスペラント研究会を開いた比嘉春潮、および日本プロレタリア・エスペラント運動のなかで重要な人物である小坂狷二と伊東三郎を紹介しながら、彼らの台湾エスペラント運動との関係について述べる。それから、日本エスペラント運動におけるマルクス主義的言語理論の導入について紹介する。そのマルクス主義的言語理論は、台湾エスペラント学会の「階級闘争論」とつながる。最後に、1920年代初期台湾エスペラント学会内部の「赤化」から、1930年代のプロレタリア・エスペラント運動へと移行するプロセスについて整理する。

(一) 比嘉春潮・小坂狷二、および伊東三郎

台湾のプロレタリア・エスペラント運動を分析する際、蘇璧輝の勧めで沖縄でエスペラント運動に取り組み、東京で「柏木ロンド」を開いてプロレタリア・エスペラント運動を始めた、連温卿の親友比嘉春潮に言及しなければならない。また、台湾エスペラント運動が始まった当初から、日本エスペラント運動の父と言われる小坂狷二との連携は、日本エスペラント学会や台湾エスペラント学会の機関誌からうかがえる。特に小坂のエスペラント観や彼の多くの著書などは、日本や台湾の運動に大きな影響を与えている。そして小坂と『プロレタリア・エスペラント必携』を共著した伊東三郎は、エスペラント運動の担い手であり、重要なプロレタリア運動家でもある。彼はプロレタリア・エスペラント運動の理論を構築し、『台湾日日新報』でも関連の文章を発表したため、台湾の運動にも間接的な影響を与えたと考えられる。この小節では、この3人の活動や彼らと台湾運動との関係を簡単にまとめる。

1. 比嘉春潮

1927年、「サート (SAT)」の機関誌『Sennaciulo (無民族者／無国籍者)』を輪読するエスペラント研究会「柏木ロンド」が開かれた。「柏木ロンド」が生まれた頃は、日本における階級闘争が尖鋭化し、国際的には労働運動が活発となり、エスペラント運動の内部においても従来のブルジョア民主主義系統の中から社会主義勤労階級を背景としたサートの運動が起こり、急速にその勢力を強めた。日本においてもこのような事情に刺激され、柏木ロンドが東京の急進的エスペランチストの手によって組織された。その後、日本プロレタリア・エスペランチスト協会 (PEA) となり、大衆への普及を提唱し、1931年に至って、より広範な規模と整備された行動綱領を持った全国的プロレタリア・エスペラント運動の組織「日本プロレタリア・エスペランチスト同盟 (PEU)」が生まれた³²。この日本のプロレタリア・エスペラント運動の始まりとされる「柏木ロンド」のメンバーの1人が、当時改造社の記者を務めていた比嘉春潮であった³³。

沖縄出身の比嘉春潮 (1883-1977) は、『自由沖縄』を編集・発行し、沖縄文化協会の設立や沖縄農村の研究をした沖縄郷土史家である。改造社編集部勤務の傍ら、伊波普猷のもとで沖縄研究を始める³⁴。比嘉は1916年に沖縄エスペラント運動を始めた。そのきっかけは、台北に行ったときにエスペランチストの蘇璧輝から勧められたためだという³⁵。彼はエスペラント運動を通じて連温卿と親交を深め、連と日本の左翼人士との連絡をつけたという³⁶。連温卿は、1924年5月に東京で比嘉春潮を訪ね、そのことを日記にも記している。中国の刊行物に100回以上連載された連の「蠹魚的旅行日記」の切り抜き帳は、比嘉が保管していた³⁷。また、第三章で論じたように、1920年代初期に台湾エスペラント学会の機関誌に掲載されたエロシエンコのエスペラント原稿は、比嘉がもたらしたものである。1927年の時点で、学会の活動は休止中であったが、「柏木ロンド」が設立された当初、台湾人エスペランチストが、「サート」の機関誌を比嘉春潮の紹介で読み始めた可能性もあるだろう。ちなみに、第二章で言及した山口小静が1922年に訳したロマン・ローランの「人類解放の武器はエスペラント」では、すでに「サート」のことに言及している³⁸。つまり台湾エスペラント運動の左傾化やのちのプロレタリア・エスペラント運動への移行は、

比嘉春潮と関係が深かったとも言えるだろう。

2. 小坂狷二

1930年代以降、日本のプロレタリア・エスペラントの関連書籍が次々と出版された。そのなかで最も重要な1冊は、1930年9月に左翼系の出版社鉄塔書院が発行した『プロレタリア・エスペラント必携』であろう。作者は、日本のエスペラント運動の父と言われる小坂狷二と農民運動家の伊東三郎である。主筆の伊東三郎についてはのちほど紹介するが、ここではまず、台湾エスペラント学会と深い関係を持っていた小坂狷二を紹介する。

小坂狷二(1888-1969)は、鉄道車両工学の専門家で、1919年の年末に日本エスペラント協会を学会へと改組した重要な人物である。改組した新たな学会の事務所は小坂の自宅に置かれ、機関誌『La Revuo Orienta』の編集や制作も小坂が担当した。1922年の『改造』には、エスペラント関連の文章が多数掲載され、小坂狷二のエスペラント講座も連載された³⁹。エスペラント運動に力を注いだ小坂は、『エスペラント教科書』(1923)、『詳註インソップ物語』(1923)、『エスペラント講習用書』(1927)、『エスペラント捷径』(1929)、『エスペラント文学』(1933)など数多くのエスペラント関連書籍を出版し、また、秋田雨雀との共著で『模範エスペラント独習』(1923)、伊東三郎との共著で『プロレタリア・エスペランティスト必携』(1930)などの学習書を出版した。

日本エスペラント学会の機関誌『La Revuo Orienta』の創刊号では、協会支部について「各地旧協会支部は今後大いに独立自尊的に各地に普及活動に勤められたい。かつ、この際名称なども独立的な名称に改められることをおすすめる。東京支部は東京エスペラント倶楽部と改称しようと相談中である」などの説明があり、地方における運動のあり方についても議論している⁴⁰。こうした議論の影響もあってか、1919年に「日本台湾エスペラント協会台湾支部」も「台湾エスペラント学会」へと改称された。しかし小坂狷二は協会のエスペラント名「Asocio」が一国的な意味を有し、一地方の台湾に適さないため、「Societo」に訂正するよう連温卿に要求したことがある⁴¹。このことについては第六章で詳述するが、小坂が初期の台湾エスペラント運動において指導的立場にあったことがうかがえよう。

実際、小坂と台湾の運動とのつながりは、「台湾支部」時代から始めた。第一章で言及したように、1915年8月の『Japana Esperantisto』が組んだ『Formosa Numero (台湾特集)』に収録された「Avino Tigro (Formosa popollegendo)」(虎婆ちゃん[台湾民話])⁴²は、小坂狷二が翻訳したものであり、のちに小坂による書き直しを経て、1920年の台湾エスペラント学会の機関誌に再度掲載された⁴³。1930年に『プロレタリア・エスペランティスト必携』を出版した小坂は、勿論プロレタリア的な立場が鮮明であった。特に、1932年に連温卿が初級エスペラント教科書『Elmentaj Lecionoj de Espranto』を出版した際に、小坂は『La Revuo Orienta』の新刊紹介でこの教科書を紹介しながら、「二十年前児玉四郎氏によつて播かれた種子がよく育まれて来たのを喜ぶと共に終始一貫我が運動のために献身し来られた同会の連温郷(連嘴)氏に深甚の敬意を表する⁴⁴」と述べた。連の教科書について第三節で分析するが、つまり台湾のプロレタリア・エスペラント運動の思想や理論的な基礎は、少なからず小坂の影響を受けたものとして見逃すことはできない。

3. 伊東三郎

1930年に出版された小坂狷二、伊東三郎共著『プロレタリア・エスペラント必携』には、2人で共同執筆した序文があり、附録として「国際文化研究所」を立ち上げた秋田雨雀が書いた「ソヴェトロシヤに於けるエスペラント運動」も収録されている⁴⁵。本書の最初の頁には、「この本を第一に世界の兄弟と団結して戦ふ日本のプロレタリアに捧げる。またエスペラントを今日の偉大さにまで育て上げて来たエスペランチスト達に捧げる。最後にこの本の完成のためになくはならなかった協力と指導と激励とを賜った⁴⁶小坂先生、猪方肇、大島義夫、南正雄の諸氏に捧げ感謝の意を表する」とあり、伊東が書いた文がある。本書の主筆は伊東三郎と考えられる。

農民運動家として知られる伊東三郎(1902-1969)は、エスペラント運動の担い手であり、重要なプロレタリア運動家でもある。伊東は1929年10月に設立された「プロレタリア科学研究所⁴⁷」で「エスペラント研究会」を開催し、この研究会の名義で1930年9月に『プロレタリア・エスペラント講座』(全六冊)を出版した。これは、もちろんエスペラントの教科書だが、そのなかに、「我々の生活と言語との関係」、「言葉の研究について」、「エスペラントの歴史」、「芸術とエスペラント」、「科学とエスペラント」、「エスペラントと政治」などの文章が載っており、またエスペラント運動史や日本エスペラント運動史も付録として収録されている。例えば、第三巻の前書きで以下のように述べている。

この巻では文例で日本の労働者農民の生活＝闘争の色々な場面を具体的に取り扱ふと共に、外国のプロレタリア運動の重要な事項が、今の諸君のエスペラントの実力でいへるだけに取扱ってある⁴⁸。

この全六冊の講座は、確かに労働者農民向けの教科書ではあるが、エスペラントを通じて国内のプロレタリア運動を理解し、また外国の労働運動と連携するために作られた入門書と見るほうが妥当であろう。伊東三郎は台湾の運動には直接的影響はないかもしれないが、『プロレタリア・エスペラント必携』と『プロレタリア・エスペラント講座』という代表的な書籍が出版されたちょうど1年後の1931年9月に、第1回台湾エスペラント大会が開かれ、「プロレタ・エスペランチスト分科会」も設置された。また、前述したように、台湾エスペラント学会は、大会後に稲江義塾で講習会を開催したが、受講者のうち半数は労働者であった。台北の新店でも農村青年向けの常設講習会が設置された。さらに、第1回台湾大会と同じ月に、伊東は『台湾日日新報』で「若々しく伸びゆくエスペラント文学それは何を語る?」⁴⁹を発表した。これらのことから、伊東が構築したプロレタリア・エスペラント運動に関する理論や、彼が出版した労働者や農民青年向けの教科書は、台湾の運動にも影響を与えたのではないかと考えられる。

(二) 「PEU」とプロレタリア・エスペラント運動の綱領

これまで見てきたように、台湾のプロレタリア・エスペラント運動は、日本の左翼系の

エスペ란チストからの影響もあるが、この運動を論じる際には、「日本プロレタリア・エスペ란チスト同盟」(PEU/ポエウ)という組織に言及しなければならない。1930年7月、全国的組織化を目指して「日本プロレタリア・エスペランティスト協会(PEA/ポエア)」が創立され、翌8月に、中垣虎児郎がナップの機関誌『戦旗』に「プロレタリアとエスペラント」⁵⁰を掲載し、大きな反響を呼んだ。ちょうどその頃鉄塔書院が出版した『プロレタリア・エスペラント講座』と相まって運動を拡大したという⁵¹。また、PEAは機関誌『Avangardo(前衛)』を発行し、のちに『Proleta Esperantisto』と改題した。翌年の1931年1月に総会が開かれたが、全国的組織としての「日本プロレタリア・エスペランチスト同盟(PEU)」の創立大会に切换えられ、これが正式なプロレタリア・エスペラント運動の旗上げと言われる。創立大会宣言のなかには、以下のような言葉がある。

今日以後、日本の労働者農民はエスペラントを武器の中に数えることができるのである。ここにおいて国際語エスペラントは革命的エスペラント主義をもって国際戦線のすべての分野、すべての部署へくまなく入りこんでいくであろう。われわれプロレタリア・エスペランチストはプロレタリアートの唯一の正しい司令部の指導下にますます激化しゆく階級戦の戦列においてわれわれに課せられた使命をプロレタリアートの力強さと執ようさをもって遂行するものである。⁵²

この宣言から、日本の労働者農民が武器をエスペラントとし、「革命的エスペラント主義」を以て国際戦線の階級戦に立ち向かい、日本国内の労働者農民だけではなく全世界の無産階級と連携しようとする、PEUの姿勢がうかがえよう。また同盟規約のなかに以下の6ヶ条の綱領がある。

1. エスペラントのプロレタリア的宣伝普及及び実用
2. ブルジョア・エスペラント運動に対する闘争
3. エスペラントの言語的発達及び理論的確立への協力
4. 日本内地及び植民地におけるプロレタリア・エスペラント運動の統一
5. 国際プロレタリア・エスペラント運動の拡大強化
6. 反動的教育・強化に対する闘争⁵³

この綱領からは、プロレタリアートの立場に立つエスペラント運動を行い、ブルジョア・エスペラント運動と戦う姿勢が強くうかがえる。内容には、1930年に「PEA/ポエア」の掲げた綱領⁵⁴と似ている部分もあるが、「言語的発達及び理論的確立」と「日本内地及び植民地における運動の統一」との項目からみれば、具体的な理論的方法論や植民地への配慮などがより重要視されたと言えよう。三宅栄治が言うように、PEUはプロレタリア・エスペラント理論活動に専念する傾向がある⁵⁵。また後述するが、台湾エスペラント学会が発行した通信の内容からは、PEUの綱領「**日本内地及び植民地におけるプロレタリア・エスペラント運動の統一**」に従っていることがうかがえる。

ちなみに、PEU を結成した大島義夫（ペンネーム：高木弘）は、「サート（SAT）」の機関誌『Sennaciulo（無民族者／無国籍者）』を輪読する「柏木ロンド」の会員でもあった。彼はスピリドヴィチの『言語学と国際語』（1932.09）を翻訳出版し、日本エスペラント文芸協会機関誌『国際語研究』（1933.01-1936.07）を編集し、『唯物論全書 言語学』（1936.08）を発行した。つまりマルクスの唯物論の立場から言語学研究に従事し、ソビエト言語学を紹介した日本のプロレタリア・エスペラント運動の理論的指導者でもある⁵⁶。

ところが PEU はのちに「日本プロレタリア文化連盟（KOPF／コップ）」へ加盟したため、運動が圧迫されるにつれて文化運動のほうに傾いていく。特に 1932 年 3 月にコップ関係活動家 400 名以上が逮捕され、プロレタリア文化運動は厳しい試練に直面した。その影響を受けて、PEU の第 2 回大会は不成立に終わったが、創立大会で決められた綱領より具体的な綱領草案を提出した。

1. 労働者・農民その他の勤労大衆へのエスペラントの宣伝普及
2. エスペラントによる国際労農通信運動への参加
3. 反動的ブルジョア・エスペラント運動との闘争
4. 朝鮮・台湾・中国その他の東洋諸民族のプロ・エス運動の促進ならびに提携
5. 国際プロ・エス運動の統一と拡大強化
6. 国際主義的教育啓蒙活動による反動的排外主義との闘争
7. 国際語としてのエスペラントの発達及び国際語理論の確立
8. エスペラント実用によるプロレタリア文化建設のための闘争⁵⁷

PEU のこの 8 項目の綱領草案は、より具体的に普及や連携、あるいは闘争対象を取上げているが、コップなどの団体が弾圧されていた影響もあり、政治運動よりも言語文化運動などの「文化建設」を重視したようにみえる。前述したように、台湾の知識人たちは政治の戦場から撤退し、植民地政策に反抗するパワーが弱くなり、文化戦線に移行した。あとで詳述するが、こうした日本と台湾の背景の下に、1930 年代の台湾プロレタリア・エスペラント運動が文化戦線として行われた側面がある。ところで、PEA や PEU の綱領が出された直後に、台湾側の運動もプロレタリア・エスペラント運動に移行したのは、1920 年代の台湾エスペラント学会の「左傾化」との関係が深かったためと思われる。以下、簡単に 1920 年代の運動について振り返る。

（三）台湾エスペラント学会の「赤化」

第二章で論じたように、山口小静は台湾エスペラント学会を左傾化させた重要な人物である。山川均夫婦の家に出入しており、社会主義研究団体「水曜会」や婦人団体「赤瀾会」にも参加した山口は、1922 年の春に台湾に戻って台湾エスペラント学会に加入し、学会委員や機関誌編集者となった。エスペラント運動に力を注ぎながら、連温卿や蘇璧輝らを集めて「マルクス研究会」を組織し、学会の名義で連らと「ロシア飢饉救済運動」を行った。山口小静は 1923 年 3 月に病死したが、「赤化か緑化か」という文章で、1922 年前後

に学会で「緑化」と「赤化」のどちらを先に行うべきかについて意見を述べた。この文章から、1922年前後が、台湾エスペラント学会が左傾化し始めた時点と考えられる。

1922年は台湾エスペラント学会の最盛期であり、同時に分裂し始めた時期でもあった⁵⁸。特に1923年以降の機関誌『La Verda Ombro (緑の蔭)』の内容を見れば、山口小静の社会主義的文章のほか、例えば第三章で論じたロシアの盲詩人エロシェンコの童話の単行本を雑誌の附録⁵⁹として発行したことや、「Klasbatalo en Ĥina Socio」(中国社会における階級闘争)、「Kion Volas la Insululoj?」(島民たちは何を求める?)、「Lernejo de Tria Kominternoj」(コミンテルンの学校)、「Pri Rusa ESP. Movado ロシヤとエスペラント運動」、「Familiaj Budĝetoj de Rusaj Laboristoj」(ロシア労働者たちの家庭予算)⁶⁰など、多くの左翼色の濃い文章を掲載している。雑誌は一時休刊したが、1926年3月の復刊号に「Ĥino kaj Esperanto en Sovetruŝujo」(ソヴィエトロシアにおける中国人とエスペラント)などの文章を紹介したりしている。すなわち、この時期の台湾エスペラント学会の主導者たちは、「革命的エスペランチスト⁶¹」であったと言えよう。

ちなみに、1920年代初期におけるエスペラント運動の「赤化」は、ほかの台湾人アナキストが出版した雑誌からもうかがえる。1924年、台湾人アナキストの一洗(范本梁)が廈門で創刊した『新台湾』という雑誌の第2号で、「同志和田久太郎君の力強く勇敢な一撃を頌える」という文章を発表した。文末に「誠に故大杉栄先生の弟子たるに恥じないものであり、一人の社会革命家たる恥じないものである⁶²」という一行があり、また『新台湾』の表紙にもエスペラントで「La Nova Formoso」と表記されている。さらに同年「台湾議会期成同盟会」が解散させられ、北京にいる台湾人が「華北台湾人大会」を開き、宣言の最後に「世界語紀元38年3月5日⁶³」と記した。この執筆者はアナキストの范本梁であろうと、作家の張深切は回想録のなかで述べている。これらのことから、范本梁が大杉栄の影響を受け、アナキストになりエスペラントを勉強したことや、1920年代初期にエスペラント運動の帯びていた左翼思想が台湾人に影響を与えていたことがわかる。

前述したPEAやPEUは、「プロレタリア解放の武器としてのエスペラントの実用」、「日本内地及び植民地におけるプロレタリア・エスペラント運動の統一」、「朝鮮・台湾・中国その他の東洋諸民族のプロ・エス運動の促進ならびに提携」などの綱領を掲げたが、それに応じて、1931年の台湾エスペラント大会で「プロレタ・エスペランチスト分科会」が設置された。連温卿は大会で、「実際この言語と云ふ武器が無産階級の手収めてあるこそ、この言語の持つ偉大なる優秀性を始めて發揮しうると私は信じて居ます」と強調し、井上鉄男も「階級闘争にエスペラントが関係なしと言はぬを要求す」を宣言した。また翌年の第2回大会では、階級闘争の議論が多く出されたことに対して、内地から参加してきた大本教の井上照月が強く批判したが、大会は台湾エスペラント学会が主導し、井上鉄男の講演によって始まったという⁶⁴。つまり台湾エスペラント学会は、この2回の台湾大会で、日本内地の運動の理論確立に応じてプロレタリア・エスペラント運動が行われたと言えよう。しかし逆に言えば、1930年代の台湾エスペラント運動は、1920年代の共産主義化や「赤化」の議論、または学会の分裂を経験しなければ、日本内地のプロレタリア・エスペラントとの連動性はそこまで強くはならなかったのではないか。

では、1930年以降の台湾におけるプロレタリア・エスペラント運動は、どのように行われていたのか。以下の第三節では、台湾エスペラント学会の通信『*Informo de F.E.S.*』と学会教育部が発行した初級エスペラント教科書『*Elmentaj Lecionoj de Esperanto*』の例を取上げて分析する。

第三節 階級闘争の手段として

前述したように、1931年9月に行われた第1回台湾エスペラント大会では、井上鉄男の発言によって「紛争」が起こり、翌年の第2回大会には、在台日本人は大会準備や当日の会議に積極的に参加しなかった。1920年代後半から運動が休止状態になった台湾エスペラント学会は、大会の開催を機に運動を再開し、ほかの団体と連携しようと「台湾エスペラント連盟」を結成したが、各団体の運動に対する考え方の相違によって、実際の運営までは行かなかった。しかし台湾エスペラント学会は、同年12月に通信『*Informo de F.E.S.*』を発行し、翌年にまた初級エスペラント教科書『*Elmentaj Lecionoj de Esperanto*』を出版した。通信の内容や教科書の表紙から見ても、プロレタリア・エスペラント運動の立場とそれを実践する姿勢が鮮明であった。

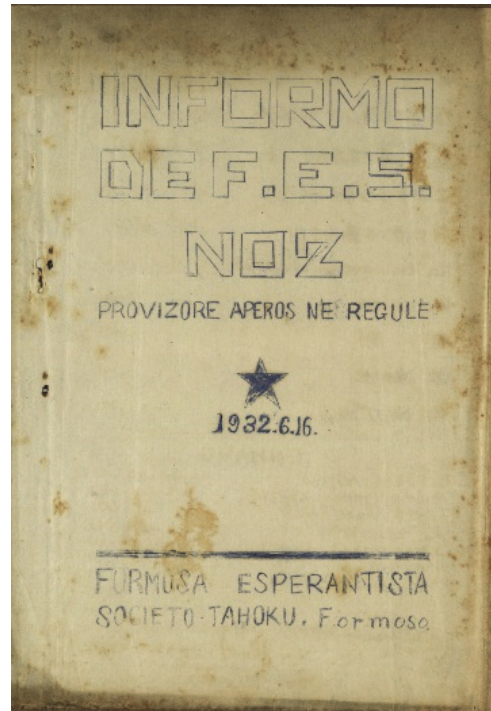
第三節では、1930年代の台湾の社会背景に基づいて1930年以降復活した台湾エスペラント学会の刊行物の内容について整理し、その思想や主張を論じる。また、日本と運動していたこの運動は、当時の台湾農民運動や文化運動にも影響を与えたため、刊行物の内容をも分析し、実際の影響について考察する。

(一) 台湾エスペラント学会通信『*Informo de F.E.S.*』(1931-1932)

1931年9月に第1回の台湾大会が開かれた後、台湾エスペラント学会は同年12月に通信『*Informo de F.E.S.*』を発行した。計2号の通信には、第1回エスペラント大会に関する文章やエスペラント運動の年代記などのほか、「エスペラントと婦人」、「農村青年とエスペラント」、「我々は闘争なき人類の平和に生きん」などの文章が掲載され、プロレタリア・エスペラント運動の宣伝および理論を深める傾向を見せた。

本誌は第3号をも出版する予定だったが、2号で休刊した。第2号(1932.06)の附録の規約から見ると、台湾エスペラント学会が執行委員会を立ち上げたことがわかる。規約には、「執行委員会ノ構造」という組織表があり、「執行委員会」の下には「組教局」と「書記局」と書かれている。「組教局」には、「組織部、教育部、図書部」があり、「書記局」は「会計部」、「庶務部」、「編集部」から構成されている⁶⁵。台湾大会以降、台湾エスペラント学会がよりプロレタリア・エスペラント運動を積極的に行ない、学会を改組したことが、推測できる。

この通信は、2号ともガリ版印刷で発行した。手書きのもので、第1号の表紙には「*Provizore Aperos* (緊急発行)」という文字があり、第1回の大会に参加したほかのエスペランチストに反論する姿勢もうかがえる。まず、第1号(1931.12.15)の目次を見てみよう。



図：『Informe de F.E.S.』、創刊号（1931.12.15）と第2号（1932.06.16）の表紙。

1. 木下浩：第一回台湾エスペラント大会感想
(K. Kinoŝita : Post la Unua Formosa Esperant-Kongreso)
2. 丘里宏：大会後に於る青年 ESP.ISTO の任務
(H. Okazato : Tasko de junula esp.-isto post la kongreso)
3. 連温卿：我々は闘争なき人類の平和に生きん
(S. Ren : Ni vivu en homara paco sen batalo)
4. 麗光：エスペラントの真髄 (Le Kong -C : Esenco de esperanto)
5. 連温卿：台湾に於るエスペラント運動年代記
(S. Ren : Kroniko de esp. movado en Formoso(1913-1931))
6. 編輯だより (El Redakcio)
7. RESUMO (概要)

第1号は全部で20頁あり、日本語のタイトルにはエスペラントが付いているが、内容は、最後の「RESUMO」だけエスペラントで、ほかの文章は全部日本語で書かれたものである。大会後に再開された学会の運動は、エスペラントという言葉よりは、まず、プロレタリア・エスペラント運動の思想を広げることに重点においたのであろう。例えば、木下浩の第1回台湾大会の感想は、以下のように述べている。

次の大会分科会では *programo* にあつた四つのもの以外に学生エスペランチストの、及びプロレタリア・エスペランチストの分科会が持たれた。特にこの最後のものが持たれた事は、本島 *esp.*運動の——更に広く云へば社会運動の——一大発

展を物語るものであり、吾々の最も愉快に感じたことであつた。と同時に、esp. を ludilo pro burĝeco inteligentalaro (引用者：中産階級の知識人の遊び) と見做してゐる落伍せる esp.-isto 諸君や意識するとしないとにかゝてと取上げてゐる凡この esp.-isto 諸君にとって最も不愉快な事柄であつた⁶⁶。

木村は、エスペラントとは中産階級の知識人の遊びであるとの見方を批判しながら、プロレタリア・エスペラント運動の主張に賛同し、学生分科会の設置にも共鳴した。大会記録では、学生分科会は特に決議を出していないが、日本人学生代表者岡田廉三は「今後私共は大いに働きたいと思ひます」⁶⁷と発言した。興味深いことに、プロレタリア・エスペラント運動の立場がより鮮明となった翌年の第2回大会では、多くの日本人が本島人の過激な姿勢に嫌気が差し、大会に興味を持たず、特に青年学生たちの熱意が冷めた。そのため、大会の準備は台湾医専学校のエスペラント会によって行われ、医専代表者は台湾人の徐銀格になった⁶⁸。第1回大会の参加者は121名、そのうち台湾人は17名しかいなかったのに対して、第2回の参加者は130人、そのうち台湾人はほぼ半数の62名もいた。プロレタリア・エスペラント運動は本島人の共鳴を得たと言えよう。また、麗光の「エスペラントの眞髓」には、以下のような言葉がある。

爾来四十数年の間長足な進展を以て今やあらゆる境界に立入り吾人の生活上必要
欽く可からざる重要性をもつに至つた。誠に『エスペラント』は人類平和国際親
善を絶対必要とするプロレタリアや解放戦線に於ても之を獲得すべきものである。

69

この文章もまた、エスペラントは人類平和国際親善には絶対必要であるだけでなく、プロレタリアのためにも必要なものであると強調している。さらに興味深いことに、作者の麗光の身分は特定できないものの、この文章は1931年12月の『台湾新民報』に掲載された紅鐵生の「「エスペラント」は人類解放の武器 国際語を学べ⁷⁰」の内容と、まったく同じである。タイトルは違うが、両方の冒頭には、「エスペラントが人類解放の武器」というロマン・ローランの言葉が引用されている。ロマン・ローランの原文は、1922年に山口小静が翻訳して『La Verda Ombro』に掲載したものである⁷¹。

本章の第一節でも引用したように、この号には、連温卿が大会での挨拶を「我々は闘争なき人類の平和に生きん」に発表している。重要な発言であるため、ここで再び引用する。

従来有産階級によりて宣伝されてきたこの言語の運動がいまや、無産階級によりて更にその發達を招来せしめてゐる事実であります。それは世界の平和、即ち闘争なき人類の平和を期待する点に於ては、無産階級が決して有産階級に落ちないものであります。否眞の闘争なき人類の平和には決して有産階級によつてなしうべきものでないと云つた方が本当である。何故ならば、有産階級が存在してゐる以上は階級闘争が消えない、階級闘争が存在してゐる間は闘争なき社会を期待し

得ないのである。⁷²

連は最後に、「1926年に成立した台北エスペラント会と分れても失望なく、この言語の運動を続けてきたのであります。今後もこの確信を以て進むつもりであります」⁷³と述べている。彼は、大会に参加した日本人エスペランティスト（主として官僚）に向かって、彼らが行っている運動とは「有産階級」が宣伝したものであると批判し、無産階級のためにはエスペラントは階級闘争の路線を取らなければならないと強く唱えた。もちろんプロレタリア・エスペラント運動を主張する在台日本人もいるが、連温卿のここで言う「有産階級」とは、従来エスペラント運動を普及させた官僚や学者などの在台日本人のことを指している。あとで詳述するが、連温卿は、エスペラント運動を単なる言語運動ではなく、階級闘争の武器や道具として、無産階級である「台湾人」の運動として、行ったのである。

続いて、第2号（1932.06.16）に掲載された文章を簡単に見ていく。

1. 蟾青：エスペラントと婦人—婦人エスペランティストへ寄す
(Lunino : Esp. kaj Virino)
2. 林森光：農村青年とエスペラント (Ŝ. Lim : Kamparjunuloj kaj Esp.)
3. S. S. : エスペラントをかく視る (Tiel mi vidas Esp.)
4. 中村一雄：その後に来るもの (K. Nakamura : La vojo returne)
5. S. Ren : La Komenco de Ideografio (連温卿：表意文字の起源)
6. Kroniko (通信欄)
7. 会則 (Regurado de F.E.S.)、お知せ (Sciigo)、編輯だより (El Redakcio)

計35頁ある第2号でも、「La Komenco de Ideografio」と「Kroniko」だけがエスペラントで、そのほかはタイトルにエスペラントが付いているが、内容は日本語である。第1号は運動宣伝に重点をおいたが、第2号の内容はより具体的にプロレタリア・エスペラント運動の思想や活動方針を打ち出し、普及対象とエスペラントとのつながりについて詳しく論じている。

例えば蟾青 (Lunino)⁷⁴が書いた「エスペラントと婦人」では、1931年に『Analiza Historio de la Esperanto-Movado (解説的エスペラント運動史)』を出版したドレーゼン (Ernest Drezen) が、1776 (1926年度) の世界のエスペラント団体数を計43ヶ国の246種 (1928年度) に上るなどの統計を引用し、運動の思想的変化や普及対象がより広がったことを説明した。さらに文化的に遅れた婦人も、エスペラントの習得によってあらゆる民族の文化に触れることができることを強調した。台湾でも婦人のエスペラント団体が設置されることに期待すると述べている⁷⁵。つまり蟾青は、文化的観点から台湾のエスペラント運動にさらに多くの婦人が参加することを強く訴えたのである。エスペラントと婦人との関連については、1922年に山口小静も「一婦人の声—世界の女性エスペランティストへ」⁷⁶という文章『La Verda Ombro』を發表したことがある。すなわち蟾青のこうした文化的観点からは、前述したように、1930年代の台湾プロレタリア・エスペラント運動は、日本内地や台湾の運

動も文化戦線への転換と連動しており、また 1920 年代の学会の運動の延長という側面も
うかがえよう。

より具体的な社会問題の例や反抗対象などを明確に打ち出したため、通信の第 2 号には
「伏字」が多くなった。例えば、林森光の「農村青年とエスペラント」には、「だがこゝ
に我々の忘れてはならないのは、今日のXX農村である。プロレタリアートの援助者とし
て農民の果すべく課せられつゝある役割が大いにしても今日眼の前に表はれたる事実で
ある」⁷⁷のように 2 字の伏字がある。S. S. の「エスペラントをかく視る」には、「国際的
恐慌の深刻化から、いまやXXXXXXのXXに逼迫した今日に於いて、我々は一層エス語の
必要を感ずる」⁷⁸のように 8 文字の伏字があった。

また、やはり伏字のある中村一雄の「その後に来るもの」は、「台湾エスペラント連盟」
が死産したのは、保守的な団体や進歩的な団体がそれぞれ異なるイデオロギーを持っている
からであると提起しながら、日本内地の日本プロレタリア・エスペランティスト同盟
(J.P.E.U) が解散を命じられた後も、それ以外のプロレタリア・エスペラント運動関連の
雑誌や団体が成立したことや、国際的団体サート (SAT) から分裂した団体も飛躍的に発
展した例を挙げて、台湾の運動もこうした世界的潮流に応じてプロレタリア・エスペラン
ト運動を行っていくべきであると呼掛けている⁷⁹。そしてこの文章の下に、マルクスの『経
済学批判』の序言がスローガンとして取り上げられている。「Ne la konscio de la homoj
determinas ilian ekzistadon, sed male ilia socia ekzistado determinas ilian konscion. Marks」。和訳
すると、「人間たちの意識が人間たちの存在を決めるのではなく、逆に、人間たちの社会
のあり方が人間たちの社会意識のあり方を決めるのである。マルクス」となる。この一行
は唯物史観の定式で、プロレタリア・エスペラント運動の理論に導入されていることを示
しているであろう。

S. S. が書いた「エスペラントをかく視る」の内容を見てみよう。

プロレタ・エスペラント運動は、いまや悪戦苦闘の中に於いて強大に発展を続け
てゐる。その発展はけつしてプチブル層に於いてはではなく、すべての**勤労大衆並
に農村青年層**に於いて極めて克明にその足跡を認めうるのである。[中略] 云い換
へれば、エス語はプロレタリア解放の武器であり、人類平和の光である。
“**esprantismo**” (引用者：エスペラント主義) もかゝる意識の下に於いて始めて自
ら正当なる発展を準備しうるではあるまいか。徒に社交的に、或は慰安的に運動
を続けてゐる“**gesinjoroj**” (引用者：皆様) も多くあるであろうが、彼等はエスペ
ラント運動の本来の使命を歪曲するこそあれ、決してそれを横的に推し進めるこ
とは出来ないのである。**であるから、エス語を学んだ以上は少くとも“esprantismo”
をかく如くに理解せねばならぬと思ふ。**⁸⁰ (太字：引用者)

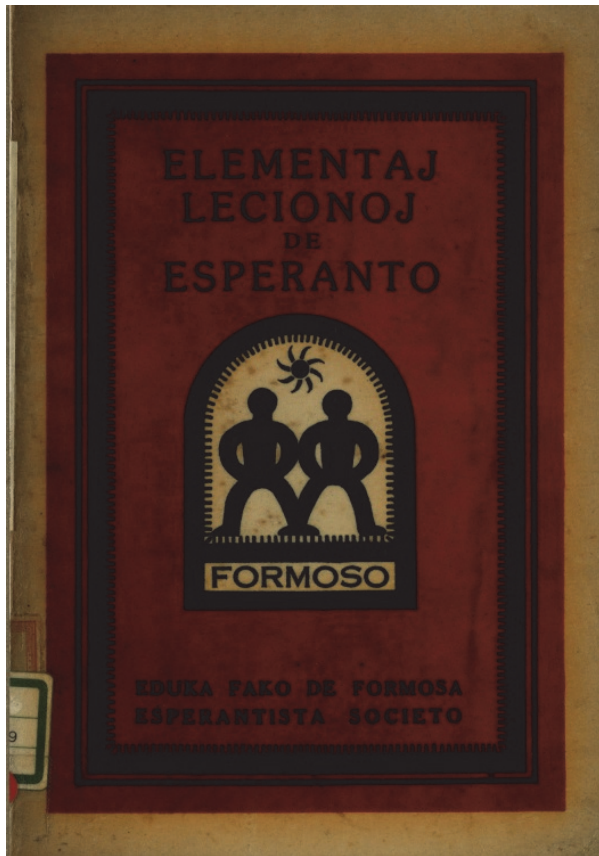
この段落は、中村一雄が言う各団体がそれぞれ異なるイデオロギーを持っているとい
うことと関連しているだろう。すなわち、台湾のエスペラント運動はプチブル層によって
発展してきたのだが、これからは単なる社交的なものにせず、プロレタリア解放の武器と

して普及して行くべきであり、それでこそエスペラントの本来の使命を果たせるのだと作者は強調している。

総じて言えば、2回の台湾大会の間に出版されたこの2号の通信を通じて、この「第3期」におかれた台湾プロレタリア・エスペラント運動は、前述した内地のPEAやPEUの成立や綱領に応じたものであると言えるが、1920年代植民地政策に対して反抗したことによって、台湾エスペラント学会が「左傾化」したこととも関係する。さらに言えば、1930年代前後に政治運動や社会運動が抑圧されたため、この時期に再開した台湾エスペラント学会の運動も、プロレタリア文化運動の姿勢を取って行ったものと考えられるのではないか。そして台湾エスペラント学会は、このような姿勢で、次節で分析する1932年の初級エスペラント教科書を発行し、より多くの知識人にエスペラントを普及しようとした。

(二) 初級エスペラント教科書『Elementaj Lecionoj de Esperanto』(1932)

前述したように、台湾エスペラント学会通信『Informo de F.E.S.』の第2号に学会の改訂した規則が附録として掲載されている。執行委員会の下には「組教局」と「書記局」があり、組教局の下に組織部、教育部、図書部がある。そのなかの教育部が、1932年5月に『Elementa Leciono de Esperanto』(初級エスペラント教科書)を出版した。本書は約50頁あり、序言を除き、全文がエスペラントのekzercaro(練習問題集)や単語によって構成されている。序文には、「本書は本会創立二十週年記念出版の一として刊行されたるものである」と書いてある。20周年と言うのは、日本エスペラント協会台湾支部が設立された1913年から数えたのだろう。



図：初級エスペラント教科書『Elementaj Lecionoj de Esperanto』、表紙。

この教科書は、エスペラントの思想や重要性などを説明していないため、単なる語学テキストと思われるかもしれない。しかし、共産主義を象徴する赤色の表紙には、エスペラントの平和主義を象徴する緑の星は見られず、また、黒い太陽の下でFORMOSO(台湾)のプロレタリアートが手を取り合って立ち上がる絵が付いており、暗黒の環境にある台湾の無産階級を奮起させるイメージを突出させているのではないかと考えられる。そして、

奥付にある発行者の名前は連温卿であった。すなわちこの教科書の出版は、台湾エスペラント学会が主導するプロレタリア・エスペラント運動を広めるために、エスペラントの普及を図るための道しるべと見なすことができよう。

これまでの経緯をまとめると、1920年代後半から台湾エスペラント学会の『La Verda Ombro』が廃刊となり、台北エスペラント会の『La Formoso』が発行された。いわゆる中立的なエスペラント運動を普及する台北エスペラント会に対して、日本内地のプロレタリア・エスペラント運動の影響を受けた台湾エスペラント学会は、台湾大会を契機に運動を再開し、1920年代初期の「赤化」的なエスペラント運動を継承しながら、プロレタリア・エスペラント運動の旗を掲げ、有産階級である官僚や学者を中心とする日本人エスペランティストの言論に対抗して階級闘争の主張を強調し、エスペラント運動を行った。こうした台湾エスペラント学会が行ってきた運動の発展の背景に関しては、連温卿の「一九二七年の台湾」という報告文からもうかがえる。重要な文章のため、やや長いが以下に引用する。

台湾に於ける社会運動の発展は、一九二七年一月台湾文化協会改組後極めて匆忙の際に成長し来り、遂に二個の潮流の対峙を見るに至つたのである。是れより先、改組前に於て中国改造問題によつて資本主義の論争を惹起し、三ヶ月間に亙り双方の主張—台湾に資本主義ありや否や—が甚しく一般社会の注意を惹起したのである。一つは台湾には未だ所謂資本家なるものがない。随つて資本主義の存在がない、であるから台湾は先づ台湾人の資本家を發達せしめて日本の資本家に対抗し得る地位に到達せしめるのが合理的である。この目的を達せんとするには、須らく民族運動を以て進まねばならぬと主張するのであつて、又一つはこの主張と全然相反し台湾には資本家はあるが、未だ獨立して發展し得る地位に至らない。それは台湾に於ける日本資本主義は已に鞏固なる地盤を有して居るからである。而して被圧迫、被搾取の台湾人は独り少数資本家及地主のみならず、最大多数の労働者及農民が存在して居るのである。それ故に台湾人を解放せんとせば、須らく階級闘争を主張せざるべからずと主張するのである。⁸¹（太字：引用者）

繰り返しになるが、1920年代後半、連温卿や蘇璧輝らも台湾文化協会の事務や社会運動に多忙で、台湾エスペラント学会の機関誌は1926年に停刊した。連温卿によれば、この時期は学会の「潜勢時期」と言ってよい。ところが、1927年頃は、台湾の社会運動、特に左翼運動が全盛期を迎える時期だった。1927年に台湾文化協会の分裂が起こり、主導権を握った連温卿たちは、日本資本主義が台湾で強固な地盤を持ち、台湾人の少数の資本家を含めて、大多数の農民や労働者が搾取対象になっていたと考えたため、民族運動だけではなく、階級闘争を以て戦わなければ日本資本主義に対抗できないと主張した。すなわち、植民地における資本家は、日本人であり、その背後には帝国主義的な台湾総督府がいる。したがって、弱小民族の台湾人の闘争する対象は台湾の資本家ではなく、日本人の官僚や資本家などの背後にある日本帝国主義であった。しかしながら、政府は政治運動を

弾圧しただけではなく、言論統制をも一層強めたため、1927年以降の「新文協」の機関誌『台湾大衆時報』は東京で創刊された。連温卿は、『台湾大衆時報』で「台湾社会運動概観⁸²」、「台湾殖民政策的演進⁸³」などの文章を発表した。

ところが、左傾化した新文協の内部に再び対立が発生した結果、1929年に連温卿は新文協から除名され⁸⁴、その後、台湾社会運動からはその名前が消えた⁸⁵。そして前述したように、知識人たちは1930年代以降に「文化運動」に重心を移した。台湾文化協会という戦場を失った連温卿は、「元戦場」である台湾エスペラント学会を再発足させ、マルクス理論と結びついたエスペラントという言語的武器によって階級闘争の主張を貫こうとしていたのではないかと推測される。そして、連が台湾大会で在日日本人である有産階級を批判し、エスペラントを階級闘争の武器として普及させようと強調したように、1930年代の台湾プロレタリア・エスペラント運動は、当時の台湾の社会運動と似ていて、社会主義的性格とナショナリズムの2つの側面を持っている。さらに言えば、単なる言語運動を行っていた台北エスペラント会の在日日本人エスペランティストたちは、政府側に立つ官僚や学者であり、彼らの背後には帝国主義を帯びた日本政府がいたため、プロレタリア・エスペラント運動の闘争対象となったのである。

前述したように、1930年代以降の日本プロレタリア・エスペラント運動も結局文化運動のほうに傾いて行ったように、台湾のエスペラント運動の階級闘争論も、文化運動の側面が強かった。次の第三小節で例を挙げて論じる。

(三) 農民運動や文化運動への影響

これまで台湾農民運動についての研究は多くあるが、農民運動とエスペラント運動との関係についてはほとんど論じられていない。1930年代前後に政治運動や社会運動が総督府に全面的に弾圧されたため、多くの知識人は文化運動に転向し、特に文学建設に取り組んでいた。一方、1920年代後半からエスペラントが農民運動者や左翼作家の間で流行していた。それは前述したように内地からの影響もあるが、ここでは、農民運動のリーダーである李應章や簡吉のエスペラント経験、またプロレタリア作家である楊逵が創刊した『台湾新文学』雑誌に掲載されたエスペラント関連文章などに触れる。

農民運動のリーダーである李應章(1897-1954)は、台湾総督府医学校時代に、大杉栄、山川均らの著作を読んでおり、「弘道会」という日本植民地統治を批判する組織を創立した⁸⁶。卒業後、台北で「全台湾青年会」を組織した際に蔣渭水らと知り合い、彼らと台湾文化協会を結成した⁸⁷。文協の二林支部部長を務め、のちに蔣渭水が創立した台湾民衆党にも参加した。1925年6月に台湾初の農民組合「二林蔗農組合」を成立し、農民講座などを開いた。同年10月の「二林事件」勃発後に入獄し、台湾農民運動の火付け役と言われる。特に「二林事件」がきっかけとなり、もう1人の農民運動者である簡吉と全島的「台湾農民組合」を組織した。李應章は、医学校時代(1916-1921)からエスペランティストの大杉栄の著書をよく読んでおり、連温卿らのエスペランティストとも関わった台湾文化協会の創立に参加したため、彼がエスペラントを学んだのは、1920年代初期であったと考えられる。また、簡吉の1930年の獄中日記からは、李應章は当時すでにエスペラントを学んだ

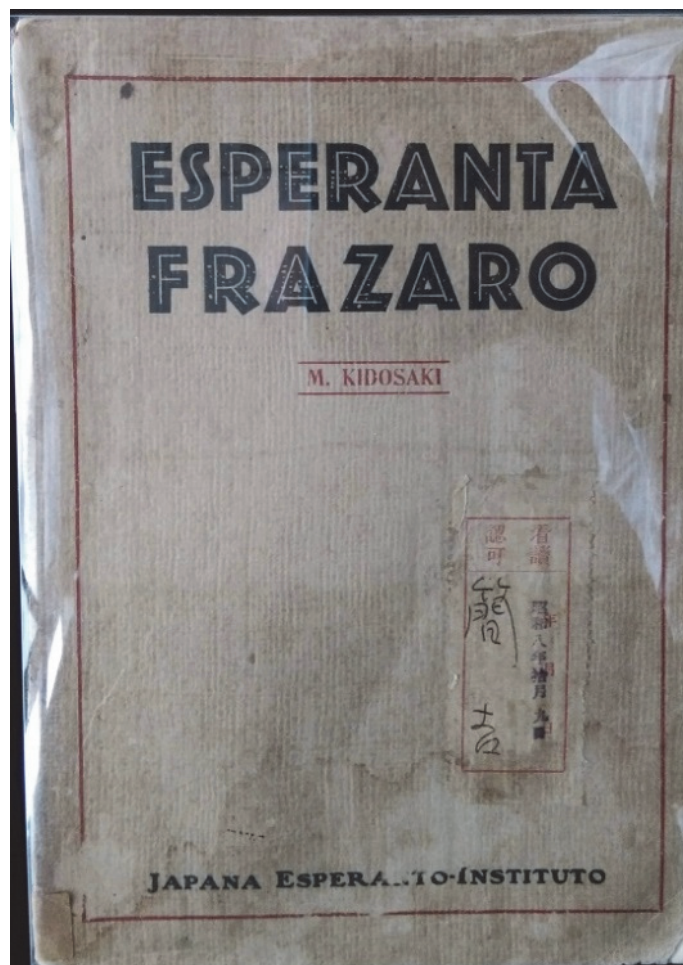
ことがわかる⁸⁸。

一方、元公学校教員の簡吉（1903-1951）は、資本家に搾取された貧しい農民の状況を見て、農民運動に身を投ずることを決めて教員を辞めた。李應章と台湾農民組合を結成し、1928年の第2回全島大会で、台湾共産党支持を表明したことなどによって、1929年12月に逮捕された⁸⁹。2005年に出版された『簡吉獄中日記』（1929.12-1930.12）は、当時入獄した時のものであり、そのなかに家族や同志との間の手紙も収録されている。1930年3月27日の弟への手紙に、簡吉は次のように書いている。

『エスペラント全程』（初学の独習者が使ふものであることを忘れないやうに。要するに教科書です。それ以上のものを送つてきても許されない。またアルファベツトがやつと読める位の僕には役に立たない。）『エスペラント辞典』（之も許可されたものです。独習書と合せて是非必要です）の式冊は是非完全に新しいものを取寄せて至急送つて下さい。『エスペラント独習書』は初歩的なものからずつとあるだけ全部（エスペラントは簡単ですからいくらもない、二冊か三冊位なものです）送ってください⁹⁰。

この手紙から、簡吉は入獄の前後にエスペラントを学び始めたこと、獄中でエスペラントの勉強を切に求めたことがわかる。また日記から、彼が獄中で『エスペラント辞典』、『エスペラント研究』、『初級世界語読本』、『世界語新読本』、『エスペラント中等読本』などのエスペラントに関する本を読んでいたことがわかる。このように、獄中にいても英語やほかの外国語ではなく、エスペラントを学習することは、1930年代のエスペラント運動と農民運動がより強く結びついたと証拠となるであろう。

右図：昭和8年（1933年）10月9日、簡吉が獄中で読んでいた M. Kidosaki（城戸崎益敏）の『Esperanta Frazaro』（エスペラント文例集）。⁹¹



つまり台湾のプロレタリア・エスペラント運動が本格的に行われる前に、農民運動の知識人の間で、例えば李應章は1920年代初期に、簡吉は1930年前後に、すでにエスペラントを学んでいた。また、2005年に出版された簡吉の獄中日記は、1929年12月から1930年12月までのものだが、右図のように、10年間獄中にいた簡吉は、1933年10月以降にも、エスペラントを学び続けていた。

すなわち、1930年代には政治運動や社会運動が鎮圧されていたが、台湾エスペラント学会は1931年と1932年の台湾エスペラント大会を機に、プロレタリア文化運動として、台湾の農民や労働者に向けてエスペラントを普及させたのである。そして、特に農民運動者の知識人らにも強い影響を与えたのではないか。また、獄中での学習だが、簡吉の例から見れば、前述したように、1931年に全国的組織として創立された「日本プロレタリア・エスペランティスト同盟（PEU）」が訂正した同盟規約の1ヶ条である「日本内地及び植民地におけるプロレタリア・エスペラント運動の統一」、および1932年に提出した綱領草案の1ヶ条である「労働者・農民その他の勤労大衆へのエスペラントの宣伝普及」は、実際に植民地や農民運動に影響を与えたといえよう。つまり台湾の知識人は、島内のエスペラント運動に影響を受けた可能性もあろうが、日本内地の雑誌などから左翼運動とエスペラントが結び付いていたことを知り、エスペラントを学習し始めたのかもしれない。

もう1つ注目すべき点は、台湾のプロレタリア作家として活躍した楊逵が1936年に創刊した雑誌『台湾新文学』である。楊逵（1906-1985）の本名は楊貴で、楊建文、林泗文、公羊、SP、伊東亮、狂人などのペンネームがある。台南州立台南第二中学校中退、1924年に日本へ留学し、日本大学芸術学部文学芸術科の夜間部に進学した。留学中、日本の社会主義運動に深く影響され、反田中内閣のデモに参加し、また在日朝鮮人を支援したことで逮捕された。1927年に台湾に戻り、積極的に社会運動や農民運動に参加し、何度も入獄した。1927年に『号外』で「自由労働者の生活断面」を発表し、1934年に小説「新聞配達夫」が『文学評論』で受賞する⁹²。

1936年に楊逵は、妻の葉陶や、頼和、呉新栄などとともに雑誌『台湾新文学』を創刊した。雑誌の表紙には、「La Formosa Nov-Literaturo」というエスペラント名が書かれている。日本エスペラント協会の機関誌『La Revuo Orienta』もこのことを伝えている⁹³ため、それは連温卿の仲介と考えられる。1920年代以降の日本の左翼誌や、1930年代前後に発行されたプロレタリア雑誌の多くがエスペラントの表題を付けることを、台湾の知識人は知っていたのであろうが、『台湾新文学』は、いままで確認できた日本統治下の台湾で発行された文芸雑誌のなかで、おそらく唯一エスペラントの表題を付けた雑誌と思われる。

また、エスペラント運動が衰退していく戦争直前の1936年の時点でも、楊逵は連温卿の「エスペラント講座」を『台湾新文学』に2度掲載した。「エスペラント講座（I）」の前書きで、連は次のように言っている。

エスペラントを学習しやうとする人が、我が台湾に於てもだんだん殖へてきたことは、誠に喜ばしい限りである。が、何故エスペラントを学びたい人が多くなってきたのか？一言に云へばエスペラントが非常に役に立つと云ふことが一般的に

知られてゐる結果と思ふ。⁹⁴

政府からの弾圧がより厳しくなった 1930 年代後半においても、当時の台湾の知識人たちはエスペラントを肯定的に捉え、学ぶ人も増えたことがわかる。また台湾エスペラント学会は、プロレタリア・エスペラント運動を広げるために、通信や教科書を発行しただけではなく、『台湾新文学』のような文芸誌を通じてもっと多くの知識人に影響を与えようとする意図も持っていたようである。

さらに、『日本学芸新聞』の台中支部代表者を務めた楊達は、連温卿の「台湾童話の国際的紹介に参加せよ！！⁹⁵」という文章を『台湾新文学』に掲載し、雑誌を『日本学芸新聞』で紹介しながら、「フランス『国際文学』の編集者が計画してゐる世界各民族の童話叢書刊行について台湾童話の紹介に参加する連温卿氏を援助」すると述べた⁹⁶。つまり、楊達がエスペラントを学んだことがあるかは判然としないが、『台湾新文学』のタイトルにエスペラントを使用したことやエスペラント講座を掲載していたことから、彼はエスペラントを受け入れていたと考えられる。

実際、1930 年代の知識人は、連温卿のように「台湾童話の国際的紹介に参加せよ」と呼び掛けただけではない。第三章で言及した文化運動に力を注いだ莊松林（1910-1974）は、1933 年に創刊された台南エスペラント会の機関誌『La Verda Isulo』（緑の島）に、「So-Ŝjo-Lin」というエスペラント式のペンネームでエスペラントを用いて台湾の童話「La Malsaĝa Tigro」（愚かな虎）を発表した。すなわち、1920 年代初期の『La Verda Ombro』の童話掲載なども含めて、台湾童話の翻訳は、エスペラント運動の初期から 1930 年代まで広がっており、そこには 1930 年代の民間文学運動との連動も見取れるだろう。さらに言えば、これらのエスペランチストたちは、文化運動として台湾の童話をエスペラントに翻訳し、世界文学の舞台に送り出そうという意図が強かったと思われる。

文化運動の側面を持つ 1930 年代の台湾のプロレタリア・エスペラント運動は、資料の制約もあるため、どこまでの影響力を持っていたか具体的には計れないが、知識人の間ではエスペラントは確かに好感を持たれていた。例えば、多くの漢詩漢文、白話小説を発表した鄭坤五の未刊稿の短編科学小説「火星界探検奇聞」のなかに、エスペラントで宇宙人と会話するシーン⁹⁷があり、エスペラントが世界だけではなく、未来ともつながることが想像されていたようである。また、1930 年代の「郷土文学と台湾話文論争」のなかでも、賛成／反対を問わず、しばしばエスペラントが言及されている⁹⁸。例えば、負人の「台湾話文雑駁」のなかでは、以下のように述べられている。

「至急、郷土文学の旗を降ろせ」と郷土文学の諸先生に諫言する。そしてより偉大で、より通用性があり、意義がある世界のプロレタリア階級の郷土文学に従事せよ。⁹⁹

この「世界のプロレタリア階級の郷土文学」は、つまり 1930 年代に世界の共通語やプロレタリアの国際連帯として唱えられるエスペラントとそれによって書かれた文学と

指している¹⁰⁰。すなわち、台湾話文提唱者を皮肉ったものであるが、負人は、エスペラントが「世界のプロレタリア階級」の共有できる「郷土文学」と認識している。論争を通して、決してエスペラントを台湾の共通語として採用するまでには行かなかったが、当時のプロレタリア文化運動の潮流の影響を受けて、またプロレタリア・エスペラント運動の宣伝も一定の効果があったため、エスペラントで全世界のプロレタリアが連携できるというイメージは知識人の間に浸透していたのではないか。

以上、1930年代の台湾エスペラント運動のプロレタリア・エスペラント運動への移行の経緯について分析し、また、運動が農民運動や文化上への影響についても論じた。総じて言えば、エスペラント運動は、1910年代から台湾で始まり、在日日本人や台湾人によって行われてきたが、1920年代以降、それぞれ異なる立場に立って運動が分裂した。そして1930年代前後から、特に台湾エスペラント学会の運動は、プロレタリア・エスペラント運動に移行した。こうした運動の方向によって、エスペラントという言葉は、台湾社会の主流なものにならなかったが、当時のプロレタリア文化運動とつながっていたため、さまざまな分野でプロレタリアという意識として認識され、学ばれ、そのことは、1930年代文化運動の1つの特徴になっていたと言えよう。

-
- ¹ 『第一回台湾エスペラント大会』（大会記録）、台北エスペラント会、1931.09、9頁。
 - ² 武上耕一、「台湾に於けるエスペラント運動に就て」、『第一回台湾エスペラント大会』（大会記録）、台北エスペラント会、1931.09。
 - ³ 連温卿、「台湾に於けるエスペラント運動年代記」、『*Informo de F.E.S.*』第1号、1931.12.15、9頁。
 - ⁴ 台湾総督府警務局編、『台湾総督府警察沿革誌（三）』、台北：南天書局、1995.06（復刻版、初版：1939.07）、1026頁。
 - ⁵ 『台湾総督府警察沿革誌（三）』、1045-1046頁。
 - ⁶ 許世楷、『日本統治下の台湾』、東京：東京大学出版会、1972.05、369頁。
 - ⁷ 奇（葉榮鐘）、「発刊詞」、『南音』第1号、1932.01、1頁。
 - ⁸ 吳叡人、「福爾摩沙意識型態一試論日本殖民統治下台湾民族運動「民族文化」論述的形成(1919-1937)」、『新史学』17(2)、2006.02、175頁。
 - ⁹ 「台湾話文」と「郷土文学」の論争については、陳淑容の『一九三〇年代郷土文学：台湾話文論争及其餘波』（台南：台南市立図書館、2004）を参照。民間文学運動については、王美惠の論文「1930年代台湾新文学作家的民間文学理念與実践」（台南：成功大学歴史系博士論文、2008.01）を参照。
 - ¹⁰ 陳建忠、『日拠時期台湾作家論：現代性、本土性、殖民性』、台北：五南、2004.08、65-95頁。
 - ¹¹ 蔵原惟人、「プロレタリア文学運動」、『日本プロレタリア文学案内（1）』、京都：三一書房、1955.06、20-28頁。
 - ¹² ナップは各分野の組織を充実させる方針をとった。たとえば、日本プロレタリア作家同盟（ナルプ、1929.02）、日本プロレタリア劇場同盟（プロット、1929.02、後の演劇同盟）、日本プロレタリア映画同盟（プロキノ、1929.02）、日本プロレタリア美術家同盟（ヤップ、1929.01、ナップから改組）、日本プロレタリア音楽家同盟（PM、1929.04）、日本プロレタリア写真同盟（プロフォト）など多くのプロレタリア文芸組織とかかわっていた。これらの組織の略称はすべてエスペラントで書いた名称の頭文字の略字から取ったものである。

- 13 蔵原惟人、「プロレタリア文学運動」、28-32 頁。
- 14 プロレタリア科学研究所エスペラント研究会編、『プロレタリアエスペラント講座 3』1930.12、221 頁。
- 15 台湾総督府警務局編、『台湾総督府警察沿革誌 (三)』、291-292 頁。
- 16 中島利郎編、『1930 年代台湾郷土文学論戦資料彙編』、高雄：春暉、2003.03。
- 17 陳規懐 (連温卿)、「日本帝国主義下の植民地台湾」、『大衆』、1926.11。「台湾に於ける政治運動」、『大衆』、1926.12。
- 18 連温卿、「台湾殖民政策的演進—日本資本主義的発達及其発展—(一~三)」、『台湾大衆時報』、1928.06.04、11、25。
- 19 『台湾大衆時報』創刊号、1928.05、3 頁 (復刻版、台北：南天書局、1995.08)。
- 20 蘇慕紅、「台湾における民族革命」、『プロレタリア科学』、1931.01。
- 21 蘇新、『未帰的台共鬥魂 蘇新自伝與文集』、台北：時報、1993.04、100 頁。
- 22 『台湾大衆時報』創刊号、27 頁。
- 23 蘇新、『未帰的台共鬥魂 蘇新自伝與文集』、40-42 頁。
- 24 蘇新、『未帰的台共鬥魂 蘇新自伝與文集』、55-56 頁。
- 25 連温卿、「台湾に於けるエスペラント運動年代記」、『Informo de F.E.S』第 1 号、14-15 頁。
- 26 『第一回台湾エスペラント大会』(大会記録)、12-13 頁。
- 27 連温卿、「我々は闘争なき人類の平和に生きん」、『Informo de F.E.S』第 1 号、1931.12.15、6-7 頁。「————」は原文。
- 28 「内地報道」、『La Revuo Orienta』、1932.02、72 頁。
- 29 「内地報道」、『La Revuo Orienta』、1932.03、108 頁 (開始日が空白になって判明できない)。
- 30 史可乗、「日抛時期台湾 ESP 運動」、『台湾風物』、1967.08、55-58 頁。
- 31 井上照月、「第二回台湾エス大会感想記」、『Verda Mondo』、京都：エスペラント普及会、1933.01、21 頁。
- 32 竹内次郎、『プロレタリア・エスペラント運動に付て』、東京：東洋文化研究社、思想研究資料特第 69 号、1939.11、151-152 頁。
- 33 小谷一郎、「日中プロレタリア・エスペラント運動の交流—中国人留学生のプロレタリア・エスペラントを中心に」、『「磁場」としての日本 一九三〇、四〇年代の日本と「東アジア」』第一輯、埼玉：埼玉大学教養学部、2008.03、84 頁。
- 34 比嘉春潮、『沖繩の歲月 自伝的回想から』、東京：日本図書センター、1997.12、本の扉から引用。
- 35 比嘉春潮、「琉球のエスペラント運動回顧」、『La Revuo Orienta』、1936.06、75 頁。
- 36 「インタビュー 柳田国男との出会い 比嘉春潮／(ききて) 谷川健一」、『柳田国男研究資料集成』第 15 卷、東京：日本図書センター、1987.04、169 頁 (初出：『季刊柳田国男研究』第 3 号、1973.09)。
- 37 戴国輝校訂、「連温卿日記—1930 年の 33 日間」、『史苑』39 (1)、東京：立教大学史学会、1978.11、99 頁。この切り抜き帳は現在中央研究院に所蔵されている。
- 38 ロマン・ローラン原著、K. Jamaguchi (山口小静) 訳、「人類解放の武器はエスペラント」、『La Verda Ombro』、1922.11-12 月合併号、1 頁。
- 39 1922 年 8 月号の『改造』では、エスペラント講座を連載し始め、「エスペラント語研究」を特集した。
- 40 初芝武美、『日本エスペラント運動史』、東京：日本エスペラント学会、1998.03、46-47 頁。
- 41 連温卿、「台湾エスペラント運動の回顧」、『La Revuo Orienta』、1936.06、74 頁。
- 42 『Japana Esperantisto』、1915.08.1-7 頁。
- 43 K. Ossaka (小坂狷二) 訳、「Avino Tigro (Formosa popollegendo) I」、「Avino Tigro (Formosa popollegendo) II」、『La Verda Ombro』1920.04、1920.06。
- 44 小坂 (狷二)、「新刊紹介」、『La Revuo Orienta』、1932.08、302 頁。
- 45 秋田雨雀、「ソヴェトロシアに於けるエスペラント運動」、小坂狷二・伊東三郎著『プロレタリア エスペラント必携』、287 頁。秋田雨雀はロシア十月革命十周年の記念祭に招かれ、1927 年にソビエトロシアのモスクワへ行った。そこで 3 回ラジオの放送をエスペラントでこ

- なし、また十数回の短い講演をエスペラントでこなしたという。1927年の時点でソビエトロシアには活動中のエスペランチストが一万二千人ほどおり、モスクワだけでも42の小さなグループがあり、1200人の人々が実際に活動しており、その中の大部分はソビエトエスペラント協会の会員であり、またSATの会員でもあると、秋田は言っている。
- 46 小坂狷二・伊東三郎、『プロレタリア・エスペラント必携』、東京：鉄塔書院、1930.09。
- 47 「プロレタリア科学研究所」はコップ結成時の加盟団体の1つであった。当時コップに加盟した団体は日本プロレタリア作家同盟、日本プロレタリア映画同盟、日本プロレタリア演劇同盟、日本プロレタリア・エスペランティスト同盟、日本プロレタリア音楽家同盟、日本プロレタリア美術家同盟、日本プロレタリア写真家同盟、日本戦闘的無神論者同盟、無産者産児制限同盟、プロレタリア科学研究所、新興教育研究所などの11団体があった。
- 48 「前書き」、『プロレタリアエスペラント講座3』、1頁。
- 49 伊東三郎、「若々しく伸びゆくエスペラント文学 それは何を語る?」、『台湾日日新報』、1931.09.06。
- 50 西東なほみち(中垣虎児郎)、「プロレタリアとエスペラント」、『戦旗』、1930.08、108-113頁。
- 51 大島義夫・宮本正男、『反体制エスペラント運動史』、東京：三省堂、1974.07、163頁。
- 52 『反体制エスペラント運動史』、163-164頁。
- 53 『反体制エスペラント運動史』、164頁。
- 54 PEAは、「エスペラントの宣伝・普及」、「プロレタリア解放の武器としてのエスペラントの実用」、「プロレタリア諸団体に対する支持」、「ブルジョア的教育への批判と闘争」、「日本プロ・エス運動の全国的統一の促進」など5項目の綱領を掲げた。『反体制エスペラント運動史』(162頁)から引用。
- 55 三宅栄治、『闘うエスペランティストたちの軌跡—プロレタリア・エスペラント運動の研究』、大阪：リバーロイ社、1995.10、68頁。
- 56 柴田巖・後藤齋編、峰芳隆監修、『日本エスペラント運動人名事典』、東京：ひつじ書房、2013.10、95頁。
- 57 『反体制エスペラント運動史』、178頁。
- 58 拙論、「日本時代台湾世界語運動の開展與連温卿」、陳翠蓮ら主編、『跨域青年学者台湾史研究』第五集、台北：政治大学台湾史研究所、2013.08、143-156頁。
- 59 V. Eroshenko、『Unu Paĝeto en Mia Lerneja Vivo (私の学校生活の一頁)』、『La Verda Ombro』第六卷第1-2月合併号付録、1923.03)、『Turo por Fali (墜ちる為の塔)』、『La Verda Ombro』第六卷第6-7月合併号付録、1923.07)。
- 60 「Klasbatalo en Ĥina Socio」(支那社会における階級闘争)、『La Verda Ombro』、1923年1-2月合併号)、「Kion Volas la Insululoj?」(島民たちは何を求める?)、1923年3-4月合併号)、「Lernejo de Tria Kominterno I~II」(コミンテルンの学校I~II)、1923.05、6-7月合併号)、「Pri Rusa ESP. Movado ロシヤとエスペラント運動」、1923.10)、「Familiaj Budĝetoj de Rusaj Laboristoj」(ロシア労働者たちの家庭予算)、1923.11-12月合併号)。
- 61 エスペランチストと呼ばれる人のなかには、大体「中立的」、「革命的」、「平和主義的」など3つの型に分けられる。中村陽宇編、『国際補助語エスペラントと人類主義に就いて』、京都：愛善エスペラント会、1950.04、24頁。
- 62 原文は中国白話文。訳文は廣畑研二編・著、『大正アナキスト覚え帖』(東京：アナキズム文献センター、2013.10、37頁)から引用。
- 63 張深切、『張深切全集 里程碑—又名：黒色的太陽(上)』、台北：文経、1998.01、258-260頁。
- 64 史可乗、「日拠時期台湾ESP運動」、55-57頁。
- 65 『Informe de F.E.S』第2号、1932.06.16、33頁。
- 66 木下浩、「第一回台湾エスペラント大会感想」、『Informe de F.E.S』第1号、1931.12.15、2-3頁。
- 67 『第一回台湾エスペラント大会』(大会記録)、13頁。
- 68 史可乗、「日拠時期台湾ESP運動」、56頁。
- 69 麗光、「エスペラントの眞髓」、『Informe de F.E.S』第1号、8頁。
- 70 紅鐵生、「「エスペラント」は人類解放の武器 国際語を学べ」、『台湾新民報』394号、1931.12.12、15頁。

- 71 ロマン・ローラン原著、K. Jamaguchi (山口小静) 訳、「人類解放の武器はエスペラント」、『La Verda Ombro』、1922.11-12 月合併号、1-3 頁。
- 72 連温卿、「我々は闘争なき人類の平和に生きん 去九月二十日に開かれた台湾第一回エスペラント大会への挨拶」、『Informo de F.E.S』第 1 号、1931.12、6 頁。
- 73 連温卿、「我々は闘争なき人類の平和に生きん」、『Informo de F.E.S』第 1 号、7 頁。
- 74 「エスペラントと婦人—婦人エスペランティストへ寄す」の作者名蟾青 (Lunino) は、月の異称で、月の中に蟾蜍と兎がいるという伝説からの蟾兎に意味する。目録での日本語は蟾青である。エスペラントの語法からでも、作者が女性だと考えられる。
- 75 蟾青、「エスペラントと婦人—婦人エスペランティストへ寄す」、『Informo de F.E.S』第 2 号、1-8 頁。
- 76 K.Jamaguchi (山口小静)、「Alvoko de Virino – al la Esperantistino en la mondo (一婦人の声—世界の女性エスペランティストへ)」、『La Verda Ombro』、1922.09、3-4 頁。
- 77 林森光、「農村青年とエスペラント」、『Informo de F.E.S』第 2 号、1932.06.16、10 頁。
- 78 S. S.、「エスペラントをかく視る」、『Informo de F.E.S』第 2 号、13 頁。
- 79 中村一雄、「その後に来るもの」、『Informo de F.E.S』第 2 号、16-20 頁。
- 80 S. S.、「エスペラントをかく見る」、『Informo de F.E.S』第 2 号、14 頁。筆者は第三章でこの「S. S.」は、左翼作家であり、台湾労働者聯盟にも参加し、左翼誌『赤道報』を創刊した莊松林だと推測する。
- 81 連温卿、「一九二七年の台湾」(抜粋)、台湾総督府警務局編・呉密察解題、『台湾総督府警察沿革誌 (三)』、203 頁。
- 82 連温卿、「台湾社会運動概観 (一) (二) (三)」、『台湾大衆時報』創刊号、15-16 頁 (1928.05.07)、第 3 号、12-13 頁 (1928.05.18)、第 5 号、13-14 頁 (1928.05.28)。
- 83 連温卿、「台湾殖民政策的演進 (一) (二) (三)」、『台湾大衆時報』第 6 号、12-14 頁 (1928.06.04)、第 7 号、13 頁 (1928.06.11)、第 8 号、14 頁 (1928.06.25)。
- 84 1926 年、「台湾文化協会」内部で協会規則をめぐる論争が起きたため、1927 年 1 月に臨時大会が開かれ、連温卿の「委員長制」という提案が可決された。これを受け、蔡培火と蔣渭水は文協を脱退し、「台湾民衆党」を設立した。こうして「新文協」は、連の社会主義派が支配する左派の団体となった。しかしその後、新文協内でまた「上大派」と「非上大派」の 2 つの流れが生じた。対立の結果、1929 年に連は新文協から除名され、1931 年、新文協は活動を停止した。このように、連は「文協」の 2 回の分裂を招いた重要な人物となった。張炎憲、「社会民主主義者—連温卿」、連温卿著、張炎憲・翁佳音編校『台湾政治運動史』、台北：稻郷、2003.11、365-368 頁。
- 85 蘇新、『未帰的台共鬥魂 蘇新自伝與文集』、104 頁。
- 86 簡吉、『簡吉獄中日記』、台北：中央研究院台湾史研究所、2005.02、263 頁。
- 87 楊渡、『簡吉 台湾農民運動史詩』、台北：南方家園文化事業、2009.01、50 頁。
- 88 簡吉、『簡吉獄中日記』、191 頁。
- 89 陳慈玉、「導讀」、簡吉『簡吉獄中日記』、30 頁。
- 90 簡吉、『簡吉獄中日記』、200-201 頁
- 91 この写真は、「財団法人大衆教育基金会」によって提供されるものである。ここに感謝の意を表す。
- 92 林梵 (林瑞明)、『楊達畫像』、台北：筆架山、1978.09。
- 93 1936 年 5 月の『La Revuo Orienta』に「台湾新文学— " La Formasa Nov-Literaturo " なる表題を付す」という記事がある。東京：日本エスペラント学会、1936.05、30 頁。
- 94 連温卿、「エスペラント講座 I」、『台湾新文学』1(3)、1936.04、100 頁。
- 95 連温卿、「台湾童話の国際的紹介に参加せよ!!」、『台湾新文学』、1936.11、82 頁。
- 96 「同人雑誌めぐり(六) 台湾新文学」、『日本学芸新聞』16 号、1936.11.15、5 頁。ちなみに、『日本学芸新聞』にもエスペラントのタイトルが付いている。
- 97 林翠鳳、『鄭坤五研究』、台北：文津、2004.11、211-228 頁。
- 98 例えば、鄭坤五、「就郷土文学説幾句」：「現在正在鼓吹世界語の声浪中、怎麼要來倡設郷土文学呢？世界語是欲統一言文，使世界的人除出了各国各地唔呀吱咯的口腔；和言文不同的弊病，誰人都曉得這個方法是無以復加的了……」(227 頁)。あるいは、邱春榮、「致郷土文学運

動的諸位先生」：「幸而万般事物都趨動於簡易化，統一化底下的二十世紀的新人，對著你們這些時代逆行的邪說，不但不垂一聽，並且學習自國語（國文當然在內）和有關係要的一兩個外國語以外，還要熱熾熾地去提倡世界語和世界語的文学哩！」（379 頁）、中島利郎編、『1930 年代台灣鄉土文学論戰資料彙編』、高雄：春暉、2003.03。

⁹⁹ 負人（莊遂性）、「台灣話文雜駁」、中島利郎編、『1930 年代台灣鄉土文学論戰資料彙編』、215 頁（初出：『南音』、1932.02.22）。原文：「勸告提唱鄉土文学的諸先生「緊緊降下鄉土文学的旗幟」，從事那更偉大較有連絡性較有意義的世界普羅階級的鄉土文学。」。

¹⁰⁰ 伊東三郎、「若々しく伸びゆくエスペラント文学 それは何を語る？」、『台灣日日新報』、1931.09.06、6 頁。

第五章 言語・文字改革運動のなかのエスペラント運動

近代国民国家の成立をめざした日本は、明治維新以来、政治、経済、金融、産業、教育、宗教、文化などさまざまな改革を行った。これらの一連の改革とともに、言文一致運動が展開され、近代文学が成立した。そうしたなか、「国語」としての日本語表記法をめぐる国語国字問題が議論され、20世紀初期に欧米で流行していたエスペラントも1つの重要な言語として推進され始めた。第一章で言及したように、多くの日本の思想家や作家はエスペランチストであった。それだけではなく、日本近代文学の担い手であった二葉亭四迷や坪内逍遙、秋田雨雀なども重要なエスペランチストである。第一章でも触れたが、日本の初期のエスペランチストの多くは、二葉亭四迷の『世界語』を読んでエスペラント運動に取り組んだ。また坪内逍遙は、西洋文学作品を日本語に訳しただけでなく、多くの作品をエスペラントに訳した。さらに第四章でも述べたように、秋田雨雀は、日本のエスペラント運動をプロレタリア・エスペラント運動へ移行させた重要な人物でもあった。このように、日本の近代文学における文体、言文一致運動を論じる際、エスペラントの果たした役割を見落とすことはできない。

近代化とともに言語・文字改革運動が行われたのは、日本だけではない。中国の白話文運動、朝鮮の朝鮮語規範化運動¹、台湾の新文学運動などのように、東アジア諸国の各地で近代化に応じて言語・文学改革運動が進められた。そうしたなか、清末から始まったエスペラント運動の役割は見逃せない。例えば、注音字母を作った呉稚暉やアナキストの劉師培、あるいは中国近代思想に大きな影響力を持つ銭玄同、作家の魯迅、思想家の傅斯年らは、みなエスペランチストであった²。特に第三章で論じたように、1919年の五四運動以降、盛んに展開された中国白話文運動に最も貢献した魯迅や胡愈之は、エスペラント普及運動にも熱心に取り組み、エスペラント作家エロシェンコの作品を多く翻訳した。だが、白話文運動についてのこれまでの研究は非常に多いが、魯迅らの白話文運動とエスペラント運動との関係についてはあまり言及されていない³。のちに例を挙げて詳述するが、エスペランチストは、諸民族語のローマ字化を世界のエスペラント化の第一歩と捉える⁴。そのため、魯迅の主張する中国語のラテン化は、エスペランチストとしての考え方であり、ラテン化そのものが最終目的ではなく、中国語の文字改革の手段だったと言える。

一方、日本統治下における台湾は、日本内地の言文一致運動の流れに巻き込まれ、また中国白話文の文体を模倣しながら、地域色の濃い白話文運動を展開していった。蔡培火をはじめとする人々が推進してきた「類中国白話文」や「台湾話文」、そして漢字の枠組み以外のローマ字運動は、日本からかなりの影響を受けたものと言える。また、直接的な影響ではないかもしれないが、エスペラント運動がもたらした言語や文字の改革の考えや実践は、日本や中国の例からうかがえるが、台湾も同様のプロセスを歩んでいた。

第五章では、エスペラントの角度から、東アジアの言語・文字改革運動の連鎖に着目し、台湾の言語・文字の改革運動を再考したい。まず、エスペラントが日本と中国の言文一致運動において果たした役割、例えばローマ字運動やラテン文字運動との連帯や満州国での動きなどについて整理する。また台湾のエスペラント運動は、1920年代から1930にかけて言語・文字改革運動にどのような影響を与えたか、さらに「大衆」に関する議論にどの

ような示唆や影響を与えたかを論じる。

第一節 日本と中国の文字改革運動のなかのエスペラント論

日本の言語・文字改革運動に関連する研究は、一定の成果があり、国語国字問題や近代国語への批判など、さまざまな観点から展開されてきた。そのなかには、漢字を中心に論じたものもあれば、ローマ字に議論の焦点を当てたものも少なくない。明治期の文章や文体と比べて漢字の割合がかなり減少した現在でも、漢字批判の立場から仮名やローマ字の使用を主張する組織⁵は存在しており、関連研究もしばしば学術誌などに掲載されている。一方、ローマ字専用論の考え方にもつながるエスペラントは、表記法の問題だけではなく、国際化や各民族語の平等を目指したものであった。日本でもエスペラントの全国的組織や地方の支部があり、日本エスペラント大会に至っては2013年に第100回目を迎えた。本節では、日本の明治末期から第二次世界大戦前後までに行われた言語・文字改革運動、ならびに中国の清末民初の時期に行われた言語・文字改革運動を簡潔にまとめ、エスペラントの位置づけ、ローマ字運動とラテン文字運動との連帯について論じる。

(一) 日本の国語国字問題と言文一致運動

明治期後半の1890年頃、法制度や教育、郵便事業、新聞など近代国民国家としてのさまざまな制度が整備された。これらの制度が整うにつれ、「国語」の制定も強く求められ、「国語国字問題」が浮上した。「国語問題」とはどのようなことばを「国語」とするかという問題であり、「国字問題」とはその表記をどのようにしていくかという問題である⁶。この問題は、国語問題というより、むしろ国語としての日本語の表記法をめぐる国字の議論が中心であった。例えば、漢字仮名交じり文やそれを構成する漢字、仮名遣いのあり方、あるいはローマ字においては綴り方に関わる言語政策の議論である。第二節以降に詳述するが、台湾の「文字改革運動」もこの国字問題に相当する。

近代日本の国語国字問題について現在最も詳細な資料は、『明治以降国語問題論集』(1972)と『明治以降国語問題緒案集成 上下』(1972-73)であろう。平井昌夫が1948年に出版した『国語国字問題の歴史』も1998年に復刻された。60種にも及ぶ著作を発表した平井は、日本言語障害児教育研究会の初代会長、日本国語教育学会常任理事として活躍したばかりでなく、ローマ字論者としても知られている⁷。

「国語」を何語にするかという議論を最初に提起したのは、17世紀に「中国語採用論」を提唱した儒学者の荻生徂徠であったという説がある。実際、彼はよりラジカルで、訓読も撤廃してすべての漢字を「華音」で音読するという直読を主張した。しかしながら、結局のところ訓読に頼らざるを得なかった⁸。「国語」問題が注目され始めたのは、森有礼の「英語採用論」からであろう。森の英語採用論はよく批判されるが、J・マーシャル・アンガーは、森の筆記などを参照しながら、彼は当時日本国内で使われていた方言の種類多さと公式標準口語の不在を強く意識し、**アルファベット文字の採用**を視野に入れた上で英語を採用したと評価した⁹。もしそうであるならば、森の議論は、国語の問題というより国字問題ではないだろうか。

国字問題をめぐる議論は、文学の場で試みられ、実践されてきた。例えば、言文一致体の先駆と言われる二葉亭四迷を評価した坪内逍遙は、二葉亭以前の文学は「漢文くづしか、和文くづしか、戯作文しか無かった」時期の「表現苦時代」にあると述べた¹⁰。この「漢文くづし、和文くづし」（漢文を訓読した文体）という言い方は、国字問題の議論にもなり、言文一致の初期段階のものと言えよう。その後、言文一致運動が現れ、漢字仮名交じり文が主流となり、作家や思想家たちの文章や作品はより言文一致の文体で書かれるようになった。

つまり、国字問題は言文一致運動や日本の近代文体の発展とも連動していたのである。この近代文体にさまざまな変化を引き起こした言文一致運動は、日本本土だけではなく、中国や植民地朝鮮そして台湾の言語・文字改革運動にも影響を及ぼした。

（二）日本のローマ字論とエスペラント論とのつながり

本論は、エスペラントを中心として論じるため、国字問題をめぐる漢字主張や廃止論、あるいは仮名文字に関する議論などは省略するが、エスペラントとそれに関連するローマ字論については少し整理する。西洋文明論とともに漢字廃止論、とりわけローマ字論が提唱されたとよく言われる¹¹が、エスペラントの普及も西洋文明論と深い関係がある。簡単に言えば、ローマ字とエスペラントとの共通点は、どちらもアルファベットの一種であるラテン文字で構成されるため、「西洋」とのつながりを持つことができると当時の人々は捉えていたことである。第二章で論じたように、世界とつながりを持ち、布教するため、創唱宗教の大本教や社会福祉運動団体の希望社は、エスペラントの普及に取り組んだだけでなく、同時期に日本語を綴るローマ字の教科書を大量に発行し、エスペラント講座もローマ字講座も積極的に開いていた。また、1922年2月の日本エスペラント協会の機関誌では、ローマ字とエスペラントとの関係についての文章を掲載し、表意文字である漢字の難しさを非難しながら、エスペランチストによるローマ字化の主張を紹介した¹²。こうした関連があるゆえ、ローマ字論者のなかには、エスペランチストが少なくない。大本教の出口王仁三郎や希望社の後藤静香はもちろん、思想家の新渡戸稲造、作家の宮沢賢治、戦後の作家井上ひさしや研究者の梅棹忠夫なども有名ところであろう。

とはいえ、ローマ字とエスペラントとの根本的な違いは、言語そのものにある。ローマ字論者が改革したいのは日本語の文字であるが、エスペランチストはより平和主義で中立的な国際共通語普及を目的とする。ただ、ローマ字はエスペラントほど政府側に弾圧されてこなかった。第二章で言及したように、エスペラントはロシアの虚無党とみなされただけでなく、エスペランチストが社会主義者やアナキストたちと関わったことで政府から強い弾圧を受けた。一方、ローマ字運動は、思想的な色彩や反政府の立場はあまりない。1939年にエスペランチストの斉藤秀一が治安維持法違反容疑で検挙され、唯物論研究会関連の事件「左翼ローマ字運動事件¹³」が起きた。検挙した側はローマ字とエスペラントとの運動が関連するものと捉え、共産主義者の隠れ蓑と考え、ローマ字論者でもあった斉藤秀一や『国語国字問題の歴史』の著者平井昌夫を起訴した¹⁴。1930年代以降、いわゆる「進歩的なエスペランチスト」はローマ字運動と連携しようとした。例えば、大島義夫が編集し

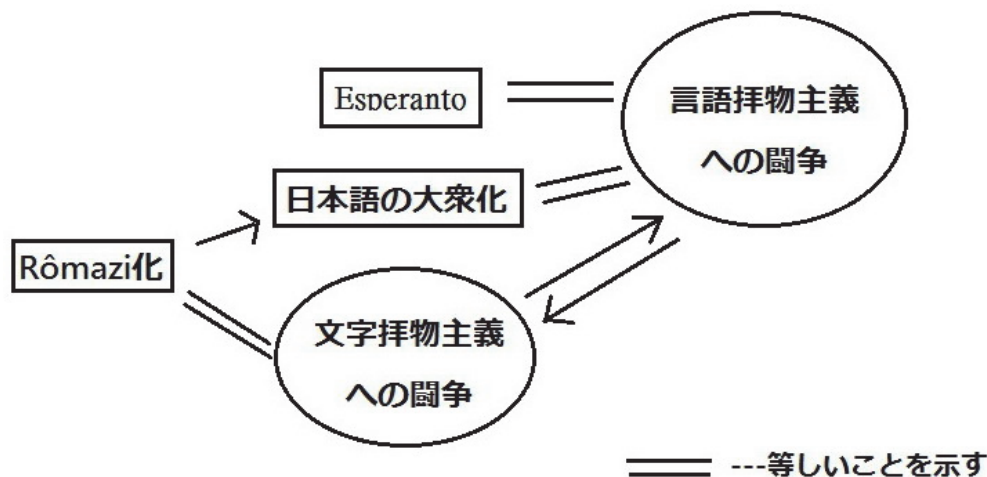
たエスペラント雑誌『国際語研究』の創刊号で、「エスペラント・ローマ字の優位性」という文章が掲載されている。少し長いが、重要な論点であるため引用する。

エスペラントは飽くまで現在の世界共通語であつて、決して将来の世界語でないのであるが、これは世界の民衆の生活の国際化の過程が益々促進され、国際化の範囲が広く深くなるに従つて、使用の範囲も拡大され、程度も高くなると同時に、エスペラントはそれぞれの民族語の特質を取り入れつゝ発展する。然しながら民族語は依然として民族的な生活の理解・表現の手段として存続し発展するのである。そして民族文化が真に解放され——それは政治的には帝国主義支配の根絶、階級国家の廃棄を意味する——個々の民族が同権の基礎の上に立つて自己の文化を極限まで発展させつゝ国際的文化の発展・融和せしめる様に、丁度同じことが言語に於ても行われる。[中略] 日本式ローマ字がヘボン式を始め、他のいろいろな書き方のローマ字に比して、技術的に優れてゐるといふことは疑ひない。然しながら日本式ローマ字も他のいろいろなローマ字と同じく、飽くまでも日本語の、従つて民族的立場から一步も発展せず、その上日本語の意識的干渉による発展の動向に合致してゐない。[中略] 我々にとっては、日本語の日常的使用にあつて、五十音図に従つた体言の変化法則は全く必要でないのである。然かも文字上エスペラントの文字と同じである点から、エスペラントの学習に技術的準備をなすものであり、日本語の合理化と共に、国際的結合の強化を迫られてゐる日本の勤労大衆にとっては日本語のエスペラント式ローマ字化は極めて必要であり、新しい任務のひとつであらう。¹⁵

つまり、作者は「政治的には帝国主義支配の根絶、階級国家の廃棄」という考えを持つエスペラントの民族語尊重に視点を据え、日本の勤労大衆の民族語としての日本語をより発展させて国際共通語化させるため、「日本語のエスペラント式ローマ字化」を提言したのである。同じ国際化のためのローマ字主張でも、この論点はほかのローマ字論者と異なり、「エスペラントの学習に技術的準備をなすもの」が対内（日本：エスペラント式ローマ字）と対外（外国：エスペラント）を一致させることによって、学習するコストを減らせると提言した。また、日本に限らず、プロレタリア・エスペランチストが重視する世界中の「勤労大衆」と連携する意図を強く見せた。さらに『国際語研究』は、1934年10月に『ローマ字問題の特輯号』を出した。寄稿者には、日本語の「国字」をエスペラント式にすることを主張する者、あるいはどちらか一方に賛同するエスペランチストもいれば、併用を支持する者もいた¹⁶。いずれも「日本人にはローマ字を、外国人にはエスペラント」を使わせようという共通の主張を持っていた。

上述した「左翼ローマ字運動事件」で検挙された斉藤秀一は、さらに雑誌『世界』¹⁷で1934年から1935年にかけて掲載された「大衆語とエスペラント」について述べている。そこでは、「エスペラントとローマ字化との関係」を図式化したうえで、この2つの言語や文字を使う背後にある思想を提出した。簡単に言えば以下の通りである。エスペラント

はそもその成り立ちからローマ字で書き表され、ローマ字はエスペラントの本質に準ずる性質のものである。そして、齊藤が描いた下の図式の通りに、エスペラントは、言語拝物主義に挑戦をするものであり、文字のローマ字化は日本語の大衆化を促す。また日本語の大衆化は、言語拝物主義への闘争でもある。つまり、ローマ字化は日本語表記の大衆化であるため、漢字という文字拝物主義への闘争となる。ローマ字による日本語表記の大衆化は、エスペラントと同じように言語拝物主義への闘争にもなる。また、言語拝物主義への闘争は、文字拝物主義への闘争とつねに相互作用している¹⁸。齊藤は、このような言語と文字の論理を持ちながら、方言研究に取り組み、植民地の言語にも高い関心を示した。



図：齊藤秀一、「エスペラントとローマ字化との関係」、『国際語研究』16号、1936.07、111頁。

さらに言えば、齊藤が言うローマ字の普及によって目指した言語表記の「大衆化」は、漢字文化圏に属し、識字率が低かった中国や植民地台湾におけるラテン文字運動やローマ字運動などの掲げた課題とも似ていた。つまり学習に時間のかかる漢字より、発音だけで理解が可能ですぐに読み書ができるローマ字の方が、比較的効率よく教育し普及させることができると思われていたのである。のちに例を挙げて説明するが、齊藤は1939年に創刊した雑誌『文字と言語』に、中国におけるラテン文字運動に関する文章を数多く掲載している。1930年代後半にローマ字論者は、植民地台湾や朝鮮、あるいは南洋に対して、より学習効率の高いローマ字を用いて日本語を普及しようと呼びかけている¹⁹。後述するが、戦争期に入ったローマ字の普及は、帝国主義拡張の道具としての側面もあり、それはエスペラントにおいても顕著に見える。

日本の領土が拡張されていくにつれ、ローマ字やより共通語に対応可能なエスペラントではなく、言語ナショナリズムを含む漢字仮名交じり文の日本語が、言文一致運動や国語国字の議論とともに標準化され、植民地でも普及されていった。結果から言うと、ローマ字は周辺化されたかのように見えるが、発音の記号として定着し、いまでも駅名や地名の綴り、またパソコンの入力などの「補助文字」として使われている。

満洲でのエスペラント運動は、1920年代初期に始まり、1923年には大連エスペラント会が成立した。また1924年に小坂狷二が大連で講演会を行い、講習を指導し、ハルビン

で訪問活動をし、満洲エスペラント運動の地固めをした²⁰。1930年代の満州事変以降、日本の傀儡国家満州国の共通語として普及しようと、エスペランチストたちに働きかけた。1932年の満洲国建国後、台湾エスペラント運動にもかかわった高橋邦太郎²¹らは、日本の文部大臣、内部大臣と、満洲国政府國務総理、民政、実業、交通各総長にあてた陳情書を提出した。

特に、貴国の如く言語を異にする諸民族の混住する国に在りては斯語（引用者：エスペラント）の普及は国内的にも亦大なる利益を齎らすものなる事を堅く信ずるものであります。冀くは 貴国内に一日も早く斯語を普及されるやう、又最も近き将来に於て 貴国家の国際用語として斯語を採用せられるやう、 其の爲め必要な御施設等最も迅速に着手せられん事を。²²

高橋らは、国内の共通語としてエスペラントを普及し、近い将来には対外的な国際用語として採用するよう満洲国政府に建言した。この陳情書からは日本語を擁護する立場はあまり見えないが、翌年の1933年に、日本の国家主義者と言われる藤澤親雄²³は、雑誌『満蒙』では以下のように述べている。

満洲国は王道主義を以て其文国〔引用者：文明国〕の精神とする、而してエスペラントの公用化によつて日満両国民が完全な道徳的提携を行うことは取りも直さず王道主義の実現には外ならない。更に満洲国は近き将来に於て国際政治の理想的模型となるの崇き抱負を有する、此点よりしても積極的に国際補助語エスペラントの採用を御勧めしたい。近頃は動もするとエスペラントと非国家的なマルクス左傾主義とを混同して之を盲目的に排撃する者があるが、之は非常な迷想であり、又誤解である。元来エスペラント主義は国内に於て母国語と母国文化を尊重し、たゞ国外に対して共通語を使用すべきことを主張するものであつてこれほど健全で闡明的な国民思想はない。²⁴

この文章は、上記の陳情書と似た立場でエスペラントを推奨している。自由主義者で国際主義者であった藤澤は、1924年にヨーロッパから帰国後、ナショナリストになり、「マルクス主義は退歩思想で日本思想こそ新進思想なのだ」と共産主義を排撃した²⁵。「エスペラントと非国家的なマルクス左傾主義と混同」する現象を批判した藤澤は、満洲国の提唱する王道主義を賞賛し、その理想を実現するためによりエスペラントを満洲国の公用語にすることを勧めたのである。

「王道楽土」と「民族協和」というスローガンを掲げた多民族国家の満洲国²⁶には、満洲語はもちろん、日本語、モンゴル語、ロシア語、朝鮮語、英語なども使われ、公文書には満洲語（支那語）と国語（日本語）とが併用され²⁷、日本語、満洲語、ロシア語、モンゴル語の4つの文字を掲示する駅もあった²⁸。そうしたなかで、1930年代後半から、満洲国でのエスペラント普及の状況が変化した。例えば1939年の日本エスペラント学会の機

関誌では、「大陸における言語の問題」という特集で満州国でのエスペラント普及について議論している。つまり彼らは、母国語は尊重すると言いながら、一国で二種の国語を持つことは国民にとって負担になると考えた。日本人にとって満州語の発音は難しく、満人の日本語能力の程度はほぼゼロである。日本語の普及が必要であるため、「日の丸の旗のひらめく処は日本語で それを越えたらエスペラント語で」というスローガンを提出した²⁹。

結局、1940年代前後に、帝国主義の拡張とともに満洲に渡ったエスペランチストたちは、「王道楽土」と「民族協和」をスローガンに掲げた満州国ではエスペラントを共通語とせず、国際的な場でエスペラントを使用するだけに止め、日の丸の旗が掲げられた満州国では日本語を国語として普及すべきであると提言した。このように主張は、人類の平等を求め、政治的中立性を持つエスペラントの思想と矛盾するようだが、満州国でのエスペラント普及は、そもそもこの言語の追求する「普遍性」を積極的に実践しようと試みたものと考えられる。すなわち、安田敏朗が言うように、帝国化する日本語は、国民国家の枠内では「正当性、正統性」が国家により保障された「国語」が通用することになったのである。国語的論理の源泉は、いわゆる「普遍性」にまとめられる。そして帝国化した日本語にもりこまれた普遍性の内容は、「文明化」、「東亜共通語」、「八紘一宇」、「日本精神」などの理念を付与することによって、国民国家のボーダーを超越させようとしたものである³⁰。そのため、民族言語を尊重し、多民族の国の共通語として普及するという理念を持つエスペラントは、エスペランチストの普及によって国語国字の議論のなかで議論され続けていたが、多言語国家の満州国において国語としての日本語の拡張にともない、その帝國的「普遍性」を追及するようになり、日本語に付属するものとして普及されていった。

以上、日本の言語・文字改革運動におけるエスペラント運動のローマ字との関係、またエスペラントの満州国での普及状況について論じたが、以下、中国の言語・文字改革運動におけるエスペラントの位置づけを整理する。

(三) 中国のエスペラント運動および魯迅と胡愈之の役割

中国における文字改革運動を論じる際に、1919年の五四運動以降の中国白話文運動を無視することはできない。中国の白話文運動は、清末まで遡ることができる。1900年頃、白話文を主張した知識人はすでに存在した。1901年に裘廷梁は『無錫白話報』を創刊し、「崇白話而廢文言」というスローガンを掲げた³¹。同時期の各地方でも、これに似た主張が唱えられた。例えば、香港の鄭貫公が日本の言語改革に言及しながら、白話を口語と認識し、白話では中国全土で共通のものにならない恐れがあり、新聞を通じた新しい知識を普及することにも、まだ文言文に頼らざるを得なかったため、1905年に「半文半白」の「浅文」で書くことを呼びかけた³²。また、1899年日本に亡命した梁啓超が提出した「新文体」は実は「漢文訓読体」を基調にした当時の日本の新しい文体を模倣したもの³³であった。後述するが、梁の「新文体」は台湾の知識人にも影響を与えた³⁴。

一方、清末以来、プロテスタントの宣教師を中心とする西洋人たちは布教のために、漢字に代わる表記法を模索し、とりわけローマ字で各地域の言語を表記することに取り組ん

でいた。西洋人によるこの中国の文字改革は、1830年代にイギリス植民地下のインドで発生したローマ字論争に遡ることができる³⁵。また、譚嗣同が1898年に『仁学』で漢字を廃止し、音字を利用すべきであると唱えたことは、中国最初の「漢字廃止論」と言われている。さらに倪海曙が言うように、「清末漢語拼音運動や切音字運動」が中国の近代民族漢語拼音運動、あるいは漢字改革運動の第一段階となったという³⁶。だが、清末時期の運動は、まだ1つの近代国民国家の国語国字問題としてみなされていなかった。そのためか、現在よく提起される中国語ラテン文字運動の起源は、1922年からソ連で行われたローマ字運動の影響を受け、1929年2月瞿秋白が郭質生の協力で中国語ラテン文字方案を定め、同年10月に『中国拉丁化的字母』というパンフレットを出版した時点におかれることがある³⁷。とはいえ、宣教師によるローマ字の文字改革や識字教育などは、五四前後にもまだ影響力があり³⁸、ローマ字を用いて方言や口語を書くことはまだ維持されており、民間レベルでもローマ字関連の刊行物が出版されていた。

エスペラントと中国の文字改革運動との関係はどうであろうか。エスペラントが中国に伝来した経緯については、一般的に3つの説がある。1つ目は、1891年にロシアの商人がハルビンでエスペラントを伝え、もう1人のロシア人が1905年に上海で世界語講習会を開き、陸式楷らが参加したことから始まるという。陸は1906年に世界語学社を作り、世界各国のエスペランティストとのネットワークを構築し始めた。2つ目は、20世紀の始め、大杉栄からエスペラントを学んだ中国人留学生劉師培や張継らが、東京で『衡報 (Egaleco)』や『天義報 (Justeco)』を出版し、エスペラントとアナキズムを宣伝したことからである。1908年に劉らは上海に帰って「世界語伝習所」を開いた。3つ目は、ヨーロッパからである。1907年にフランス留学生の呉稚暉、李石曾、褚民誼らがパリでアナキズムの宣伝雑誌『新世紀 (La Tempoĵ Novaj)』を創刊し、エスペラントを普及しようとした。1908年にイギリス留学生の楊曾誥もエスペラントを学んで『万国新語』を出版した。また、フランス留学生の許論博が広州に戻り講習班を開き、翌年に華南圭がパリで『中国語世界語科学文学雑誌 (Ĥina-Esperanta Scienca Literatura Revuo)』を発行し、エスペラントで科学や文学を紹介した。このほかにも劉師復、区声白、黄尊生らは1910年代初期から、広州でエスペラントを普及し始め、1913年に『晦鳴録 (La Kiro de koko)』(のちに『民声 (La Voĉo de la Popolo)』に改名、大杉栄からの影響)を創刊し、アナキズムを宣伝しながら、エスペラントを普及した³⁹。

そのなかで、呉稚暉らは1907年にパリで発行した『新世紀』において、漢字を廃止してエスペラント語を使うことをと主張したが、国学者の章太炎から強い批判を受ける。章は、中国にエスペラントを普及することに反対するだけではなく、当時の中国の知識人が日本の言文一致運動の影響を受けて展開した白話文運動やラテン化運動にも反論した。つまり章太炎は、「言語(音声)」に応じる文字で表せなければ本当の言文一致ではなく、また言語統一や言文一致が結局は方言を制限することになると考えたのである⁴⁰。ちなみに、第一次世界大戦以前のヨーロッパのエスペラント運動は、中立主義の立場をとる運動が主流であったため、たとえある民族語や国語をエスペラントに取り替えることが主張されたとしても、それは本来のエスペラント運動とは関係ないものとされた。呉稚暉ほどのラデ

イカルな「エスペラント採用論」は、同時代のヨーロッパにもまだ出現しておらず、これに近いエスペラント観が登場したのは、1921年にランティによって設立された「SAT (Sennacieca Asocio Tutmonda、全世界無民族性協会)」以後のことである⁴¹。

これらの一連の動きを合わせて見れば、中国の白話文運動は、清末における新たな時代に現れた白話提唱の議論を受け継ぎながら、上述した「浅文」や「新文体」のように日本の言文一致運動の影響を受けたものであり、さらに、プロテスタント宣教師たちのローマ字運動や、知識人がエスペラントからもたらされた文字改革への考え方などが相互作用した結果、成立したものと考えられる。

次に、魯迅と胡愈之における台湾エスペラント運動との関わりについて言及しつつ、1919年の五四運動以降盛んになった白話文運動における中国人エスペランティストの果たした役割や、彼らの中国語表記のラテン化の主張とエスペラントの関係について論じる。

いうまでもなく、魯迅(1881-1936)は、中国白話文運動に大きな貢献をした人物で、思想家でもあり革命家でもあった。第三章で論じたように、彼は1902年から1909年にかけて日本に留学し、その際に張継の世界語講座を受講し、帰国してから多くのエスペラント関連の文章を発表した。また1920年代初期から、ロシアの盲目の詩人エロシェンコの作品を翻訳し、エロシェンコの北京大学でのエスペラント教育を後押しした。上海世界語学会の機関誌『世界』にもしばしば寄付をした⁴²。『新青年』には、1916年から1919年にかけてエスペラントに関する議論が多く出現した。胡適らのエスペラント反対論に対して、銭玄同、呉稚暉、区声白らが反論した⁴³。魯迅も「渡河與引路」(渡河と道案内)を発表し、エスペラントを支持する立場を見せた。

私はもちろん Esperanto に反対ではありませんが、討論したくはありません。私が Esperanto に賛成する理由は、きわめて簡単である上に、討論できようとは思わぬからです。賛成する理由を尋ねられれば、私の考えでは、人類は将来どうしても一つの共通語を持つべきだろう、だから、Esperanto に賛成だ、というだけのことです。将来通用するのが Esperanto であるかどうかは、断定のしようもありません。あるいは、Esperanto を改良し、より完璧なものとするか、あるいは、他にもっとすぐれたものがあらわれるか、それはまだわかりません。ただ現在は、この Esperanto しかないですから、まず、この Esperanto を学ぶしかありません。⁴⁴

この文章から、五四運動以前に、魯迅がエスペラントに賛同したことがわかる。また、日本でエスペラントを学んだ魯迅は、エスペラントの単語を挙げながら、「しかし、私はいま一つ、意見を持っています。Esperanto を学ぶのも一つですが、Esperanto の精神を学ぶのもまた一つです。——白話文学もこれと同じです。——思想がもとのままなら、看板をかえただけの元の木阿弥です。⁴⁵」と言っている。すなわち、1918年の時点で、魯迅はエスペラントの問題を考えるとともに、白話文を推進し始めたのではないだろうか。のちに魯迅はエスペラントの集会にも参加し、エロシェンコを北京に招いて自宅に泊まらせるなど、実際の運動にも取り組んでいた。

また、胡愈之（1896-1986）は、1913年からエスペラントを学び、1年後には上海の商務印書館に勤め、『時事新報』で「世界語與世界和平」という文章を発表した。胡は、1917年から1926年にかけて、中国白話文運動のなかで重要な雑誌である『東方雑誌』の編集を務め、雑誌に「世界語發達之現勢」、「世界語的理想與現實」、「ESPERANTO 以外の國際語方案」、「世界語四十年」など多くの文章を発表し、『國際語運動』⁴⁶という本も発行した。また、胡は1928年から3年間パリに亡命し、そこでエスペランチストでもある巴金と知り合った。1931年にパリから中国に帰る途中、胡はモスクワに滞在し、エスペラントを生かしロシアのエスペランチストに案内してもらい、モスクワを見て回った。同年に出版された『莫斯科印象』はその旅行記であり、多くの注目を集めたという⁴⁷。中国エスペラント運動のリーダーと言われ、生涯をエスペラント運動に捧げた胡は、1930年代以降、さらに積極的に文字改革運動に取り組んだ⁴⁸。

第三章で論じたように、エロシェンコは1921年に再び日本から追放され、ハルビンや上海に滞在した。魯迅に招かれて北京に渡り、蔡元培を通じて北京大学で教鞭をとり、エスペラントでロシア文学を講義しただけでなく、演劇活動にも参加した。台湾エスペラント学会の機関誌は、1922年にエロシェンコの「El Fabelaj Skezoj pri Ĥina vivo de Sro. V. Eroshenko⁴⁹」を連載し、翌年には別冊の「Unu paĝeto en mia lerneja vivo」（私の学校生活の一頁、1923.03）と「Turo por fali」（墜ちる為めの塔、1923.07）を発行した。しかしこのエロシェンコの作品の著作権⁵⁰をめぐる、連温卿と胡愈之の間で揉め事が起こり、『リーダーズ・ダイジェスト』の福岡誠一が仲裁に入った。また、蔡元培が北京大学でエスペラント学院を設立するために、連温卿からエスペラント文献を多く借りたまま返還しなかったというエピソードもある⁵¹。つまり、第三章での考察を通して、エスペラントは、台湾と中国の知識人をつなげる1つの重要な媒介となっていたのである。

魯迅や胡愈之のエスペラント活動は、彼らが取り組んでいた中国白話文運動と時期が重なっている。特に、魯迅らがのちに中国語表記のラテン化を提言したことは、日本におけるローマ字とエスペラントとの議論とも関連がある。以下、斉藤秀一の『文字と言語』を例に、中国のラテン文字運動とエスペラントとの関係を論じる。

（四）エスペラントと中国のラテン文字運動

第四章で論じたように、1927年頃に東京で結成されたエスペラント研究会「柏木ロンド」は、日本プロレタリア・エスペラント運動の最初の団体と言われる。そのメンバーである大島義夫が1930年に行なった新宿・二葉保育園での講習会を受講した40名のなかには、1939年の「左翼ローマ字運動事件」で検挙された斉藤秀一がいた。斉藤は1934年9月から1938年5月にかけて、唯物論言語学の立場に立った雑誌『文字と言語』を謄写印刷で自費出版する。のちに詳述するが、彼はプロレタリアートのためにエスペラントが必要だという理論を發展させ、魯迅を初めとする世界各国の進歩的な者とともに、各国語をローマ字化して識字運動を高めるため、エスペラントを使って国際的連帯を実践した⁵²。

上述したように、白話文運動を行った魯迅らのように、多くの中国知識人は、エスペラントを支持し、普及運動に熱心に取り組んだ。日本のエスペラント運動とともに行われた

ローマ字運動からも影響を受け、近代国民国家の国字問題の一環としての中国語表記のラテン文字運動が 1920 年代初期から始まった。もちろん、ローマ字運動も白話文運動も当初から順調よく発展されたわけではないが、それについて、魯迅はちょうど「柏木ロンド」が結成された 1927 年に、香港での講演で以下のように述べている。

より激烈な主張がないかぎり、彼らはおだやかな改革すら実行しようとはしないのです。当時、口語文が通用するようになったのは、とりもなおさず、中国文字を廃止してローマ字を使え、という議論があったためなのです。⁵³

これは香港での講演であったが、魯迅は口語文の通用のために、そして漢字を改革するために、白話文主張より激しいローマ字論を提案した。のちの 1930 年代前後に盛んになったラテン文字運動の最中、魯迅はさらに「漢字與大衆是勢不兩立的（漢字と大衆とは、どうしても両立しない）」や「漢字不滅、中国必亡（漢字滅びざれば、中国は必ず滅ぶ）」などの激烈な漢字廃止論を出した⁵⁴。ここにローマ字と「大衆」との関係が提起されたが、それは上述したように身に付けるのにさほど時間はかからず、学習効率の高いローマ字の普及によって、言語表記の「大衆化」を目指すという論理と似ている。特に 1935 年に「新文字（ラテン文字）」の教科書や指導書、あるいは辞典、新文字と漢字の対照読物を作ろうと集まった 688 人の署名の中には、魯迅をはじめ、蔡元培、陳望道、胡愈之、郭沫若、葉籟士、巴金など、多くのエスペランチストの名前がある⁵⁵。つまり、中国語表記ラテン化には、間接的にはあるが、エスペラントの影響を受けたと言える。また齊藤の『文字と言語』から判断すると、1930 年代以降の中国語のラテン文字運動は、日本のエスペランチストが中心に行ったローマ字運動との関連も深かったようである。

『文字と言語』の内容から、1930 年代以降もローマ字論が日本の国字問題議論のなかで重要なテーマだったことや、それがエスペラントと深く関わっていたことがわかる。創刊号には、「ローマ字教育の重要問題一つ二つ」（鬼頭禮蔵）、「小学校児童にローマ字を教へて」（渡辺保信）、「中等学校のローマ字教育」（渡辺六郎）、「ローマ字習字の教授に就いての一つの案」（齊藤秀一）などローマ字教育に関連する文章が多く掲載され、高木弘（大島義夫）の「言語学研究の新しい方向」も掲載されている。

未見号もあるが、「支那のラテン文字運動」関連の文章も多く見られる。例えば、第 8 号（1935.11）には鄭寧人の「錢玄同先生の印象」や、第 9 号（1936.04）には「支那のローマ字運動を助けよう!!」、魯迅の「あて字について」が掲載され、「ローマ字論の近頃」では「支那の国語・国字運動の研究熱」という中国における文字改革の動きが紹介された。また、次号は「支那のローマ字運動の号」とすることを予告し、魯迅「支那文のよみがへり」、木土の「注音字母とローマ字化」および之光の「民族解放とローマ字」などが掲載される予定であった。しかし第 10 号（1936.10）には、魯迅の訃報と、次号の第 11 号（未見）は『魯迅追悼号』とするのお知らせが見える。そして第 10 号に、「支那のローマ字運動への寄付」に上海拉丁化研究会への寄付者の名前が載せられており、黄郁が書いた支那の「新文字運動（ラテン文字運動）」を紹介する「方言文学とローマ字」も掲載されて

いる。また葉籟士・魯迅などの論文集『支那語ローマ字化の理論』という本が紹介され、中国の言語関連書籍を紹介する青江有因の長篇書評「文字の国から学ぶ」も載せられている。さらに第12号(1937.09)には、鳥海昇の「上海のローマ字運動」が掲載され、そこには魯迅の「ローマ字について」という文章も収録されている。また、「全文エスペラント書きのローマ字運動雑誌」である『LATINIGO』第2号の予約を募っている。

ここで鄭寧人の「錢玄同先生の印象」を見てみよう。鄭は、冒頭に「支那国際語運動史の最初の一ページに真先に大きく書きつけなければならないのは錢玄同先生である」と述べたうえで、錢が1917年に『新青年』の編集者陳獨秀に宛てた手紙と陶孟和に反論した手紙の内容から、彼のエスペラントに対する5つの見解をまとめている。

- (1) 国際語は文学に用ひることが出来る；
- (2) 現在はそれが発表された日を去ること遠くない。国際語は必ず次第に広まる。だから人々にすゝめなければならない；
- (3) 人造語は言語進化の必然的な段階である。歴史的遺物（民族語を指す）を重んじて人造語を軽んずることは進化のじやまである；
- (4) 国際語は人造語の案を以て正しい径路とする。民族語を以てほかの国語を征服することは出来ない；
- (5) 進歩した言語は必ず人間が手を加へたものである。⁵⁶

1906年から1910年にかけて日本に留学した錢玄同(1887-1939)も、中国白話文運動を論じる際に無視できない人物である。エスペランチストである錢は、白話文運動が始まる前に、すでにエスペラントという「人造語」を重要視し、それが言語進化の必然的な段階を踏んだものとみなしている。彼はこのような観点から、のちに魯迅らと文字改革運動に取り組み、漢字廃止論や中国語ラテン文字化論を提出した。すなわち、魯迅や胡愈之のみならず、錢玄同のケースもまた、中国のラテン文字運動をエスペラントと連動して捉えたことを示す1例だったのである。また『文字と言語』は、ローマ字運動に関する理論を構築しただけではなく、中国のローマ字論者とも連携した役割を果たしたのではないだろうか。

以上、日本と中国の文字・言語改革運動におけるエスペラントの役割をまとめた。以下の第二節では、まず日本や中国の運動が影響をもたらしたローマ字論を含む台湾の文字改革運動について簡潔にまとめ、第三節では、この文字改革運動のなかにある台湾エスペラント運動を位置づける。

第二節 1920年代から1930年代の台湾文字改革運動

日本統治下における台湾の言語状況について、『台湾語典』の作者連雅堂は、1932年に『三六九小報』で以下のように述べている。

我等はこうした文運が盛んになった際に、固有の華文や和文、英語、仏語、露語、

独語も使用可能であり、さらにローマ字で白話文を書いても構わない。しかし私は多くの人と互いに感情を通わせるため、**愛世語**も学ぶ。⁵⁷ (太字：引用者)

ここの「**愛世語**」とは、エスペラントのことを指す中国語の略称である⁵⁸。「世界語」という翻訳からの影響かもしれないが、文章から、当時の知識人はエスペラントはより国際的で世界の人々と交流しやすい言葉である、という印象を抱いていたことがうかがえる。また、日本時代の台湾における文字改革運動について、廖毓文は1954年に発表した「台湾文字改革運動史略」で以下のように述べている。

民国11年(引用者：1922年)から民国22年にかけての10年間、一連の文字改革運動が起こった。「白話文」を唱える人、「ローマ字」を唱える人、「台湾話文」を唱える人や、「エスペラント」を提唱する人さえいた。それぞれの主張は一致しなかったが、その意図は、異民族の支配下、全省民(当時は台湾人と称した)に新知識や新思想を吸収させるため、識字の利器を獲得させることだった⁵⁹。

のちに詳述するが、廖毓文は、台湾の文字改革運動を、黄朝琴らが漢文改革論を提出した1922年から黄石輝らの台湾話文論戦が終止符を打った1933年までと設定し、そして白話文やローマ字、あるいは台湾話文やエスペラントなどの運動は、すべて台湾の「文字改革運動」のために行ったものであると述べている。上述した日本や中国の例と対照させれば、この一連の台湾の文字改革運動は、**台湾語を主要な言語とする台湾における「国字問題」**の枠に位置づけられると思われる。1930年代以降の台湾文学界でも、「台湾語式の白話文」が「漢文」として一般的に認識されるようになった。例えば1936年に『台湾新文学』の編集者であった王詩琅は、以下のように述べている。

台湾文学はその特殊性ゆえ、**和文と漢文の二種の言語・文字**で表現されることはいまさら言うまでもないことだろう。[中略]。台湾の文学は現段階でこの二種の言語・文字で表現されることは仕方のないことではあるが、将来どうなるかは別として、現在の台湾人がまだ台湾語を使用している以上、台湾語式の漢文は、文学そのものの観点から考えれば、消滅してはならないだけでなく、前者(引用者：和文)の意義より減ずることにもならない。[中略] **漢文作家よ！客観的な不利な条件を打破し、奮起せよ！**⁶⁰ (太字：引用者)

王詩琅は、日本語が普及した影響で、作家たちが台湾語式の白話文を作ることが困難になり、漢文が消滅することを心配し、「漢文(台湾語式の白話文)作家よ！客観的な不利な条件を打破し、奮起せよ」と呼びかけた。彼がこの文章を書いた頃、「漢文」で台湾新文学を創作する作家は激減しており、知識人の間では一連の「民間文学運動」や「台湾語整理」などの動きが進められた。すなわち1922年から1933年にかけて台湾文字改革運動が行われてきたが、1936年の時点で王詩琅は、まだ「漢文作家」に奮起せよと呼びかけ

ていた。このことから、この「台湾語式の白話文」は、近代文体としてはまだ構築中とも言えるが、文体の名称は定着していた。

本節では、1920年代から1930年代までの台湾文字改革運動を簡単に整理し、次節では 에스ペラントの角度でこの運動を考え直したい。

(一) 1920年代初期の台湾文字改革論

1921年に陳端明は『台湾青年』で「日用文鼓吹論⁶¹」を発表したが、「台湾白話文の嚆矢」とされるのは、1923年1月の黄朝琴の「漢文改革論」と黄呈聰の「論普及白話文的新使命」である⁶²。陳の文章が台湾白話文の嚆矢とされないのは、黄らの文章が白話で書かれたものである一方、陳の文体が文言文だからであろう。いずれにせよ黄らの文章が発表されてから、台湾の白話文運動が推進され、『台湾民報』は創刊の記念事業として「台湾白話文研究会⁶³」を設置し、「漢文字改革⁶⁴」についての議論も続けられた。

台湾白話文運動の火付け役の黄呈聰は、第一章で触れたように、1913年に児玉四郎の通信教育を受けて 에스ペランチストとなり、彰化で 에스ペラント研究会を開いた⁶⁵。彼は1916年に日本 에스ペラント学会に入会し、1921年に設置された国際商業語協会の会員となった。早稲田大学留学中の黄は、1923年に発表した「論普及白話文的新使命」で、中国の白話文運動を見学した経験を述べ、台湾でも白話文を普及すべきであると建言し、日本の言文一致体や言文一致の概念を提起した。

凡そ一つの国や一つの社会には、一つの統一された言文がなければ、民衆に智識を容易に普及できないだろう。それを一つの中心勢力として、一つの特別な民族の性格をまとめあげていくのである。例えば日本の文章には、普通文、白話文、書信文などの区別があり、学ぶには困難であったため、二十年前にすでに言文一致体の議論が提唱された。当時保守的な人は、あまりにも俗で下品だと反対したが、しかし民衆はその便利さを感じて、以後徐々に普及していく。今では、公用文や一部の特別な著書を除けば、大体この言文一致の文を用いる。例えば新聞、雑誌、新しい著書や手紙などもこの言文（一致）を使用する。⁶⁶

黄呈聰の白話文観は中国からの影響が大きいといわれるが、しかし彼が日本に留学していた時期は、 에스ペラント運動も言文一致運動も盛んになった頃であり、また彼がいくつかのエスペラントの関連組織に参加した。文章の中にも言文一致を強調しているため、彼の文体観は、中国よりは日本からの影響が強いであろう。また、彼は次のように述べている。文体についての考えを検討するため、原文のまま引用する。

將日本話教我們是好，**總也要教我們台灣話**，自小学起用我們的話來教各種的科学和一般的智識，豈不是普及文化快一点嗎？若是更進一步，**用這個白話文做漢文自小学教他到六個年卒業，就社会上的利用是很方便了**。我很希望當局採用這個白話文的，放棄那深遠難解的古文，這是最要緊的。⁶⁷（太字：引用者）

この文章からは、台湾語に基づいて白話文を普及しようと呼びかける黄呈聰が言文一致体を使用していることがわかる。中国でも日本でも、古典漢文から口語体まで一気に発展したのではなく、いくつかの段階を経ており、その間、さまざまな文体が発生したのである。上述した中国の「新文体⁶⁸」や「浅文⁶⁹」、日本の「漢文訓読体」や「言文一致体」⁷⁰など多くの文体が形成された。台湾白話文運動の初期に現れた文体も「言文一致体」であることは、黄呈聰だけではなく、黄朝琴の文章からもうかがえる。サブタイトルが「唱設台湾白話文講習会」の「続漢文改革論」では、黄朝琴は言文一致体で書くことを呼びかけている。

以最少的時間，使他們得著最大的智識。教授的方法，用言文一致的文体，以言語根柢，使聽講的文，易記易寫，免拘形式，不典句，起筆寫白就是。⁷¹。

ここの「言文一致的文体」は「言文一致体⁷²」のことである。この文章は白話文で書かれたものであるが、「得著」、「使聽講的文」などは台湾語の口語体に近いものである。そして、「言語」という語彙は日本語から借用した台湾語読みの「giân-gí」となり、「們」は複数を表すことばで、台湾で出版されたアモイ語辞典「甘字典⁷³」から bûn、būn、lín といった読み方が確認できる。すなわち、「們」の台湾語訓読みは lín で、「他 (i)」、「你 (lí)」、「我 (guá) / 人 (lâng)」を lín / n と加え、より白話に近づけると、「他們 (in/tha-bûn)」、「你們 (lín/lí-bûn)」、「我們 (guán/lán/ngóo -bûn)」となる。また、黄朝琴と黄呈聰は文章でしばしば言文一致を提起したことから、当時、言文一致の議論は、留学生の間で広く知られていたのではないだろうか。さらに 1925 年以降も、『台湾民報』が設けた「本社特設五間」に対して、「希望貴社多鼓吹言文一致或白話文容易及衆併翻譯外国時事」、「全文改做言文一致体」、「添載羅馬字的記事」、「希望本報旬刊改作日刊、羅馬字白話副刊」など⁷⁴、読者から文字改革に関する意見が寄せられている。

ところが、次に論じるように、日本への留学生が移入した言文一致観やその後の台湾白話文に関する一連の動きは、同時に中国の白話文運動に影響されながら変化していく。

(二) 模倣と創造による台湾の近代文体：「台湾白話文」

日本の言文一致は、「東京語」から「標準語」への文法制定や言語の近代化と深く関わっていた。国語学者森岡健二の言うように、「言文一致」を実現する上で最も大きな困難は、「言」をどうとらえるかという問題である⁷⁵。では、「中国語」がまだ台湾に浸透していない日本統治時代に、台湾人が「中国白話文」を書くことは、どのような意義があったのだろうか。

言文一致体で書くことを呼びかけた黄朝琴は、「私の意見としては、若い学生には、奨励できるが、年取った人には、台湾の在来の白話文を教えたほうがよい。このような事業を当局に実行させるのは、実際に不可能だろうか？⁷⁶」と述べながら、「台湾の在来の白話文」を提起した。実際に白話文を書くには、「言」と合わせなければ成り立たないため、

漢文改良の初段階でも「口語体」が出現していた。例えば、1924年の『台湾民報』には「新正」という口語体に近い文体で書いた文章が掲載されている。文体を論じるため、原文のみ引用する。

……好兄弟姊妹！汝看咧！嬌嫩的春風、一下吹來、草木就漸々發芽、軟暖的陽光、一下照來、鳥仔就唱歌、狗仔就会伸脰、猫仔也就展威起來、水牛也会『吁嘛』『吁嘛』魚啦、鱉啦、雞啦、鴨啦、老鼠啦、蟻蠶啦、無論山禽野獸、一切都盡活動起來！

親愛的兄弟姊妹！當這個萬物更新！發展！的景象、咱大家也應該一發有元氣！有精神！有膽力！相共來打開咱的門路！相共來掃盡前途的耕荊！相共來建設一條。光明！闊大！自由！平坦！的活路徑。這豈不是咱大家的本領？這豈不是咱大家的使命？幾句零刪話，抵做新正頭一句的『恭喜』、大家平安。⁷⁷

「漢文改革論」が掲載されてから、1924年には台湾語の「土音」（白話音、訓読み⁷⁸）にあてた漢字で書かれた口語体白話文が出現した。それまでは、小野西洲が言うように、当時台湾人が書いた口語文はローマ字文献にしか存在しなかった⁷⁹。台湾人の口語体の実践として、ローマ字で書かれた脚本や小説など多くの作品が出版されたが、中国白話文を模倣して台湾語の「文言音」（音読み）を中心とする文体が多かった。しかし「土音（白話音）」を中心とする「口語」をあてた漢字で書かれた「新正」のような口語体はあまりなかった。

ところが、このような口語体が掲載された後、まもなく中国白話文を主張する知識人から批判が起きた。上海に留学している施文杞は文章の中に、友人の林耕餘がかつて「台湾人做的那種白話文，真是弄笑話！他們做那種台湾式的白話文，要是他們後日到中国來，豈不還要習中国的白話文嗎？」⁸⁰と「台湾式の白話文」を嘲弄したことを引用しながら「新正」を強く批判した。ここも文体を議論するため、原文のみ引用する。

還有一件我要作鄭重地声明！就是文言文、和白話文的分別。文言和白話是絕對的不同。若是同一篇文章，忽而白話，忽而文言，（我的朋友各丁君也是有這種毛病）忽而用著『的』『嗎』『了』『呢』，忽而『之』『乎』『也』『者』都有，好像是一個人身穿著洋裝，手拿著司的克，Stick 而頭則戴掛帽、（台湾土話叫做碗帽仔）而身則穿前清時代的旧式鞋，像這樣你看成得體統嗎？我現在再把本期出版的一第二卷第一号一文芸欄內，有一署名『性』做的一編『新正』的文章，這一編完全是方言—土語—的白話文，像稱『鳥』為『鳥仔』，稱『狗』為『狗仔』，這都是泉漳的方言。若照普通的白話文写起來，是應該叫做、『鳥兒』、『狗兒』。

又用一個『咱』字，這也是泉漳的方言，普通白話是叫做『我們』。像這種對於普通白話文絕沒心得的作者，也公然做文章來『民報』上發表，我實在是替他羞煞呀！⁸¹

施文杞は、白話と文言をきちんと区別せずに、同じ文章のなかに両者を混ぜて使用するの**は**本当の白話文ではないと強調しながら、「新正」の言葉遣いを修正した（若照普通の白話文写起来，是应该叫做、『鳥兒』、『狗兒』）。このことは、台湾人が中国白話文を模倣し白話文を作ったことを裏付けるものであろう。ところが、この文章のとなりに林耕餘の「対在台湾研究白話文的我見」も掲載されている。林は、自分は白話文も研究せず、国語（中国語）も少し喋れるだけだ⁸²と述べながら、台湾人の白話文を批判し、台湾に「中国国語」の学習機関を設けるよう建言した。ところが、2人の文章には台湾語を母語とする者ならでの用例が見られる。

こうした模倣と修正によって、台湾人は白話文を書く際に、中国白話文の「語彙」を選び、頭の中に台湾語の「文言音」（音読み）や「白話音」（訓読み）を混ぜて発音しながら、中国白話文に似たさまざまな文体を作り出したのである。上海から多くのテキストが輸入され⁸³、また中国に渡った台湾人留学生からの影響で、文体の模倣対象のモデルが中国白話文になった。そのため、言文一致観は日本の影響があっても、1920年代初期の台湾文字改革は、言文一致体や口語体の出現時間は短く、その後に白話文章体や雅俗折衷体などの文体に変化し、台湾語（言）とは異なる中国白話文（文）と合流した。そのため、「類中国白話文」の台湾白話文が主流となり、「言文不一致」の現象が生じた。そのため、1930年代に再び「口語体」が提起され、より言文一致に相応しい「台湾話文⁸⁴」が改めて議論されたのである⁸⁵。

1930年代後半、台湾の言語状況や文字使用は、さらに大きな変化が起きた。理論物理学者である武谷三男は以下のように述べている。

本島人で大学を卒業した人々も、漢文によって台湾語をよむことができる人はむしろ少ないのである。その上国語普及の名のものに、書房は昨年（1935年）から絶対にゆるされなくなり、公学校の漢文は今年から廃止となった。また、そのもっとも著しいことは、今年（1936年）から台湾の諸新聞が漢文欄を全廃した**こと**である。それは表面には自発的ということになっているが、いろいろ聞くとところによると、実は小岸参謀長が主となって強制的、半脅かつ的に施政記念日までに廃止するようにせしめたのである。[中略] 書房の禁止、公学校の漢文禁止、諸新聞の漢文欄撤廃、いたるところ公開の場面で台湾語禁止、できるだけ台湾語を使わせないこと、等によって台湾の民衆は台湾の言葉にたいする文字を、文化を失ったことになる。[中略] 何となれば台湾語を記述する漢文はそれほどいきわたっていないのに最近においてのきびしい漢文禁止のため、漢文は人の目から姿を没せしめられ、字引のあらわれようはずがない⁸⁶。（太字：引用者）

ここで武谷の言う「漢文」は、漢字で書いた台湾語を表記する文章であろう。しかし40年間近く「国語」を普及してきた結果、台湾人は台湾語で漢文を読める人は少なくなった。漢文欄禁止、台湾語禁止などの措置によって、文字も文化も失うことになった。「自

発的」とされているが、武谷は同文のなかで、「国語普及の見地からすれば、ローマ字による方法が一番はや道であり親切な方法だと思える。ローマ字を習得するのは数ヵ月であり、ローマ字による台日字引をつくれば、大した苦勞なしに、今使っている台湾語を基礎として国語を知ることができ、国語普及は数年ならずして可能であろう」と述べている。すなわち、彼はローマ字を以て国語を普及すべきで、ローマ字で台湾語を表記すべきだと主張しているのである。言い換えれば、国語の普及によって、武谷が言うように「台湾の民衆は台湾の言葉にたいする文字を、文化を失ったことになる」が、「今使っている台湾語を基礎として国語を知ることができ」る。こうした考え方は、当時方言に関心を持つ当時のローマ字論者の論理、つまり、国語と方言もローマ字で書けば、国語をより普及させることができ、方言も保存できるという考え方と似ている。また、同じ1936年、雑誌『教育』⁸⁷に国語国字問題に関する議論が多く掲載されている。つまり、武谷が提起した台湾の国語国字問題や彼のローマ字論は、1930年代後半も続けられていたローマ字論を含む国語国字に関する議論が、植民地台湾に与えた影響を反映したものではないか。

本章の第三節では、台湾の文字改革運動におけるローマ字とエスペラントとの関係についても論じるため、以下の第三小節では、台湾の口語体を表記するもう1つの文字—ローマ字についての議論や運動のプロセスについてまとめる。

(三) もう一つの文字改革：口語体を表記するローマ字

台湾のローマ字運動や台湾話文に関する先行研究は少なくない。研究の主流は、新文学運動や台湾語構築論に関する議論であり、日本の国字問題としての考察や言文一致運動との関係などは、あまり注目されていない。しかしながら、日本統治時代に台湾のローマ字運動に最も力を入れた蔡培火は、実際、日本の思想家植村正久や社会運動家田川大吉郎のローマ字論に影響されていた。

蔡培火(1889-1983)は北港郡北港街の生まれ。台湾総督府国語学校師範部を卒業後、数年間公学校に勤務した。その後、東京高等師範学校に入学し、1919年に「啓発会」、1920年に「新民会」の幹事を担当し、のちに『台湾青年』(『台湾民報』の前身)の編集者及び発行人を務め、台湾社会運動の先駆の1人となった⁸⁸。クリスチャンでもある蔡は、日本留学期間中に植村正久⁸⁹や田川大吉郎⁹⁰と知り合い、『台湾青年』を創刊した際にも、彼らに原稿を求めた。植村は創刊号の「台湾の青年に望む」で、以下のように述べた。

台湾基督者の間には羅馬字が行はれて居る。実に驚くべき進歩である。内地人は其の後に瞠若たらずんば有らず。其の基督者の既に採用して居る羅馬字を台湾人の間に普及せしむる様にしたい。政府当局者に之を奨励するの智慧と雅量が有りたきものである。内地の羅馬字論者も此所に心付きて、台湾の羅馬字実行者に声援を与へられたい。斯くて羅馬字は帝国の南端から北上する如き事実を見るに至るであらう⁹¹。

植村は、台湾のクリスチャンがすでにローマ字を使っていることを知り、彼自身もロー

マ字論者の立場から台湾のローマ字を応援している。また衆議院議員の田川大吉郎も第3号で「歐米の思潮と羅馬字」を発表した。

ローマ字を採用されることが、台湾の開発を助けるに最も有効の計画と存じます。

[中略]、今日の台湾は、第一維新の日本である。日本の第一維新当時を顧みて、其の当に為すべくして為す能はざりし弊に鑑み、断乎とし羅馬字を採用すべきである。其の普及に務むべきである。是れ老年の事業に非ず、青年の事業である。

「台湾青年」は、その普及奨励に、力を尽さるべき筈であると信じる。[中略]、曰く心を虚にして欧米の思潮に学び、旧来の勢力に馴れて、漢字を学び、其の思想に囚はるゝこと勿れ。曰く支那文学を革め、羅馬字を採用し、以て多数島民に、文化の澤に浴せしむると共に、母国たる日本の為にも、其の開化進前の模範を示されたいと只此だけである⁹²。

田川はローマ字論者であっただけではなく、日本エスペラント協会の会員にもなった⁹³。1920年代初期の日本は、エスペラント運動とともにローマ字運動が盛んになった時期であったため、その影響を受けた蔡培火は、積極的に台湾でローマ字普及運動を始めた。『台湾青年』の表紙にローマ字のタイトル「The Tâi-oân Chheng-liân」を付けたのは、台湾人が漢文を台湾語で読むことと、蔡が雑誌を通じてローマ字を推進しようとしたことも示すためであろう。植村と田川の文章が掲載されたあと、蔡培火の「新台湾の建設と羅馬字」や、張洪南の「誤解されたローマ字」⁹⁴などの文章も発表された。

清末から日本敗戦まで、台湾のキリスト教によって出版された雑誌や刊行物には、『台湾教会公報』のように台湾語ローマ字で書かれたものも多く、ローマ字運動に直接関わっていないとしても、文字によって残された史料は多い⁹⁵。蔡培火の奔走で台湾文化協会は1922年6月からローマ字普及を事業の一部とすることを決議し、同年8月よりすべての通信をローマ字で綴るように決めた⁹⁶。だが、文協の主導者の多くは漢文擁護者であるため、ローマ字運動は順調に発展しなかった。とはいえ、1932年に林猷堂とイギリスに留学した息子の林攀龍が霧峰菜園で「一新会」を創設し、文化啓蒙運動を続けた。そこでは講演会、婦人茶話会、漢文研究会などとともに、「白話字教授（ローマ字講座）」も設けられた⁹⁷。また1934年5月、蔡培火と林攀龍が『台湾白話字普及の趣旨及び島内賛成者氏名⁹⁸』を出版し、日本政府に陳情しようとした。さらに蔡は仮名式白話字を考案し、1936年に「台湾に於ける国字⁹⁹」として認可してもらうために当局に出願したが、もちろん成功しなかった。

このように「国字問題」としてローマ字運動を行い、さらに統治者への働きかけに最も力を尽くした人は蔡培火であった。しかしながら、武谷三男が述べているように、「本島人のほとんどが文化に浴し得ないのを憂慮し、蔡培火氏がローマ字化を企てたが当局の反対に会ったので、内地に来て、諸名士、ことに以前の総督に相談したところ一同大賛成であったのが、台湾ではやはり反対された¹⁰⁰」という結果になった。

とはいえ、台湾のローマ字運動は知識人の間にとどまらなかった。1922年から1923年

までに『台湾時報』には Kakinami-Seiiti の「Kootoosyo no Hanasi (紅頭嶼の話)¹⁰¹」という調査研究が4回掲載された。全はがローマ字で書かれた日本語で、最後の「Kôtôsyô nite (紅頭嶼にて)」から、作者がヤミ族を調査するため紅頭嶼に滞在したこと、またローマ字の綴り方が統一されていないことがわかる。作者がローマ字運動にどこまで参加したかは不明だが、ローマ字の実践者であることは確かであろう。この時期の内地ではローマ字運動が盛んだったため、『台湾時報』にこうした文章が現われるのは不思議ではない。おそらく台湾にも日本人ローマ字論者は少なくなかったであろう。どこまで影響力を持ったかは不明だが、1930年代初期に「台湾ローマ字会」という組織が存在する。創立者や活動期間などは不明だが、雑誌『台湾ローマ字¹⁰²』を刊行した。

要するに台湾のローマ字運動は台湾の文字改革運動の一環として行われたものであり、今日まで、台湾語の文字改革や表記法に大きく影響を与えている。しかし上述したように、1920年代や1930年代に日本や中国で行われたローマ字運動は、エスペラントと強く連携した側面があるが、台湾では両者はあまり密接な関係を持っていなかった。それはおそらく、台湾でのローマ字普及は、清末以来、特に教会関係者によって長い間使用され、すでにその基盤を持っていたからであろう。

第三節 文字改革運動の一環としての台湾エスペラント運動

文学評論家の劉捷は、1936年に発表した「台湾文学の史的考察」のなかで、黄呈聰の「論普及白話文の新使命」、黄朝琴「漢文改革論」、蔡培火「新台湾の建設と羅馬字」、張梗「討論旧小説的改革問題」、連温卿「将来之台湾語」、張我軍「新文学運動的意義」など、1920年代初期の新文学の導火線となった6篇の論文を挙げた¹⁰³。今日の台湾新文学運動や「新旧文学論争」に関する研究の多くは、黄呈聰や黄朝琴、そして張我軍に注目している。新文学運動と言語との問題を分けて考え、特にローマ字運動や台湾語に関する問題を避ける傾向がある。しかし劉捷は、連温卿と蔡培火の文章を重視していた。張我軍が「新文学運動的意義」において指摘したように、「私たちが現在語っている新文学運動は少なくとも2つの要点がある。それは白話文学の建設と、台湾語言の改造である¹⁰⁴」。新文学運動が小説や詩歌または評論だけではなく、「台湾語の建設」とつながっていたのは明かである。

植民地台湾の言語環境から見れば、中国白話文であれ、台湾話文であれ、ローマ字や仮名などの「文字」は、すべて台湾語を表記する記号として使われていた。そして新文学運動における「台湾語改造」の議論は、漢字文化圏に属する日本や朝鮮、または中国と同じように、文字改革を通じて「近代語」を構築しようとする試み、つまり台湾語を近代語に改造するための白話文建設という議論となっている。

本節では、台湾の文字改革運動におけるローマ字を含むエスペラント問題を考えてみたい。まず、国語国字問題の島内での反応やエスペラントの内容がどのように変化していったのかを検討する。また1930年代のエスペラントと「大衆」についての議論を整理しながら、「新文学に関する導火線となった」論文の1つである連温卿の「将来之台湾語」を取り上げる。そこで提起された台湾語の文法制定とエスペラントの関係、およびその歴史

的意義を論じる。

(一) 台湾の国語国字改良論とエスペラント

劉捷が挙げた「新文学の導火線となった」いくつかの文章が発表された前後に、日本の国字改良に関する議論が台湾に伝わってきた。例えば『台湾日日新報』は、「差迫って来た国字改良 同時に万国語の普及を急げ」という文章を掲載した。少し長いが重要なので引用する。

国字改良の論は、長い間の問題であるが、国民生活上の大問題であるため、今尚ほ何等の解決もつかない。然しながら、ローマ字論者やエスペラント論者、仮名文字専用論者などが、夫々熱心なる運動を続けて、今日は相応の地盤を築き上げてゐる。更に其上大阪の北村貫吾君等の如き新字創造論者迄現はれて、日本在来の国字が、今日文明国民の使用する文字として甚だ不適當だから、何等かの改善方法を講じやうと熱心努力してゐる。[中略] 但し国語が今後大いに整理され、難解な或は廻はりくどい漢語や和文などが次第に国民の記憶から薄らいて行き日常語として平生使用する口語だけを綴つて用が便じられるやうな時代ともならば、ローマ字の専用或は可能かも知れない。今日のやうに交通が至便となり世界各国の交渉が頻繁となつて来ては、将来各国語は、互ひに相融合スル傾向を帯びて来ること[中略] 従て此儘で進んでも各国語が次第に整理され、自づから一種の世界共通語といふものが必要に迫られて現はれて来るやうにも考えられる。この点に着目して世界共通語の普及に熱中してゐるのが、例のエスペランチストである。[中略] 今日国内で国語改良論がやかまして論じられてゐる如く、世界各国の間にも世界共通語の要求や運動がある。此傾向は、今後益々盛んにならずにはゐないであらうそこで吾人は、わが国民に向つて**国語の改良**と共に、世界語の普及運動に向つても熱心ならんことを希望する。¹⁰⁵ (太字：引用者)

作者は「国字改良論」から議論を始め、これからは「口語」の時代になり、日本語もローマ字を専用する可能性があるかと推測する。そして、世界各国の交渉が頻繁となる時代が来ているため、「国語改良」とともに世界共通語のエスペラントの普及を呼びかけている。つまりローマ字や仮名運動によって「国字」がますます「口語」を表現できるよう改良されていくなかで、世界と頻繁に交流していく新しい時代に応じるためにも、世界共通語であるエスペラントも「国語」の規模で普及することを求めている。また、同年の1924年に『台湾日日新報』でも「エス語を国際補助語に帝国学士院でも使用決定¹⁰⁶」、翌年の『台湾日日新報』漢文版でも「国際語與本邦¹⁰⁷」などのニュースが掲載されている。そのなかに、エスペラントが帝国学士院での使用が決定されたことのほか、1925年5月ベルギーで開かれた万国学士院連合総会において、万国共通の国際補助語の協定が第一のテーマとなったことに対して、日本代表の福田徳三は日本学士院の会員が国際補助語を必要とし、「益斯伯蘭特」(エスペラント)を望んでいると述べたことが報道されている。つまり

1920年代初期に、日本の国字改良論はエスペラントの議論とともに台湾に伝わってきたのである。

一方、第二章で触れたように、日本人エスペランチストは国語を擁護する立場にたっていたが、台湾人にとっては、台湾の言葉を抑圧する日本語である「国語」は、むしろ抵抗の対象となっていた。国語国字の議論が展開されていくなかで、台湾人は自分が立脚する台湾の「国語国字問題」を考え始めた。上述したように、黄呈聰らは日本の言文一致運動に影響を受け、台湾で白話文普及や漢字改革を始めた。蔡培火も内地のローマ字論者の支持を得て、島内ではかの教会関係者によって積極的にローマ字運動を行なった。漢字の枠で文字を改革しようとする黄呈聰らと、台湾語をローマ字にしようとした蔡培火の考えには、1つの共通性がある。それは「口語」を書くことである。だが話しことばと書きことばを一致させるためには、言葉自体やその言語の文法を整理する必要がある。後述するが、それを具体的に提案したのは、エスペランチストの連温卿が書いた「将来之台湾語」であった。

ところで植民地の「国語運動」は日本語運動であり、それが進展するにつれ台湾語は抑圧され¹⁰⁸、その趨勢は1930年代後半には皇民化運動とともに強化された。島内のエスペラント運動の規模もだいぶ縮小してしまう。そしてこの帝国の拡張とともに勢力が広まった「国語」を「世界語」にしようという主張が1940年代以降に出現した。1943年4月の『台湾日日新報』に掲載された「「国語」は「世界語」となり」という記事のなかで、以下のように述べている。

今や国語は英語を凌ぐ世界語にならんとしてゐる。茲を想ふ秋本島に於ける国語問題は従来の如き微温的方案より一段と飛躍して台湾一家の名誉にかけても一日も速かに解決せねばならぬ問題であり之が解決の方法は元より政治的に教化的に色々と考えられるが、要は本島有識者の地位にある者が現下皇国民としての責務の重大なるを想ひ国語常用運動の陣頭に立ち率先垂範強力なる指導と勇敢なる実践に一層の努力を払われる事が最も根本義であると信じ此処に各位のご協力を切望する。¹⁰⁹

こうした発言は、第一節で引用した安田敏朗が言うように、国語的論理の源泉は、いわゆる「普遍性」にまとめられるため、満州国でのエスペラント普及も、この言語の追求する「普遍性」を積極的に実践することとも呼応しているのではないか¹¹⁰。ここでは、満州国でのエスペラント普及はなく、台湾での国語常用運動について語っているものだが、国語としての日本語は、皇民化運動の高揚によって、本来はエスペラントを意味していた「世界語」という名称を借りることによって、それまで強固な位置を占めていた英語と並ぼうとしたことを示している。

また、こうした国語常用運動が行われたことで、1920年代に始まった台湾の文字改革や、徹底的な「言文一致」を目指す1930年代の「台湾話文」は挫折したのである。ところで1930年代初期の台湾における国語国字問題が議論されるにあたっては、日本や中国

と同じように「大衆」をめぐる、さまざまな意見が提出された。ローマ字の学習効率の高さが強調され、そしてプロレタリア運動と結びついたエスペラントも「大衆語」として認識されている。以下の第二小節では、ローマ字とエスペラントおよび「大衆」についての議論を整理する。

(二) ローマ字とエスペラントおよび「大衆」

上述したように、1930年代以降、魯迅は「漢字と大衆とは、どうしても両立しない」や「漢字滅びざれば、中国は必ず滅ぶ」などの漢字廃止論とローマ字論を出した。彼が言うローマ字と「大衆」との関係は、ローマ字普及による言語表記の「大衆化」を目指す齊藤秀一の論理とも似ている。1930年代の日本と中国の「大衆語」についての議論や研究は多くの蓄積があるが、同時代の台湾でも「文芸大衆化」というスローガンが掲げられ新文学運動が進められていた¹¹¹。「文芸大衆化」という課題が1934年5月に全島的な文芸団体「台湾文芸連盟」によって提出された¹¹²が、すでに1920年代後半から「大衆」とローマ字との関連が注目されていた。例えば葉榮鐘は1929年に「關於羅馬字運動（ローマ字運動に関して）」という文章で、ローマ字と大衆教育との関係を論じた。そのなかに魯迅や齊藤の論と類似する部分もあれば、連温卿が言うような台湾語の標準化を重要視する部分もある。

現在の台湾では、あらゆる**無産大衆**は文盲で無智であるのみならず、**大多数**のいわゆる**プチ・ブルジョア**さえも文字が読めないのだ。学校教育の普及は遅れて振わず、社会教育もまた取るに足りない。今日のいわれる学校教育、社会教育そのものの内容は、果たして吟味する必要があると言えるのだろうか。こうした様々な条件のもとで、「**大衆教育**」という問題は、疾うから私たちの島内の文化運動の目標となり、様々な解放運動の先行条件となっていた。[中略] こうしたなか、蔡培火氏が提唱したローマ字運動は、私たちが議論し研究する対象であることは言うまでもない。[中略] 私はローマ字運動については全くの門外漢である。[中略] 私はこの問題について、それが当たっているか否か、逐一指摘することはできないが、全く意見を持っていないわけでもない。その中で私が最も懸念しているのは、**台湾語の標準語**の問題である。この問題は2つのレベルから考えられる。第一は**語彙の拡大**、第二は**言語の統一**である。¹¹³（太字：引用者）

葉榮鐘は、文章の始めに、あらゆる**無産大衆**だけではなく、**大多数**のいわゆる**プチ・ブルジョア**さえも文盲である、という台湾の現状を述べながら、「大衆教育」の問題を提起した。また、蔡培火が十年間推進してきたローマ字運動があまり注目されてこなかったことを遺憾に思うと同時に、蔡のローマ字運動に関心を持っていることを示した。さらに葉は、ローマ字問題を「台湾話的標準語」の問題と同時に捉え、台湾語標準語の問題を「語彙の拡大」と「言語の統一」の2つのレベルから見ている。蔡がローマ字そのものの普及に力を入れ、言葉や文法など具体的な問題にはあまり言及しなかったため、葉はこの2

つの論点を提出したのであろう。「大衆教育」問題をローマ字問題と同時に考えた葉は、同じ文章のなかで、「大衆教育」の視点から、台湾語による文学創作を呼びかけた。

それゆえ私は、島内や島外にいる筆の立つ同胞たちが、すぐにでも私たちの側に立ち、台湾語をたくさん用いて詩、文章、小説、脚本を創作して頂きたいのだ。そうすることで、台湾語を完全に正確な言語にすることができ、全島の重大な問題を解決することができるのだ。[中略]とにかく、「大衆教育」という問題は一刻も早く解決すべき全島の重大な問題であり、標準語もまた肝要な問題である。——これは言うまでもないことだ。¹¹⁴

葉は台湾語を「完全に正確」な言語とすることによって全島の重大な問題を解決することができると考えた。また、台湾語で文学作品を書くことは、台湾語の標準化につながるばかりでなく、言葉の標準化が早急に解決すべき「大衆教育」という重大な問題にも関連していると述べた。言い換えれば、文字が標準化されなければ、台湾語を用いた大衆教育を普及させることができず、また、「**大衆教育**」という問題は、疾うから私たちの島内の文化運動の目標となり、様々な解放運動の先行条件となっていた」と述べているように、台湾語を用いた大衆教育を普及させることができなければ、文化運動や解放運動の先行状況も失うことになるのだと葉は考えていた。さらに葉は、1932年の『南音』で「大衆文芸」への期待を明言する。

それゆえ、文芸は必ず大衆に接近し、大衆に楽しさと慰めを提供し、彼らに自身の本来の姿や思想、感情を捉えさせなければならない。[中略]いまの台湾には文芸が、とりわけこのような通俗的な大衆文芸が不足している。[中略]私は、私たち台湾の風土、人情、歴史、時代を背景とする、面白くかつ有益な大衆文芸の誕生を待望している。¹¹⁵

葉は、文芸は必ず大衆に接近し、彼らに自身の本来の姿や思想、感情を捉えさせなければならないと述べながら、「通俗的な大衆文芸」、特に「台湾の風土、人情、歴史、時代を背景する、面白くかつ有益な大衆文芸の誕生」を期待したのである。このように、葉は、台湾語の標準化と結びついた「大衆文芸」の議論を踏まえて、台湾人全体に共通する生活に立脚した「第三文学」を提出した。

一つの社会的集団は、その人種、歴史、風土、人情社会によって共通した特性が形成される。このような特性は階級を超えたものである。そのため、台湾人は階級の一員になる前に、台湾人としての特性を具えなければならない。**第三文学は、この集団全体の特性に立脚して、現在の台湾人全体に共通した生活、感情を描き出し、解放を目指すものでなければならない。**[中略]それゆえ、第三文学の建設は、台湾自身にとって絶対的で必然的な価値を持っているだけでなく、客観的

に見れば、世界文学から与えられた使命でもあろう。¹¹⁶（太字：引用者）

当時流行している貴族文学¹¹⁷やプロレタリア文学に対して、葉は、階級の一員になる前に台湾人としての特性を具えなければならないと強調し、貴族文学とプロレタリア文学を超えた台湾人全体の解放を要求する「第三文学」を提唱した。葉榮鐘は当時、大衆文芸と台湾語との議論を重要視していたのである。「第三文学」を実現するため、彼が頼和らとともに『南音』雑誌を創刊した。雑誌のタイトルは、「南国之音」、すなわち日本より南にある台湾の言語、という意味から来ている。雑誌には「台湾話文討論欄」というコラムが設けられ、台湾話文について議論が展開されていた。ところが、のちに「文芸大衆化」のために結成された「台湾文芸連盟」は、結局は分裂した。その理由の1つは「文芸大衆化」に対する考え方の違いであった。

要するに、「大衆」に関する議論が1930年代前後注目を集めるなか、従来は漢字を使うことが当然とされた台湾においても、ローマ字と大衆との関係に論じられている。その一方で、エスペラントはより早く「大衆」について議論していた。第四章で論じたように、1930年代以降、台湾エスペラント学会はプロレタリア・エスペラント運動に移行し、「勤労大衆」という言葉を打ち出している。1932年6月に発行された台湾エスペラント学会通信において、S. S.は以下のように述べている。

プロレタ・エスペラント運動は、いまや悪戦苦闘の中に於いて強大に発展を続けてゐる。その発展はけつしてプチブル層に於いてではなく、すべての**勤労大衆**並に農村青年層に於いて、極めて克明にその足跡を認めうるのである。云ふまでもなく勤労大衆と農民と青年はすでに逼迫した自己の環境からすべてを学び取り、そしてそれを欲求し、且つ学はねばならなかつた。¹¹⁸

ここでは、プチブル層以外の「勤労大衆」に焦点が当てられている。この文章に続く1篇は、PEU（1931年に結成された全国的組織：日本プロレタリア・エスペランチスト同盟）に言及した中村一雄の「その後に来るもの¹¹⁹」である。そのため、「勤労大衆」という用語は、PEUが1932年3月に提出した綱領草案¹²⁰において初めて掲げられた「労働者・農民その他の勤労大衆へのエスペラントの宣伝普及」にしたがったものと思われる。つまり、当時のプロレタリア・エスペランチストが強調する大衆とは、葉榮鐘の言う「台湾人という集団」としての大衆ではなく、**無産階級**、つまり**プロレタリア**とのことであろう。

興味深いのは、連温卿は1931年の台湾エスペラント大会での挨拶で、「従来有産階級によりて宣伝されてきたこの言語の運動がいまや、無産階級によりて更にその発達を招来せしめてゐる事実であります。それは世界の平和、即ち闘争なき人類の平和を期待する点に於ては、無産階級が決して有産階級に落ちないものであります。否真の闘争なき人類の平和には決して有産階級によつてなしうべきものでないと云つた方が本当である。¹²¹」と述べている。ここでの「有産階級」とは、在台日本人や台湾人の資本家も含んでいるように見える。しかし、第四章でも引用した連の報告書「一九二七年の台湾」にあるように、「台

湾には資本家はあるが、未だ独立して発展し得る地位に至らない。それは台湾に於ける日本資本主義は已に鞏固なる地盤を有して居るからである。而して被圧迫、被搾取の台湾人は独り少数資本家及地主のみならず、最大多数の労働者及農民が存在して居るのである。それ故に台湾人を解放せんとせば、須らく階級闘争を主張せざるべからずと主張するのである¹²²。つまり、連の「無産階級」というのは、圧迫、搾取された台湾人であり、最大多数の労働者および農民だけではなく、そこには少数の資本家と地主も含まれていた。言い換えれば、彼らプロレタリア・エスペランチストにとって、台湾の「勤労大衆」は、「台湾人全体」を意味していたのではないか。

総じて言えば、1930年代の文脈のなかで、葉榮鐘のような民族運動者や連温卿のような社会主義者が考えている「大衆」は、階級概念の有無はあるものの、どちらも「台湾人全体」の枠組みで議論されていたといえよう。そして1930年代の「郷土文学と台湾話文論争」において、「大衆」のために、台湾人の「文体」を中国白話文と台湾話文のどちらにするのかという議論が行われた場合、エスペラントがしばしば言及されたのである。

例えば台湾話文派の鄭坤五は「就郷土文学説幾句」で、「いまエスペラントを鼓吹する潮流の中で、なぜ郷土文学を提唱するのだろうか？エスペラントは言語と文字を統一しようとするもので、世界中の人々の異なる言語の壁、言文不一致の弊害を取り除く方法である。これ以上のものはあるのだろうか。¹²³」と論じ、エスペラント思潮を主張しているにもかかわらず、なぜ郷土文学を提唱するのか、疑問を投げかけている。あるいは、反対派の邱春榮は、「幸いにもすべてのことが簡易化され、統一化された二十世紀の新人は、時代と逆行したあなたがたの邪説を聴こうともしないだけでなく、自国の国語（国文も当然含まれる）と重要な1つ2つの外国語のほかに、また熱心にエスペラントやエスペラント文学を提唱するだろう。¹²⁴」と述べる。特に、負人は、「台湾話文雑駁」のなかで、「至急、郷土文学の旗を降ろせ」、と郷土文学の諸先生に諫言する。そしてより偉大で、より通用性があり、意義がある世界のプロレタリア階級の郷土文学に従事せよ。¹²⁵」と述べている。ここでのより偉大で通用性や意義を持った世界のプロレタリア階級の郷土文学とは、第四章で言及したように、つまり1930年代に世界の共通語やプロレタリアの国際連帯として唱えられたエスペラントと、それによって書かれた文学を指している。

すなわち、当時の台湾ではエスペラントやエスペラント文学¹²⁶が流行しており、それが全世界のプロレタリアと連携することができるという印象を、知識人は持っていた。「世界のプロレタリア階級」と共有できる「郷土文学」という言い方はおおざっぱだろうが、とにかくこうしたように認識されていたのである。その背景には、台湾エスペラント学会のみならず、日本内地のプロレタリア・エスペラント運動による宣伝も大きな影響力を持っていたように思われる。

1930年代後半から徐々に周辺化されていったエスペラント運動であるが、1つの重要な示唆を台湾社会に与えた。それは、1920年代初期に連温卿が書いた「将来之台湾語」に見られる、台湾語の言葉と文法の整理に関する議論である。

(三) 台湾語の文法制定とエスペラント

第三節第一小節で引用した「差迫って来た国字改良 同時に万国語の普及を急げ」という文章は、1924年に『台湾日日新報』に掲載されたものが、ちょうどその年に連温卿は内地へ旅行に行き、「蠹魚的旅行日記」という旅行記を書いた。5月5日の日記には、「私は上京の目的（引用者：労働祭、K氏=児玉四郎を訪ねる）を大体終え」と書いているが、友人たちの引留めもあり、11日にJ. E. I.（引用者：日本エスペラント学会）でフィンランド公使のRamsteq博士（引用者：G. J. Ramstedt）とジュネーヴの国際聯盟から帰国した藤澤法学士（引用者：藤澤親雄）の歓迎会に参加するため、滞在期間を延長した。そして慶応大学のエスペラント会の幹事の誘いで、14日に慶応大学にて「社会的言語性質」というテーマでエスペラントによる講演を行った。講演の原稿¹²⁷は『La Verda Ombro』に掲載されたが、連は原稿を漢文に翻訳、加筆し、「言語之社会的性質」というタイトルで同年10月に『台湾民報』に発表した。

本文は1923年12月20日台北の偕行社で書いたものである。また、私は1924年5月14日に東京の慶応大学において「愛斯不難讀」（引用者：エスペラント）を宣伝するために開催された講演会に招かれ、本文はそこでの講演原稿を訳したものであり、「将来之台湾話」とも少し関係がある。この文章をその問題についての序論と考えれば、読者はきっと私の見地と論拠を簡単に理解してくださるだろう。この文章を掲載したのは私が望んだことである。¹²⁸

連は、冒頭で慶応大学におけるエスペラント宣伝会での講演に言及しながら、この文章を「将来之台湾話」の序論として読ませようと考えていた。この説明から、彼が台湾語について考察したことはエスペラントと関連していたことがわかるだろう。そして彼は「将来之台湾話¹²⁹」を3回に分けて発表した。その2年後の1926年には「怎麼是世界語主義¹³⁰」で、エスペラントが創られた経緯やエスペラントの「内在精神」である「ホマラニスモ（人類主義）」を紹介しながら、言語の「社会的性質」について議論することになる。要するに、連は、エスペラント普及運動を行っていくうちに、日本においてエスペラントも1つの言語や文字の選択肢として国語国字問題や言文一致運動のなかで議論されていたことに影響を受け、台湾語の近代化に着手し始めたのである。その考え方は、彼が1924年から1926年にかけて発表した一連の言語問題の文章に現れている。

1924年10月から1925年2月にかけて連載された「将来之台湾話」では、「言語的觀念」、「言語的起源」、「近世之言語問題」、「台湾話的将来」、「台湾話文法暫定」など大きく分けて5つの問題を論じた。「序論」に位置づけられる「言語之社会的性質」と同じように、社会学の視点から言語問題を考えている。まず、連温卿が観察していた当時の「台湾語像」を見てみよう。

台湾の言語は、ローマ字を用いた宗教上の宣伝に影響され、言語学的にはいくらか進歩したが、一般の人はそれが宗教的な匂いがすると思い、その努力には感謝しようとしな。これは誤りである。実際には、言語学は言語学の視点だけから見れば

よい。その後、日本教育の影響や交通の発達ゆえ、台湾の言語には、一言話せば新たな名詞が1つ加わるようになった。台湾の住民には、泉州人、漳州人、客家人がおり、それぞれ言葉が異なる。もし新たな名詞が翻訳されると、泉州人、漳州人、客家人がそれぞれ泉州音、漳州音、客家音によって翻訳するため、1つの名詞は三通りの発音になってしまう。台湾は海に浮かんだ孤島であり、住民は中国から渡来してきているが、気候や風土が異なるため、発音は必ずしも本土の人々と同じではない。さもないと、南北の2つの中国で翻訳された新しい名詞を比較すれば、きっと異なるのである。¹³¹

本章の最初でも述べたように、エスペランチストは、諸民族語のローマ字化を世界のエスペラント化の第一歩と捉えている。そのため、連は台湾語を考える際にローマ字を排除せず、宣教師による台湾語のローマ字化という貢献に言及した。また、日本統治期以来、多くの日本語の言葉が台湾語の「新名詞」となった現象¹³²を提起した。台湾語はもともとは福建語や広東語であったが、歴史の変化によって中国の言葉とますます異なっていくのが現実であると説明している。つまり、日本統治期以降、自然に形成されていた「台湾語」はもともと福建語に由来するものであったが、そのなかの漳州語、泉州語、潮州語はまだ各地で使われており、それぞれの訛りも強かったため、それを統一することが必要であると彼は主張したのである。そのため彼は、台湾語の標準化に具体的な改良策を提出した。

第一に、音韻学を研究し当て字を削除すること。第二に、一つの標準的な発音が必要であること。 そうしなければ、1つの名詞を知ろうとすれば、3、4個の同義異音の名詞を弁別しなければならず、それはどれだけ不便なことであろうか。[中略] **第三に、1つの文法を作らなければならないこと。** 文法がなければ、台湾語は野獣と同様に、気の向くままに森の中を駆け回ることになり、台湾人はいくら追いかけても意味をつかむことができない。ほかの人は、この台湾語を森に棲む凶悪の獅子や虎と比べることを恐れ、台湾語は文化の洗礼を受けておらず、野蛮だ野蛮だと言うだろう。実際のところ、台湾語は文法を持たないわけではない。考えてみたまえ、中国には中国語があり、その系統を受け継いだ台湾人が、それと似た文法を持たないはずがない。¹³³ (太字：引用者)

連は、文法を整えなければ、台湾語が「野獣」のように統制の取れないものになってしまうと批判している。しかし彼の引用文を見れば、彼自身が書いた文章も文法的に正しいものではなく、中途半端に「口語体」に近い文章と言える。とはいえこの文章は、台湾語の建設に3つの具体案を出した。1つ目は、音韻学を研究し「仮字」を排除すること。すなわち当て字ではなく、音韻学に合致する台湾語の「本字」を研究することである。2つ目は、標準化した発音が必要であること。3つ目は、文法を作ること。彼は、台湾語にも文法はあるが、統一し整理しなければ、言葉の標準化は図れず、近代的な書き言葉にならないと考えた。そして彼は、「社会を発展させるためには、言語問題は大変重大である¹³⁴」

と強調しながら、「将来之台湾話」の最後に暫定的な台湾語文法を提案した。

々、難道中國有中國話、而引他系統的臺灣人、就沒有和他相似的文法麼？不過臺灣人對臺灣話、恰好像老人家貪眠清早、任他家窩和野獸在他屋內叫喚跳舞一樣、然他若覺醒起來我想在那屋內的野獸也要被他馴化去了、

因為這樣原因、要社會發達、言語問題是很重大的、所以我假定立著一個法則、請你們看々、

臺灣話文法暫定

這文法是假定的、應該改訂的地方後來必要改訂、然這文法以外雖有例外的規則、這次我不述記在這地方、因為我還要那閉的工夫去注意研究、然這樣工作不是一個人的事業、有不妥的地方、請你們知道我罷。

動詞

不定式動詞 走、寫、讀、

【例】 我走、你寫、伊讀、

現在式動詞 的 (Tio) 欲 (Tia)

【例】 犬的吠、 因仔欲哭、

未來式動詞 能 (Oo) 要 (Oo) 的要 (Tia Oo)

【例】 伊能來、 我要去、 伊的要寫、

過去式動詞 了、 曾 (Tie)

【例】 寫了著去、 伊曾去臺南、 讀好再讀

假定式動詞 敢能 (Tia Oo)

【例】 敢能成功、 吠那吠、 人敢能走、

命令式動詞 著 (Tio) 使 (Tio)

【例】 著去、 使伊讀、

否定詞 不 (Mia) 無、未 (Mue) 也未、

【例】 不走、 無來、 未寫、 也未讀、

疑問詞 (要臺語去說)

【例】 知不知、 走不起、

人稱代名詞

	一人稱	二人稱	三人稱
單數	我	你	伊
複數	阮	您 (Nia)	伊
複數咱		您 (Nia)	伊 (Tia)

汎稱代名詞 大家

【例】 大家著講、 犬能放屁、

前置詞 替、向、前、內、頂、下、對、

用、透、對面、(此以外還有二十多字)

【例】 伊替我讀、 我向東去、 厝前有大樹、 厝內空々、 棹頂有書、 棹下無滑氣、 對中國來、 此條路透大龍啊、 你對面有歹人、

分類語 條、頂、扇、張、個、尾、(此以外約有四五十字)

【例】 此個路、 門一扇、 紙一拘、 衫一領、 魚一尾、

接尾語 仔、(此外還有幾個)

【例】 因仔、 賣魚仔、

比較級 比較、 更較 (Mia Oo)

【例】 雪比紙較白、 伊比你更較好、

最上級的比較是要用 不止、 盡、 極、

【例】 盡美、 不止好、 極賢、

接續詞 所以、 雖然、 若、 (Ja) 若是、 尙且、 亦 (Ja) 也是、 到返、 驚了、 設使

【例】 所以不敢講、 雖然伊無來、 我也要去、 (完)

図：連温卿、「将来之台湾話（続）」、『台湾民報』3(4)、1925.02.01、14頁。

この図からわかる通り、連温卿は不定式動詞、現在式動詞、未来式動詞、過去式動詞、仮定式動詞、命令式動詞、否定詞、疑問詞、人称代名詞、前置詞、分類語、接尾語、比較級、接續詞などに分類し、具体的に文例を挙げた。分類は、エスペラント教科書を手本にしたものと考えられる¹³⁵。特に最後の接續詞のところに「亦 (Ja)」があるが、そのアルファベットは明らかにエスペラント式の綴りであった¹³⁶。要するに、連温卿の台湾語についての考え方は、エスペラント運動を行ったからこそできたものと言えよう。

ところが、陳芳明は、連の「台湾話文論」が1930年代にも影響し、「台湾民族主義」を提唱する役割を果たすと評価している¹³⁷。台湾話文論とは「将来之台湾話」を指しているが、それがどのように台湾民族主義の提唱に影響を与えたのか、陳は詳しく論じていない。この問題は言語ナショナリズムの問題とつながっているため、第六章で詳述する。

以上、日本と中国、そして台湾の言語・文字改革運動におけるエスペラントの位置づけ、またローマ字や大衆に関する議論との関係について論じた。そして、近代化社会に新しい文化を建設していくために、言葉を改革し、文字を標準化することが、1つの重要な手段であると植民地台湾の知識人は考えた。こうしたなかで、エスペラント運動は文字改革運

動の一環として行われ、1つの改革の方法を提供した。

1920年代に行われた台湾の文字改革や言語の標準化については、未完成の事業となっていたが、本章で明らかにしたように、エスペラント運動もそれに間接的な影響を与えており、新文学運動のなかで大きな意味を占めていたのである。日本の標準語について研究する野村剛史が述べたように、明治末期から、各地の方言がかなり異なっていた「日本語」が近代化、基準化され、そして標準語が作られるにつれて、標準語に近い東京語が誕生した¹³⁸。また、日本近代語を研究する森岡健二は「明治時代の国語運動は、口語文法の整理にしても、文体の創造にしても、漢字制限にしても、語彙の更新にしても、大局からみると、日本語の共通項を精選して、どこでもだれにも使える標準的な言語に改善していくことであったといえることができる。この理想は、もちろん完全ではあり得なかったにせよ、明治の人たちの抱いた夢をおおむねは実現し、次の世代に同じ方向で残りの問題の後始末をすることを委ねたといえる¹³⁹」と述べている。連温卿の台湾語の音韻学の考究や、発音の標準化、そして文法構築は、「口語体の成立の問題」、つまり台湾語の「近代語」、すなわち標準語を目指して考えたものであろう。そして彼の考え方や提案は、エスペラントからの影響が大きい。もちろん、上述したように、国語は皇民化運動とともに強勢の言語となった一方、エスペラントの運動は継続が困難で、1920年代の文字改革や、1930年代の台湾話文議論も挫折することになった。そのため、彼自身の理想は同時代には実現されなかったが、後世に大きな示唆を与えるものとは言えないだろうか。

- 1 本論では朝鮮の言文一致運動や朝鮮語規範化運動については触れないが、この件に関しては三ツ井崇の『朝鮮植民地支配と言語』（東京：明石書店、2010.12）や、金三守の『韓國애스페란토運動史』（ソウル：淑明女子大学校出版部、1976.11）などの関連研究を参考されたい。
- 2 周質平、「晩清改革中の語言烏托邦：從提倡世界語到廢滅漢字」、『二十一世紀』137号、香港：香港中文大学、2013.06、31頁。
- 3 近年、魯迅のエロシエンコとの接触による思想の変化についての研究は増加している。例えば、藤井省三の『エロシエンコの都市物語—1920年代 東京・上海・北京』（東京：みすず書房、1989.05）はこれまでのこのテーマに関する最も詳細な研究であろう。そのほか、例えば、彭明偉、「愛羅先珂與魯迅 1922 年的思想轉變—兼論〈端午節〉及其他作品」（『政大中文學報』7、2007.06）などの短編論文がある。しかし魯迅のエロシエンコとの接触に関して、エスペラントとの関係は重要視されていない。
- 4 安田敏朗、『近代日本言語史再考 帝国化する「日本語」と「言語問題」』、東京：三元社、2004.06（初版：2000.09）、290頁。
- 5 例えば「日本ローマ字会」（公式ホームページ：<http://www.roomazi.org/>、機関誌：『ローマ字世界』）や、「日本のローマ字社」（<http://www.age.ne.jp/x/nrs/>、機関誌：『Rômazi no Nippon』）などがあり、「カナモジカイ」（<http://www9.ocn.ne.jp/~kanamozil/>、機関誌：『カナノヒカリ』）なども活動をしている。
- 6 安田敏朗、『「国語」の近代史 帝国日本と国語学者たち』、東京：中公新書、2006.12、45-46頁。
- 7 安田敏朗、「解説」、平井昌夫著、『国語国字問題の歴史（復刻版）』、東京：三元社、1998.02、590-591頁。
- 8 斉藤希史、『漢文脈と近代日本 もう一つのことばの世界』、東京：日本NHKブックス、2007.02、65-66頁。
- 9 J・マーシャル・アンガー著、奥村睦世訳、『占領下日本の表記改革 忘れられたローマ字による教育実験』、東京：三元社、2001.10、50-51頁。
- 10 山本正秀、『近代文体発生の史的研究』、東京：岩波書店、1965.07、1頁。「漢文崩し」：漢文を訓読した文体、またはそのような文体で書かれた文章のこと。
- 11 菅野則子、『文字・文・ことばの近代化』（東京：同成社、2011.03）の第二章（34-77頁）を参考されたい。
- 12 「“RÔMAJĪ”KAJ ESP.」（ローマ字とエスペラント）、『La Revuo Orienta』、日本エスペラント学会、1922.02、16頁。
- 13 安田敏朗、「解説」、『国語国字問題の歴史』、596頁。
- 14 安田敏朗、『近代日本言語史再考 帝国化する「日本語」と「言語問題」』、287頁。
- 15 山本周夫、「エスペラント・ローマ字の優位性について」、『国際語研究』創刊号、1933.01、29-32頁。
- 16 「ローマ字問題についての質問と解答」、『国際語研究』第10号、1934.10、173-194頁。
- 17 斉藤の文章では、1934年から1935年にかけて雑誌『世界』において、「大衆語とエスペラント」について議論されていたと言及している。この『世界』は、おそらく上海で発行されたエスペラント雑誌『La Mondo（世界）』と推測される。『La Mondo』には日本のエスペラント運動をも紹介し、斉藤の『文字と言語』も支那のラテン文字運動へ寄付金を募っている。
- 18 斉藤秀一、「エスペラントとローマ字化との関係」、『国際語研究』16号、1936.07、107-116頁（図：111頁）。
- 19 Yotumoto-Minoru（四元実）、「Taiwan, Tyôsen, Nan'yô no Rômazikwa（台湾、朝鮮、南洋のローマ字化）」、『ローマ字世界』26(10)、1936.10、12頁。
- 20 田中貞美、「満洲エスペラント運動史概観(上)」、『満洲評論』20(11)、1941.03.15、12-13頁。
- 21 高橋邦太郎（1866-1941）、東京帝大工科大卒業、土木技師として鉄道や水力発電所建設に従事。1907年に日本エスペラント協会に入会。1920年に浅井恵倫らと横浜に日本エスペラント貿易商會を設立し、社長を務めた（柴田巖・後藤斉編、峰芳隆監修、『日本エスペラント運動人名事典』、東京：ひつじ書房、2013.10、290頁）。また、台湾で出版した『組織的研究エスペラント講習書』（児玉四郎編、日本エスペラント協会横須賀支部会と台湾支部、1915.03）のなかに、高橋の「国際補助語エスペラントと国語の権威」が収録されている。ちなみに、

- 第二章で触れたが、高橋は在台日本人のエスペラント組織「緑の家」にも参加した。
- 22 田中貞美、「満洲エスペラント運動史概観(下)」、『満洲評論』20(12)、1941.03.23、8頁。
- 23 藤澤親雄(1893-1962)、1917年東大法学部卒業し、農務省に入った。東大時代は吉野作造を中心とする新人会で活動。1920年国際連盟事務局などを経て1924-30年九州大学教授、1932年国民精神文化研究所員、1941年大政翼賛会東亜局庶務部長、同会中央訓練所調査部長などを務めた。1919年小坂狷二らと共に日本エスペラント協会創立に動き、1920年ヨーロッパ出張に際し、協会の宣伝部員の肩書きを得た。柴田巖ら監修、『日本エスペラント運動人名事典』、430-431頁。
- 24 藤澤親雄、「日満両国の共通語問題」、『満蒙』14(3)、1933.03、32頁。
- 25 白井裕之、「国際派からオカルト・ナショナリストへ」、『エスペラント研究』4、2010.06、9-10頁。
- 26 山室信一、『キメラ—満州国の肖像 増補版』、東京：中公新書、2004.07、10頁。
- 27 山県光枝、「大陸と日本語」、『エスペラント』7(9)、1939.09、32頁。
- 28 高木貞一、「日本語の使命」、『エスペラント』7(9)、1939.09、33頁。
- 29 高木貞一、「日本語の使命」、36頁。
- 30 安田敏朗、『近代日本語史再考 帝国化する「日本語」と「言語問題」』、13-14頁。
- 31 黄華、「白話文為何在五四時期活起来了」、『二十一世紀』142、香港：香港中文大学、2014.04、55頁。
- 32 貫公、「拒約必須急設機関日報」、『唯一趣報有所謂』、1905.08.20。李婉薇、『清末民初的粵語書写』(香港：三聯、2011.04、65頁)から引用した。
- 33 清水賢一郎、「梁啓超と〈帝国漢文〉—「新文体」の誕生と明治東京のメディア文化—」、『アジア遊学』13、2000.12、34-35頁。
- 34 例えば、台湾の言語・文字改革運動の火を付けた1人である黄朝琴が「漢文改革論(上)」で、梁に言及している。「但是中国普及教育的運動。熱度一天已高一天。所以現時除了来往私信古詩之外。皆採用言文一致的白話文。以官話為標準叫做新体白文〔中略〕這片(按：片)就是現代文豪深啓起(按：梁啓超)先生所記在中学教科書的一節。先生自十数年前到外邦回来。便将八股做法改写白話文。每於報上发表意見。或著作。無不用他。那時候一部的守旧家。個個都笑他變戲法。到了今日。不但現時的青年崇拜他。是前清的举人進士亦佩感他了。」(「漢文改革論(上)」、『台湾』4(1)、1923.01、30頁。)
- 35 蒲豊彦、「庶民のための書き言葉を求めて」、森時彦編、『二十世紀中国の社会システム』、京都：京都大学人文科学研究所、2009.06、3-4頁。
- 36 倪海曙、『拉丁化新文字運動的始末和編年紀事』、上海：知識出版社、1987.12、2頁。
- 37 倪海曙、『拉丁化新文字運動的始末和編年紀事』、4頁。
- 38 蒲豊彦、「庶民のための書き言葉を求めて」、17頁。
- 39 侯志平主編、『世界語在中国一百年』、北京：中国世界語出版社、1999.09、47-48頁。
- 40 彭春凌、「以“一返方言”抵抗“漢字統一”与万国新語一章太炎与語言文字問題的論争(1906-1911)」、『近代史研究』、2008.02、66-69頁。
- 41 浜田ゆみ、「1930年代における中国エスペラント運動の成功—言語・文字改革運動との結びつき—」、田中克彦ら編、『ライブラリ相関社会科学4 言語・国家、そして権力』、東京：新世社、1997.10、340頁。ランティはあらゆる民族の言語、文化、習慣、伝統をプロレタリアート統一の障害とみなし否定する立場をとり、それを「sennaciismo(無民族主義)」と称した。
- 42 侯志平主編、『世界語在中国一百年』、65頁。
- 43 侯志平、「魯迅与世界語」、藍天強編、『中国世界語者與世界語運動』、24頁。
- 44 魯迅、「渡河と道案内」(原文：唐俟、「渡河與引路」、『新青年』5(5)、1918.11.15)。日本語訳(岡田秀樹訳)は、『魯迅全集9 集外集・集外集拾遺』(東京：学習研究社、1985.06、66頁)から引用。
- 45 魯迅、「渡河と道案内」、『魯迅全集9 集外集・集外集拾遺』(67頁)から引用。
- 46 東方雜誌社編、『国際語運動』、上海：商務、1923.12。この本は、頼和記念館の書庫にも所蔵されている。
- 47 郡斌、藍天強、「中国世界語運動的領導人」、3-4頁。
- 48 郡斌、藍天強、「中国世界語運動的領導人」、藍天強編、『中国世界語者與世界語運動』、北京：中国世界語出版社、2002、3頁。于友、『胡愈之』、北京：群言、2011.01、7-9、22、74、

414 頁。

- 49 「El Fabelaj Skezoj pri Ĥina vivo de Sro. V. Eroshenko I La Strata Arbo」(童話の写生：エロシエンコの中国生活について I 街路樹)、1922.07；「El Fabelaj Skezoj pri Ĥina vivo de Sro. V. Eroshenko II Lando de Revoj」(童話の写生：エロシエンコの中国生活について II 夢の国)、1922.08；(III 夢の国)1922.09。この2篇は、胡愈之が中国語に訳した『枯葉雜記及其他』(1924.04)に収録される。
- 50 「Unu paĝeto en mia lerneja vivo」(私の学校生活の一頁、1923.03)と「Turo por fali」(墜ちる為めの塔、1923.07)は、エロシエンコが1922年に中国で発表した後、胡愈之によって中国語に翻訳され、『愛羅先珂童話集』(1922.07)に収録された。『愛羅先珂童話集』のなかでは、胡愈之が2篇、馥泉が1篇、そのほかの9篇は魯迅が翻訳していた。詳細は、第三章を参照されたい。
- 51 史可乘(連温卿)、「人類之家・台湾 ESP 学会」、『台北文物』、1954.05.01、92 頁。
- 52 朝比賀昇、「日本のプロレタリア・エスペラント運動」、『第 81 回日本エスペラント大会』資料集、東京：日本エスペラント学会、1994.10、2 頁。
- 53 魯迅、「無声的中国」、(1927年2月16日に香港での講演、のちに『三閑集』に収録)『魯迅全集』第4巻、北京：人民文学出版社、2005、14 頁。原文：「沒有更激烈的主張，他們總連平和的改革也不肯行。那時白話文之得以通行，就因為有廢掉中国字而用羅馬字的議論的緣故」。訳文は『魯迅全集5 而已集・三閑集』(松井博光ら訳、東京：学習研究社、1985.04、208 頁)から引用。
- 54 さねとう けいしゅう、『増補 中国の文字改革』、東京：くろしお出版、1971.09、41 頁。
- 55 さねとう けいしゅう、『増補 中国の文字改革』、45 頁。
- 56 鄭寧人、「錢玄同先生の印象」、『文字と言語』第8号1935.11、85-86 頁。文章の最後に、「「世界」去年の2-3号から支那語に拠つて訳す」と書いてある。
- 57 原文：「我輩處此文運交會之際，能用固有之華文可也、能用和文可也、能用英、法、俄、德之文尤可也；則用羅馬字以寫白話文亦無不可。但得彼此情素互相交通，雖愛世語吾亦學之。」連雅堂、「本土與世界」、『雅言』、台北：実学社、2002.08、39-41 頁(原文は、『三六九小報』160号、「雅言(三)」、1932.03.06)。
- 58 温・連(連温卿)、「怎麼是世界語主義(1)」、『台湾民報』、128期、11頁、1926.10.24。
- 59 廖毓文(漢臣)、「台湾文字改革運動史略」、『台北文物』3(3)、4(1)、1954.12.10、1955.05.05(李南衡校註、『日拋下台湾新文学・明集5・文献資料選集』、1979.03、459頁)。原文：「自民国11年起，至民国22年止，十年來之間，發生了一連串的文字改革運動，有的提倡「白話文」，有的提倡「羅馬字」，有的提倡「台湾話文」，甚至也有人提倡過「世界語」，各人的主張都不一致，但其企圖，都是一樣想在異族的支配下，使全省民(當時稱台灣人)，獲一識字的利器，以吸收新智識，新思想。」
- 60 王錦江(王詩琅)、「一個試評—以「台湾新文学」為中心」、『台湾新文学』1(4)、1936.05、94-95 頁。原文：「台湾文学因為它的特殊性，分以和文與漢文的兩種言語文字來表現的事，固不必待筆者再提。[中略]台湾的文学在現階段以這兩種語言文字表現，雖是件無可如何的事，於將來姑且勿論，現在的台灣人既是還在用台湾話以上，台湾話式的漢文，在文学自身著想起來，不但不能消滅，還有不減前者的意義。[中略]漢文作家呀—撞破客觀的不利之條件，奮起罷！」
- 61 陳端明、「日用文鼓吹論」、最初は『台湾青年』(3(6)、1921.12.15)に掲載されたが、当期が禁止されたため、のちに『台湾青年』(4(1)、1922.01.20)に再刊された。
- 62 廖毓文(漢臣)、「台湾文字改革運動史略」、李南衡校註、『日拋下台湾新文学・明集5・文献資料選集』、460-461 頁。
- 63 「唱設白話文研究会」、「台湾白話文研究会暫定簡章」、『台湾民報』、1923.04.15、29 頁。
- 64 例えば、高冠吾、「漢文字改革的管見」、『台湾民報』、1923.12.11、4 頁。
- 65 台湾エスペラント運動は、当時多くの知識人に影響を与えた。連温卿は「台湾エスペラント運動の回顧」で、「前者(黄呈聰)は国語学校出身の同窓者数名と会合し、斯語(筆者：エスペラント)けんきゅうちゅうなり」と書いている(『La Revuo Orienta』、1936.06、72 頁)。また、台湾エスペラント学会の機関誌『La Verda Ombro』から、学会の委員会には、台湾の飛行士の第一人謝文達、台湾文化協会の担い手石煥長などがいた。
- 66 黄呈聰、「論普及白話文的新使命」、『台湾』4(1)、1923.01、22 頁。原文：「凡一個国家和一

- 個社会、一定要一個統一的言文、才可以容易普及民衆の智識、做一個中心的勢力、團結一個特別民族的性格、如像日本の文字、有普通文、白話文、書信文の分別、学的人很困難、二十年前已經有提倡言文一致體的議論、那個時候守旧的人、也是反对太俗不雅、總是民衆感覺著很便利、以後漸々普及、到現在除了公用文和一部特別的著書以外、大概都是用這個言文一致的文、如新聞、雜誌、新的著書和写信也是用言文（一致）。
- 67 黄呈聰、「論普及白話文的新使命」、『台湾』4(1)、1923.01、32 頁。和訳：「日本語を我々に教えるのは構わないが、**台湾語も我々に教えるべきであろう**。小学校から我々の言葉で各種の科学や一般の知識を教えるならば、文化を普及するのよりも速いのではないか？さらに一歩進んで、この白話文を漢文にし、**小学校から六年間卒業するまで教えれば、社会上での利用もより便利になるであろう**。私は当局がこの白話の文を採用し、その深遠で難解な古文を放棄することを望む。これが最も肝要なことである。」
- 68 清水賢一郎の「梁啓超と〈帝国漢文〉—「新文体」の誕生と明治東京のメディア文化—」（『アジア遊学』第13号、2000.12）を参考されたい。
- 69 李婉薇の『清末民初的粵語書写』（香港：三聯、2011.04、66-67 頁）を参考されたい。
- 70 森岡健二の『近代語の成立 文体篇』（東京：明治書院、1991.10）や、山本正秀の『近代文体発生の史的研究』（東京：岩波書店、1965.07）などを参考されたい。
- 71 黄朝琴、「続漢文改革論 唱設台湾白話文講習会」、『台湾』4(2)、1923.02、27 頁。和訳：「最短の時間で彼らに最も多くの智識を獲得させる。教授の方法は、言文一致の文体により、言語に基づいて、聞いたり話したりする文を覚えやすく書き易いものとし、形式に拘らず、典故を引かず、筆を起し白話を書くだけでよい。」
- 72 楊雲萍が戦後初期にこの文を引用したとき、直接「言文一致体」とした。楊雲萍、「台湾新文学運動的回顧」、『台湾文化』1(1)、1946.09、10 頁。
- 73 甘為霖 (William Campbell, 1841-1921)、『Ē-m̄ng-im Sin Jī-tián (廈門音新字典)』、台南：台湾教会公報、1913.07、38 頁、453 頁。だが、「他們」、「我們」、「你們」などの模倣が、「屈二字去就一字」とのことになってしまうため、黄石輝が「佢」、「咱」、「恁」などの「新代字」を採用しようと提出した。黄石輝、「言文一致の零星問題」、中島利郎編、『1930 年代台湾郷土文学論戦資料彙編』、高雄：春暉、2003.03、281-282 頁。
- 74 「本社特設五問」、『台湾民報』、1924.08.26、53-55 頁。
- 75 森岡健二、『近代語の成立 文体篇』、東京：明治書院、1991.10、87 頁。
- 76 黄朝琴、「続漢文改革論 唱設台湾白話文講習会」、26 頁。和訳：「在我的意見、年少的学生、可以奨励他、年多的人、不如教他学台湾在来白話文、較是利益、像這種的事業、叫台湾當局来做、實際上是不可能的？」
- 77 性、「新正」、『台湾民報』2(1)、1924.01.01、15 頁。
- 78 台湾語の漢字には、「文言音」と「白話音」および「訓読」など三種類の発音が存在する。「文言音」とは日本語のような「音読み」で、「白話音」とは「土音」であり、「訓読み」のような発音である。例えば「黒」の「文言音」が「hik」と読み、「白話音」が「oo」と読む。また例えば「兄」と「哥」は「ko」と読み、「不」、「沒」、「無」、「否」は「bô」と読むのは「訓読」という現象である。王育徳、「文言音と白話音と訓読と」（台湾語講座第11回）、王育徳、『王育徳の台湾語講座』（復刻版）、東京：東方書店、2012.07、49-50 頁。一般では、文章体（書面文）は主に文言音で、談話体（口語体）は文言音と白話音を混用する。東方孝義、「台日新辞書緒言」、『台日新辞書』、台北：台湾警察協会、1931.07、12 頁。
- 79 小野西洲：「我国では現今口語文が尤も便利として広く実用的に使用されております。然るに台湾では、本島人の書く文と言へば羅馬字で表はす台湾語より外に口語文はないのであります」。小野西洲、「用字と口語文体の創定に就いて」、『語苑』22(3)、1929.03、4 頁。
- 80 施文杞、「對於台湾人做的白話文的我見—台湾人的研究白話文者注意—台湾人的投民報者注意」、『台湾民報』2(4)、1924.03、8 頁。太字のところは台湾語話者の言葉遣いである。同頁でも逸民（林耕餘）の「对在台湾研究白話文的我見」が載せられている。8-9 頁。
- 81 施文杞、同前註、8 頁。
- 82 逸民（林耕餘）、「对在台湾研究白話文的我見」、『台湾民報』2(4)、1924.03、8 頁。
- 83 「研究白話文的討論」、『台湾民報』第1号、1923.04.15、26 頁。研究の方法について、編集者が「上海亜東図書局」からテキストを購入したほうが最も速いと勧める。
- 84 1930 年代の台湾話文関連議論について、中島利郎編の『1930 年代台湾郷土文学論戦資料彙

- 編』(高雄：春暉、2003.03)を参考にされたい。
- 85 より詳しい議論は、拙論の「訓読、模倣、創造—「台湾白話文」：論日本時代台湾近代文体的形成與様貌」(『頼和・台湾魂的迴盪 2014 彰化研究學術研討會論文集』、彰化：彰化県文化局、2015.03、355-420 頁)を参考されたい。
- 86 武谷三男、「台湾に於ける国語国字問題」、『弁証法の諸問題』、東京：勁草書房、1968.05、167-168 頁(初出：『科学評論』、1936.05)。
- 87 例えば、『教育』4 卷 8 号(1936.07.25)には、下村海南、「国字政策問題」、日下部重太郎、「国字問題史観」、土岐善磨、「新聞文化と国字問題」、服部愿夫、「ラヂオと国字問題」、上野陽一、「タイプライタから見た国字問題」、蔡培火、「台湾に於ける国字問題」、小倉進平、「朝鮮に於ける国字問題」、廖鸞揚、「中華民國に於ける漢字問題と国語改造運動」、井上萬寿蔵、「駅名掲示と国字問題」などが多くの国語国字問題に関する議論が掲載されている。
- 88 台湾新民報社編、『台湾人士鑑』、台湾：台湾新民報社、1937.09、151 頁。
- 89 植村正久(1858-1925)が1902年から1920年までに台湾を10回訪問した(京極純一、『植村正久 その人と思想』、東京：新教、2008.01、10 頁)。次女の植村環が台南長栄中学校長を務めたことがある(阪口直樹、『戦前同志社の台湾留学生 キリスト教国際主義の源流をたどる』、東京：白帝社、2002.05、58-60 頁)。
- 90 田川大吉郎(1869-1947)、評論家、衆議院議員。1896年から1897年まで『台湾新報』で勤務し、台湾議会請願運動のため衆議院に建言したことがある。楠精一郎、『大政翼賛会に抗した40人 自民党源流の代議士たち』、東京：朝日新聞社、2006.07、40 頁。
- 91 植村正久、「台湾の青年に望む」、『台湾青年』1(1)、1920.07、27-28 頁。
- 92 田川大吉郎、「歐米の思潮と羅馬字」、『台湾青年』1(3)、1920.09、9-10 頁。
- 93 日本エスペラント学会の機関誌『Japana Esperantisto (日本エスペラント)』の会員録には、田川の名前があった(1916.08、1 頁)。
- 94 蔡培火、「新台湾の建設と羅馬字」、『台湾』3(6)、1922.09。また、張洪南「誤解されたローマ字」、『台湾』4(5)、1923.05。
- 95 多くの資料がデジタル化されてネットで検索できる。例えば：「台湾白話字文献館」(<http://pojbh.lib.ntnu.edu.tw/script/index.php>)、「台語文數位典藏資料庫」(<http://ip194097.ntcu.edu.tw/nmtl/dadwt/pbk.asp>)などがある。
- 96 蔡培火、「新台湾の建設と羅馬字」、『台湾』3(6)、1922.09、41 頁。
- 97 葉榮鐘、『日抛下台湾政治社会運動史(下)』、第六章「台湾文化協会」、台中：晨星、2000.08、398-404 頁。
- 98 蔡培火編、『台湾白話字普及の趣旨及び島内賛成者氏名』、東京：(不明)、1934.05。付録に矢内原忠雄の「台湾白話字問題に就いて」と蔡培火の「台湾白話字普及に就き内地人に訴ふ」が付いている。
- 99 蔡培火、「台湾に於ける国字問題」、『教育』4(8)、1936.07.25、69-74 頁。
- 100 武谷三男、「台湾に於ける国語国字問題」、『弁証法の諸問題』、東京：勁草書房、1968.05、169-170 頁(初出：『科学評論』、1936.05)。
- 101 Kakinami-Seiiti、「Kootoosyo no Hnasi」、『台湾時報』、1922.12 (45-52 頁)、1923.01 (219-227 頁)、1923.02 (71-78 頁)、1923.03 (124-127 頁)。
- 102 工藤折平、「台湾の活字文化」、『台湾時報』第150号(特輯号)、1932.05、48 頁。
- 103 劉捷、「台湾文学の史的考察」、『台湾時報』、1936.04、87 頁。
- 104 張我軍、「新文学運動的意義」、『台湾民報』、1925.08.26、19 頁。原文：「我們現在談新文学的運動、至少有二個要点：1 白話文学的建設 2 台湾語言的改造」。
- 105 「差迫って来た国字改良 同時に万国語の普及を急げ」、『台湾日日新報』、1924.08.16、2 頁。
- 106 「エス語を国際補助語に帝国学士院でも使用決定」、『台湾日日新報』、1924.12.17、2 頁。
- 107 「国際語與本邦」、『台湾日日新報 漢文版』1925.03.23、4 頁。
- 108 1920年代後半から、公学校では漢文教育が停止され、書房の漢文教育も禁止された。例えば『台湾民報』のなかに「要求公学復教漢文」という嘉義の読者による文章が掲載され、サブタイトルは「郡當局倒反禁止書房」、「父兄們不滿公学校教育」となる。『台湾民報』第232号、1928.10.28。
- 109 「「国語」は「世界語」となり 常用へ挙州総進軍」、『台湾日日新報』、1943.04.14、4 頁。

- 110 安田敏朗、『近代日本言語史再考 帝国化する「日本語」と「言語問題」』、280-282 頁。
- 111 趙勳達、『狂飆時刻—日治時代台湾新文學的高峰期（1930-1937）』（台南：國立台灣文學館、2011.12）の第三章を参考されたい。
- 112 趙勳達、『狂飆時刻—日治時代台湾新文學的高峰期（1930-1937）』、69 頁。
- 113 葉榮鐘、「關於羅馬字運動」、『葉榮鐘早年文集』（台中：晨星、2002.03、190-191 頁。初出：『台灣民報』、1929.05.19、05.29、05.26）。原文：「現在的台灣不但無產大眾全部是文盲無智就是所謂小市民階級的大多數也是目不識丁的居多，學校教育的普及遲遲不振，社會教育更不足道，何況現在所謂學校教育、社會教育自身的內容尚有吟味的必要的呢？在這種種的條件之下，這箇「大眾教育」的問題，老早就成了我們島內文化運動的目標，和各種解放運動的先行條件了。〔中略〕那末，蔡培火氏所提倡的羅馬字運動當然不失為我們討論研究的對象了。〔中略〕我對於羅馬字運動完全是一個門外漢，〔中略〕對這個問題我雖然不能一一指摘其可否的所在，卻也不是完全無意見的，就中使我平時最懸念的一點就是**台灣話的標準語**的問題。這問題還可分作兩層來講，第一是**語彙的補充**，第二是**言語的統一**」。
- 114 葉榮鐘、「關於羅馬字運動」、『葉榮鐘早年文集』（193 頁）。原文：「所以我希望島內或島外有筆力的同胞趕緊站起來立在我們自己的立腳點，多多採用台灣話來做詩、做文、寫小說、編劇本，一來可使台灣話漸成為完全正確的言語，來解決這個全島的重大問題，〔中略〕總而言之，「大眾教育」這個問題是急不容緩的全島的重大問題，標準語也是一件要緊的問題——這是不用講了。」
- 115 奇（葉榮鐘）、「「大眾文芸」待望」、『南音』（卷頭語）、1(2)、1932.01。原文：「所以文芸一發，要接近大眾，供給大眾以娛樂和慰安，使彼等切實地去觀念他們自身的本相，思想和感情。〔中略〕現在台灣實在太缺少了文芸，尤其太缺乏這種通俗化的大眾文芸，〔中略〕待望以我們台灣的風土，人情，歷史，時代做背景的有趣而且有益的大眾文芸的產生。」
- 116 奇（葉榮鐘）、「第三文學提唱」、『南音』（卷頭語）1(8)、1932.05。原文：「一個社會的集團，因其人種，歷史，風土，人情社會形成一種共通的特性，這樣的特性是超越階級以外的存在。所以台灣人在做階級的分子以前應先具有一種做台灣人的特性。**第三文學是要立腳在這全集團的特性去寫現在的台灣人全體共通的的生活，感情，要求解放的。**〔中略〕所以第三文學的建設不但於台灣自身有絕對的必要價值，由客觀的看來也是世界的文學所賦與的使命呀！」
- 117 1930 年代の台灣文壇では「貴族文學」と「普羅文學」という言い方がある。「貴族文學」とは、當時盛んになっていた古典文學や純文學を指す。「普羅文學」とは、プロレタリア文學（階級文學）やリアリズム文學など社會關心を持つ文學作品を意味する。
- 118 S. S.、「エスペラントをかく視る」、『Informo de F.E.S』第 2 号、1932.06.16、13 頁。
- 119 中村一雄、「その後に来るもの」、『Informo de F.E.S』第 2 号、16-20 頁。
- 120 1932 年 3 月にコップ關係活動家 400 名以上が逮捕され、プロレタリア文化運動は厳しい試練に直面されていた。その影響を受けて、PEU の第 2 回大会が不成立に終わったが、創立大会で決められた綱領より具体的な綱領草案を提出した。1.労働者・農民その他の勤勞大眾へのエスペラントの宣伝普及、2.エスペラントによる國際勞農通信運動への参加、3. 反動的ブルジョア・エスペラント運動との闘争、4. 朝鮮・台灣・中国その他の東洋諸民族のプロ・エス運動の促進ならびに提携、5. 國際プロ・エス運動の統一と拡大強化、6. 國際主義的教育啓蒙活動による反動的排外主義との闘争、7. 國際語としてのエスペラントの發達及び國際語理論の確立、8. エスペラント実用によるプロレタリア文化建設のための闘争。大島義夫・宮本正男、『反体制エスペラント運動史』、東京：三省堂、1974.07、178 頁。
- 121 連温卿、「我々は闘争なき人類の平和に生きん」、『Informo de F.E.S』第 1 号、1931.12.15、6 頁。
- 122 連温卿、「一九二七年の台灣」（抜粋）、台灣總督府警務局編・吳密察解題『台灣總督府警察沿革誌（三）』（復刻版）〔初版：1939.07〕、台北：南天書局、1995.06、203 頁。
- 123 鄭坤五、「就郷土文學說幾句」、中島利郎編、『1930 年代台灣郷土文學論戰資料彙編』、高雄：春暉、2003.03、227 頁。原文：「現在正在鼓吹世界語的聲浪中，怎麼要來倡設郷土文學呢？世界語是欲統一言文，使世界的人除出了各國各地唔呀吱咯的口腔；和言文不同的弊病，誰人都曉得這個方法是無以復加的了。」
- 124 邱春榮、「致郷土文學運動的諸位先生」、中島利郎編、『1930 年代台灣郷土文學論戰資料彙編』、379 頁。原文：「致郷土文學運動的諸位先生」：「幸而萬般事物都趨動於簡易化，統一化底下的二十世紀的新人，對著你們這些時代逆行的邪說，不但不垂一聽，並且學習自國語（國

文当然在内) 和有關緊要的一兩個外國語以外, 還要熱熾熾地去提倡世界語和世界語的文学哩！」

- ¹²⁵ 負人(莊遂性)、「台湾話文雜駁」:「勸告提唱鄉土文学的諸先生「緊緊降下鄉土文学的旗幟」, 從事那更偉大較有連絡性較有意義的世界普羅階級的鄉土文学。」、中島利郎編、『1930年代台灣鄉土文学論戰資料彙編』、215頁(初出:『南音』、1932.02.22)。
- ¹²⁶ エスペラントが發明された当初、エスペラント文学はすでに提唱されていたが、日本のエスペラント界では1930年代前後から重視し始めた。小坂狷二の『エスペラント文学』(東京:岩波書店、1933.07)を参照されたい。
- ¹²⁷ このエスペラント原稿は同年1月『La Verda Ombro』に掲載された。Lepismo(連温卿)、「Skizo de Parolado pri Esenco Lingva en socio」(「社会における言語の本質」に関する講演の要旨)、『La Verda Ombro』、1924.01。
- ¹²⁸ 連温卿、「言語之社会的性質」、『台湾民報』2(19)、13頁、1924.10.01。原文は:「這篇是從一九二三年十二月二十日在台北偕行社作的, 又一九二四、五、一四日在東京愛慶応大学「愛斯不難讀」宣傳講演会的招請在該校講演的講稿訳出的, 因為這稿子和「将来的台湾話」有些干係, 若是拿這篇當作那個問題的序論, 讀者一定容易能夠了解我的見地和論拠了, 所以我揭出這篇來是我的希望。」
- ¹²⁹ 連温卿、「将来之台湾話」、『台湾民報』2(20-21)、3(4)、1924.10.11、1924.10.21、1925.02.01。
- ¹³⁰ 温・連(連温卿)、「怎麼是世界語主義」、『台湾民報』、1926.10.24; 10.31; 11.14; 1927.01.09。この文章も1923年に『La Verda Ombro』に掲載された。Lepismo(連温卿)「Kia estas Esperantismo?」(エスペラント主義はどんなものなのか?)、『La Verda Ombro』、1923.05。
- ¹³¹ 連温卿、「将来之台湾話(続)」、『台湾民報』3(4)、1925.02.01、14頁。原文:「台湾的言語、先受了宗教上用羅馬字宣傳的影響、言語学雖有些進步、然民衆皆以那是有宗教的臭味、却不感謝那的努力、這是錯的、事實上言語学上只可以言語学上觀之方可、後來受了日本教育的影響、及交通敏捷的緣故、台湾言語每說了一句便有新名詞在、台湾的住民有泉州人、漳州人、客人、發音各殊、若以新名詞翻譯起來、泉人則以泉音、漳人以漳音、客人以客音訳之、一個名詞遂變作三個、又台湾是孤懸海中、住民雖是從中国渡來、因為氣候風土各異的緣故、發音上未必能與本土的人們相同、不但如是就是拿南北兩個中国所翻譯的新名詞、來比較、一定也是不同的。」
- ¹³² ここの「新名詞」とは、日本語の言葉から台湾語になった「借用語」と指す。1935年に林茂生は『台湾教会公報』で「Sin Tâi-oân-ōe ê Tîn-liát-koán(新台湾語の陳列館)」を1933年12月から1935年3月まで15回に分けて連載し、133個の「新台湾語」を紹介した。
- ¹³³ 連温卿、「将来之台湾話(続)」、『台湾民報』3(4)、15頁。原文:「**第一要考究音韻学以削除假字、第二要一個標準的發音**、若沒有這麼、要知道一個名詞、須辨續[引用者:讀]三四個同樣異音的名詞、這是怎麼不便呢、[中略]、**第三要立一個文法**、沒有文法、台湾語像野獸一樣、任他縱意疾驅山野、使台湾人們、必竭力追逐、猶恐怕不能摩提風影、若別的人們我恐拿這個台湾話、去比那棲在深林中兇惡的獅虎、說沒有曾受過文化的東西啦、野蠻野蠻、其實台湾話不是沒有文法、你們想々、難道中国有中国話、而引他系統的台湾人、就沒有和他相似的文法麼？」
- ¹³⁴ 連温卿、「将来之台湾話(続)」:「要社会發達, 言語問題是很重大的」、『台湾民報』3(4)、15頁。
- ¹³⁵ エスペラントの文法には、特に動詞を強調する。ここで連温卿が挙げた「不定式動詞、現在式動詞、未来式動詞、過去式動詞、仮定式動詞、命令式動詞」などからは、エスペラントの学習から影響を受けたことがわかる。またほかの「否定詞、疑問詞、人称代名詞、前置詞、分類語、接尾語、比較級、接続詞」などもエスペラント教科書によく取り上げられた文法である。小坂狷二・秋田雨雀の『模範エスペラント独習』(東京:叢文閣、1923.05)や、千布利雄の『エスペラント全程 独習用=教科書用』(東京:日本エスペラント社、1924.07)を参照されたい。
- ¹³⁶ 台湾語のローマ字なら、「亦」を「ia」と綴り、日本語のローマ字なら、「ya」と綴る。ここの「ja」の「j」の綴りかたは、エスペラント式となる。
- ¹³⁷ 陳芳明、『台湾新文学史』、台北:聯經、2011.11、62-63頁。
- ¹³⁸ 野村剛史、『日本語スタンダードの歴史 ミヤコ言葉から言文一致まで』、東京:岩波書店、2013.05。

¹³⁹ 森岡健二、「共通語とその変容—思考と表現の観点から—」、近代語学会編、『近代語研究 第八集』、東京：武蔵野書院、1990.09、307 頁。

第六章 連温卿の「エスペラント主義」

第一章から第五章までは、日本統治下における台湾エスペラント運動のプロセスや重要な担い手、また雑誌の内容、あるいは運動自体の思想とその変化、そして言語・文字改革運動のなかの位置づけなどについて論じてきた。序章で述べたように、エスペラント運動は、言語の問題ばかりではなく、社会運動の一環として行われ、文字改革運動のなかのさまざまな主張の1つであり、また、コスモポリタニズムや社会主義などの思想を伝える役割を担うものでもあった。第四章では1930年代のプロレタリア・エスペラント運動の理論の導入、また島内の社会運動や文化運動への影響について考察し、第五章ではエスペラントとローマ字との関係を論じながら、エスペラントの台湾の文字改革運動における位置づけを明かにした。この第六章では、以上の考察や分析結果を踏まえ、思想面に焦点を当てて、連温卿の「エスペラント主義」を例に、言語ナショナリズム・文化ナショナリズムの側面から議論を展開する。なぜ連温卿の思想を例に取り上げるのか、3つの理由が挙げられる。

まず、連温卿は日本統治時代における台湾の政治・社会運動史を語るうえで不可欠な人物であり、エスペラント運動に最も尽力した人であった。連の社会運動や思想については多くの論究があるが、彼が長い時間をかけて取り組んだエスペラント運動を中心とした研究はほとんどない。そのため、マルクス思想を持ち帝国主義に対抗する連の「ナショナリズム」は、研究者それぞれの政治的イデオロギーによって、台湾ナショナリズムの原点として捉えられる場合（呉叡人¹）もあれば、祖国（中国）意識を強く持った左翼とみなされる場合（邱士杰²）もあり、両極に分岐し、全体像が見えない。したがって本章は、第五章までの検討に基づいて、連温卿がエスペラントの思想から獲得した言語意識や階級意識、またそれとつながる民族観、そして彼が提出した「台湾民族性」を考察する。

2つ目の理由は、序章でも言及したように、これまで「非武装抗日運動」の胎動期を論じる際、1914年の板垣退助の「同化会」や1919年の蔡恵如の「啓発会」、あるいは1920年の『台湾青年』の創刊などが言及されてきた。しかしエスペラント運動の角度から検証すれば、それとは異なった「非武装抗日」へのアプローチが見出せる。連温卿は、留学生でも地主でも役人でもなく、公学校卒の学歴しか持たないが、民族運動を行っていた台湾文化協会の主導者となり、左翼的な労働者運動にもかかわり、また多くの論説や民俗研究、さらには台湾政治運動史を執筆している。彼の思想形成を考察するには、彼が最も力を注いだエスペラント運動を無視することはできないだろう。1929年の『漢文 台湾日日新報』に次のような報道がある。

赤化の文協幹部、三名公判に。台北の文協幹部、市内太平町居住、連温卿、三十六歳、王萬得、二十七歳。李徳和、二十六歳。三名は共謀し、本年六月十七日の始政紀念日に、帝国主義打倒、総督独裁政治排除のチラシを印刷した。本島各地の同志に配布する際に発覚し、台湾出版規則違反事件に関する第一回公判となった。[中略] 三名とも口を揃えて、総督の独裁政治に対して絶対反対と唱えた。³

1927年に連温卿は、「打倒帝国主義」、「排斥総督独裁政治」と書いてあるビラを配布して逮捕された。このビラは、彼が帝国主義や独裁政治に抗議する行動の1つの裏づけとなる。1957年、中国のアナキスト毛一波は、連温卿への追悼文で以下のように述べている。

連氏が努力して学んだものが何なのか存じませんが、彼の著作を細かく読むと、時代の思潮に深く影響されていると感じる。[中略]とはいえ、連氏は「玄学的弁証唯物論」と「いわゆる階級独裁制」に反対していた。従って、連氏はやはり自分自身の思想体系を持っており、それを自身の行動の羅針盤としていたのだろう。

4

「玄学的」な「理論的マルクス主義」よりは、連温卿は実践的唯物論を重視し、階級独裁的な政治体制に反対していた。こうした連の思想は、1927年の「打倒帝国主義」、「排斥総督独裁政治」という思想や実践に一貫しているだろう。ところで、毛が述べた連の「自分自身の思想体系」は、どのように形成されたのだろうか。第一章で述べたように、連は1913年からエスペランティストになり、社会運動を行いながら、エスペラント運動を1930年代後半以降も続けていた。つまり彼は、エスペラントの影響を受け、「自分自身の思想体系」を形成し、社会・政治・文化運動を行なったのである。

3つ目の理由は、「エスペラント主義」はザメンホフの思想のなかの最も重要なものである。のちに詳述するが、「エスペラント主義」についてエスペランティストの間で大きな「ホマラニスモ論争」が起こった。それに対して、連温卿は1923年5月に台湾エスペラント学会の機関誌『La Verda Ombro』に、エスペラントで「Kia estas Esperantismo? (エスペラント主義とは何か?)」を發表し、また1926年10月からこの文章を漢文に翻訳加筆した「怎麼是世界語主義 (エスペラント主義とは何か)」を『台湾民報』に連載した。この2つの文章は、連のエスペラントに関する考えや、共通語・自国語、また民族問題・社会構造問題などについて論じている。台湾の思想史を論じる際、連温卿の思想形成は重要である。彼の思想を考察するにあたって、この2篇は重要で見逃すことはできないにもかかわらず、これまで詳しく論じられてこなかった。言い換えれば、連のエスペラント主義を論じることによって、彼自身の思想形成がより明確になるだけでなく、台湾の思想受容のもう1つのルートを明らかにすることにつながる。

以上の理由から、本章は連温卿の「エスペラント主義」について論じることにする。それを議論する前に、まず、ザメンホフのエスペラント主義およびその「ホマラニスモ (人類人主義)」に対する連温卿の意見を振り返りながら、連の思想形成の背景を整理しなければならない。また、第五章で論じたように連はエスペラントから受けた言語的な思考によって「将来之台湾話」を論じたが、そのなかに存在する言語ナショナリズムや、彼が同時に考えた民族問題、特に「先住民族」の問題、民俗と民族に関する思考などを本章で全体的に考察する。さらにマルキストとしての階級的視点から民族問題を思考しつつ、抗日運動を続けた連の「エスペラント主義」を彼の思想のなかに位置づけ、彼の「ナショナリ

ズム」を再考する。

第一節 「ホマラニスモ」と「国語」排斥

言語や民族の差別のない人類の共通語を作るという動機で誕生したエスペラントは、「国語」の問題と無縁ではない。しかしザメンホフが1905年のブローニュー宣言で、「エスペラント主義とは、国民の内生活に立入ることなく、又毫も現在の国語を駆逐することを目的とせずして異なる国民に相合了解の可能を與へ、且つ諸種の民族が言語に関して相争へる国内に於ては公共機関の和解用語として用ひ得べく⁵」と述べたため、エスペラントが日本に導入された当初、エスペランチストたちは、国語を駆逐することなく、それを擁護しながら運動を推進したのである。例えば、在台日本人エスペランチスト村井徳寿は、1909年に国語と国際語との関係を以下のように述べている。

然かし国語なるものは国家存立上の要素であつて、苟も一国を形作る以上は必ず特有の国語がなくてはならぬ。故に世界言語の統一など云ふ事は黄金時代にでもなつたらば知らぬ事、各国併立の現世では一の妄想に過ぎぬのである。然るに現在の国語は先づ其儘に存して置て、別に各国民交通の機関たる一の中立語を作つて之を使用する様にしたらば、世界言語の統一と略ぼ同一の利益を得らるゝではあるまいか⁶。

すなわちエスペラントが日本に伝来した当初、国語は「国家存立上の要素」と認識されていた。そのため対外的には、中立のエスペラントを使用することで世界の各国民と思想や情報を交換し、人類の幸福を得ることができると村井は考えた。こうした考え方から、コスモポリタニズム的な思想もうかがえる。しかし、国家を維持するために「国語」を擁護しなければならないという言語観は、初期のエスペランチストが共通して持っていたものであろう。そしてこうした考え方は、1930年代以降にも継承され、理論化された。日本エスペラント協会の創立メンバーで文学博士の黒板勝美は、1932年に「国語の擁護を論じて国際語に及ぶ」を発表した。彼は、言語の統一は国民を形作る要素であると述べ、国家統治において必要であると強調し、建国以来2500年あまりの日本帝国の国体と長い歴史を持つ日本語を賛美しながら、多数の方言に分裂している日本語を統一することが急務であると呼びかけた。黒板はまた、外国語を学習する必要性は認めつつも、外国語を学ぶ者がそれを崇拜することを批判した。そして、エスペラントは自国語を尊重すべきであり、簡略化された欧州諸国に共通するエスペラントを日本の唯一の外国語として採用することを提言したのである⁷。黒板のような国語擁護論に立脚し、エスペラント運動を行った学者は大勢いる。ところがその一方で、1920年代前後にはエスペラントと「国語」の関係がしばしば議論され、植民地の言語政策とともに問題化したのである。

周知のように、植民地台湾では、1896年3月から台北に「国語学校」が設立され、同年末までに全島で14箇所の国語伝習所が創立された。1897年10月に総督府は国語伝習所規則を修正し、また1898年7月に「台湾公学校令」を公布し、台湾人の初等教育機関

としての公学校が次々と設立された。台湾の「国語（日本語）」教育は、ここから本格的に始まった。1918年の時点で、公学校を卒業した台湾人は53401人で、総人口の1.51%を占めた。1920年には「国語解者」は総人口の2.86%を占め、1937年の時点では37.8%まで増えた⁸。領台後20年の段階では、「国語解者」の割合はまだ低かったが、領台前後に生まれた連温卿の世代は、公学校を卒業すれば、日本に留学しなくてもある程度日本語の読み書きができるようになっていた。そして1937年の日中戦争以降、国語運動、改姓名、志願兵制度、宗教・社会風俗改革などの「皇民化政策」が行われ、「国語家庭」を認定する制度が作られた⁹。一方、国語教育が推進され「国語解者」が増えるにつれて、漢文の読み書きができる知識人は減少し、文章や文学作品などを日本語でしか書けない知識人が増加した。

国語教育が実施されていく一方で、1913年に台湾のエスペラント運動は始まった。1913年の時点では、連温卿は「国語」を通じてエスペラントを学び、普及運動に取り組んでいくが、やがて国語について批判的な立場に立つようになった。例えば彼が1922年10月にエスペラントで書いた「反対運動者と裏切者」という文章で、次のように述べている。

過去数世紀のあいだ各強国の植民地政策は、従属国の民衆の同化を目ざし、支配する国の言語がうまくひろまれば、同化政策もみのり多いものになることができる、と彼らは信じていた。[中略]しかし、それに反して世界大戦後はそういう思慮を欠いた考えは、世界の潮流のなかで春の雪崩のように消えうせた。そしてその反動としてエスペラントはひろまりつつある。[中略]自由と平等の上に立って考案されたエスペラントこそ、新時代の精神を最も完全に表現できるからである。

10

連は、エスペラントは植民地政策や同化政策への反動として出現したものであると認識していたのである。そして彼は1920年代初期から、世界の潮流に応じて世界の思潮を帯びたエスペラントを宣伝すると同時に、植民地政策や同化政策を批判していた。これは、世界の変化に対する批判だけではなく、植民地における状況を理解した上での発言であり、島内で同化政策を唱える者への批判と考えられる。その批判について後述するが、まず、「自由と平等の上に立って考案されたエスペラント」を普及する連温卿の考え方は、エスペラント運動内部での「ホマラニスモ（人類人主義）論争」、つまり真のエスペラント主義は何か、という論争とも関連していたのである。以下、連のエスペラント主義について分析する。

（一）「ホマラニスモ論争」と連温卿のエスペラント主義

1922年11月、大阪エスペラント学会の機関誌『Verda Utopio（緑のユートピア）』は、「Deklaro Sensubskribita（無署名の宣言）」という文章を掲載し、1905年のブローニュー宣言における国語関連議論を含む第1項¹¹を削除することを主張するとともに、ザメンホフが1906年に提唱した「ホマラニスモ」（Homaranismo、人類人主義）を新たなエスペラ

ント主義として支持することを宣言した。この Homaranismo とは、「純然たる人間性と民族間の絶対正義と平和を目的」であり、「偏狭愛国心のない基礎の上に立って中立的な人間の文化に奉仕することのできる」ため、中立的言語エスペラントを起用する主義である¹²。簡単に言えば、民族、言語、宗教の差別がなく、その差異を認めた上で人類の正義と平等をうたったものである。ところが、この宗教を超越した理念は、合理主義的なフランスなど西ヨーロッパのエスペランチストたちに受け入れられず、その後も多くの批判や議論を招いた¹³。翌年の 1923 年、『Verda Utopio (緑のユートピア)』は 1-3 月合併号で、この問題を再び取り上げ、伊藤徳之助の「内在思想こそ真のエスペラント主義」、千布利雄¹⁴の「エスペラント主義は純粋な言語運動」、高橋邦太郎の「ブローニュー宣言に忠実であれ」など賛否の分かれる 3 つの意見を載せた。このため、真のエスペラント主義とは何かが変わって問われ、議論されることになった。

これらの意見に対して、小坂狷二は 1923 年 8 月創刊の世界思潮研究会の機関誌『エスペラント研究』で「La Homaranismo (ホマラニスモ)」を発表し、エスペラントの「内在思想」である「Homaranismo」に共鳴した¹⁵。だが、小坂の主張に不満を持つ千布利雄は、1923 年 9 月の日本エスペラント学会の機関誌『La Revuo Orienta』で「学会委員を辞するについて」という記事を発表した。

私はこのたび委員諸君の了解をえて、平和に円満に日本エスペラント学会委員たることを辞しました。それは近ごろ学会の事実上の主宰者小坂狷二氏及びその同志の方々と私とが、エスペラント主義に関する見解において根本的に相違せることを見いだしたからであります。[中略] 事務上の意見の相違なればお互いに譲歩して和衷協同しなければならぬけれども、主義思想の相違は妥協を許さるべきものではありません。[中略] 日本のエスペランチストが、主義思想のいかに問わずに単にエスペラントを用いるという一点において結合しえざる今日の状態を、エスペラントのために深く遺憾とします。¹⁶

結局、1922 年 11 月から始まった「ホマラニスモ論争」では、ホマラニスモを支持する小坂狷二は学会のアジテーターとしてみなされ、小坂の主張に抗議する千布は 1923 年 9 月に学会委員を辞任した。論争のなか、小坂らは「ホマラニスモ派」、千布らは「ブローニュー派」と呼ばれた¹⁷。その論争の影響もあってか、千布は 1924 年に改めて『世界語主義 ブローニュー宣言¹⁸』を翻訳出版した。

ところで、ホマラニスモ論争が始まる前、1920 年 9 月に台湾エスペラント学会の機関誌は、すでにザメンホフの「El Deklaracio pri Homaranismo (ホマラニスモについての宣言)¹⁹」を掲載していた。そして 1923 年 5 月に連温卿は、筆名の Lepismo (蠹魚) を用いて「Kia estas Esperantismo? (エスペラント主義とは何か?)²⁰」を発表した。短い文章だが、連は最後に『Verda Utopio』に掲載された「Deklaro Sensubskribita (無署名の宣言)」に同調し、ブローニュー宣言第 1 項を葬ることを認め、エスペラント主義の内在思想「ホマラニスモ」を支持することを宣言した²¹。この文章は、小坂の「La Homaranismo」の主張と一

致するが、小坂より早く発表されている。

連温卿はさらにこの「Kia estas Esperantismo ?」を漢文に翻訳加筆し、「怎麼是世界語主義（エスペラント主義とは何か）」というタイトルで『台湾民報』に1926年10月から4回にわたって連載した。漢文版の内容は「Kia estas Esperantismo ?」の主張とほぼ一致するが、より詳細に「エスペラント主義」とその内在思想である「ホマラニスム」の源流を紹介し、ヨーロッパ諸国や台湾の例を挙げて言語と社会状況との関係について説明している。以下、漢文版の「怎麼是世界語主義」に基づいて連のエスペラント主義を論じる。全12節からなる文章を要約すると、次のようになる。

エスペラントが今日のような盛況となったのは、簡単に学べるという理由のほか、「民族観念を超える」という理想に人々が惹かれたためであろう。その理想は、エスペラントの内在思想にあり、「エスペラント主義」と名付けられる。現今の国家には種々の民族が含まれるが、しかし権力者が民族意識を高めようとして「同化主義」を行うため、国家と民族との関係は、1つの国がほかの民族を排除しながら支配する行為となった。エスペラントの流行は、狭い国家概念に対する反動であり、「民族自決」に応じた結果でもある。そのためエスペラントの普及運動は、植民地では常に警戒される。現今、強大な国には多くの異民族が含まれ、各異民族が民族意識によって国家制度に対抗している。一方、国家は民族の闘争心をなくそうとしている。すなわち国家と民族との間の衝突の原因は、言語の差異ではなく、制度の問題にある。支配者は統治の基礎を固めるために同化制度を実施し、「分割統治」によって各民族間が敵視し合うようになった。

例えば、多民族のポーランドがロシアに分割された後、ポーランド人の地位や地域内の各民族の言語が抑圧されたことは、ザメンホフがエスペラントを創造する1つのきっかけとなった。ザメンホフは1つの中立的言語を以て各民族間の衝突を解決しようと図った。しかし、衝突の原因は、政治上の「分割統治」にあるため、エスペラント主義はその「内在思想」から分離されれば、エスペラント主義とエスペラントが存在する意義がなくなってしまう。エスペラント主義の具体的表現は、ザメンホフが個人名義で発表した「ホマラニスム」にある。すなわち、民族、言語、宗教を差別しないことを訴え、人類の正義と平等を求めることである。しかし現今の権力者たちは、みな自国の国語の権威を擁護しながらエスペラントを普及する。ソビエトロシアにおいて、エスペラント主義がプチブルの思想であると言われるのは、これらの現象から帰結した考えであろう。

現在の既成社会には、「抑圧者」と「被抑圧者」との2つの階層が存在する。前者は政治力に頼って、抑圧された生産者から経済的に搾取し収奪する。もしこのような社会構造を変えなければ、エスペラント主義は実現できないだろう。つまり、ザメンホフが当初提出したエスペラント主義は当時の社会に応じた主張であるが、

エスペラント主義の思想も社会の進化と共に発展していくべきである²²。

すなわち、自国の国語の権威を擁護する思想になっている現状に対して、連温卿は、「エスペラント主義」がその「内在思想」の「ホマラニスム」と分離しなければ、今の時代にふさわしい思想になると考えたのである。第一章で言及したように、台湾エスペラント学会は1922年から左傾化し始め、機関誌も1922年から1923年にかけて多くの社会主義に関する文章²³を掲載した。また、前述した植民地政策や同化政策を批判した「反対運動者と裏切者」もあり、連が1923年5月に「Kia estas Esperantismo?」を發表し、「ホマラニスム」を支持したことは不思議ではない。だが、1926年の漢文版の「怎麼是世界語主義」においては、「現在の既成社会には、「抑圧者」と「被抑圧者」との2つの階層が存在する。前者は政治力に頼って、抑圧された生産者から経済的に搾取し収奪する」と、より明確にマルクス主義的な視点でエスペラント主義を考えていた。

1913年にエスペランチストになった当初は、連温卿は「嫌悪な政治雰囲気」から逃れる1つの新たな道として、エスペラント運動を「純粋な言語運動」とみなしていた。しかし植民地の現状を考えながら社会主義と接触することで、台湾エスペラント学会を左傾化させた。連は1926年には、ザメンホフの1906年のエスペラント主義と1913年の「ホマラニスム」との時空的な差異を論じながら、「ホマラニスム」こそが今日にふさわしい「エスペラント主義」だと考えた。ちょうど同じ1926年に、連が陳規懐という筆名で発表した「日本帝国主義下の植民地台湾²⁴」で、統治者の被統治者への経済搾取政策を強く批判している。つまり彼は植民地の「被圧迫者」である台湾人の状況を知ったうえで、「真のエスペラント主義」を再考しながら、運動を普及していったのではないか。こうしたエスペラント主義に対する考えの変化は、1930年代の「プロレタリア・エスペラント運動」として発展していった。

(二) 国語としての日本語への排斥

上述したように、1922年に連温卿が「反対運動者と裏切者」というエスペラントの文章で、植民地政策や同化政策に反対し、また1926年の「怎麼是世界語主義」で自国の国語の権威を擁護しながらエスペラントを普及するエスペランチストを批判した。では、同化政策の一環として普及された台湾の「国語」に対して彼はどのように考えていたのだろうか。「怎麼是世界語主義」では、植民地台湾における国語政策について直接的には言及していないが、実例を挙げて台湾での差別的な社会構造を説明している。

ちょうどある友人が政府に命じられてアンナン（フランスの保護国）へ出張に行った。私は彼に手紙を送り、あて先をエスペラントで書いた。その後、彼の返事をもらった。友人は、またエスペラントで書き寄こし、当局に発見されれば、私は追放されるかもしれないから、もうそうしないでくれと言った。[中略] エスペラントを学ぶと言っても、日本人と台湾人とは、その意義は同じではないようだ。それはなぜだろうか。例えば、日本人はエスペラントを学んで西暦の年号を

使っても、それは国際上の慣例にしたがっただけである。しかし、もし台湾人が西暦を使えば、一種の反逆と見なされる。なぜなら、日本国には固有の年号「大正〇〇年」があり、それを使わず西暦を用いるのは、日本固有の年号を排斥する行為となるからだ²⁵。

連はヨーロッパ共通の言語といわれるエスペラントで書いた手紙を出張先の友人へ送ったが、母国フランスで禁止されたエスペラントで書かないよう忠告された。当時、エスペラントを警戒するヨーロッパの国もあったのだ。同文章でも 1920 年代初期にフランスが訓令でエスペラントの普及を禁止したと言及している。同じような状況は台湾にもあった。第一章で触れたように、警察の監視がエスペラント運動に対して厳しくなってきたため、在台日本人エスペランチストは台湾エスペラント学会から次々と離れていった。また、同文章でも連の友人である「K. J」から聞いた話に言及している。当時警務局保安課で勤務している日本人は、台湾人が日本人と同じエスペラントを学んでも、日本人と階層や立場が違う台湾人が西暦を使うことは当局から認められなかった。その K. J とは、第二章で論じた台湾エスペラント学会の左傾化に大きな影響を与えた山口小静（K. Jamaguchi）のことである。

山口は、台湾人の西暦使用が一種の反逆と見なされることを「赤化か緑化か」にも書いた。また彼女は、台湾人が日本人と同じエスペラントを学び、西暦を使うことが当局に「日本語排斥」と見なされると詳しく述べている。

私は最近台湾当局の某高等刑事とエスペラントに就いて二三問答する機会を持った。彼は、一般台湾人の間にエスペラントが普及される事に就いて当局はこれを如何なる眼で見ているか、といふ私の問に対して、次の如く答へた。『一般に内地人がこれをやる場合と台湾人がやる場合とでは、かなり違つた意味に解されねばならない。例へば手紙の端にでも一九二二年と書かれてある場合、その筆者がもし内地人ならば単に世界共通の年号として之を使用したに過ぎないが、同じ事が台湾人によつて書かれた場合には、これは単にそれ丈の意味ではなくて、明かに日本に厳存せる大正十一年という年号を無視し且つ排斥する心と見なければならぬ。同様に、同じくエスペラントを学習するにしても、内地人の場合には単に世界の共通国際語として、来るべき人類平和の象徴語として、或は国語愛重の手段としてこれを扱んだものである事を疑はないが、台湾の場合には大いに事情が違つてくるのである。彼らは単に世界の一民としてこの世界語をやるのではなく、一方に日本語排斥の意味を十分に含ませている。而して言語と思想との関係は密接であるから、日本語排斥は即ち日本そのものゝ排斥でなければならぬ。日本の植民政策は断じてかゝる反逆者を黙許する事は出来ない²⁶。（太字：引用者）

内地人が国語愛重の手段としてエスペラントを使用していることや、台湾人のエスペラント使用には日本語排斥の意味が含まれている、という当局の発想は、山口小静を驚かせ

た。それは当局の一方的な考え方であったとしても、連温卿が「怎麼是世界語主義」で言う、各民族間の衝突の原因は、言語の差異でなく、政治上の「分割統治」によるという論理と似ている。すなわち、連は当局が台湾人と日本人とを対等に扱う「一視同仁」の制度を導入すれば、日本人と台湾人の言語が異なっても両者の間で衝突は起こらないだろうと考えていた。つまり、「社会構造を変えなければ、エスペラント主義は実現できないだろう」というように、連温卿は、「偏狭愛国心のない基礎の上に立って中立的な人間の文化に奉仕する」ために、中立的言語エスペラントを起用する「ホマラニスモ」を、真のエスペラント主義として取り入れ、植民地台湾の統治制度を変えることによって、真のエスペラント主義を実現できると主張したのである。

1920年代の連は、帝国主義や有産階級を打倒することをしばしば語っているが、日本語を排斥することは明言していない。しかし彼が支持する「ホマラニスモ」から見れば、国家制度としての日本語である「国語」は、分割統治を行う「同化主義」によって維持されるもので、決して中立でなく、擁護することもないとわかるだろう。ところが、1920年代に「将来之台湾話」を提案し国語政策を批判した連が1930年代以降には、日本語で文章を執筆することが1920年代より多くなっている。それは、彼がいう各民族間の衝突の原因は、言語の差異でなく、政治上の「分割統治」という論理が働いたからではないか。つまり、彼は言語問題にかなり関心を持っているが、民族問題を含む階級問題をより重視したといえよう。そして彼は、プロレタリア・エスペラント運動の旗を掲げ、エスペラントを無産階級の武器として帝国主義に対抗する姿勢を見せた。以下の第三小節でこの問題について論じる。

(三)「無産階級」の武器で帝国主義に対抗

第四章で言及したように、1930年代以降に日本内地では、大島義夫はマルクス主義的言語理論を日本に導入し、雑誌『国際語研究²⁷』を発行した。また斉藤秀一は、雑誌『文字と言語²⁸』を刊行し、エスペラントとローマ字および大衆化との関係についての理論を構築し、中国のラテン文字運動とも連携した。これらの行動は1930年代の半ばから後半に行われたものだが、台湾エスペラント学会は、内地での動きの影響を受け、プロレタリア・エスペラント運動の方針を取り運動を再開した。この時期の連温卿のエスペラント観の変化を言えば、1910年代の「純粋な言語運動」の普及や1920年代の国語批判を経て、社会運動や政治運動における階級闘争路線を実践しながら、1930年代以降は階級闘争論によってプロレタリア・エスペラント運動を行い、「無産階級の武器」となるエスペラントを普及していった、ということになる。

エスペラントが無産階級の武器であるというスローガンは台湾でも掲げられたのは、1930年代の島内の思想状況とも関係する。小林長彦が『台湾時報』に「社会思想界の展望」という文章を発表し、当時の台湾の思想界の変化について語っている。彼は、経済恐慌に加えて農村恐慌の影響が日本全国で深刻化し、労働争議や小作争議などの発生、社会主義思想や無産階級組織の発展について説明する。さらに、「民族自決主義思想」が衰退し、「社会民主々義的思想」が高揚しつつある状況や、台湾地方自治団体の主張などを紹

介したあとで、台湾におけるマルクス思想の広がりを批判して次のように述べている。

世界大戦の産物で、前代未聞の著大を増加を示した二種の紙製品に、不換紙幣とマルキシズム文献の刊行物があるとさへ謂はれて、マルキシズムの旗の下に大衆を誘致せんとする運動は、大戦後に於ける世界的現象となつて表はれた。[中略] 現在島内に於ける之等の左翼思想は、文化協会・農民組合等を其の中心となし、内地又は中国方面に留学する青年学生達によつて齎されるやうであるが、最近漸く一つの勢力を形成し、様々なる形態によつて表現化されようとしてゐる。[中略] 即ち、文化協会は、農民組合と共に左翼の一勢力をなすものなることは、同会幹部達が、自治聯盟辺りの運動を常に日本帝国主義に迎合する反動的性質を有するものなりと称して、絶へざる慢罵を浴せてゐる点より見ても瞭かである。[中略] 無産階級運動の進境未だ幼稚なる本島の現状に於て、斯る対立思想の何れが運動の純真なる成長に幸ひするであらうか、将又、その何れが大衆の信頼を捷ち得るものであらうか。²⁹

1930 年前後、経済恐慌に加えて農村恐慌を背景として、労働争議や小作争議が日本各地や植民地でも発生したため、マルキシズムが知識人の間に影響を与え、無産階級運動が起こっていた。こういう思想は総督府側から見れば批判すべき対象となるため、政治運動で挫折した台湾の知識人は、文化運動に重心を移したり、エスペラント運動にもマルクス主義的言語理論を導入することで、文化運動的闘争によってエスペラントを普及した。

本論で何度も引用したが、連温卿は「我々は闘争なき人類の平和に生きん」という文章で、「実際この言語と云ふ武器が無産階級の手収めてゐるこそ、この言語の持つ偉大なる優秀性を始めて發揮しようと私は信じて居ます。何故ならば、この言語を趣味や社交などのために使用するのではなく、永久の闘争なき人類の平和に生きんがために、それを実現するがために使用するからであります。であるからエスペラント運動が階級的性質を帯びてくるのが当然である³⁰」と述べている。つまり、台湾の有産階級が持つ武器でもある「国語」に対して、大多数が無産階級である台湾人の武器は、有産階級と闘争するだけでなく、世界の無産階級と連携が可能で、本当の平和を求めることができるエスペラントであると彼は考えていた。

1932 年 6 月に発行された台湾エスペラント学会通信のなかに、S. S. の「エスペラントをかく視る」が掲載された。そのなかにも「Esprantismo」（エスペラント主義）が提起されている。第四章でも言及したが、ここは少し長めに引用する。

プロレタ・エスペラント運動は、いまや悪戦苦闘の中に於いて強大に発展を続けてゐる。その発展はけつしてプチブル層に於いてはではなく、すべての**勤労大衆**並に農村青年層に於いて極めて克明にその足跡を認めうるのである。[中略] 云い換へれば、エス語はプロレタリア解放の武器であり、人類平和の光である。
“esprantismo”もかゝる意識の下に於いて始めて自ら正当なる発展を準備しうで

はあるまいか。徒に社交的に、或は慰安的に運動を続けてゐる“gesinjoroj”も多くあるであろうが、彼等はエスペラント運動の本来の使命を歪曲するこそあれ、決してそれを横的に推し進めることは出来ないのである。であるから、エス語を学んだ以上は少くとも“esprantismo”をかく如くに理解せねばならぬと思ふ。³¹（太字：引用者）

この文章は連温卿によるものではないが、彼が編集した通信で発表したものであり、連の「我々は闘争なき人類の平和に生きん」という文章での主張と一致する。作者は「社交的に、或は慰安的に運動を続けてゐる“gesinjoroj”（按：皆様、つまり多くのエスペランチスト、とりわけ有産階級）」を批判し、「エス語を学んだ以上は少くとも“esprantismo”をかく如くに理解せねばならぬ」と強調した。こうした考えは、連温卿が「怎麼是世界主義」での主張、すなわち「エスペラント主義の具体的表現は、ザメンホフが個人名義で発表した「ホマラニスム」にある。すなわち、民族、言語、宗教を差別しないことを訴え、人類の正義と平等を求めることである。しかし現今の権力者たちは、みな自国の国語の權威を擁護しながらエスペラントを普及する。[中略]もしこのような社会構造を変えなければ、エスペラント主義は実現できないだろう」と同じ論理であろう。このように、連はザメンホフの「ホマラニスム」を新たなエスペラント主義とみなし、エスペラントを無産階級が共有できる武器と考え、プロレタリア・エスペラント運動を進めていたのである。

1932年以降も、連は「台湾新民報」社内で定期的なエスペラン講習会³²を開いただけでなく、エスペラント教科書を発行し、さらに1936年には『台湾新文学』に「エスペラント講座³³」を掲載した。彼はこうしたエスペラントの思想を、作家や知識人らに広めようと試みていた。

ところが、帝国主義を帯びる日本語に対抗するために、エスペラントは無産階級の共通の武器となりうることを強調した連温卿は、民族言語としての台湾語によって、帝国言語に対抗できると考えたのではないだろうか？第五章で論じたように、1920年代初期の文字改革運動の流れのなかに、連はエスペラントから学んだ思考で台湾語の言葉や文法の整理を提案した。こうした提案は、1920年代の文字改革運動には大きな影響を与えることはなかったが、1930年代のナショナリズムを帯びた台湾話文論争に継承された。以下の第二節と第三節では、連の言語ナショナリズムと彼の「民族観」について分析する。まず第五章の「将来之台湾話」についての分析を踏まえて、連温卿の「台湾話文観」を論じる。

第二節 連温卿の「台湾話文観」

「国語」を使用せざるをえない状況のなかで、エスペラントの思想も変化しつつあったが、社会運動に参加しながらエスペラント運動を続けた連温卿は、最も早く「台湾語」を近代語として考えた1人であった。第五章で言及したように、劉捷は「台湾文学の史的考察³⁴」のなかで、黄呈聰の「論普及白話的新使命」、黄朝琴の「漢文改革論」、蔡培火の「新台湾の建設と羅馬字」、張梗の「討論旧小説的改革問題」、連温卿の「将来之台湾語」、張我軍の「新文学運動的意義」などは、いずれも「台湾語の建設」とつながっており、1920

年代初期の新文学の導火線になっていたと論じている。張我軍が「私たちが現在語っている新文学運動は少なくとも2つの要点がある。それは白話文学の建設と、台湾語言の改造である³⁵」と言っていたように、台湾における近代語を構築することは、台湾新文学運動の重要なテーマであった。

劉捷の文章と同じ1936年に、日下部重太郎は雑誌『教育』に「国字問題史観」という文章を発表した。明治維新以降70年経った現在までの国字問題を、漢字節減説・仮名説・ローマ字説・新字説など4種類の国字改良説の発展から論じ、「国字問題は新日本の一大思潮である。国字問題の所説に種々相のあるのは、現在から将来に達する国字に対する理論と実際との間における意見に異同があるからだ³⁶」と述べ、「懸案」である国字問題の解決に最善を尽くそうと建言した。同じ年に「新台湾の建設と羅馬字」を執筆した蔡培火は、「台湾に於ける国字³⁷」を提出し、仮名式の台湾語文字を当局に認可してもらおうとした。第五章で強調したように、1920年代初期からの台湾の文学上での一連の動きは、「国字改良問題」として議論されたのである。

第五章で、連温卿の行った台湾語文法の構築は台湾語を近代語とするために重要な試みであると分析したが、ここでは連の「言語之社会的性質」と「将来之台湾話」との2篇の文章やそれと1930年代の台湾話文論争との関係から、彼の「台湾話文観」について論じる。

(一)「言語之社会的性質」で考える社会問題

第五章で触れたように、連温卿は1923年12月に台北の偕行社で「言語之社会的性質」というテーマで講演を行った。講演の要旨は1924年1月に『La Verda Ombro』に発表された³⁸。同年5月の東京旅行中に、連は慶応大学で同じテーマをエスペラントで講演をした³⁹。その後、彼はそれを漢文に翻訳加筆し、「言語之社会的性質⁴⁰」というタイトルで『台湾民報』に掲載した。のちに、これを発展させて「将来之台湾話⁴¹」を3回連載した。

「将来之台湾話」の序論となっている「言語之社会的性質」は、どのような内容であろうか。まず連温卿は、台湾語のなかに日本語からの借用語が多くなったことを例に挙げて説明する。例えば、日本語のマッチの発音からつくられた「麻茲知」ということばは、日本が西洋文化を模倣して生み出されたものである。昔から「迷子」が存在しなかったわけではないが、日本時代に迷子になった子どもが家に帰れるケースが増えたため、台湾語読みの「麻約伊哥」ということばが台湾社会に定着するようになった。つまり言語そのものが当時の文化的象徴であり、当時の社会を反映したものであると彼は言っている。しかし、彼はそのことばを別の社会で使用すれば、人を支配する可能性があるとして主張する。例えば、マッチや電車などの新しいことばを、原始社会やそのものが使われていない社会に使用できれば、その社会の人々に劣等感を感じさせることになるだろうと、連は考えた。そして、彼は以下のように述べる。

言語の起源は、民族の起源と一致する。自己の存在のために、自己を防衛するために生まれたものである。その時の言語はまだ社会的性質を持っていなかったが、し

かしその後、群れの集団は、家族の集団や地方の集団に分化し、さらに民族の集団に分化していく。言語の範囲と当時の社会の経済組織は、互いに比例して次第に拡大する。言語の社会的地位－性質は、対内的にも対外的にも、変化していくだろう。

42

すなわち、言語の「社会的性質」は、群れの集団が家族や地方、さらに民族の集団に分化してから生まれ始めたというのである。特に集団の範囲が変わるにつれて、言語の範囲も拡大していくと連は考えた。また連は、新渡戸稲造が国連へ提出した「エスペラント運動に関する観察」という報告書のなかで「言語と民族の敵愾心は同じものである。今日の言語の社会的性質は、他民族の言語の世界的優越権を排斥する一方で、自民族の独立精神を守ろうとするものである。極力自民族の言語を保護し、改良に尽力し、(引用者：結局)他民族の言語をより優れたものにしようとし、世界的な優越権を獲得しようとする。これは矛盾でなければ何であろうか。」⁴³と述べたことを引用しながら、自分の意見を加える。

私が言うまでもないことだが、現在の代表的な政治思想は、国家の観念と民族の観念を同一視し、同一の民族を同一の権力の理想に服従させるものである。[中略]言語問題を民族の感情とみなしてはいけない。むしろ社会問題として見たほうがより適切だろう。読者がもしこの問題を理解できれば、国際語の問題も理解されるだろう。⁴⁴

ここでは、連は、言語問題を民族の感情ではなく社会問題や「権力」として考えている。言語と民族との関係を説明しながら、国際語、つまりエスペラントの重要性も提起した連は、植民地政策が実行した台湾社会の社会問題に注目し、言語の問題を考えている。繰り返しになるが、第五章で論じたように、連が台湾の言語問題を考えたのは、エスペラントからの影響が大きい。しかし、彼は言語問題よりも民族問題を含む階級問題を重視した。すなわち、言語問題を考えるのも、そのなかに反映された社会問題に関心を持っていたためと考えられる。そのため1930年代以後に、彼はエスペラントを帝国主義へ対抗する武器とみなし、この言語を普及した。

ところが、序論としての「言語之社会的性質」で「自己民族の言語」に言及しながら、連温卿は「言語問題を民族の感情とみなしてはいけない。むしろ社会問題として見たほうがより適切だろう。」と言った。しかし「本論」にあたる「将来之台湾話」には、彼は自己民族の言語である台湾語に対する「民族感情」が溢れている。以下の第二小節では、「将来之台湾話」にある民族感情のイデオロギーについて論じる。

(二) 近代意識から生まれた「将来之台湾話」

『台湾民報』に3回連載された「将来之台湾話」は、「言語的観念」、「言語的起源」、「近世之言語問題」、「台湾話的将来」、「台湾話文法暫定」の5節に分けて展開した。第五章で論じたように、この文章は、エスペラントから影響を受けた言語観に基づいて台湾語の論

考や文法の体系化を試みたものであった。まず、「将来之台湾話」の概要をまとめよう。

1節の「言語的観念」は、言語は社会観念を表現する道具であり、人類の日常生活から生み出されたものであるため、それを通して、「社会」がどのように形成されたかを知るべきであると説明する。2節の「言語的起源」は、社会学で言及した人類の繁殖や群れの形成を例として言語の進化を説明した。また、文字は発達した言語が誕生させたものであり、群れの団体化した社会が生み出した思想を記録するものであるというように、言語と文字および社会との関係を語っている。そして、3節の「近世之言語問題」は、1つの社会の経済が極めて発展すれば、その社会の人々に「国民性」を持たせるためにその言語を鼓吹して、侵略政策の道具になったことを述べている。連温卿はそれを批判しながら、弱小民族であり、植民地の言語でもある台湾語は、社会観念を表現できなくなったため、「我々台湾人は、私たちの台湾語を改造し、社会の生活的要求に応じなければならない⁴⁵⁾」と強調した。

また、4節の「台湾話的将来」では、泉州人・漳州人・客人（客家人）など台湾住民の言語は発音がそれぞれ異なり、多くの発音を当て字で表し、また日本教育の影響で新しい言葉も多くなったため、言語状況が混乱していることを指摘する。そのため、彼は進化している台湾社会は、その言語にも進歩させるためには、改良しなければならないと強調する。さらに連は、①音韻学を研究し、当て字を削除すること、②標準の発音を定めること、③文法を体系化することなど、3つの台湾語の改良案を提出した⁴⁶⁾。最後の5節の「台湾話文法暫定」は、具体的に言葉の整理や台湾語の文法を提案した。彼が挙げた例から見れば、それはエスペラントから学んだ文法や綴り方を「台湾話」に応用したものであることがわかる。

すなわち、「将来之台湾話」は、文法を整理することによって、台湾語を1つの「標準的な言語」に改善しようとしたものと考えられる。つまり連は、近代化した台湾社会には、標準語であり、なおかつ「近代語」としての「台湾語」を作らなければならないと主張する。そして彼が「標準的な言語」という問題を考えたとき、もちろんそれはエスペラントや言文一致運動であった。しかしより重要なのは、彼は、弱小民族としての感情から出発し、多言語状況にある台湾が、植民地政策によって多くの社会問題を抱えながらも「近代社会」になりつつある現状を踏まえ、台湾語を近代化させなければならないと考えたことである。

連の言語に関する考え方は、1920年代初期にとどまらず、彼が1926年に台湾エスペラン学会機関誌で訳した「Bildo Ideografra I（表意文字の絵像 I）」⁴⁷⁾や、1932年の学会通信で発表した「La Komenco de Ideografio（表意文字の起源）」⁴⁸⁾にも表れている。そして連は、言語問題を通じて社会問題を考えながら、新しい社会にふさわしい「自己民族の言語」のために、台湾語の「近代語」を作ろうとした。こうした言語的イデオロギーの背景には、彼の「近代意識」が強く働いている。それを検証するには、彼が『台湾民報』や『大衆』などに発表した文章を分析しなければならない。

「将来之台湾話」と同じように、彼の多くの文章には、「近世」、「文明」、「現代化」などの言葉がよく出てくる。例えば、1925年の「婦人的地位和社会的關係」の冒頭には、「近

代社会における人類科学の研究において、女性の地位は、経済組織—生産方法の変化によって移行するものであると考えられている⁴⁹とある。また、1926年の「印度的売淫」では、「最近、北部では『検番』制度を設置しようと唱えており、私に微かな感慨を抱かせた。社会の流行語癖『台湾はすでに文明化した』という言葉の思い出させるのである⁵⁰」と、台湾社会の文明化を感慨している。あるいは、1926年に日本の左翼系雑誌『大衆』に発表した「日本帝国主義下の植民地台湾」でも、「金融に於て従来銀本位を金本位に変革し、本国資本家の投資に黄金の花を咲かせると同時に、台湾人の生活を一躍して近世文明人の程度にまで引き上げたのである。[中略] 尚一方には土地調査を励行して、地租の増収を計り、大租横を整理して旧社会に於ける農民寄生階級たる大租戸を廃し、農業制度を完全に現代化せしめたのである⁵¹」と述べている。

連温卿は、台湾はすでに「近代」、「近世文明」、「現代化」したことを肯定するかもしれないが、上述したように、彼は植民地政策による近代化を批判する。そのため、植民地になってから20余年、こうした近代化に応じて、彼は黄呈聰、黄朝琴、張我軍、張梗、蔡培火などの知識人と同じように、「近代意識」に促され、「近代社会」に適合させるために、台湾語の改革を考えた。特に連は「標準的な台湾語」を作り出そうとした。言語の問題だけではなく、彼は台湾の近代化・文明化を意識しながら、女性問題や、帝国主義における植民地社会、あるいはその社会の経済問題などを考え、そうした社会を作り上げた帝国主義や資本主義を批判している。

ところが、社会運動や政治運動に力点を置いた連温卿の台湾近代語の構築は、すぐに実現されたのではなかった。台湾文学研究者の陳芳明は、連の「台湾話文論」が1930年代以降に影響し、「台湾民族主義」を提唱する役割を果たしたと評価している⁵²。陳芳明の言う「台湾話文論」とは、「将来之台湾話」を指しているが、陳はそれがどのように「台湾民族主義」の提唱に影響を与えたかについては詳しく論じていない。では、連温卿の近代意識から生まれた台湾語近代化の構想を支えるイデオロギーは、1930年代の「台湾民族主義」の提唱にいかなる影響を与えたか。次節で論じる。

(三) 連温卿の言語ナショナリズム

第一章で少し触れたが、連温卿が台湾エスペラント運動について1936年の回想のなかで、興味深い1つの証言がある。

そしてエスペラント語の味を体験した私は同じくさう云ふ体験を持つ蘇氏の相談に応じて黄鉄氏と共に日本エスペラント学会の成立後に台湾支部を台湾エスペラント学会 (Formosa Esperantista Societo) と改称し、再組織に努めることになった。そのとき私は一つの民族に一つの団体と云ふ意味から Societo の代りに Asocio を使っていたが、小坂狷二氏から asocio は一国的の意味を有するので一地方たる台湾には適しないとの意味合の注意を受けたことがあつたと憶へてゐる⁵³。(太字：引用者)

上述したように、台湾エスペラント運動を始めたのは、在台日本人の児玉四郎であったが、総督府はエスペラントをロシアの虚無党とみなし、また抗日運動が西来庵事件を経て挫折したため、エスペラント運動は沈静化した。そして1919年に運動を再開したのは、在台日本人ではなく、連温卿と蘇璧輝および黄鉄ら3人の台湾人であった。1919年末の創刊号は未見であるが、1920年1月の機関誌のエスペラント名は、「Formosa Esperantista Grupo Taihoku Japan」と記されている。小坂はいつ「注意」を促したのか不明だが、同年2月から1921年3月までは、機関誌のエスペラント名は「Formosa Esperantista Asocio」となった。つまり連は、組織のエスペラント名を考えると、「一つの民族に一つの団体」という意味から「Asocio」を選び、1年間その名称を使っていた。

台湾人を1つの民族として捉えたことについては後述するが、西来庵事件から5年しか経っていない1920年前後に、「台湾民族」という概念はまだ提起されていない。すなわち、当時は、台湾人と日本人はそもそも異なる2つの民族とされていた時期である。連温卿は、台湾人は大和民族と異なるため、1つの民族の組織として学会を運営していたのではないか。もちろん学会改組当初には、在台日本人も加入していたが、運動が再開した当初、民族問題をめぐって学会が分裂する時ほどに深く考えられていないためか、組織名について特に議論されていなかったようである。のちに詳述するが、1920年代から1940年代まで、連の民族観や「台湾民族」に関する概念は、時代によって変ってきたが、最初から在台日本人を含めていなかった。

上述したように、連温卿は、エスペラント主義に関する文章で国語や台湾語の問題に言及し、また社会学的な考察によって「将来之台湾話」、つまり台湾語の標準化を提案した。しかし彼は、のちに政治運動や社会運動に取り組むようになったため、1920年代後半にはほとんどエスペラン学会の活動に参加しなくなった。とはいえ、彼が台湾語の問題を考え続けていたことは、別の文章からもうかがえる。例えば、彼は陳規懐というペンネームで1926年12月の『大衆』に「台湾に於ける政治運動」を發表した。そこでは台湾の言語状況と不平等な入試試験について次のように述べている。

初等学校に於ける台湾語の会話の禁止、漢文教育の廃止、書房教育の制限、町名改正の如きが決して同化を体現するものでないことを悟らせ、教育の均等、共婚法定、自治の訓練等が施行された。けれどもこれ等は社会の表面を粉飾する道具に過ぎない。[中略]教育の門戸を台湾人に開放しながら『国語を常用するもの』との条件が附せられ、日本人よりも低い初等教育を台湾人に施して、日本人と同一の入試試験を課する如き、所謂一視同仁、共存共栄の意味が疑はれるのである⁵⁴。

1926年の時点の文章だが、初等教育の現場では、すでに台湾語や漢文教育が縮小されていたことがわかる。台湾人に教育の門戸を「開放」したとはいえ、『国語を常用するもの』であることが入場券となった。こうした政策を批判した点を見れば、なぜ連が「民族、言語、宗教を差別しないことを求め、人類の正義と平等を訴える」「ホマラニスモ（人類人主義）」を支持したかがわかるだろう。

言語問題の次に、連は民族問題として台湾の政治運動について語る。彼は、台湾議会設置請願運動が民族運動でありながら、小ブルジョアの自由運動でもあったことを批判し、経済的圧迫を受けて農村で起こり始めた農民運動を紹介した。この農民運動について、連温卿は以下のように評価した。

台湾にはまだ真の無産階級の政治運動も、労働運動もない。唯だ現在はその黎明期である。[中略] 今台湾に於ける無産階級運動は『歴史上に於ける一切従来の運動は少数の運動である。若くば少数の利害のための運動である。平民運動はこれと異り、**大多数の利害のためにこの大多数が自覚せる独立運動である**』に第一歩を踏み出したのである⁵⁵。(太字：引用者)

連は、真の無産階級運動は、平民運動であり、大多数の利害のための民衆運動とみなした。そして1926年の時点では農民運動を含む台湾の無産階級運動はまだ黎明期にあったが、「**大多数の利害のためにこの大多数が自覚せる独立運動**」の第一歩を踏み出したと彼は考えた。連は、1927年1月から台湾文化協会の主導権を握り、農民運動や労働運動などと連携しながら、台湾人の立場に立って植民地政策と対抗し続けた。もちろんここで言う「独立運動」がナショナリズム的な運動とは断言しにくい、上述したように1920年代後半の台湾政治運動が、民族問題と階級問題と絡めていることを考えるならば、連が期待する平民運動は、大多数の民衆運動であり、ある意味で民族運動とも言えよう。もちろん、台湾エスペラント学会が最初に**一国的の意味を有する「asocio」**という組織名を使ったことについてはまだ検証する余地があるが、しかし彼が行っていたエスペラント運動や無産階級運動は、いずれも民族問題、つまりナショナリズムと関連していた。それは、「台湾政治の特殊性」ともいえるが、次に論じるように、台湾政治の特殊性は、1930年代の「台湾文化の特殊性」とつながっている。

社会学者の蕭阿勤によれば、政治運動や社会運動がほぼ鎮圧された1930年代の初期に、台湾の知識人たちは文化運動に転換したという。よく例として挙げられるのは、1930年代の郷土文学・台湾話文論争であるが、そこでは、文学の言語と文字の改革を中心として議論され、「台湾文化の特殊性」についても論争の焦点となったという⁵⁶。つまり、1930年代の「台湾文化の特殊性」をめぐる議論は「台湾話文論争」の重要な論点であった。この台湾話文論争は、連温卿の「将来之台湾話」とどのように関連しているかという、後者は、言語社会学的な思考で言葉の変遷を考察しながら、音韻学の研究、標準の発音と文法の体系化などの考案を提出したものであり、これらの考案は、1930年代の「台湾話文論争」の焦点となりそこで具体化されたのである。

例えば郭秋生の「建設「台湾話文」一提案」は、①言文一致に符合する既存漢字を研究し、できるだけ既存の漢字を使うこと、②字義に符合するが音韻に当てはまらない場合には、「字音（音読み）」に相応しい漢字を取ること、③熟語の慣行を除いて、一切「語音（訓読み）」に従うこと、④字義と語義が異なる時は、誤解を招きやすいため、台湾話文の建設にふさわしくないこと、⑤字義と語義の差異を補足するため、新字を作ることなど5

つの提案を行った⁵⁷。また黄純青は「台湾話改造論」で、①言文一致にすること、②読音を統一すること、③語法（文法）を講究すること、④語彙を整理すること、など「台湾語改造」の原則を提出した⁵⁸。

すなわち、連の「将来之台湾話」が提起した論点は、1930年代の台湾話文論争で再び提起され実践されたのである。そのため、陳芳明は、連温卿が1924年に提起した「台湾話文論」が1930年代以降に影響し、「台湾民族主義」を提唱する役割を果たしたと評価したのである。さらに言えば、1920年代初期の一連の新文学に関する議論は、台湾の最初の言文一致運動と考えられた。のちに実践された新文学の「表記」は中国白話文を用いる傾向が圧倒的に多かったが、作品のなかの会話文は、しばしば台湾語が用いられ、そのうえ、作者と読者はテキストを台湾語で読み解釈していたのである。つまり、中国白話文という「文字表記」では台湾語という「言語」を完璧に表現できず、「言文不一致」が生じたため、1930年代の台湾話文運動は、郭秋生らの「建設「台湾話文」一提案」のように、改めて「言文一致」を唱え、台湾語を近代化する「台湾語改造」の問題が再び提起されたのである。

政治学者の呉叡人は、1930年代の台湾話文論争を例として1920年代初期から形成された台湾ナショナリズムが1930年代半ばに成熟していったと指摘している⁵⁹。「台湾話文論争」が台湾ナショナリズムの1つの表れであるとすれば、台湾話文論争と同じ論理を持ち、1920年代初期の国語国字問題として議論された「将来之台湾話」は、「近代意識」から生まれ、エスペラントから受けた思考で、台湾の近代語として台湾語の標準化を求めるものであり、言語ナショナリズムという性質を持っていたことになる。

以上、連温卿の「台湾話文観」を整理した。もう一度「ホマラニスム（人類人主義）」の定義を見てみよう。ホマラニスムは、「純然たる人間性と民族間の絶対正義と平和を目的」とし、「偏狭愛国心のない基礎の上に立って中立的な人間の文化に奉仕することのできるために」中立的言語エスペラントを起用する主義である⁶⁰。ホマラニスムにしたがってエスペラント運動を行ってきた連は、植民地政策や植民地の言語政策を批判しながら、台湾語の近代化問題を提案した。こうした一連の行動は、彼が1940年代以降に発表した「民俗文化」や「台湾民族性」の考察とどのようにつながっていくのか、またどのように変化していくのか。以下の第三節では、同じくエスペラントの視点から、連の「台湾民族論」を論じる。

第三節 エスペラントから出発した台湾民族論

民俗学者の柳田国男は、1921年に国際連盟委任統治委員に就任するためジュネーブに行った。そこで当時国際連盟で働いていた台湾エスペラント学会の宣伝部員である藤澤親雄や、国際エスペラント大会に関する報告書を国際連盟に提出した新渡戸稲造らの影響を受けてエスペランティストになった⁶¹。柳田が本格的にエスペラントを始めたのは同年12月に帰国したあとで、1922年1月末からエスペラントを学習し、半年間でエスペラントをマスターしたと推測される⁶²。また、彼は1924年7月に仙台で行われた第12回日本エスペラント大会の顧問や実行委員を担当し⁶³、1926年7月から1938年末まで学会の理事

を務めた⁶⁴。1923年に再び渡欧した柳田は、第三回委任統治委員会に英文の報告書「委任統治領における原住民の福祉と発展」を提出した。そこで彼は委任統治領や植民地内で満足すべき公用語が確立されておらず、異なったさまざまな方言がひしめきあい、行政や教育、原住民同士の意志疎通の障害になっていると論じた。このこともあって、岡村民夫は、柳田の方言研究はエスペラントの学習と関係があったと指摘している⁶⁵。

民俗学者がエスペランチストとなり、原住民の言語問題に取り組み、方言を研究することになったことは興味深い。また、柳田は新渡戸稲造の「地方の研究」についての講演を聴いて感銘を受け、1907年頃に「郷土研究会」を開いている。彼は「山人」という説を出し、台湾の「生蕃」と同じような先住民が日本にもいたと考えた。佐谷真木人は、柳田の「山人」のイメージは台湾の「生蕃」に関する知識の影響下にあると指摘した⁶⁶。

後述するが、連温卿が1940年代に発表した「台湾民族性の一考察」は、エスペランチストでもある柳田国男から間接的な影響をもたらされたものである。周知のように、柳田は1930年代に「一国（語）民俗学」という理念を提示し、村落組織・稲作儀礼・祖霊信仰・氏神信仰・民俗語彙・口承文芸などの研究を大きく推し進めた。そして、柳田の一国民俗学の提唱は、彼のヨーロッパ体験、特にスイス時代に学んだ西洋の口承文芸学の影響があったという⁶⁷。また奈良宏志は、柳田がエスペラントをどのように理解していたかを調べることで、彼の言語観や国語観、そしてナショナリズムとインターナショナリズム、という2つの問題についての手がかりをつかめると指摘した⁶⁸。すなわち、柳田にとって「民族」の文化を表現する「民俗」を研究するためには、言語の問題は重要な切り口となっていたのである。連温卿も同じように、言語や社会問題を考えるとともに、民族問題もつねに念頭に置いていた。これまで検討してきた「言語的社会性質」や「将来之台湾話」、「怎麼是世界主義」だけではなく、1926年9月の「夜中の冬天」でも民族問題や台湾の生蕃を提起した。

民族問題は確かに人類の最も重大な問題である。しかし過去の歴史における民族の規範—社会的であれ、政治的であれ—を見れば、それは今日のように厳密なものではなく、過去の国家の規範と同じようなものであることがわかる。例えば台湾の生蕃は、いまでもその種族は古代を経過する途中にあるかのように、すべて土地によって民族を規定することを基準としている。⁶⁹

連は、民族問題が人類の最大の問題であると言い、台湾の「生蕃」を考える際に、近代国家の基準ではなく、土地の範囲による基準に注目している。そもそも1920年代には、一般の知識人はまだ「古代」を経過中の先住民族を自分たち漢民族（人間）と同じ存在として認めていなかった。しかし第三章で言及したように、連は「蕃地」に足を踏み入れ、1920年に編集を担当した台湾エスペラント学会機関誌に、エスペラントに翻訳した「台湾先住民物語」を連載した。彼は1910年代後半から「生蕃」の問題に関心を持ち、「台湾には特別な民族が存在すること」をエスペラントを通じて海外に紹介したのである。そして1920年代以降、彼は民族問題に着目するようになり、台湾の生蕃が土地の範囲によっ

て分類されると考えながら、1930年代前後に「台湾人全体」という意味も含めた階級問題を提起し、1941年からは『民俗台湾』に「台湾民族性の一考察」を始めとする、台湾の民俗や民族を考察した文章を数多く発表した。第三節では、第三章で分析した連温卿の「台湾先住民物語」から出発し、彼の階級意識が働いた「民族論」にも着目し、台湾におけるさまざまなエスニックを論じながら、1つの集団としての「台湾人」の特性を分析した「台湾民族性の一考察」に焦点を当て、彼の「台湾民族論」の変化を論じる。

(一)「台湾先住民物語」での連温卿の民族観

1920年前後に、連温卿は「蕃地」調査に行った。1924年の「蠹魚的旅行日記」(日記第25・59・68回など)にも、蕃社を訪ねて滞在調査したことが書かれており、また1925年の「婦女的地位和社会的關係」には「数年前私は卑南に行き、瑪蘭社を二回訪ねたので、大体のことは知っている⁷⁰」や、「私が卑南に滞在した時、ちょうど私と同じ船で宜蘭からやってきた若い1人の女性がいた。――製脳の労働者だという――卑南に着いた五六日後、町の男性たちはこのきれいなお嬢さんに心を奪われてしまったようだ」などと述べている。連はその経験を生かして1920年から台湾エスペラント学会の機関誌で、先住民の伝説や器物・文化・習俗などを紹介し、1920年2月から1921年11月にかけて「La indigena Legendo en Formoso (台湾先住民物語)」を連載した。さらに、1923年の3-4月合併号には連載された「台湾先住民物語」を付録として再刊した。この「台湾先住民物語」の掲載は、連温卿の「ナショナリズム」(民族主義)の原点と考えられるだろう。

第三章で詳述したが、連は雑誌で6つの「台湾先住民物語」を連載した。付録として発行された「台湾先住民物語」は、物語の順序が少し変更し、①先住民の由来、②移住、③独楽と怠け者、④稲妻と竜王の愛、⑤刺青の花嫁、⑥プロレンデェヤ城(普羅蘭遮城)となった。いずれにせよ、エスペラントで書かれたこの文章を読む外国人の読者は、台湾先住民が長い歴史を持つことや、異民族の文化的な特殊性を強く感じるだろう。ところが、連はなぜこの6つの物語を選んだのだろうか。特に「プロレンデェヤ城」の物語は、当時『台湾日日新報』に掲載された先住民の伝説や、出版された生蕃物語の関連書籍⁷¹には載っていないものである。この「プロレンデェヤ城」を先住民の物語として紹介したことは、どんな意味を持っているのだろうか。

南台湾の海辺に佇む「プロレンデェヤ城(普羅蘭遮城)」は、オランダ人が建てた城であり、「赤崁楼」や半月城とも言われる。立派な城の話であるが、文章のなかに、「見ろ。子どもたち、オランダ人が陰謀を企んでこの城を建てたのだ」という父親からの忠告もあれば、「当時の移民者(引用者:外来の植民者)は、このようにこの肥沃な土地を持つ台湾を虎視眈々として、次々とやってくる」という記述もある。文章の最後に、1651年の出来事として次のように記されている。

1651年、ある若い先住民がお城の前の広場で殴られて死んでしまった。その時、ある人が彼の目を閉じさせようとしたが、彼は、狂暴に叫びつづける。

「どいてくれ!大砲から発射される弾を見たいのだ!」

そして彼は傲然として大砲の前に佇んで勇敢な死を遂げた。

史書によると、このことは牛革事件が勃発した翌年に起こった。彼は人目を盗んで広場へ城に行き放火しようとしたが、逮捕されたらしい。

第三章で詳述したが、オランダ人は布十五疋で「新港社（いま台南市新市区にある）」の平埔族から土地を買い、1653年にプロレンデェヤ城を建てたが、「一枚の牛革」で土地を騙した物語として伝わった。この伝説に登場するのは、「高砂族」ではなく、「平埔族」もしくは「熟蕃」である。そして連温卿は、長い歴史を持つ先住民族の文化的特殊性を表現する「台湾先住民物語」に、オランダ人に支配された「熟蕃」の物語を入れ、彼らの土地を略奪してプロレンデェヤ城を造ったオランダ人を「*invadantoj*（侵入者）」と称した。また、文章のなかに「史書によると」と書いたのは、外来者が先住民の土地を略奪し侵略した事実を強調しようとしたためではないか。連は「日本帝国主義下の植民地台湾」で、以下のように述べている。

台湾に於ける植民政策の変遷は、日本に於ける経済的発展の段階に反映されたるものたるを免れない。即ち台湾に於ける植民地政策は西班牙や、葡萄牙や、和蘭諸国の採用したものと全然異なつた形成を有するは勿論、英国、佛国、米国乃至は獨逸の其とは又異なる所がある。⁷²

繰り返しになるが、1920年代初頭に連がこの物語を取上げたのは、「生蕃」も「熟蕃」も台湾の民族であるという「民族観」だけではなく、オランダ統治時代を「植民地時代」と認識し、「植民者」でもある日本帝国を批判する彼の植民地政策批判の意図や歴史観がうかがえよう。後述するが、連は1940年代に『民俗台湾』で連載した「台湾民族性の一考察」において、「オランダ統治時期」の経済政策などを詳しく論じている。

1936年連温卿は、プロレタリア作家の楊達が創刊した『台湾新文学』で、「私はフランスの「国際文学」の編集者が計画してゐる世界各民族の童話叢書の發行に賛成し、台湾に於ける昔の童話、例へば「虎姑婆」や「白賊七仔」などのやうなものを募集します。[中略] 私はこれを編輯し、エスペラントに譯して送る手筈になつてゐます⁷³」という原稿募集の記事を載せた。1930年代後半には、台湾エスペラント学会はもはや活動を行っておらず、連はエスペラントを通じて、台湾の民話や童話などを世界に発信し続けた。上述したように、1920年代初期の『La Verda Ombro』には「台湾先住民物語」のほか、いくつかの台湾の民話も掲載されている。ところが、「台湾先住民物語」は先住民の伝説であつたのに対して、民話や童話は漢民族の伝説であつた。

張炎憲は、「第二次世界大戦から戦後にかけて、(連温卿は) 民俗学の研究に専念し、1960年まで彼の思想はあまり変わらなかつた。依然として社会主義者で、しかも台湾意識と郷土への感情を強く持っている⁷⁴」と連を評価した。しかし連の民族問題への関心は、すでに1910年代後半から始まっていた。そして1936年の時点でも、彼は漢民族の物語を世界に紹介しようとした。つまり彼は、台湾の先住民や漢民族の物語に関心を持つ一方で、エ

スペラント運動を通じて言語問題や階級問題を考察しつつ、台湾の「民族問題」を理論化した。その思想の蓄積は、彼が1941年に『民俗台湾』で発表した「台湾民族性の一考察」に結実している。

ところで、連の「台湾民族性の一考察」における民族観の変化について論じるには、階級運動のなかにある民族問題についての彼の思考も合わせて考える必要がある。以下の第二小節でこの問題について簡単にまとめる。

(二) プロレタリア的ナショナリズム

連温卿が「陳規懐」というペンネームで『大衆』に発表した2篇の文章をもう一度見てみよう。2篇とも1926年に掲載されたものだが、それはちょうど台湾文化協会が分裂して、連温卿が文協の主導権を握る直前だった。「日本帝国主義下の植民地台湾」で、連は以下のように述べている。

統治者は台湾に於いて、新たに勃興せる日本資本主義の為に市場を開いた。殊に日露戦争による日本資本主義の躍進的發展は更に其の勢を助長せしめた。是に従つて台湾に於ける産業の発達も又促進されたと云ふものゝ、其は日本資本主義の發展の延長を意味すると同時に、台湾人は台湾の産業界から失墜する第一歩であつた。今まで何等の基礎的産業を有せぬ資本家は、如何にして唯一の武器たる莫大な資本を擁して、堂々として台湾に君臨するか？或は政治的権力を通じて自己の欲望——搾取を実現せしむるか？⁷⁵

連は、日本の企業が政治的権力に頼り、莫大な資本を植民地に持ち込み、台湾人が主導した産業が滅ぼされていく現実を述べ、台湾に君臨する日本の資本主義を批判する。1927年に連温卿は、台湾文化協会の主導者になり、会則の改訂案を提出した際、文協の方向転換の意義およびその目標について「一九二七年の台湾」という報告文を提出した。第四章でも引用したが、連は「一九二七年の台湾」のなかで、「台湾には資本家はあるが、未だ独立して發展し得る地位に至らない。それは台湾に於ける日本資本主義は已に鞏固なる地盤を有して居るからである。而して被圧迫、被搾取の台湾人は独り少数資本家及地主のみならず、最大多数の労働者及農民が存在して居るのである⁷⁶（太字：引用者）」と言っているように、日本資本主義に搾取されていたのは、「独り少数資本家及地主のみならず、最大多数の労働者及農民」、つまり**大多数の台湾人**であると強調している。

そして、連は同じ1926年に『大衆』で発表した「台湾に於ける政治運動」では、1921年に始まる「台湾議会設置請願運動」の請願理由書を引用し、その内容を批判している。

台湾議会設置請願は、日本の統治より分離して独立する表現ではなく、日本の国民たるが故に日本国民としての待遇——機会均等を与へよ、そして台湾人の生活様式を尊重せよといふのである。それだけ台湾議会設置請願運動は民族運動であると共に、小ブルジョアの自由運動である。そして又日本の小ブルジョア自由主

義者の同情を勝ち得たのもそれ故である。けれども、請願運動が真に一般民衆の一致した支持を受けたのは、その運動の二年目の一ヶ年に過ぎなかつた。そしてそれは小ブルジョア連が支配者の経済的圧迫で手をひき、同情的支持がなくなつたからでもあるが、台湾には未だ大組織の工場産業がなく、真実の労働階級が存在せぬためである。けれども智識階級や無産階級はもはや以前の無意識状態ではなかつた。そして新しき無産青年はこの間から生まれんとしてゐる。[中略]現在の台湾には少数ながらも階級意識を有してゐるものがある。従つて議会設置運動以外に、既に民族的障壁を打破つて、経済的關係で団結された芭蕉自由輸出を主張する如き、芭蕉組合、小作組合等が同時に出現するのである。⁷⁷ (太字：引用者)

台湾議会設置請願運動は、1921年から1934年にかけて行われた。最初の段階で運動を主導したのは台湾文化協会のメンバーであり、日本の知識人からも大きな声援を受けた。しかし1927年から連温卿などの左翼が文協を主導するようになり、大半のメンバーが請願運動から脱退した。この文章は1926年12月に発表したものであるが、議会設置に対する考えは、文協内部ですでに分岐していたことがわかる。連温卿は、この運動は日本の統治から分離して独立するものではなく、日本の国民として平等の待遇を求める運動であり、小ブルジョアによる民族運動や自由運動であると考えていた。では、連が求めた運動とは、日本の統治から分離して独立する運動だったのだろうか。1930年に、彼は『改造』に投稿しようとした「台湾に於る日本植民政策の展望」のなかで、以下のように述べている。

かくの如く、台湾に於る日本帝国主義の発展は**広汎なる被圧迫大衆**の搾取の上に打ち建てられている。従つて日本帝国主義の利益は、**台湾民族的利益**と同一でないことは明白である。それ故に、政治上に現はれたる政治機構の変換は、この経済的利益を擁護する必要なら、より以上に権力の集中と強化に具現される。⁷⁸ (太字：引用者)

1930年の文章でも、彼は台湾において日本帝国主義が生み出した利益が「台湾民族」にもたらされない現実を批判し続ける。この文脈での「**広汎なる被圧迫大衆**⁷⁹」という「大衆」は、さきほど引用した「一九二七年の台湾」で述べられていた、「而して被圧迫、被搾取の台湾人は独り少数資本家及地主のみならず、最大多数の労働者及農民が存在して居る」ことに通じるものであろう。第五章で論じたように連の「大衆」の概念は、ほかの民族運動者や社会主義者の「大衆」より広く、「**台湾人全体**」の枠で議論されていたことが確認できる。言い換えれば、日本帝国主義や植民地政策を批判している連の階級論は、「**台湾民族**」の利益に基づいて構築した論理であろう。

エスペラント運動を行うことによって、連温卿は、1910年代後半から言語や民族の問題を考えつつ、社会主義やマルクス主義を学んだ。また彼は、経済学によって社会構造を分析しながら、民族運動とともに階級闘争運動を行ってきた。さらに1930年代以降は、エスペラント運動をプロレタリア・エスペラント運動に移行させた。このように民族問題

と階級問題を同時に考え、日本帝国主義への反対運動を行い、台湾民族の利益を追求し続けた彼は、「**独り少数資本家及地主のみならず、最大多数の労働者及農民**」であり、「**広汎なる被圧迫大衆**」である「台湾民族」という全体像を描き出した。その「台湾民族」という概念は、一種のナショナリズムでもあるが、そこには左翼的なナショナリズムという思想も含まれていた。しかし、こうした左翼的なナショナリズムで構築した「台湾民族像」からは、台湾の生蕃が見えなくなる。そして以下の第三小節で詳述するが、柳田国男の「一国民俗学」の影響もあり、1940年代以降に連温卿が論じた「台湾民族」の性格や特徴は、1920年代の彼の民族観とかなり異なるものであった。そこには、台湾先住民が欠落しているのである。以下、連の「台湾民族性の一考察」を分析する。

(三)「台湾民族性の一考察」における台湾民族像

1927年から、林猷堂・蔡培火らの改良主義派や、蒋渭水らの民主主義派と一線を画し、王敏川とともに台湾文化協会の主導権を握った連温卿は、結局、「福本イズム」と「山川イズム」のイデオロギー闘争に敗れて1929年に除名された⁸⁰。1930年代以降、知識人は政治運動や社会運動が挫折し、文化運動に舞台を移し、台湾文学や文化の構築に活動していくことになった。文協で失脚した連は、1930年前後に台湾エスペラント学会を再発足させ、プロレタリア・エスペラント運動を続けたが、戦争期に入った1940年以降、活動はほぼ停止した。ところが1940年代以降、民族学・民俗学が盛んになり、その方面に力を入れた知識人が増えていく。連温卿もその1人であった。

1941年7月に創刊された『民俗台湾』に、連温卿は「台湾民族性の一考察⁸¹」という論文を6回連載しただけでなく、「老葱に就て」(1942.06)、「牽手考」(1943.08)、「福老媽その他」(1943.01)、「媳婦及び養女の慣習について」(1943.11)などの文章をも発表した。皇民化運動の最中、なぜ『民俗台湾』という雑誌が発行されたのだろうか。台湾の民俗学者池田敏雄は、その原因を、中国の中山大学が刊行した『民俗月刊』を見つけ、台湾でも民俗の刊行物を発行しようとしたことに始まると考えた⁸²。『民俗台湾』には、言葉や習俗を考察する文章は、それぞれの具体的なテーマを論じたものが多い。しかし「台湾民族性の一考察」のようにさまざまな統治者による植民地政策を受け、内部に独自の経済を発展させていくことで形成された「台湾人」という集団およびその民族性についての全体的考察は、数少ない。連は文章の冒頭で、以下のように述べている。

台湾の民族性に就てはいろ／＼の説がある。意識的にしろ、或は無意識的にしろ、これを正しく正常なものとして理解する人のあるのをまだ見聞したことがない。が、これらの論者の一貫した通弊は、社会と慣習とを切離し、或は一方に偏した点に存する。[中略]果して台湾には台湾という名称にふさわしい民族があるか。即ち経済的發展過程から生れ出でた現代で云ふ民族(nation)が存在してゐるか。否と、私は遺憾ながら答へざるを得ない。まして現代を遠く離れた封建制度下に於て、Nationの範疇で云ふ民族が存在する筈のないことは勿論だ。従つて、こゝで云ふ民族なるものは通俗で呼ばれてゐる地理的限界のそれを指すものである。

が、ある意味で寧ろ、これを種族と呼ぶ方が却って正しいかもしれない。⁸³

上述したように、連は、1920年代初期にエスペラントで海外に「台湾先住民物語」を紹介し、先住民を「台湾における特別な民族」とみなした。しかし、彼は1930年前後に「広汎なる被圧迫大衆」である「台湾民族」の概念を提示し、先住民のことは徐々に消えていった。そして1940年代には、連は「台湾民族」がまだ近代的概念のいう「民族(nation)」になっておらず、むしろ「種族」という意味で考えたほうが相応しいと考えた。さらに彼は台湾人の民族について、「福建族(福州人、漳州人、泉州人)、広東族、高砂族」から構成されるというが、いわゆる台湾民族に高砂族を除き、すでに同化され、習俗としての特徴がなくなった平埔族が含まれていると述べた⁸⁴。つまりこの時期の連は、高砂族の存在を認めつつも、この考察で論じている台湾民族とは、福建族、広東族、および消滅された平埔族を含むエスニックグループ(ethnic group)であった。すなわち、先住民はいまだに土地の範囲によって分類され、福建族や広東族のように1つの民族社会を形成していなかったため、それが彼には「台湾民族」の範疇として考えられなかったのである。一方、さまざまなエスニックグループを含む漢民族は、封建制度の下に置かれ、1つの近代的な「台湾人の集団」としての民族を形成する途中にあった。これは、連温卿が台湾民族という近代的集団はいまだ形成されていないと考える2つ目の理由であろう。とはいえ、彼は考察を通じて、形成されつつある台湾民族およびその特徴を理論化しようと試みた。

「台湾民族性の一考察」では、オランダ統治期以来いくつかの経済的發展段階によって台湾の「社会」が形成され始め、清国時代の台湾封鎖政策によって中国との経済的連携から断たれたことで、「台湾の民族的形体は清朝の全統治期を通じて略その姿を鮮明にしたのである」、「この時代に於る慣習は地理的に、新たに台湾を冠することの出来る、或は台湾を象徴しうる民族の原生的状態を看做すことが出来る⁸⁵」と述べている。そして所謂「分類械闘」を取り上げ、支那と異なる社会的集団の特徴、つまり「台湾型」の民族の特徴が作られたと説明した。すなわち、清国時代以来、台湾の独自の社会構造が定着してきたことは、連は最初から強調している。さらに、台湾人が「支那民族」の「血族」や「血縁」を持ちながら、経済上の独立や、福佬族や客家族の漢民族が平埔族や「蕃人」と混血し、習俗や文化も混淆することによって、「支那」と異なる「台湾人」という「社会的集団」が形成され、民族的独自性を持つようになったと分析する。

連は、多くの文献や史料によって、「台湾が歴史上に於て知られたのは六世紀頃であつた。しかしながら支那の政治圏内に引入られたのは、それからずつと後の十四世紀の末頃、即ち一三六〇(元の至正二〇年)頃であつた。時の支那政府は澎湖島に巡検司を置き、これを対岸の同安県に隸属せしめたのが抑々台湾を支配する端緒であつた⁸⁶」と述べながら、行政面の分析を進める。興味深いのは、彼が日本時代はもちろん、オランダや清国(支那)時代も植民地統治や支配の視点から見ていることである。例えば、文章の中で「郭懐一の台湾独立事件」に触れている。

郭懐一の台湾独立事件に就て伊能嘉矩及栗野傳之亟の踏査報告書たる『台湾蕃人

事情』(明治三十三年刊二五五頁参照)や連雅堂の通史によると、一六五二年プロヴィデンチヤ城下の移住民が郭懷一を中心として反乱を企て千数百人の和蘭人を虐殺したが、急を聞いたゼーランヂヤ(安平)城駐在のフエルバルが兵百二十名を引率して台南へ急行し、熟蕃二千人の援助の下に遂にこれを鎮圧した。この反乱は十四日に亘り移住民の死するもの約四千人があつた。[中略]そこで荷蘭人の支配を対象として民族的意識が喚起され、前述の如き郭懷一事件に関する独立事件をば発生せしめたのである。がこの民族的意識なるものは具体的なものではなく、漠然たるものであつたやうだ。⁸⁷

連は、民族的意識が喚起されたことをきっかけとする郭懷一の事件を取り上げたが、その民族的意識とは具体的なものではないと言っている。つまり彼は、文章の最初で提起した近代的概念で言う「民族(nation)」は未形成としながらも、台湾の歴史において漠然とした「民族的意識」の発生に言及したのである。

すなわち、日本統治時代以前の反抗運動には、具体的なものとしての「民族的意識」もまだ形成されていないと彼は強調した。しかし日本統治下の台湾社会で近代的「民族的意識」が形成されたのか否か、彼は明言していない。当時の社会状況について、彼は社会的集団、経済的発達、生産様式、剰余労働、産業資本など社会学的、マルキシズム的な用語を多く用いて論じている。例を挙げよう。

そこで**商人資本**は荷蘭時代に於ける場合と同様に、獲得経済や生産経済——農業及びその家内手工業ともいふべき砂糖製造との直接的結合の上に基礎づけられてゐた。だから、**商人資本**の発展にも拘らず、商業及び商品交換は**台湾農村の内部**、とりわけ**蕃人社会の内部**にまで深く浸潤してゆくことが出来なかつた。それ故に台湾社会の特質的構造を変革することはなかつた。[中略]即ち**商人資本が権力と結合の上、蕃人や農民に対して領主や地主的徴収者として働くのであるから**、他の新しい生産様式を導くことなく、従来組織を結果させ、そしてその過程を反覆させたのである。かうして**商人資本が蕃人や農民から剰余労働を吸収しても**、その剰余分を農村外にある市場に投ずることによつて市場の成立と拡大をもたらしめ、これがまた逆に彼らの地主的徴収を強めることになつた。⁸⁸(太字:引用者)

植民地政策のもとにある台湾社会を、経済的な変化から分析する手法は、上述した「日本帝国主義下の植民地台湾」や「台湾に於ける政治運動」など連の1920年代以降の文章と似た部分がある。経済学的な分析ではあるが、1920年代の文章で論じたように、「蕃人や農民(台湾人、被支配者)」と領主や地主的徴収者(日本人資本家、支配者)」という二項対立的な「左翼的なナショナリズム」という思考が含まれているだろう。呉叡人は、台湾共産党の台湾民族論が1920年代後半の政治運動に応じて生まれたものであり、典型的な実践的民族論であると論じている。その一方で彼は、連温卿の1940年代に提出した台湾民族論は、1920年代後半から左翼運動に関わった際に社会経済史の分析に基づいて発

展させた理論的な民族論であるとも指摘した。また連の「台湾民族」は、マルクス主義の民族概念であり、封建時期における前近代の「准民族」であり、共通した性格を持つ民族や種族であり、近代的民族意識が喚起された民族である、という4つの概念をあわせ持つものである⁸⁹と論じた。すなわち、1940年代の連の台湾民族論の特徴は、「先住民」を排除しながらも、1920年代や1930年代と同じように、マルクスの唯物論的史観で台湾の民族問題を考え、さらにマルキシズムに基づいて日本の帝国主義を批判しながら、経済史的・民俗学的考察を通して台湾独自の民族性や民族論を打ち出したのである。

ところで、筆者にとって興味深いのは、連の「台湾民族性の一考察」と、エスペランチストであった柳田国男の「一国民俗学」との関係である。

『民俗台湾』と日本民俗学との接点についてよく提起されるのは、1943年10月17日に柳田邸で行われた柳田国男を囲んだ座談会だろう。座談会の内容は同年12月の『民俗台湾』に「座談会 柳田国男氏を囲みて—大東亜民俗学の建設と「民俗台湾」の使命—」と題して掲載されている⁹⁰。上述したように、柳田は1920年代初期からエスペランチストになり、日本エスペラント学会の理事も務めた。また、学会機関誌には柳田の講演や写真など多くの関連ニュースが掲載された⁹¹。それを通じて連温卿は、1920年代初期から柳田の研究を知っていたはずである。また、台湾エスペラント学会の機関誌は1922年4月号の「帝国議会に於るエスペラント 教授調査に関する請願」という記事のなかで請願書の全文を掲載し、当時スイスのジュネーヴに滞在する柳田国男も請願に関わったことに言及した⁹²。柳田は、マルクス主義に対して強い批判を抱いていたが、1930年代以降、転向した何人かのマルクス主義者が柳田の門をたたいていた。民俗や郷土をめぐるマルクス主義者たちが苦闘した場として柳田民俗学がある⁹³。さらに、連温卿の親友であるエスペランチストの比嘉春潮は、1921年に沖縄で初めて柳田国男と会う。その後、比嘉が上京し改造社で働いていた頃、柳田が南島研究会を開き、雑誌『島』の出版にも関わった⁹⁴。これらの背景から、1930年代に「一国民俗学」を提示した柳田国男の研究を連温卿が知らなかったはずはないだろう。

伊藤幹治が指摘したように、柳田は1934年の『民間伝承論』で「一国民俗学」の理論的枠組みを固めた。それは、口頭伝承や行為伝承など地方文化の採集・集成運動の中心となったフランス民俗学者から大きな影響を受けており、またドイツ民族学と共通した側面もあるという。その1つは、柳田が一国民俗学を「自国民同種族の自己省察」、あるいは「自ら知る為の学問」と規定し、研究対象を「一国」（日本）のなかの「主要種族」に限定し、戦中から戦後にかけて「固有信仰」の問題にこだわった点である。もう1つは、柳田の内部に育まれた、日本人のナショナル・アイデンティティを追求する強靱なパトスである⁹⁵。そのため、方言研究にも力を注いだ柳田の「一国民俗学」は、「一国一言語」という設定で日本の民俗学を構築していたとも言われる⁹⁶。また、佐谷真木人が論じたように、渡欧の経験を生かした柳田は、主にエスノロジーの方法論に立脚し、「白人統治者」の「錯誤」を否定して、世界の諸民族における「別の文化の流れ」を尊重することを強く主張した。それが「日本独特のエスノロジー」へと結びつくことになるのだが、それは日本における「民族学」（のちの文化人類学）を目指すのではなく、「一国民俗学」を思考す

るものであり、朝鮮や台湾は日本ではないという暗黙の前提を含むものであった⁹⁷。つまり、1930年代後半から構築された「一国民俗学」は、「一国」のなかの「主要種族」に限定し、「自国民同種族の自己省察」のため、植民地の民族を排除した論理となっていたのである。

こうした論理は、連温卿の「台湾民族性の一考察」にも反映している。1920年代に連温卿が「台湾先住民物語」を連載した時に、最初は漢字の「生蕃物語」が付いており、エスペラントのタイトルで「生蕃」を「sovaĝula（野蛮な、蕃人の）」ということばで表したが、連載の3回目以降は、野蛮を意味する「sovaĝula」ではなく、土著的、先住民的、という意味の「indigena」に変更した。彼は「台湾における特別な民族」の存在を、誇りをもって海外に紹介したのである。一方、連は先住民の言語を含めず、「将来之台湾話」では「一国語」の概念に近い、台湾人全体としての近代語を標準化しようと建言した。1930年代前後にも、左翼的なナショナリズムで台湾人の全体像を描き出し、1940年代の「台湾民族性の一考察」では、近代的意味を持ち形成過程にある台湾民族を理論化しようとした。しかしながら、1940年代の民族論では、平埔族のことについては多く言及したが、先住民族（高砂族）ははっきり排除している。連は、また『民俗台湾』で「老葱に就て」、「牽手考」、「福老媽その他」、「媳婦及び養女の慣習について」など多くの台湾の民俗に関する文章を発表したが、いずれも漢民族や漢化された平埔族を中心として論じたものであった。さらに彼は、戦後になっても、「人類之家・台湾 ESP 学会⁹⁸」、「日抛時期台湾 ESP 運動⁹⁹」（遺稿）など日本統治期における台湾のエスペラント運動についての文章を発表する一方で、「郭懐一抗荷事蹟考略¹⁰⁰」、「林道乾¹⁰¹」、「台湾文化的特質」や「再就台湾文化的特質而言¹⁰²」など、台湾の歴史や文化に関する文章を多く発表した。つまり、連温卿の「台湾民族論」は、マルクス主義の影響を受け、左翼的なナショナリズムによって構築されたのであるが、そこでは「自国民同種族の自己省察」として、「一国」のなかの「主要種族」に限定し「固有信仰」にこだわることによって、そして「台湾人」のナショナル・アイデンティティを追求しようとする彼の強靱なパトスが見られる。それは、柳田の「一国民俗学」の論理の影響を受けたものと考えられる。

総じて言えば、1910年代半ばに武装抗日運動が挫折した時、留学生でも士紳階級でもない島内にいる一部の台湾青年が、エスペラントによって植民地の未来を模索した。特に連温卿は、エスペラントを通じて当時のコスモポリタニズムや社会主義などの西洋思潮を受け入れながら、植民地の言語や民族問題に着目し、社会や政治運動に力を尽くした。本章の冒頭で引用した毛一波の発言のように、植民地の人間として生まれた連は、「所謂階級獨裁制」にも「玄学的弁証唯物論」にも反対した。弱小民族の言語を守る思想を持つエスペラントの学習から、連はマルキシズムなどの社会主義思想を学び、左翼的な思想によって実際に階級闘争を行った。松田はるひが述べたように、「初期の連のエスペラント観は、実用主義、コスモポリタンの理想主義であり、世界共通語としてエスペラントを商業取引、国際機関などに使うべきだという認識から出発した。しかし、民族主義運動と共産主義運動からのインパクト、そして何よりも日本語の支配とエスペラント運動への迫害は、連にエスペラント観の変革をもたらした¹⁰³」のである。この連温卿のエスペラントに関す

る思想的な変化は、本章の第一節で論じた彼の「エスペラント主義」からうかがえる。つまり連は、植民地におけるさまざまな問題に基づいて、エスペラントが自国の国語の権威を擁護するプチブルの思想になっている現状に対して、本当の「エスペラント主義」はその「内在思想」の「ホマラニスモ」であり、今の時代の課題に応じられる思想であると考えていた。

また、エスペラントの言語観から影響を受けた連温卿は、「国語」に対抗するために台湾語の近代語や標準化に具体的な提案をした。その射程と影響は、第二節で論じたように、1930年代の台湾話文運動が見せた台湾の文化特殊性と言語ナショナリズムからうかがえよう。さらに、社会主義の思想を持つ左翼といわれた連は、エスペラント運動を行うなかで、民族問題に関心を持つようになった。彼は、一般の漢民族の知識人が「生蕃」を自分たちと同じ台湾の民族と認めていなかった時点で、1920年以降にエスペラントで台湾の民話や童話を翻訳し、台湾の先住民の生活道具や文化などをエスペラントで紹介し、「台湾先住民の物語」を連載した。この時期の連は、台湾の「生蕃」を「台湾における特別な民族」とみなし、エスペラント通じて海外に紹介した。

しかしながら、1930年代前後に左翼的な、プロレタリア的ナショナリズムに基づき、「**独り少数資本家及地主のみならず、最大多数の労働者及農民**」であり、「**広汎なる被压迫大衆**」である「台湾民族像」を形成するなかで、先住民族のことは徐々に彼の台湾民族論の枠から消えてしまった。1940年代以降の連温卿は、『民俗台湾』で「台湾民族性の一考察」など一連の台湾民族・民俗に関する論文を發表し、「台湾民族」の概念を理論化した。そのなかに、彼は生蕃以外の台湾に存在するさまざまなエスニックがそれぞれ経験した歴史や、植民地支配下で形成された1つの集団としての「台湾人」の民族性を論じた。台湾の生蕃は近代国家の基準ではなく、土地の範囲によって分類されることが、台湾の先住民族を「台湾民族」の枠組みからは排除したのである。こうしたエスペラントから形成されてきた連温卿の民族観は、当時ブームとなっていたエスペランチストでもある柳田国男の「一国民俗学」の影響を受けたものと考えられる。ところが、こうした台湾民族観は、漢民族を中心とする台湾社会におけるエスニックへの想像の限界であり、新しい世界的な潮流の影響を受けながらも、日本内地の民俗学にも左右された連温卿自身の限界とも言えよう。

¹ 吳叡人、「誰是「台湾民族」？：連温卿與台共的台湾解放論與台湾民族形成論之比較」、『地方菁英與台湾農民運動國際學術研討會』、台北：中央研究院、2008.03、199-229頁。

² 邱士杰、『1924年以前台湾社会主義運動的萌芽』、台北：海峽學術、2009.10。

³ 『漢文 台湾日日新報』（夕刊）、1929.07.18。原文：「赤化文協幹部 三名公判 台北文協幹部市內太平町連温卿。年三十六。同王萬得。年二十七。李德和。年二十六。三名共謀。於本年六月十七日始政紀念日。印刷打倒帝國主義。排斥總督獨裁政治。欲配布于本島各地同志之時。被發覺。閱此之台湾出版規則違反事件之第一回公判。〔中略〕三名異口同音，對總督之獨裁政治。豪言絕對反對。」

⁴ 毛一波、「哀悼連温卿先生」、『台湾風物』7(6)、1957.12、1-2頁（原文：連先生個人的力学如何、我不知道。但詳讀他的著作，我覺得他所受時代思潮的影響很深。〔中略〕話雖是這樣說，

- 連先生是反对「玄学的弁証唯物論」和「所謂階級独裁制」的。因此，連先生畢竟有其自己的思想体系來作為他行動的指南針吧。)
- 5 千布利雄、「ブローニュー宣言本文」、『エスペラント主義 ブローニュー宣言』、東京：日本エスペラント社、1924.09、4頁。
 - 6 村井徳寿、「国際語に就て」、『台湾日日新報』、1909.01.01。
 - 7 黒板勝美、「国語の擁護を論じて国際語に及ぶ」、日本エスペラント学会編、『国語の擁護を論じて国際語に及ぶ』、日本エスペラント学会、1932.05、2-3頁、12-14頁、28-29頁。
 - 8 周婉窈、「台湾人第一次的「国語」経験」、『海行兮的年代 日本殖民統治末期台湾史論集』、台北：允晨、2003.02、79-83頁。
 - 9 周婉窈、「台湾人第一次的「国語」経験」、91-93頁。
 - 10 Lepismo (連温卿)、「Kontraŭmodulo kaj Perfidanto (反対運動者と裏切者)」、『La Verda Ombro』、1922.10、3-4頁 (原文：エスペラント、訳文：ウルリッヒ・リンス著、栗栖継訳、『危険な言語』、1975.11、岩波書店、120頁より)。
 - 11 ブローニュー宣言の第1項は、「エスペラント主義とは、国民の内生活に立入ることなく、又毫も現在の国語を駆逐することを目的とせずして異なる国民に相互了解の可能を与へ、且つ諸種の民族が言語に関して相争へ国内に於ては公共機関の和解用語として用ひ得べく、尚之を以て各国民に対し平等の利益を有する著作物を発表し得べき、人類共有の言語の使用を全世界に普及する努力なり。或エスペランチストが此他の思想又は希望をエスペラント主義に結付くることありとも、そは皆純然たる其者の私事たるべく、エスペラント主義は之に対して責を負はず。」となる。千布利雄、「ブローニュー宣言本文」、前掲書、4頁。
 - 12 中村陽宇編、『国際補助語エスペラントと人類主義に就いて』、京都：愛善エスペラント会、1950.04、20頁。
 - 13 初芝武美、『日本エスペラント運動史』、東京：日本エスペラント学会、1998.03、59-60頁。
 - 14 千布利雄 (1881-1944)、初期のエスペラント運動の実質的な中心人物。1914年出版した『エスペラント全程』は良い教科書として広く使われる。小坂狷二と並び称されたが、ブローニュー宣言擁護を唱え、小坂らとの「ホマラニスム」論争の末、日本エスペラント学会の委員を辞任した。「教育勅語」や憲法などを多くの文章をエスペラントに翻訳した。柴田巖、後藤斎編、『日本エスペラント運動人名事典』、東京：ひつじ書房、2013.10、318頁。
 - 15 初芝武美、『日本エスペラント運動史』、60頁。
 - 16 初芝武美、『日本エスペラント運動史』、59頁。
 - 17 初芝武美、『日本エスペラント運動史』、60頁。
 - 18 千布利雄、『世界語主義 ブローニュー宣言』、東京：日本エスペラント社、1924.09。
 - 19 L. L. Zamenhof、「El Deklaracio pri Homaranismo (ホマラニスムについての宣言)」、『La Verda Ombro』、1920.09、8-9頁。
 - 20 Lepismo (連温卿)、「Kia estas Esperantismo? (エスペラント主義とは?)」、『La Verda Ombro』、1923.05、1-2頁。
 - 21 Lepismo、「Kia estas Esperantismo?」、『La Verda Ombro』、1923.05、2頁。
 - 22 連温卿の漢文版「怎麼是世界語主義 (エスペラント主義とは何か)」の要約。温・連、「怎麼是世界語主義 (一~四)」、『台湾民報』、1926.10.24、10.31、11.14；1927.01.09 (2回目以降のタイトルは「什麼是世界語主義」になった)。
 - 23 『La Verda Ombro』には、第二章で言及した山口小静の「赤化か緑化か」や、彼女が訳したロマン・ロランの文章があり、また「Socia Movado (社会運動、1922.08)」、「Klasbatalo en Ĥina Socio (支那における階級闘争、1923.02)」、「Lernejo de Tria Kominterno I~II」(コミンテルンの学校 [東方勤労者共産大学]、1923.05、07)などは、台湾の社会運動、ロシアや中国の社会主義関連組織や闘争について詳しく紹介している。1923年9月号にもコミンテルン学校内のエスペラント普及状況が報道され、また国際労働機関からの情報である「Familiaj Budĝetoj de Rusaj Laboristoj (ロシア労働者の過程予算、1923.12)」文章も掲載されている。
 - 24 陳規懷 (連温卿)、「日本帝国主義下の植民地台湾」、『大衆』、1926.11。
 - 25 温・連 (連温卿)「怎麼是世界語主義(1)」、『台湾民報』、1926.10.24、11頁。原文：「恰適有一位友人，受政府的命令出張於安南（法国的保護国），而我亦寄信給他，其信皮却是以世界語写着。後來接收了他的覆信，說若你再用世界語写着，若被其當局查見，我想亦被命退去也未可知，叫我不那様做。[中略]說日本人和台湾人学了世界語、然其意義總不能看做相同、

- 因為怎麼呢？譬如日本人讀了世界語用著西曆的年号、這是日本人不過以國際上的慣例用之而已。但若是台灣人用了西曆的年号、這可以看做一種的叛逆、因為日本國家有固有的年号「大正〇〇年」而不用之、而却用西曆、是一種排斥日本固有的年号的行為。」。
- 26 山口小静、「赤化か緑化か」、山口小静遺著、『匈牙利の勞農革命』、東京：水曜會、1923.06、32-33 頁。山川菊榮の『女二代の記 わたしの半自叙伝』（東京、日本評論新社刊、1956.05）もこの段落を引用した（262 頁）。
- 27 『國際語研究』は、大島義夫によって 1933 年から 1936 年にかけて全 16 号発行した季刊誌である。エスペラントが社会において占めるべき位置を理論付けするために重要な役割を果たし、エスペラント運動に理論を与えただけではなく、マルクス主義言語学に問題点を提出するものであったと位置づけられた。大島義夫・宮本正男、『反体制エスペラント運動史』（東京：三省堂、1974.07、215 頁）を参考されたい。
- 28 『文字と言語』、1934 年 9 月から 1938 年 5 月にかけて全 13 号発行した季刊である。ミニコミ雑誌ではあるが、中国のラテン化運動と連絡を取り、エスペランチストの葉籟士の『支那字ローマ字化概説』や魯迅らの論文を翻訳編集して『支那語ローマ字化の理論』という謄写印刷の本にまとめて各地へ配布した。『反体制エスペラント運動史』（218-219 頁）を参考されたい。
- 29 小林長彦、「社会思想界の展望」、『台湾時報』、1931.12、29-34 頁。
- 30 連温卿、「我々は闘争なき人類の平和に生きん」、『Informo de F.E.S.』、1931.12.15、6-7 頁。
- 31 S. S.、「エスペラントをかく視る」、『Informo de F.E.S.』第 2 号、1932.06.16、14 頁。「esprantismo」がエスペラント主義で、「gesinjoroj」が皆様という意味である。この S. S. という人が台南エスペラント会の機関誌『La Verda Insulo（緑の島）』で「Formosa fabelo - La Malsaĝa Tigro（台湾童話—愚かな虎）」を発表した So-Ŝio-Lin で、1930 年代に活躍した左翼作家である莊松林であると第三章で推測した。
- 32 「お知せ!」、『Informo de F.E.S.』第 2 号、1932.06.16、34 頁。
- 33 連温卿、「エスペラント講座 I」、『台湾新文学』1(3)、1936.04。「エスペラント講座 II」、『台湾新文学』1(4)、1936.05。
- 34 劉捷、「台湾文学の史的考察」、『台湾時報』、1936.04、87 頁。
- 35 張我軍、「新文学運動的意義」、『台湾民報』、1925.08.26、19 頁。原文：「我們現在談新文学的運動，至少有二個要点：1 白話文学的建設 2 台湾語言的改造」。
- 36 日下部重太郎、「国字問題史觀」、『教育』4(8)、1936.07.25、10-24 頁。
- 37 蔡培火が 1922 年に発表した「新台湾の建設と羅馬字」（『台湾』、1922.09.08）でローマ字を以て台湾語を書こうと建言し、1924 年と 1929 年にローマ字普及を台湾当局に許さるべく出願したが、2 回とも不許可された。そして彼はまた仮名式白話字を考案し、1931 年再びその普及の認可を当局に出願したが、また不許可とされた。さらに、彼は仮名式白話式の台湾語文字を作り、当局に認可をもらうために「台湾に於ける国字問題」（『教育』4(8)、1936.07.25）という文章を発表した。
- 38 Lepismo（連温卿）、「Skizo de Parolado pri Esenco Lingva en socio（「社会における言語の本質」に関する講演の要旨）」、『La Verda Ombro』、1924.01、1 頁。「偕行社」：旧陸軍の親睦組織で、この要旨では「La Armea Klubo」と表し、陸軍俱樂部という意味となる。
- 39 越無（連温卿）、「蠹魚的旅行日記」（1924 年）、第 94 回（中央研究院所蔵）。
- 40 連温卿、「言語之社会的性質」、『台湾民報』、1924.10.01、13-14 頁。
- 41 連温卿、「将来之台湾話（一~三）」、『台湾民報』、1924.10.11、1924.10.21、1925.02.01。2 回目以降のタイトルは「将来之台湾語」となった。
- 42 連温卿、「言語之社会的性質」、『台湾民報』、1924.10.01、14 頁。原文：「言語的起源和民族的起源是一致、為自己的存在、為自己的防衛而生的。這時候的言語還沒帶着甚麼社会性質的特徵，到了後來，由群的团体分化家族的团体、分化地方的团体、隨至民族的团体、言語的範圍和當時社会的經濟組織、互相比例、暫擴大起來。言語之社会的地位一性質、不論對內、不論對外也變換。」
- 43 連温卿、「言語之社会的性質」、14 頁。原文：「言語和民族的敵愾心是一樣的、今日的言語底社会性質、就是一方面排斥他民族的言語底世界優越權、一方面要保護自己民族的獨立精神、極力保護自己民族的言語、盡事改良、期要卓越他民族的言語、獲得世界的優越權、這不是矛盾是甚麼？」。當時國際連盟常設事務局事務次長を務める新渡戸稻造の国連への「エスペラ

- ント運動に関する觀察」報告の概要が台湾エスペラン学会の機関誌『La Verda Ombro』(1922.04、2頁)にも掲載されている。
- 44 連温卿、「言語之社会的性質」、14頁。原文：「這不待我說現代代表的政治思想、是把國家的觀念和民族的觀念看作一樣、叫同一民族要去服從同一權力的理想。[中略] 言語問題不可看做民族感情、不如以社會問題觀看較為妥處。這問題若讀者能了解、對國際語問題也能夠了解。」
- 45 連温卿、「将来之台灣語(続前)」、『台灣民報』、1924.10.21、14頁。原文：「我們台灣人須要改造我們的台灣話，以應社會上生活的要求。」
- 46 連温卿、「将来之台灣語(続)」、『台灣民報』、1925.02.01、15頁。
- 47 Esperantigis L (エスペラント訳：L=連温卿)、「Bildo Ideografa I (表意文字の絵像I)」、『La Verda Ombro』、1926.03、1-3頁。
- 48 S. Ren (連温卿)、「La Komenco de Ideografio (表意文字の起源)」、『Informo de F.E.S (台湾エスペラント学会通信)』第2号、1932.06.16、21-28頁。
- 49 連温卿、「婦人的地位和社会的關係」、『台灣民報』、1925.08.26、22頁。原文：「近代社會人類科學的研究、以為婦人的地位是跟從經濟組織—生產方法的變換而遷移的。」
- 50 温・連(連温卿)、「印度的壳淫 大英植民地裏面的一個斷片」、『台灣民報』、1926.08.15、12頁。原文：「近来北部盛唱要設立『檢番』制度、俾我湧出極淡々的感慨、思着社會上的口頭禪『台灣也已經文明了』一句話。」
- 51 陳規懷(連温卿)、「日本帝國主義下の植民地台灣」、『大衆』、1926.11、40-41頁。
- 52 陳芳明、『台灣新文學史』、台北：聯經、2011.11、62-63頁。
- 53 連温卿、「台灣エスペラント運動の回顧」、『La Revuo Orienta』、1936.06、74頁。
- 54 陳規懷(連温卿)、「台灣に於ける政治運動」、『大衆』、1926.12、60頁。「初等學校に於ける台灣語の會話の禁止、漢文教育の廢止、書房教育の制限」などについては、1920年代後半から『台灣民報』でもよく議論されていた。例えば嘉義の讀者による文章「要求公學復教漢文郡當局倒反禁止書房 父兄們不滿公學校教育」、『台灣民報』第232号、1928.10.28。
- 55 陳規懷、「台灣に於ける政治運動」、63頁。
- 56 蕭阿勤、『重構台灣 當代民族主義的文化政治』、台北：聯經、2012.12、86頁。
- 57 郭秋生、「建設「台灣話文」—提案(1931年7月から『台灣新聞』に33回連載)、中島利郎編、『1930年代台灣鄉土文學論戰資料彙編』(高雄：春暉、2003.03、50-51頁)から引用。
- 58 黃純青、「台灣話改造論」(原文が1931年10月から『台灣新聞』14回連載)、中島利郎の『1930年代台灣鄉土文學論戰資料彙編』から引用、121-122頁。
- 59 吳叡人、「福爾摩沙意識型態—試論日本殖民統治下台灣民族運動「台灣文化」論述的形成」、『新史學』17(2)、2006.06、131頁。
- 60 『國際補助語エスペラントと人類主義に就いて』、前掲書、20頁。
- 61 岡村民夫、「ジュネーブの柳田国男—言語問題を中心に」、岡村民夫・佐藤竜一、『柳田国男・新渡戸稻造・宮沢賢治—エスペラントをめぐって』、東京：日本エスペラント学会、2010.10、6-12頁。
- 62 奈良宏志、「柳田国男とエスペラント」、後藤総一郎編、『柳田国男研究資料集成』第16卷、1987.04、157-159頁(初出：『季刊柳田国男研究』第4号、1974.01)。
- 63 「第十二回日本エスペラント大会記録」、『La Revuo Orienta』特別付録、1925.01、16、50頁。
- 64 奈良宏志、「柳田国男とエスペラント」、157頁。
- 65 岡村民夫、「ジュネーブの柳田国男—言語問題を中心に」、前掲書、22頁。
- 66 佐谷真人、『民俗学・台湾・國際連盟 柳田國男と新渡戸稻造』、東京：講談社、2015.01、66、72、75頁。
- 67 岡村民夫、『柳田国男のスイス 渡欧体験と一国民俗学』、東京：森話社、2013.01、314、340、344-345頁。
- 68 奈良宏志、「柳田国男とエスペラント」、151頁。
- 69 温・連(連温卿)、「夜中の冬天」、『台灣民報』、1926.09.05、10頁(原文：民族問題確係是人類間最重大的問題、但若觀看過去歷史民族的規範—不論就社會上、也是政治上的—沒有像今日那樣嚴格、恰似和過去國家的規範一樣。如台灣的生蕃、就是現在也是像他的種族在古代時代所經過的過程途中。皆以土地為規範民族的標準)。
- 70 連温卿、「婦女的地位和社会的關係」、『台灣民報』、1925.08.26、22頁(數年前我曾遊卑南、得訪瑪蘭社二次、略知大概。)、26頁(我在卑南逗留時候恰適從宜蘭和我全船來的一個青年

- 女子――説は製腦的丁――到了卑南五六日後，滿街的蜂蝶大都為這個鮮花傾倒的樣子。)
- 71 『台湾日日新報』は1910年代末期から先住民の関連文章を多く連載した。例えば、白石良の「生蕃古事記」(1917.01.17-1917.02.09、計20回)や、秋澤烏川の「生蕃の伝説と童話」(1919.05.10-1919.08.07、計22回)などある。また、1920年代初期、台湾先住民に関する書籍も多く出版した。例えば、入江暁風の『神話 台湾生蕃人物語』(台北：台北印刷社、1924.06[初版：1920.07])、佐山融吉の『生蕃伝説集』(台北：杉田重蔵書店、1923.11)などの本は、筆者の手元にある。
- 72 陳規懷(連温卿)、「日本帝国主義下の植民地台湾」、『大衆』、1926.11、45頁。
- 73 連温卿、「台湾童話の国際的紹介に参加せよ!!」、『台湾新文学』、1936.11、82頁。
- 74 張炎憲、「社会民主主義者―連温卿(1895-1957)」、連温卿著、張炎憲、翁佳音編校、『台湾政治運動史』、台北：稻郷、2003.11、369頁。原文：「二次大戦期間至戦後，専心致力於民俗学研究，至1960年，其思想仍沒多大改变，還是位社会主義者，且深具台湾意識和郷土感情」。
- 75 陳規懷(連温卿)、「日本帝国主義下の植民地台湾」、『大衆』、1926.11、42頁。
- 76 連温卿、「一九二七年の台湾」(抜粹)、台湾総督府警務局編・吳密察解題、『台湾総督府警察沿革誌(三)』、203頁。
- 77 陳規懷、「台湾に於ける政治運動」、『大衆』、1926.12、62-63頁。
- 78 連温卿、「台湾に於る日本植民政策の実態」、『史苑』35(2)、1975.03、82頁。同誌に載せた「台湾抗日左派指導者連温卿とその稿本」で、戴国輝は「台湾に於る日本植民政策の展望」には、「一九三〇年、八、一三」という末記と「送先改造社内」の朱記がある、本誌においては「台湾に於る日本植民政策の実態」と改題した」と記する(60頁)。
- 79 吳叡人によると、「広汎なる被圧迫大衆」という概念はレーニン主義から援用したものである。「誰は「台湾民族」?：連温卿與台共的台湾解放論與台湾民族形成論之比較」、『地方菁英與台湾農民運動国際学術研討会論文集』、台北：中央研究院、2008.03、219頁。
- 80 台湾総督府警務局編・吳密察解題、『台湾総督府警察沿革誌(三)』、244頁。
- 81 連温卿、「台湾民族性の一考察」、『民俗台湾』、第4、5、7、8、10、11号、1941.10、1941.11、1942.01、1942.02、1942.04、1942.05。
- 82 池田敏雄、「植民地下台湾の民俗雑誌」、台湾近現代史研究会編、『台湾近現代史研究4・池田敏雄氏追悼記念特集』、東京：緑蔭書房、1982.10、121-151頁。
- 83 連温卿、「台湾民族性の一考察(一)」、『民俗台湾』第4号、1941.10、2頁。掲載号の筆者紹介には、連温卿は「台湾靱殻灰販売組合常務理事、在大稻埕」とある(4頁)。
- 84 連温卿、「台湾民族性の一考察(一)」、2頁。
- 85 連温卿、「台湾民族性の一考察(一)」、3頁。
- 86 連温卿、「台湾民族性の一考察(二)」、『民俗台湾』第5号、1941.11、40頁。
- 87 連温卿、「台湾民族性の一考察(二)」、42頁。
- 88 連温卿、「台湾民族性の一考察(六)」、『民俗台湾』第11号、1942.05、11頁。
- 89 吳叡人、「誰は「台湾民族」?：連温卿與台共的台湾解放論與台湾民族形成論之比較」、220、224頁。
- 90 柳田が語る大東亜圏民俗学についての分析は、植野弘子の研究(『民俗台湾』にみる日本と台湾の民俗研究、東洋大学社会学部紀要、第50-1号、2012、99-112頁)を参考されたい。
- 91 岡村民夫、『柳田国男のスイス 渡欧体験と一国民俗学』、248頁。
- 92 「帝国議会に於るエスペラント 教授調査に関する請願」、『La Verda Ombro』、1922.04(3-4号)、1頁。
- 93 鶴見太郎、『柳田国男とその弟子たち 民俗学を学ぶマルクス主義者』、東京：人文書院、1998.12、9-15頁。
- 94 「インタビュー 柳田国男との出会い 比嘉春潮/(ききて)谷川健一」、『柳田国男研究資料集成』第15巻、東京：日本図書センター、1987.04、157、161-162頁(初出：『季刊柳田国男研究』第3号、1973.09)。
- 95 伊藤幹治、『柳田国男と文化ナショナリズム』、東京：岩波、2002.10、77-79頁。
- 96 岡村民夫、『柳田国男のスイス 渡欧体験と一国民俗学』、314頁。
- 97 佐谷真人、『民俗学・台湾・国際連盟 柳田国男と新渡戸稲造』、東京：講談社、2015.01、143、152頁。
- 98 史可乘(連温卿)、「人類之家・台湾 ESP 学会」、『台北文物』、1954.05.01。

-
- ⁹⁹ 史可乘、「日抛時期台湾 ESP 運動」、『台湾風物』17(4)、1967.08。
- ¹⁰⁰ 辛逕農(連温卿)、「郭懷一抗荷事蹟考略」、「郭懷一抗荷事蹟考略(続)」『台湾風物』第1、2号、1951.12.01、1952.01.01。
- ¹⁰¹ 連温卿、「林道乾」、『台北文物』2(2)、1953.08.15。
- ¹⁰² 連温卿、「台湾文化的特質」、『台北文物』3(2)、1954.08.20。「再就台湾文化的特質而言」、『台湾文物』3(3)、1954.12.10。
- ¹⁰³ 松田はるひ、「緑の蔭でー植民地台湾エスペラント運動史(5)」、『La Revuo Orienta』1977.11、16頁。

終章

ここまで、日本統治下における台湾エスペラント運動の誕生から、展開のプロセス、さらに終焉までの歴史的な背景を辿ってきた。また、運動に携わっていた主要なアクターたちの生い立ちや彼らの言論および各エスペラント組織の重要な出来事を紹介したうえで、日本内地や中国の運動との連帯、および台湾内部の政治運動や社会運動との関係を分析した。さらに本論文は、歴史的な考察にとどまらず、「思想の媒介」、「社会運動の一環」、「文字改革運動の一環」、「普遍性の追求」など4つの視点から、台湾エスペラント運動の各分野における位置づけやそれが果たした役割を解明した。

明治維新以来、日本は西洋諸国との関わりが多くなり、西洋文化が急速に日本に流れ込んでいった。とりわけ明治末期から西洋との交流がより頻繁となり、知識人の間に英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語などさまざまな外国語学習のブームが起こった。エスペラントもそのなかの1つであった。このような外国語学習ブームをとおして、多くの西洋思想が日本に受容され、文学作品も和訳され、日本近代思想や文学および文体などに大きな影響を及ぼした。日本統治下の台湾でも、こうした時代の流れに沿った動きが見られた。

17世紀にオランダ、スペインなどの西洋諸国に支配されたこともあるが、台湾は、近代国民国家として発展した日本に領有されて以来、近代社会の形成が始まったのである。20世紀に入ると、日本内地と同様、台湾人も西洋文化といっそう頻繁に交流し、日本と連動しながらエスペラント運動が展開されるようになった。しかし台湾人と在台日本人エスペランチストの間で、植民地政策に対する考えが異なっていたため、運動は分裂状態に陥り、日本内地とは違う性質を帯びることになった。

終章では、第一章と第二章で明かにしてきた台湾エスペラント運動の歴史や、第三章で分析した3種の雑誌の内容を簡潔にまとめる。そして前述した4つの視角に基づいて、第四章から第六章で論じたプロレタリア・エスペラント運動とエスペラントと言語・文字改革運動との関係、およびエスペラントから形成された連温卿の思想をまとめる。また、本研究を通じ得られた結果を振り返りながら、日本統治期の社会運動や台湾の近代思想史、あるいは台湾文学や台湾の言語に関する研究に対して、再検討が可能な点を提起し、あわせて運動の果たした役割とともに、その限界性を指摘しておきたい。最後に、今後の課題を挙げてまとめに代えることにする。

第一節 台湾エスペラント運動の歴史的意義

台湾エスペラント運動は、宗主国であった日本から伝来して日本内地の運動の動向と関連していた。そのため、第一章の第一節では、明治末期から第二次大戦までの日本エスペラント運動を概観し、台湾の運動と関わったエスペランチストや台湾の運動と連帯性を持つ組織を指摘した。例えば1915年に日本エスペラント協会の機関誌『*Japana Esperantisto*』に「台湾特集」が掲載され、そこには蘇璧輝の台湾物産を紹介する記事もあれば、日本のエスペラント運動の父といわれる小坂狷二が訳した台湾民話もあった。第二節では、台湾の運動に焦点をあてた。日本に領有されてから20年余りの頃、まだ台湾各地で武装蜂起

が相次いでいた 1913 年、三井物産の社員である児玉四郎が台北支社に派遣され、そこで『台湾日日新報』を通じてエスペラントという「国際共通語」を宣伝し普及運動を始めた。第一章で述べたように、1915 年に起きた漢人による最大の武装蜂起である「西来庵事件」は、総督府によって徹底的に鎮圧されたが、台湾社会に大きな影響を与え、日本教育を受けた若い知識人にも「反日的」意識をもたらしことになった。これらの若い知識人が植民地政策に対して新たな対抗のアプローチを模索し始めた時期に、さまざまな新時代の思想を帯びた世界共通語のエスペラントは、1 つの新たな道を提供した。第一章では、1913 年に児玉四郎が編集した『Esperanta Libreto』（エスペラント小冊子）や 1915 年に台湾で出版された『組織的研究 エスペラント講習書』の内容を論じたが、当時の台湾人がなぜ世界潮流に応じてエスペラントを学んだのかがわかる。特に『組織的研究 エスペラント講習書』は当時世界最大級のエスペラント教科書と言われ、エスペラントを通じて台湾を世界に発信することに積極的な姿勢を見せた。ところが、この本が出版された直後に台湾エスペラント運動は勢いを失ってしまう。その原因としては、主要な担い手である児玉四郎が東京に帰ったことも影響しているが、総督府がエスペラントをロシアの虚無党が使う言語とみなし警戒心を持ったことや、西来庵事件が起こったため、運動に対する総督府の監視の目がより厳しくなったことも挙げられる。

西来庵事件以降、漢人による武装抗日運動は姿を消したが、新しい世代は新たな運動スタイルとして「非武装抗日運動」を模索した。日本留学中の彭華英や蔡培火は啓発会や新民会を結成し、1920 年に東京で『台湾青年』を創刊した。また 1923 年 4 月に廃刊された『台湾』雑誌社は、『台湾民報』を東京で創刊し、1927 年 8 月に総督府の許可を得、島内で発行することとなった。島内では、蔣渭水らが 1921 年に台湾文化協会を創立し、さまざまな文化的啓蒙運動を行っていた。しかし、こうした動きよりも早く開始されたエスペラント運動が与えた影響は、これまでほとんど注目されていない。だが、台湾の社会運動や文化運動のうねりのなかで、エスペラント運動が果たした重要な役割を多くの事実が示している。

1919 年に台湾エスペラント学会が台湾人エスペランチストによって創立され、機関誌『La Verda Ombro（緑の蔭）』も発行された。これは台湾島内で最も早く設立された啓蒙運動を行う組織と雑誌である。第一章で指摘したように、1921 年に台湾文化協会の創立に関わったエスペランチストは少なくなかった。彼らは、エスペラント運動で積み重ねた経験を文協の運営に持込んだのである。特に日本統治下の社会運動を語る際に不可欠な存在である連温卿は、エスペラント運動の組織経験を活かし、台湾文化協会の会則を執筆した。また文協の創立に関与し理事も務めた蘇璧輝は、台湾エスペラント学会の機関誌の発行人であり、新民会に参加して台湾の文字改革運動の幕を開いた黄呈聰も日本エスペラント学会や国際商業語協会の会員であった。さらに、文協の発起式の際に発せられた「私は台湾人に生まれたことを神様に感謝します」というナショナリズム的な名句は、大稻埕でエスペラントの看板を掲げていた「人類の家」の創業者・稲垣籐兵衛から間接的な影響を受けたものである。また文化協会の機関誌とも言える『台湾民報』が台湾島内に移動した 1927 年は、台湾のエスペラント運動に最も力を入れた連温卿が文協を主導するようにな

った年であり、台湾エスペラント学会の機関誌が廃刊となった翌年であった。そうした点からも、1920年前後に始まった「非武装抗日運動」が、エスペラント運動と深い関係を持っていたことがわかる。

第二章では、在台日本人エスペランティストの運動に対する取組みや果たした役割、そして彼らが1920年代から30年代に設立したいくつかのエスペラント組織を分析した。まず、アナキストの稲垣籐兵衛は運動の初期に、日本内地にいる小坂狷二、エロシエンコなどのエスペランティストとの交流を深めるよう台湾人エスペランティストに促した重要な人物である。稲垣が経営した「人類の家」にはエスペラントの看板が掲げられ、台湾エスペラント学会の例会や集会の場所となった。また台湾神社の神官の娘である山口小静は、1923年に23歳で夭折したが、東京在住時に山川均や山川菊栄らに社会主義思想を学び、社会主義運動や女性運動に積極的に参加していた。彼女は病気のため台湾に戻り療養した際に、台湾エスペラント学会に加入し、多くの社会主義関連の文章を機関誌に発表することで、運動を左傾化させ学会の分裂を招いた。山口の影響もあり、1922年は台湾エスペラント運動が最盛期を迎えた年だが、学会内部の分裂に直面した時期ともなった。学会の分裂は、植民地政策に対する意見の相違が原因だが、島内における民族の差別問題や階級問題も浮上して議論されたことは本章で示した通りである。

在台日本人のうち、稲垣籐兵衛のようなアナキストや、山口小静のような共産主義者は、台湾エスペラント学会に大きな影響を与えたが、その一方で学会から脱退したものも多かった。第二章では台湾農業局参事の武上耕一や、台湾専売局参事を務める杉本良、また台北高等学校校長である甲斐三郎など重要な在台日本人エスペランティストについても考察した。これらの官僚や学者らは、左傾化する学会の方向性に反対する立場に立ち、台湾文化協会と関わりのある学会とは徐々に距離をおくようになった。彼らはのちに「台北エスペラント会」を結成して、1926年以降に機関誌『La Formoso (台湾)』を発行した。学会とは訣別したものの、台北エスペラント会のメンバーは台湾のエスペランティストの代表として世界エスペラント協会に出席したほか、学术界や産業界、あるいは教育現場などさまざまな分野でエスペラントを広める活動を続けた。

台湾エスペラント運動は1920年初期に分裂したが、日本内地の運動との連動性は維持していた。台湾エスペラント学会や台北エスペラント会はそれぞれのスタンスに立ち、運動を続けた。学会は、ザメンホフが表明したエスペラントの内在思想である「人類人主義」に賛同し、エスペラントを階級闘争の武器として植民者を含む有産階級と対抗するようになった。そして社会運動の一環として運動を行いながら、徐々にプロレタリア・エスペラント運動に移行したのである。一方、台北エスペラント会も、ザメンホフが提出した「エスペラント主義」にしたがって植民地でのさまざまな言語を抑圧している国語政策を批判せず、植民地政策を擁護しながら、エスペラントの「中立性」を強調し、文化運動としてエスペラントの普及を続けた。

1930年代以降、大本教と希望社などの宗教および福祉団体も、台湾におけるエスペラント運動を推進する役割を果たした。この2つの団体は、1920年代初期に「人類愛善運動」や「希望運動」を推進し、多くの信者や参加者を集めた。また、理想世界を作り人類

の平和を求めることを掲げ、教義にふさわしいエスペラントを導入し、エスペラント組織を創立しただけでなく、多くの関連書籍を出版し、日本における有力なエスペラント普及団体となった。1931年に台湾エスペラント大会が開催されたが、その直前に大本教と希望社のエスペラント部が台北で創立された。大会後、大本教のエスペラント普及会は「全島緑化運動」を行い、台湾各地に支部が創立された。そのなかの台南エスペラント会が『La Verda Insulo (緑の島)』を創刊した。この「緑化運動」によって、1930年代初期の台湾エスペラント運動は、1920年代初期と並ぶもう1つの最盛期を迎えたように見える。しかしながら、皇民化運動や国語運動が強化されるにつれて、1930年代後半から衰退を始め、自立的な普及運動はほぼ見当たらなくなってしまう。1940年代以降の運動について、調べた限りでは、山鹿泰治の語学塾での授業だけであった。1939年に台湾へ移住した山鹿は、連温卿と親交のあるアナキストであり、1945年に「台湾自由社」を立ち上げ、北京語、英語、エスペラント語教授の塾を開いた。

第三章では、『La Verda Ombro (緑の蔭)』、『La Formoso (台湾)』、『La Verda Insulo (緑の島)』など、台湾で発行された3つの重要なエスペラント雑誌の内容を分析した。簡単にまとめると、まず、1919年から1926年にかけて発行された『La Verda Ombro』は、発行号数が合計で44号か45号だと推測できる。裏川大無が「台湾雑誌興亡史」で述べたように、『La Verda Ombro』と交換された外国雑誌が約二百余种以上にのぼり、この雑誌は世界的に知られていた。この意味で前述した1927年によく島内で発行できた『台湾民報』と比べると、台湾人が台湾で創刊し、植民地政策に対して批判的な立場に立った『La Verda Ombro』の重要性はいうまでもなからう。雑誌の内容について、筆者は鄧慧恩の分類による「国際事情とエスペラント運動の推進」、「台湾本島の民俗と社会時事」、「文学作品」と「科学知識」の4種類のほかに、「社会主義関連文章」という種類を加え、種類ごとにいくつかの文章を挙げて紹介した。また、特に雑誌に連載された「生蕃物語」と同じ内容が付録として再刊された「台湾先住民物語」を論じた。論文では、この文章が連温卿によって執筆したものだを確認した。また文章から連の反植民統治の意図を分析した。1920年に東京で創刊された『台湾青年』は島内では発行されておらず、1920年初期に台湾の知識人が先住民のことを重視していなかった時点で、台湾エスペラント学会がエスペラントによって広義の「台湾文学」とも言える「台湾先住民物語」を紹介したことは、大きな意味を持っている。

さらに、雑誌で連載され、付録の単行本としても発行されたエロシェンコの「童話の写生」と「私の学校生活の一頁」、および「墜ちる為めの塔」など3篇の作品の掲載ルートを検討したことで、台湾人が中国の知識人とつながる1つのルートにエスペラントがあったことがわかる。連温卿の回想によると、『La Verda Ombro』にエロシェンコの作品を掲載したために、胡愈之との間に著作権をめぐる揉め事が起こった。1920年代初期に、エロシェンコの童話は日本や中国で発表されたが、3篇とも著作権をめぐる揉め事の原因であったことが本論の考察により解明された。また、エロシェンコの童話、とりわけ「私の学校生活の一頁目」が台湾で受容されたプロセスは、1923年に『La Verda Ombro』に掲載されたものが最初で、その次に1924年のローマ字版があり、最後に1925年の民報と再版

の中国語版が続くことを明らかにした。

一方、1926年から30年にかけて在台日本人が中心となった『La Formoso (台湾)』は計14号が発行されたが、現在は9号しか確認できていない。編集者の多くが官僚であり経済的に恵まれていたため、創刊号からガリ版ではなく、すべて活字で印刷された。雑誌の内容を概観すると、広告を除けば、「支部内部の交流や活動」、「エスペラントの語学やその重要性について」、「外国や日本内地の便り」、「在台日本人が見た台湾」の4種類に分けられる。『La Formoso』誌上の語学に関する文章は、『La Verda Ombro』と異なり、社会主義や政治批判など左翼思想の傾向を持たず、エスペラントの国際的な意義や実用性、メリットなどを説明している。また「ホマラニスモ (人類主義)」を支持する『La Verda Ombro』と異なり、「ブローニユ宣言」で掲げた「エスペラント主義」を真のエスペラント主義だと考えていた。さらに言えば、在台日本人は、「他国語を尊重する」と言いながら、植民地の国語政策が台湾島内の言語を圧迫していた現状を無視し、国語を擁護しながらエスペラントを普及していた。とはいえ、文章や雑誌の表紙からは、彼ら在台日本人は、「台北にすむ者」として「郷土意識」を持っていることや、第二の故郷で、郷土たる台湾を世界に見せようとした姿勢がうかがえる。

1933年から34年まで刊行された『La Verda Insulo (緑の島)』は、1930年代以降に発行された唯一のエスペラント雑誌である。わずか2号しか発行されず、創刊号だけが現存する。1931年に日本内地から台湾エスペラント大会に参加した広瀬武夫は、大本教のエスペラント普及会の代表者である。彼は大会後に半年間の台湾全島緑化運動を行い、各地にエスペラント普及会支部を創立した。台南エスペラント会は、緑化運動の影響を受けて創立された組織であり、機関誌の『La Verda Insulo』を創刊した。台南の運動に力を入れた王雨卿は、32歳という若さで肺病により死去したが、台湾の昆虫学の研究に貢献した人でもある。『La Verda Insulo』は緑化運動の影響を受けて発行された雑誌であり、1930年代に日本内地や島内で行われていたプロレタリア・エスペラント運動のような階級的な色彩はさほど濃くはなかった。しかしながら、そこには古井仙一がエスペラント文から日本語で訳した「Historio de Esp-Movado en Sovetio」(ソビエトのエスペラント運動史)や、So-Ŝio-Linが書いた「Formosa fabelo - La Malsaĝa Tigro (台湾童話-愚かな虎)」という台湾民話が掲載されている。ソビエトのエスペラント運動史の原作者である Ernest Drezen はプロレタリア・エスペランチストの間でよく知られており、「So-Ŝio-Lin」は、1930年代の台湾新文学運動や民間文学運動で活躍した左翼作家の荘松林(朱鋒)である。また、彼は、台湾エスペラント学会の通信に掲載された、プロレタリア・エスペラント運動を支持する「エスペラントをかく視る」という文章を執筆した「S. S.」だと、筆者は推測した。つまり『La Verda Insulo』は、台南エスペラント会と左翼を批判する内地のエスペラント普及会と密接な関係を持っていた一方で、1930年代に流行したプロレタリア・エスペラント運動とも連動していたことがわかる。

第四章では1930年代以降の「プロレタリア・エスペラント運動」を論じた。1924年7月の第12回日本エスペラント大会において、「サート(SAT)」分科会が設けられ、3年後の1927年に「柏木ロンド」という「サート」の機関誌『Sennaciulo (無民族者/無国籍者)』

を輪読するエスペラント研究会が東京で開かれた。この「柏木ロンド」は日本のプロレタリア・エスペラント運動の始まりだといわれる。日本よりは少し遅れたが、台湾でも大本教と希望社のエスペラント会なども含めて、各エスペラント団体のリーダーが集まって協議を行い、運動を再発足しようとして、1931年に第1回台湾エスペラント大会が開催された。大会のなかに「プロレタ・エスペランチスト」分科会が設置されたことは、台湾のプロレタリア・エスペラント運動の誕生を示す象徴的な出来事だと言える。台湾エスペラント学会の運動が、プロレタリア・エスペラント運動に移行したのは、内地の動きと連動していたが、1920年代初期から学会の左傾化、つまり社会主義や階級闘争を以って植民地政策と対抗する姿勢と一貫していた。ところが、1930年代初期に台湾の社会運動や政治運動が挫折したことによって、知識人が文学や文化運動に転向したため、プロレタリア・エスペラント運動の旗を掲げる台湾エスペラント学会は、階級闘争の武器として運動を再開したことも、1920年代のような政治運動や社会運動の勢いがなく、文化上への影響がメインとなった。こうした影響は、例えば「郷土文学論争」でも提起され、鄭坤五のS.F小説の1つのエピソードともなっていることからうかがえる。

また、第四章では、日本のプロレタリア・エスペラント運動のなかで構築された理論や発行された雑誌および主な運動者の言論をまとめた。特に台湾の運動にも関わった比嘉春潮と小坂狷二、そして伊東三郎の活動や言論がどのように台湾に影響をもたらしたかを考察した。さらに、1930年代以降に台湾エスペラント学会によって発行された通信『*Informo de F.E.S.*』と、教科書『*Elementaj Lecionoj de Esperanto*』を分析し、台湾のプロレタリア・エスペラント運動の意義を論じた。そのなかから、日本の運動に呼応する言論や、台湾の農民・青年、または婦人へエスペラントを普及しようとした動きがうかがえる。特に『*Informo de F.E.S.*』には多くの理論的な文章が掲載されたが、実際の台湾社会に大きな反響を呼んだとは言い難い。とはいえ、知識人の間には世界的な、新たな理想の思想として認識されたと思われる。資料が限られているが、簡吉や李応章、あるいは楊達が創刊した『台湾新文学』におけるエスペラントの足跡を指摘したが、1930年代の台湾プロレタリア・エスペラント運動が農民運動や文化運動にも影響を与えたことが理解できた。

つまり、1930年代以降の運動の規模は縮小したが、台湾エスペラント学会は、プロレタリア・エスペラント運動を広げるために、通信や教科書を発行しただけではなく、『台湾新文学』のような文芸誌を通じてもっと多くの知識人に影響を与えようとする意図も持っていた。そして社会運動のような影響力は薄くなったが、プロレタリア文化運動の一環として行われていた。ところが、日中戦争勃発以降、皇民化運動や国語運動が強化されることで、プロレタリア・エスペラント運動はおろか、エスペラントの普及運動も沈滞化していった。

第五章は台湾の言語・文字改革運動の一環として展開されたエスペラント運動について論じたが、得られた結論は第二節の「言語・文字改革問題への示唆」でまとめながら、台湾文学や台湾の言語研究に関していくつか再検討すべき点を述べる。そして、第六章で論じた連温卿の「エスペラント主義」を以下の第三節の「台湾近代思想の基軸として」で整理すると同時に、台湾の近代思想史の構築への示唆を提起したい。

第二節 言語・文字改革問題への示唆

1920年代初期から始まった台湾の言語・文字改革運動は、新文学運動とともに、漢文改革運動や白話文普及運動、ローマ字運動などさまざまな形で展開していった。本論の第五章は、日本や中国のエスペラント運動を取り上げ、台湾エスペラント運動が日本や中国と同じように言語・文字改革運動の一環として行われていたと位置づけて分析を行った。

従来の研究は、台湾の新文学運動や言語・文字改革運動は、中国の白話文運動に呼応して展開されたと指摘していたが、実際に当時の宗主国日本からもたらされた影響はより大きなものだった。日本では明治後半の1890年頃に、法制度や教育、郵便事業、新聞などの近代国民国家としてのさまざまな制度が整備された。これらの制度が整うにつれて具体的な「国語」の制定も強く求められた。そして、日本語の表記法をめぐる「国字問題」も注目を集めて多く議論された。この「国語・国字問題」の議論は、言文一致運動とともに展開し、日本の近代文学や近代文体を確立させた。

一方、中国の白話文運動は清末期に始まり、1919年前後の新文化運動や五四運動とともに盛んになった。白話文運動の初期は日本の言文一致運動に影響を受けており、日本に亡命した梁啓超が提起した「新文体」や、香港や広東で提唱された「浅文」も議論の対象となった。ただ、漢字に関する議論において、エスペラントからの影響もあったことはこれまであまり注目されてこなかった。第五章で指摘したように、銭玄同は1919年の白話文運動前に、すでにエスペラントという「人造語」を重視し、それが言語進化の必然的な段階だとみなしている。彼はのちに魯迅とともに文字改革運動に取り組み、漢字廃止論、つまり中国語をラテン文字にするべきという議論を提起した。また、白話文運動に大きな貢献を果たした魯迅や胡愈之らはエスペラント運動にも力を注いだ。その活動は、彼らが行っていた白話文運動とも時期的に重なっており、日本だけではなく、台湾のエスペランティストとの交流もあった。

第五章では、これらの日本と中国におけるエスペラント運動と文字改革運動との関係を整理しながら、ローマ字推進者であるエスペランティスト齊藤秀一が創刊した雑誌『文字と言語』を取り上げた。エスペラントとローマ字という2つの文字に関する思想の関連性や相互作用を論じ、1930年代の中国語ラテン文字化運動が日本のエスペラント運動とローマ字運動とどのように関連し合っているかをまとめた。一言で言えば、ローマ字による言語表記の大衆化は、エスペラントと同じように言語拝物主義への闘争となる。そのため、ローマ字を普及し、言語表記の「大衆化」を目指すことは、日本だけではなく、漢字文化圏に属し識字率が非常に低かった中国や植民地台湾のラテン文字運動やローマ字運動と似た論理を持っている。

植民地台湾の言語・文字改革運動は1920年代初期に始まった。評論家の劉捷は、黄呈聰の「論普及白話的新使命」、黄朝琴「漢文改革論」、蔡培火「新台湾の建設と羅馬字」、張梗「討論旧小説的改革問題」、連温卿「将来之台湾語」、張我軍「新文学運動的意義」などの文章を挙げ、新文学運動の導火線とみなしている。なかでも、黄呈聰や黄朝琴そして張我軍の主張が、中国白話文運動の影響を受けたことはよく指摘されるが、蔡培火のロー

マ字論と連温卿のエスペラントの思考に影響を受けた台湾語改革論は、これまであまり詳しく検討されてこなかった。本論文での調査によって、早稲田大学に留学した黄呈聰や黄朝琴は「言文一致」を強調し、「言文一致体」の使用を呼びかけたことが明らかになった。特に黄呈聰がエスペランティストであったため、彼の近代文体観は、当時国字問題としても議論されたエスペラントの影響が読み取れる。一方、クリスチャンである蔡培火も早稲田大学に留学した。もしも彼が日本の言文一致運動やローマ字運動が強調した「大衆化」という思考に影響を受けず、また植村正久や田川大吉郎らの勧めがなければ、積極的にローマ字運動を推進することもなかったと考えられる。張梗や張我軍は中国白話文運動に呼応して、中国白話文を書こうと唱えたが、文章では「台湾語の改造」の問題を念頭に置いており、それも「旧漢文」を新しい文体に改革するものであったことがうかがえる。また連温卿の「将来之台湾語」は、エスペラントからもたらされた思考によって、民族と言語および社会との関係を論じながら、台湾語の言葉や文法の整理を提案した。これら新文学運動に関する一連の文章は、東アジアにおける言語・文字改革運動の流れに沿って展開した運動の表れだと言える。そして1920年代初期に初めて「台湾語改造論」、つまり台湾語の近代化を提起したのは、エスペランティストの連温卿による「将来之台湾話」であった。

第五章で、日本、中国のエスペラント運動とローマ字運動との関連性を論じたのは、第五章で述べたように、両者の「大衆」に対する考え方が似かよったものであり、つねに同時期に議論されて運動も連携していたこと。そして、1930年代の郷土文学論争が、「漢字」の枠組みで議論されていたように見えて、実はローマ字とエスペラントについてもしばしば言及されていたことがあまり注目されてこなかったからである。例えば葉栄鐘は1929年に発表した「關於羅馬字運動（ローマ字運動に関して）」で、台湾語の標準語化や大衆教育との関係とその重要性を論じていた。また蔡培火のローマ字運動が最も影響力を持ったのは1920年代であったが、1930年代に再び提起されたのは、彼がこの時期に造った「台湾白話字」（仮名字で書く台湾語の文字）とも関係があるが、やはり日本の「大衆」や「国字問題」に関する議論に影響を受けていると思われる。1930年代以降も、日本エスペラント学会の機関誌には、エスペランティストとローマ字論者の連携を呼びかけるものもあった。また大本教のエスペラント普及会の機関誌には、「日本人にローマ字で、外国人にエスペラントで」意思疎通をしようという主張もあった。つまり1930年代後半にも、日本内地の国字問題や文字改革議論、またはエスペラントやローマ字運動は続いていたため、島内でも台湾話文やローマ字、あるいは蔡培火の「台湾白話字」などが次々と提案され、台湾の「国字問題」の解決を図ろうとしたのであった。

1920年代の新文学運動や1930年代の郷土文学論争では、台湾文学の言語や文体を改革しようとしたが、それは、近代化されつつあった「国語」という権力とのせめぎあいとも言える。言い換えれば、植民地主義の浸透に伴い近代化された台湾社会では、「国語」は日本語だったが、知識人たちは漢文改革論や白話文普及運動、あるいはローマ字運動を通じて、使用頻度の最も高い「台湾語」を近代化させようと考えていたのだ。なかでも最初に具体案を提出したのは、エスペランティストの連温卿であり、その発想がエスペラント運動から大きな影響を受けたことが本論文の考察を通じて明らかになった。だが、中国白話

文の導入もあり、1924年の時点では連温卿の提案は知識人に大きな影響を与えなかった。しかし、彼の提案は1930年代以降の「台湾話文論戦」で具体化されることになる。言語ナショナリズムを帯びた「台湾話文論戦」は、1920年代から発展してきた、「言文不一致」の台湾の白話文を批判しつつ、「言文一致」により相応しい文字の書き方や言葉の標準化などを議論した。こうした「国字問題」にもなった議論には、前述したように、台湾話文の賛成派と反対派を問わず、「世界語」が度々提起され議論されていたが、ここには1930年代以降のプロレタリア・エスペラント運動の影響の足跡が見られる。

台湾エスペラント運動は、世界や日本の運動と同じように、その初期から民族問題を重視し、「国語」との関係について熱心に議論していた。国語を排除しない「エスペラント主義」と、「純然たる人間性と民族間の絶対正義と平和を目的」とする「人類人主義（ホマラニスム）」のどちらを重視するのかという点で、エスペランティストの間で分裂が起こった。原因の1つは「国語」に対する意見が異なったためである。日本主導の植民地化と近代化が同時並行で進む台湾では、「国語」が「台湾語」を排除するものとなる言語的権力構造が形成された。そのため、連温卿が提出した「将来之台湾語」は、台湾語の近代化への努力であり、「国語」への反抗意識を有しながら、エスペラントの思想を実践することで弱小民族の言語との共存を目指すものでもあったと言えよう。また、前述したエスペラントとローマ字が「文字拝物主義」、「言語拝物主義」への闘争というイデオロギーを帯びていたことから考えれば、1920年代から30年代の台湾の言語・文字改革運動は、エスペラントの視点からみれば、「漢字」のフレームを超えるにとどまらず、言語や文字の背後にある思想やイデオロギーなど、より広範な問題に焦点を当てているのではないだろうか。

ところで、連温卿が1924年に提案した台湾語の整理や文法の構築は、「台湾話文論戦」で具体化されたものの、国語運動が強化されたことによって台湾語の近代化は断絶された。しかし興味深いのは、二二八事件後に日本に亡命し台湾語研究で博士号を取得した王育徳が、1960年に雑誌『台湾青年』を創刊し「台湾語講座¹」というコラムを開いたことだ。そこでは台湾語の系統、音韻体系、教会ローマ字の話、語彙、書房の話、文言音と白話音と訓読と、台湾語と北京語との間、歌仔冊の話などのテーマについて24回連載した。偶然かもしれないが、21回から23回は「台湾語の文法」についての研究であり、最終回のタイトルは、「**将来の台湾語**」となっている。王育徳は「将来の台湾語」のなかで、「外国語はローマ字で」、「漢字とローマ字の混用」、「ローマ字の改良」、「台湾語の洗練を」、「合理的な言語政策を」など5つの主張¹を提出している。彼は国家の言語政策など、より長期的な展望と広い視野に立って「台湾語の将来」に対して提言した。王はエスペラントの影響を受けていない。日本統治期から議論されてきた漢字とローマ字の改革は、それぞれ異なる道を歩んできたが、王の「漢字とローマ字の混用」という提案によって1960年代に初めて合流した。王の考えは現在の「台語文（台湾語文）」に大きな影響を与えている。すなわち、日本統治時代や戦後の国民党政権による二度の「国語教育」を経験した台湾人

¹ 王育徳の「台湾語講座」は、1960年4月から1964年1月まで『台湾青年』に連載した。2012年に復刻版が出版された。王育徳、『王育徳の台湾語講座』、東京：東方書店、2012.07。

は、困難に遭いながらも、戦後再び一から台湾語の近代化を目指した。その長きにわたる台湾語の文字・言語改革運動のなかで、1920年代の連温卿と1960年代の王育徳の「将来の台湾語」への提案は、2つの重要な里程標だと言えよう。

第三節 台湾近代思想の基軸として

日本統治期の台湾社会は、中国の儒教や仏教思想の伝統を保ちながら、イギリスやカナダから来訪した宣教師による神学や近代観などを吸収した。また、形成途上の日本近代思想の影響を受けながら、日本を通じてさまざまな西洋の先進的な思想に触れた。台湾人はいわゆる「コスモポリタニズム（世界主義）」を学び、「世界」を認識しはじめ、国際観を持ち始めた。このような思想を学ぶには、例えばキリスト教や新たな学校教育、または外国語の学習などいくつかのアプローチがあったが、大正デモクラシー時期から盛んになったエスペラントも、その1つであった。近代以降の台湾では、他国の統治や多種多様な宗教、または政治や歴史の影響を受けてさまざまな思想が形成された。1つの体系的にまとめられた台湾近代思想史はまだ執筆されていないとはいえ、各分野で各種の思想がどのように受容されてきたかについてはある程度の蓄積がある。しかしエスペラントがもたらした複雑な思想についてはこれまで十分議論されてこなかった。

世界共通語として普及されてきたエスペラントの背後にある思想は、コスモポリタニズムや、ザメンホフのエスペラント主義またはホマラニスモだけではない。本論文で言及したアナキズムや社会主義とエスペラントとの関係は、特に1920年代から1930年代までは深いものだった。植民地台湾で展開された運動で生まれた複雑な思想の一端は、本論文の第六章で連温卿の「エスペラント主義」を例として論じた。ここで繰り返すと、連温卿のエスペラント主義の内実は、ザメンホフによる「エスペラント主義」から「ホマラニスモ（人類人主義）」に転換したものである。

繰り返しになるが、ザメンホフは1905年のフランスの「ブローニュー宣言」で、「エスペラント主義とは、国民の内生活に立入ることなく、又毫も現在の国語を駆逐することを目的とせずして異なる国民に相互了解の可能を與へ、且つ諸種の民族が言語に関して相争へる国内に於ては公共機関の和解用語として用ひ得べく、尚之を以て各国民に対して平等の利益を有する著作物を発表し得べき、人類共有の言語の使用を全世界に普及する努力なり」と述べた。彼は1913年9月に自分が「人類人」であると言い、エスペラント主義とは異なる十カ条の原則を「ホマラニスモ（人類人主義）」として宣言した。簡潔に言えば、「人類人主義」は、「純然たる人間性と民族間の絶対正義と平和を目的」とし、「偏狭愛国心のない基礎の上に立って中立的な人間の文化に奉仕する」ために、中立的言語エスペラントを起用するという考えである。

1920年代初期にエスペランティストの間でこの2つの主義の、どちらが「真のエスペラント主義」であるのかを議論する「ホマラニスモ論争」が起こり、それによって運動が分裂した。

本論の考察を通じて明らかになったのは、連温卿が、1905年の「エスペラント主義」を批判し、1913年の「ホマラニスモ」こそ真のエスペラント主義だと考えた背景には、

植民地政策によって生じた民族問題と階級問題を彼がつねに意識しながら、社会運動を行っていたためである。連温卿が主導したエスペラント運動は、1910年代から1930年代にかけて植民地政策や日本帝国の資本主義がもたらした階級問題を批判し続け、日本内地の動きに応じてマルクス主義的な思想を帯びたプロレタリア・エスペラント運動に移行していった。その結果、植民地におけるエスペラント運動は、いくつかの段階を経てさまざまな思想を含むようになった。

具体的に言えば、1910年代の運動の初期には、エスペランチストたちは世界と交流するために、平等主義や人類愛を求めて生まれた平和的な言語であるエスペラントという媒介を通じて、コスモポリタニズムなどの世界的な思潮を学んできた。この時期の運動は政治的な色彩は濃くはなかったが、西来庵事件を経験した若い世代の台湾人は、エスペラント運動を行っていくうちに新たな抗日運動を模索し始めた。また、1920年代前後からエスペラントは社会主義と結びつくようになり、「ホマラニスモ論争」が起こり、それは植民地台湾でも議論された。特に台湾においては、社会主義や共産主義の視点からだけではなく、植民地社会の現実をめぐる議論となった。植民地主義が実行されることで、台湾人と在日日本人との間の民族問題や階級問題はますます悪化し、エスペラントを階級闘争の武器として民族解放をさせようと唱えるエスペランチストが多くなったことがその背景にある。

さらに1930年前後に日本内地では、「マルクス主義的言語理論」が導入された。「内容のない平和主義と理想主義」を批判する「革命的エスペランチスト」は、「国際語の深い理解をプロレタリア階級の全世界的解放への、すべてのほかの欲求のなかに、プロレタリア・エスペランチストとして確立された」。エスペラントのネットワークを通じて、1920年代以来、日本内地の左翼知識人と連絡を取ってきた台湾のエスペランチストたちは、1930年以降、エスペラント運動を再開し日本内地の動きに応じて、プロレタリア・エスペラント運動に移行した。運動がより鮮明な左翼的色彩に染まったことは、第四章で挙げたように第1回台湾エスペラント大会後に発行された学会通信『*Informo de F.E.S.*』での階級闘争の主張や、学会教育部が発行した黒い労働者の上に黒い太陽が輝く赤い表紙の教科書、そして1932年の第2回大会での「赤化」議論などから確認できる。こうした台湾人エスペランチストのエスペラントに対する考えは、1920年代から30年代にかけて徐々に変化していったが、その一貫性もうかがえる。連温卿は1922年の時点でエスペラントの宣伝と同時に、植民地政策や同化政策を批判している。彼はエスペラントを用いて次のように述べている。

過去数世紀のあいだ各強国の植民地政策は、従属国の民衆の同化を目ざし、支配する国の言語がうまくひろまれば、同化政策もみのり多いものになることができる、と彼らは信じていた。[中略]しかし、それに反して世界大戦後はそういう思慮を欠いた考えは、世界の潮流のなかで春の雪崩のように消えうせた。そしてその反動としてエスペラントはひろまりつつある。[中略]自由と平等の上に立って考案されたエスペラントこそ、新時代の精神を最も完全に表現できるからである。

「新時代の精神」を最も表現しうるエスペラントを薦める発言は、台湾のエスペランティストが、新しい思想を帯びるエスペラントによって、前述した平和的コスモポリタニズムや左翼的イデオロギーのみを獲得したのではないことを物語っている。そもそも彼らは西来庵事件を経験して自然に抗日意識を育んでいた。それゆえ彼らは「新時代の精神」を表すエスペラントを学ぶことで「思慮を欠いた」植民地政策や同化政策を批判した。彼らの思想のなかに徐々に形成されてきたナショナリズムの一種の表出ともいえるのではないだろうか。以下に詳述するが、エスペラントに影響された多くの思想のなかに、ナショナリズム的傾向があることを見逃してはならない。

陳翠蓮によれば、日本に領有されて以来、日本国民としての教育を受けてきた台湾人は、武装抗日運動や非武装抗日運動を行いながら、原始的ナショナリズムを獲得したが、国民国家としての台湾人のナショナリズムは戦後初期の「二二八事件」以後形成された、という³。漢人による抗日運動からナショナリズムの形成を考察するものは少なくないが、台湾先住民である「高砂族」を含む「台湾人意識」や「台湾民族」というナショナリズムの原型が、いつから形成され始めたのかはあまり論じられていない。このことについて、エスペラントの文献はヒントを提供すると思われる。

第三章で論じたように、漢民族の知識人が先住民に対して差別感や軽蔑の念を持ち、彼らのことを「台湾の民族」として語らない時期に、『La Verda Ombro』は1920年から「台湾先住民物語」を連載し、世界に台湾の少数民族の歴史や文化を紹介していた。これは、人種や民族の平等を求めるエスペラントの思想の影響を受け、同じ地域の弱小民族に対する配慮であり、それを台湾の特殊性として世界にアピールすることだったと言えよう。また、「台湾先住民物語」の1節として掲載された、平埔族とオランダ植民者との闘いを物語る「Kastelo Prorendeja (普羅蘭遮城)」からは、植民者である日本帝国に強く抗議する連温卿の意志がうかがえる。もちろん1920年代初期に「台湾先住民物語」を掲載したことは、島内のエスニックや民族問題に対する関心の表明であろうが、国民国家の意味でのナショナリズムにまでは発展していなかっただろう。ただ、それ以降の台湾エスペラント運動は、「純然たる人間性と民族間の絶対正義と平和を目的」とする「人類人主義」に依拠することによって、植民地政策や日本帝国の資本主義に依存する有産階級を批判し、エスペラントを階級闘争の武器として植民者に対抗し続けた。こうした運動で表出されたナショナリズムは、1931年の第1回台湾大会で発言されたように、民族的なイデオロギーであり、左翼的な思想も強く含んでいると考えられる。

このように、エスペラントからもたらされた連温卿のナショナリズムの内実は、1920年代から30年代にかけて大きく変化していった。具体的に言うと、1915年の西来庵事件を経験し、エスペランティストになった連温卿は、1920年代前後に弱小民族の立場に立って反植民地政策的なイデオロギーを形成しながら、より弱小のエスニックである台湾先住民を台湾の民族とみなして、彼らのことを台湾の特殊性として世界に発信したのである。ところが、連温卿は左翼的な思想をより強く持ち、階級の視点で「台湾人全体」を考える

ようなプロレタリア的ナショナリズムに変化していった。すなわち連は、「台湾民族的利益」を優先する前提としてレーニンの「広汎なる被圧迫大衆」という概念を援用し、その「大衆」を「台湾民族」と同じ次元で考えていた。そして彼は、日本帝国主義や植民地政策を批判する階級論に基づいて、先住民の言語を含めず、「将来之台湾話」で台湾人全体としての近代語を標準化しようと建言し、「**独り少数資本家及地主のみならず、最大多数の労働者及農民**」、「**広汎なる被圧迫大衆**」という台湾人全体像を描き出したのである。結局、こうした左翼的なプロレタリア的ナショナリズムによって構築された「台湾民族像」の枠から、先住民のことは徐々に消えてしまうことになった。

連温卿のナショナリズムの複雑さや彼の「台湾民族論」は、彼が1940年代以降に執筆した「台湾民族性の一考察」という文章に凝縮されている。「民俗学」ブームの影響を受けて1941年に創刊された『民俗台湾』は、『La Verda Insulo』においてエスペラントで台湾童話を紹介した朱鋒の言語研究などの文章を数多く掲載しただけではなく、連温卿の「老葱に就て」、「牽手考」、「福老媽その他」、「媳婦及び養女の慣習について」など民俗に関する論文、また「台湾民族性の一考察」を6回連載した。台湾の民俗学や民族学の構築に大きく寄与した『民俗台湾』に寄稿したのは、もちろんエスペランチストとは限らず、異なる領域の文化人も多かった。しかし連が執筆した「民族性論」の背後には、彼がエスペラントから学んだ民族問題の思考が意味を持っていた。

第六章で論じたように、エスペランチストでもある柳田国男は、先住民の言語問題や方言の研究にも力を入れながら、1930年代後半から、「一国民俗学」という学問を構築した。連温卿の「台湾民族性の一考察」は、台湾に存在するさまざまなエスニックがそれぞれ経験した歴史や、植民地支配下で形成された1つの集団である「台湾人」の民族性を論じている。ただ、主張にはゆらぎがないわけではなく、前述した植民地政策を批判するナショナリズムや、マルクス主義の思想が含まれているが、柳田国男の「一国民俗学」に影響された痕跡も見られる。1920年代の「台湾先住民物語」では台湾に存在する少数民族を認めたが、1940年代の「台湾民族性論」では、台湾の「生蕃」が近代国家の基準ではなく、土地の範囲を基準としていることを述べている。そして連は、台湾人が「支那民族」の「血族」や「血縁」を有していながら、経済上の独立や、福佬族や客家族の漢民族が平埔族や「蕃人」と混血し、習俗や文化も混淆することによって、「支那」と相違する「台湾人」という「社会的集団」が形成され、民族的独自性を持つようになったが、近代的概念で言う「民族(nation)」の「台湾民族」は未形成だと強調している。つまり連温卿の「台湾民族論」は、近代的意味を持ち形成過程にある台湾民族を理論化しようとしたものであるが、台湾民族近代的「台湾民族」はまだ形成されていないと主張し、先住民を「台湾民族」を議論する枠組みからも排除したのである。それは、柳田国男の「一国民俗学」と同様、「台湾人」のナショナル・アイデンティティを追求しようとする連の強靱なパトスを見せていた。しかし「一国民俗学」のなかに、柳田が「主要種族」(日本人)に限定し「固有信仰」にこだわることによって、沖縄や植民地台湾・朝鮮など言語が異なる民族を排除したことで、連も「自国民同種族の自己省察」として、「一国」のなかの「主要種族」(台湾人:漢民族や漢化された平埔族)に限定し「固有信仰」にこだわることによって、先住民を「台

湾民族」の枠組みから排除したのではないだろうか。

もちろん連温卿は思想家とはいえない。しかし日本統治下における近代思想の受容を論じる際、コスモポリタニズムであれ、社会主義やナショナリズムであれ、それぞれ異なる思想背景や受容ルートを通じて考察していくべきであろう。本論文は、エスペラントの視点で、公学校だけの学歴にもかかわらず、台湾の政治運動や社会運動に大きな影響を与え、またエスペラントからもたらされた思考で台湾語の近代化を提案した連温卿の思想形成や変化、またその思想に基づいて実践された行動を検討した。こうした考察によって、上述の思想が含まれることや、植民地政策や歴史の影響を受けて生じた複雑性を見出すことが可能であり、台湾の近代思想史の構築にも示唆を与えるのではないだろうか。

第四節 今後の課題

本論文は、日本や中国など東アジアの連動に焦点を絞って、日本統治時代の台湾エスペラント運動に対して歴史的な考察を行い、社会運動や文字改革運動、また思想の伝播などの視点でこの運動の意義や各分野での位置づけを明かにした。しかし、エスペラント自体はヨーロッパの言語から由来し、また当時台湾で出版されたエスペラント雑誌によって交換された欧米各国で発行された刊行物が 200 点以上あるため、国際的な思潮からの影響は日本や中国より大きかったと言えよう。

だが、史料や文献の制限もあるため、台湾のエスペラント運動は、東アジア以外の国々とのつながりなどは、まだ把握されていないほかに、島内の普及運動についても、まだ多くの課題が残っている。例えば、第一章と第二章では、児玉四郎、連温卿、蘇壁輝、黄呈聰、稻垣籐兵衛、山口小静、武上耕一、杉本良、甲斐三郎など重要なエスペランティストについて論じた。杉本良と甲斐三郎は台湾代表として世界エスペラント協会の理事を務めたが、そこでの具体的な台湾に関する発言は把握できていない。また台湾エスペラント運動に貢献した黄鉄、岩瀬通や甲斐虎太、江副秀喜などの人物については、資料の欠如のため、彼らの生い立ちさえも考察できなかった。また本論では、当時発行されたエスペラント雑誌に収録された文章を主に扱ったが、それ以外にも台湾島内で刊行された『台湾日日新報』や『台湾時報』または『新高新報』などの新聞や雑誌にもエスペラントに関連する文章が掲載されていたが、それらの議論をすべて分析することはできなかった。

また、本論文が扱っている主な資料は台湾・日本・中国で刊行されたものである。しかし例えば、『La Verda Ombro』、『La Formoso』、『La Verda Insulo』のなかには海外のエスペラント誌から転載された文章がある。連温卿が外国のエスペラント雑誌に掲載したドイツやウィーンの記事や文学作品を漢文に訳して『台湾民報』に発表したこともある⁴。あるいは 1936 年に、連がフランスの『国際文学』の編集者が計画した世界各民族の童話叢書の発行に応じて、『台湾新文学』で台湾の昔話を募集しエスペラントに翻訳しようとしたこともある⁵が、これらの文章の出典や掲載先はほとんど確認できなかった。そのため、本論での考察は東アジアにおける連携しか解明できず、エスペラント運動の実際的な国際連帯、つまり当時の台湾エスペランティストがエスペラントを通じて欧米のどの国の運動と連携していたのかなどのは、ほとんど論じることができなかった。

ところが、東アジアにおける連携しか解明できないと言っても、島内にいた台湾の知識人は、エスペラント運動を通じて日本や中国の知識人と交流しただけではなく、同じ植民地である朝鮮とも交流していた。しかし朝鮮のエスペラント運動についてはほぼ言及することもなかった。例えば在朝日本人の大山時雄は、1926年から1927年にかけて月刊『朝鮮時論』(1926.06-1927.08)を発刊して、朝鮮人と日本内地の社会主義者との交流を促している。大山時雄はエスペランティストであり雑誌のタイトルにもエスペラントが付いており、そのなかにもエスペラント欄が設けられていた。雑誌のなかに、山川均や台湾の連生(連温卿)、そして「一琉球人」らの手紙⁶が掲載されている。その「一琉球人」は比嘉春潮だと推測できる。つまり、朝鮮の雑誌に掲載された連温卿や比嘉春潮の手紙は、エスペラントのネットワークを示したものだと考えられるのだ。

1920年代初期に朝鮮人、台湾人間の交流は内地に限られたといわれ⁷、また日本や中国との社会運動の連携や文化上の相互影響などはよく議論されている。しかしエスペラント運動を通じて、島内の台湾人はヨーロッパのエスペラント組織との間で雑誌や多くの情報を交換し、また東アジアの日本や中国だけではなく、朝鮮や沖縄の知識人との交流も早くから行っていた。しかし本論では、言語能力の制限もあり、朝鮮のエスペラント運動と台湾の運動については一切触れておらず、それは1つの大きな欠点だと思う。

そして本研究では、ジェンダーの視点も欠如している。第二章で、山口小静という在日日本人女性について論じたが、彼女のほかにも、台湾エスペラント学会が1932年12月に主催した「エスペラントの夕べ」⁸というラジオ番組にも出演した廖秋桂という人物がいた。また、学会の通信『*Informe de F.E.S.*』では、「蟾青(Lunino)」という女性が執筆した「エスペラントと婦人—婦人エスペランティストへ寄す」⁹が掲載されている。つまり、つまりエスペラント運動に参加した女性も何人かいたが、ジェンダーの視点からエスペラント運動を議論することはまだできていない。

また例えば、真イエス教会のクリスチャンである謝萬安や、左翼作家の莊松林には第三章で言及したが、彼らは、1930年代以降にエスペラント運動に取り組みながら、文化運動、特に民間文学運動や台湾語の整理にも力を入れた。こうした1930年代の文化運動とエスペラント運動との関係についても十分に論じることはできなかった。

つまり、日本統治下における台湾エスペラント運動についての研究は、本論文が今まで最も詳細的なものと言えるだろう。しかしながら、この研究は、いくつかのいまの台湾研究に注目されている視点で、台湾エスペラント運動の歴史や概略を考察したものにはすぎない。以上に述べたように、解明できないテーマは多い。これらのテーマを1つ1つ、今後の課題にしたい。

¹ 王育徳、「将来の台湾語」、『王育徳の台湾語講座』、122-123頁。

² Lepismo(連温卿)、「Kontraŭmodulo kaj Perfidanto(反対運動者と裏切者)」、『*La Verda Ombro*』、1922.10、3-4頁(原文:エスペラント、訳文:ウルリッヒ・リンス著、栗栖継訳、『危険な言語』、1975.11、岩波書店、120頁より)。

³ 陳翠蓮の『台湾人的抵抗與認同(1920-1950)』(台北:遠流、2009.10)を参照されたい。

⁴ 例えば、温・連、「印度的売淫 大英植民地裏面的一个断片」(『台湾民報』、1926.08.15、12頁)、「紹介一篇「反对徵兵制度的宣言」」(『台湾民報』、1926.10.17、13頁)、「道德的神髓(上)(下)」(『台湾民報』、1927.03.27、11-12頁、1927.04.03、11-12頁)。

-
- ⁵ 連温卿、「台湾童話の国際的紹介に参加せよ!!」、『台湾新文学』、1936.11、82 頁。
- ⁶ 『朝鮮時論』1(4)、1926.09、74-75 頁。
- ⁷ 紀旭峰の「大正期在京台湾人留学生と東アジア知識人—朝鮮人と中国人とのかかわりを中心に—」(『アジア太平洋研究』15、2010.10、201-219 頁)を参考されたい。
- ⁸ 「エスペラントの夕べ」、『台湾日日新報』、1932.12.03、4 頁。このエスペラントのラジオ番組に出演した廖秋桂は、彫刻家の黄土水(1895-1930)の妻だと推測した。黄氏廖秋桂は、1930 年代以降、『台湾日日新報』で「東京の婦人と台湾の婦人 大聲て話し暮す本島婦人」(1931.07.04)、「本島人の女性間に—流行し出した洋装」(1931.07.31)、「婦人と家庭 衣裳文化と「黒猫」」(1931.10.02)などの文章を発表した。
- ⁹ 蟾青、「エスペラントと婦人—婦人エスペランティストへ寄す」、『Informe de F.E.S』第2号、1-8 頁。目録での日本語は蟾青である。蟾青(Lunino)は、月の異称で、月の中に蟾蜍と兎がいるという伝説からの蟾兔に意味する。エスペラントの語法からでも、作者が女性だと考えられる。

参考文献：（あいうえお順）

エスペ란トの雑誌、刊行物など：

- 『La Japana Esperantisto (日本エスペランティスト)』、東京：日本エスペ란ト協会、1906-1918
『La Revuo Orienta (エスペ란ト)』、東京：日本エスペ란ト学会、1919-
『Esperanta Libreto (エスペ란ト小冊子)』、台北：日本エスペ란ト学会台湾支部、
1913-1914
『La Verda Ombro (緑の蔭)』、台北：台湾エスペ란ト学会、1919-1926
『La Formoso (台湾)』、台北：台北エスペ란ト会、1926-1930
『ラヂオ放送 エスペ란トの夕』、台北：台北エスペ란ト会、1929
『第一回台湾エスペ란ト大会』(大会記録)、台北：台北エスペ란ト会、1931
『Informo de F.E.S (台湾エスペ란ト学会通信)』、台北：台湾エスペ란ト学会、1931-1932
『ELEMENTAJ LECIONOJ DE ESPRANTO (初級エスペ란ト)』 台湾エスペ란ト学会、
1932
『国際語研究』、東京：1933-1936
『文字と言語』、山形：1934-1938
『Verda Mondo (緑の世界)』、京都：エスペ란ト普及会、1925-?
『La Verda Insulo (緑の島)』、台南：台南エスペ란ト会、1933-1934
『緑蔭 La Verda Ombro』、東京：台湾国際語学会、1991

ほかの新聞、刊行物：

- 『愛光新聞』
『改造』
『教育』
『国際文化』
『語苑』
『新世紀』
『新高新報』
『人類愛善新聞』
『戦旗』
『大衆』
『種蒔く人』
『台湾日日新報』、『漢文台湾日日新報』
『台湾』、『台湾青年』、『台湾民報』、『台湾新民報』
『台湾大衆時報』、『台湾新大衆時報』
『台湾時報』
『台湾新文学』
『台湾協会報』
『台湾同盟通信』
『台北文物』
『台湾風物』
『台湾文化』
『朝鮮時論』
『天義』
『東方雑誌』
『南音』
『日本学芸新聞』
『非台湾』
『プロレタリア科学』

『満洲評論』
『民声』
『民俗台湾』
『ローマ字世界』
『我等』

エスペラント関連著書（日本語）：

- 秋田雨雀監修・プロレタリア科学研究所エスペラント研究会編著、『プロレタリア・エスペラント講座』（一～六）、東京：鉄塔書院、1968.08（復刻版[初版：1930.09]）
- いとうかんじ、『ザメンホフ』（一～八）、京都：永末書店、1967-1978
- 伊東三郎、『エスペラントの父 ザメンホフ』、東京：岩波書店、1997.11（初版：1950.04）
- 石黒修、『初等エスペラント教科書』、東京：世界思潮研究会、1923.08
- ウルリッヒ・リンス著、栗栖継訳、『危険な言語—迫害のなかのエスペラント—』、東京：岩波新書、1975.11
- エ・ドレーゼン著、高木弘訳、『エスペラント運動史』、東京：鉄塔書院、1932.09
- エドモン・プリバー著、大島義夫・朝比賀昇訳解説、『エスペラントの歴史』、東京：理論社、1957.11
- 小坂狷二、『エスペラント語訳 イソップ物語』、東京：日本エスペラント社、1923.10
- 、『エスペラント文学』、東京：岩波書店、1933.07
- 小坂狷二・秋田雨雀、『模範エスペラント独習』、東京：叢文閣、1923.05
- 小坂狷二・伊東三郎、『プロレタリア・エスペラント必携』、東京：鉄塔書院、1930.09
- 大島義夫・宮本正男、『反体制エスペラント運動史』、東京：三省堂、1974.07
- 岡村民夫・佐藤竜一、『柳田国男・新渡戸稲造・宮沢賢治—エスペラントをめぐる—』、東京：日本エスペラント学会、2010.10
- 加藤節、『全世界通用語 エスペラント獨修』、東京：岡崎屋書店、1906.10
- 川原次吉郎、『エスペラントの話』、東京：日本評論社出版部、1923.05
- 児玉四郎主編、『組織的研究エスペラント講習書』、日本エスペラント協会横須賀支部会と台湾支部、1915.03
- ザメンホフ著、板橋鴻訳、『エスペラントの本質と将来』、東京：日本エスペラント学会、1962.09
- ザメンホフ著・述、水野義明編・訳、『国際共通語の思想 エスペラントの創始者ザメンホフ論説集』、東京：新泉社、1997.06
- 柴田巖、『中垣虎児郎—日中エスペランティストの師—』、大阪：リバーロイ社、2010.05
- 柴田巖・後藤齊編、峰芳隆監修、『日本エスペラント運動人名事典』、東京：ひつじ書房、2013.10
- 杉本良、『禁酒の国を見る』、台北エスペラント会、1928.12
- 、『専売制度前の台湾の酒』台北：台湾酒類売捌人組合、1932.06
- 、『佐夜中山御林百年』、静岡：杉本周造、1979.05
- 高杉一郎、『わたしのスターリン体験』、東京：岩波書店、2008.08
- 、『中国の緑の星 長谷川テル 反戦の生涯』、東京：朝日新聞社、1980.11
- 、『ザメンホフの家族たち あるエスペランティストの精神史』、東京：田畑書店、1981.07
- 高杉一郎編、『夜あけ前の歌—盲目詩人エロシエンコの生涯』、東京：岩波書店、1982.12
- 高杉一郎編訳、『エロシエンコ童話集』、東京：偕成社、1993.11
- 竹内次郎、『プロレタリア・エスペラント運動に付て』、東京：東洋文化研究社、思想研究資料特第 69 号、1939.11
- 田中克彦、『エスペラント—異端の言語』、東京：岩波新書、2007.06
- 田中貞美・峰芳隆・宮本正男共編 『日本エスペラント運動人名小事典』、大阪：日本エスペラント図書刊行会、1984.11
- 千布利雄、『エスペラント全程 独習用=教科書用』、東京：日本エスペラント社、1924.07

- 、『エスペラント主義 ブローニュー宣言』、東京：日本エスペラント社、1924.09
 中村陽宇編、『国際補助語エスペラントと人類主義について』、京都：愛善エスペラント会、1950.04
 日本エスペラント学会編、『エスペラント年鑑（1934）』、東京：日本エスペラント学会、1934.04
 日本エスペラント運動 50 周年記念行事委員会編（代表者福田正男）、『日本エスペラント運動史料 I 1906-1926』、東京：日本エスペラント学会、1956.11
 日本プロレタリア・エスペランティスト同盟教育部編（代表者中垣虎児郎）、『エスペラントを学べ』、東京：ポエウ出版部、1931.10
 日本エスペラント学会編、『国語の擁護を論じて国際語に及ぶ』、東京：日本エスペラント学会、1932.05
 初芝武美、『日本エスペラント運動史』、東京：日本エスペラント学会、1998.10
 長谷川二葉亭、『教科用 獨習用 世界語（エスペラント）』、東京：彩雲閣、1906.07
 藤間常太郎、『近代日本における国際語思想の展開』、東京：日本エスペラント図書刊行会、1978.06
 二木紘三、『国際語の歴史と思想』、東京：毎日新聞社、1981.05
 ———、『国際共通語の夢』、埼玉：筑摩書房、1994.07
 マージョリー・ボウルトン著・水野義明訳、『ザメンホフ——エスペラントの創始者』 東京：新泉社、1993.11
 水野義明、『言語の発展：国際語エスペラントの観点から』、東京：大村書店、1992
 三宅栄治、『闘うエスペランティストたちの軌跡—プロレタリア・エスペラント運動の研究』、大阪：リバーロイ社、1995.10
 向井孝、『山鹿泰治 人とその生涯 アナキズムとエスペラント』、東京：青蛾房、1974.05
 八木日出雄、『我国に於ける外国語問題とエスペラント』、京都：カニヤ書店、1924.01

日本語著書：

- ア・ハリコウスキー著・山本直人訳、『盲目の詩人エロシェンコ』、東京：恒文社、1983.09
 旭季彦、『ナロードニキ運動とその文学』、東京：新読書社、1991.09
 池田昭編集、『大本史料集成 I 思想篇』、東京：三一書房、1982.06
 ———、『大本史料集成 II 運動篇』、東京：三一書房、1982.09
 ———、『大本史料集成 III 事件篇』、東京：三一書房、1985.08
 伊藤潔、『台湾』、中公新書、2008.10
 「インタナショナル」編集部、『国際プロレタリア婦人運動 婦人問題』、東京：戦旗社、1930.10
 井手文子・江刺昭子、『大正デモクラシーと女性』、東京：合同出版、1977.02
 井上伊之助、『台湾山地伝道記』、東京：新教出版社、1960.09
 井出武三郎、『吉野作造とその時代 大正デモクラシーの政治思想断章』、東京：日本評論社、1988.08
 井上留五郎編、『暁の鳥』、京都：天声社、1925.06
 入江暁風、『神話 台湾生蕃人物語』、台北：台北印刷株式会社、1920.07
 江刺昭子、『覚めよ女たち 赤瀾会の人びと』、東京：大月書店、1980.10
 小谷一郎、『一九三〇年代後期中国人日本留学生 文学・芸術活動史』、東京：汲古書院、2011.12
 岡村民夫、『柳田国男のスイス 渡欧体験と一国民俗学』、東京：森話社、2013.01
 王育徳、『王育徳の台湾語講座』、東京：東方書店、2012.07
 大杉豊ら著、『大杉栄 日本で最も自由だった男』、東京：河出書房新社、2012.02
 鹿野政直、『大正デモクラシーの底流 "土俗"的精神への回帰』、東京：NHKブックス、1973.10
 河原功編、『台湾引揚者関係資料集（編集復刻版）』全7巻・付録2、東京：不二出版、2011.11
 許世楷、『日本統治下の台湾』、東京：東京大学出版会、1972.05

- 京極純一、『植村正久 その人と思想』、東京：新教、2008.01
- 蔵原惟人編、『日本プロレタリア文学案内 (1)』、京都：三一書房、1955.06
- 後藤静香著・後藤静香選集刊行会編集、『後藤静香選集(10) 実践運動編』、東京：善本社、1978.10
- GOTÔ-SEIKÔ (後藤静香)、『RÔMAJI KÔGI』(ローマ字講義)、東京：希望社、1929.10
- 佐山融吉、『生蕃伝説集』、台北：杉田重蔵書店、1923.11
- 佐谷真木人、『民俗学・台湾・国際連盟 柳田國男と新渡戸稲造』、東京：講談社、2015.01
- 齋藤勇、『日本共産主義青年運動史』、東京：三一書房、1980.08
- 斉藤希史、『漢文脈と近代日本 もう一つのことばの世界』、東京：日本NHKブックス、2007.02
- 坂口直樹、『戦前同志社の台湾留学生 キリスト教国際主義の源流をたどる』、東京：白帝社、2002.05
- さねとう けいしゅう『増補 中国の文字改革』、東京：くろしお出版、1971.09
- 坂本栄二(上林会代表)編集発行、『上林熊雄翁 追悼録』、神戸：上林会、1979.05
- 周婉窈著、石川豪・中西美貴訳、『図説台湾の歴史』、東京：平凡社、2007.02
- 菅野則子、『文字・文・ことばの近代化』、東京：同成社、2011.03
- 外村史郎、『プロレタリア文学』、東京：岩波書店、1933.04
- 武谷三男、『弁証法の諸問題』、東京：勁草書房、1968.05
- 竹中信子、『植民地台湾の日本女性生活史②大正篇』、東京：田畑書店、1996.10
- 台湾総督府警務局編、『台湾総督府警察沿革誌(三)』(復刻版、初版：1939.07)、台北：南天書局、1995.06
- 台湾新民報社編、『台湾人士鑑』、台湾：台湾新民報社、1937.09
- 鶴見太郎、『柳田国男とその弟子たち 民俗学を学ぶマルクス主義者』、東京：人文書院、1998.12
- なだいなだ、小林司『20世紀とは何だったのか マルクス・フロイト・ザメンホフ』、東京：朝日新聞社、1992.01
- 永野芳夫、『経験哲学を基礎としての新しい教育論』、東京：モナス、1924.07
- 日本プロレタリア美術家同盟、『闘争ニュース用 プロレタリアカット漫画集』、東京：戦旗、1930.05
- 野村剛史、『日本語スタンダードの歴史 ミヤコ言葉から言文一致まで』、東京：岩波書店、2013.05
- 林要編、『小さき命 林てる子遺稿集』、東京：大空社、1995.12
- 飛田良文、『国語研究第11集 言文一致運動』、東京：明治書店、2006.06
- 比嘉春潮、『沖縄の歳月 自伝的回想から』、東京：日本図書センター、1997.12
- 平井昌夫、『国語国字問題の歴史 (復刻版)』、東京：三元社、1998.02
- 廣畑研二編・著『大正アナキスト覚え帖』、東京：アナキズム文献センター、2013.10
- 藤代和成編、『大本えすぺらんと史』、京都：天声社、1986.08
- 藤井省三、『エロシエンコの都市物語』、東京：みすず書房、1989.04
- 細田哲史編集、『復刻版 人類愛善新聞 (別冊1)』、東京：不二出版、2013.11
- 松尾尊兌、『大正デモクラシー』、東京：岩波書店、1974.05
- 三ツ井崇、『朝鮮植民地支配と言語』、東京：明石書店、2010.12
- 向山寛夫、『日本統治下における台湾民族運動史』、東京：中央経済研究所、1987.07
- 森岡健二、『近代語の成立 文体篇』、東京：明治書院、1991.10
- 山口小静(遺著)、『匈牙利の労農革命』、東京：水曜会、1923.06
- 山川菊栄、山川振作編、『山川均全集』5、7、20巻、東京：勁草書房、1968
- 山川菊栄、『山川菊栄集(8)』、東京：岩波書店、1982.01
- 、『女二代の記』、東京：日本評論新社、1956.05
- 山川均、『山川均全集(7)』、東京：勁草書房、1968
- 山田清三郎、『日本プロレタリア文芸運動史』、東京：叢文閣、1930.02
- 山本正秀、『近代文体発生の史的的研究』、東京：岩波書店、1965.07
- 山室信一、『キメラ—満州国の肖像 増補版』、東京：中公新書、2004.07

- 安田敏朗、『近代日本言語史再考 帝国化する「日本語」と「言語問題』』、東京：三元社、2004.06（初版：2000.09）
- 、『近代日本言語史再考』、東京：三元社、2000.09
- 、『脱「日本語」への視座 近代日本言語史再考Ⅱ』、東京：三元社、2003.06
- 、『「国語」の近代史 帝国日本と国語学者たち』、東京：中公新書、2006.12
- 魯迅著、松井博光ら訳、『魯迅全集5 而已集・三閑集』、東京：学習研究社、1985.04
- 若林正文、『台湾抗日運動史研究 増補版』、東京：研文出版、2001.06
- 渡邊順三編、『プロレタリア短歌集 1929年メーデー記念』、東京：紅玉堂書店、1929.05
- J・マーシャル・アンガー著、奥村睦世訳、『占領下日本の表記改革 忘れられたローマ字による教育実験』、東京：三元社、2001.10
- Louise Young（ルイーズ・ヤング）著、加藤陽子ら訳、『総動員帝国 満州と戦時帝国主義の文化』、東京：岩波書店、2001.02

中国語著書：

- 愛羅先珂著、魯迅訳、『愛羅先珂童話集』、上海：商務、1922.07
- 愛羅先珂著、胡愈之訳、『枯葉雜記及其他』、上海：商務、1924.04
- 愛羅先珂著、魯迅訳、『世界的火災』、上海：商務、1924.12
- 簡吉、『簡吉獄中日記』、台北：中央研究院台湾史研究所、2005.02
- 郭杰(К.М. Тертицкий)・白安娜(А.Э. Белогурова)著、李隨安・陳進盛訳、『台湾共產主義運動與共產國際(1924-1932)研究档案』、台北：中央研究院台湾史研究所、2010.06
- 邱士杰、『1924年以前台湾社会主義運動的萌芽』、台北：海峽學術、2009.10
- 許善述編、『巴金與世界語』、北京：中国世界語出版社、1995.05
- 胡愈之、『莫斯科印象記』、上海：新生命、1922.10(初版：1921.08)
- 胡愈之編、『近代文学概観』(上、下)、上海：商務、1924.09
- 胡愈之著、戴文葆編、『胡愈之出版文集』、北京：中国書籍出版社、1997.11
- 胡愈之、『胡愈之文集』(一～六)、北京：三聯書店、1998.08
- 黄尊生、『中国問題之綜合的研究』、天津：啓明書社、1935.05
- 侯志平編、『胡愈之與世界語』、北京：中国世界語出版社、1999
- 侯志平主編、『世界語在中国一百年』、北京：中国世界語出版社、1999.09
- 、『中国世界語運動簡史』、北京：新星出版社、2004.07
- 吳密察監修・遠流台湾館編著、『台湾史小事典』、台北：遠流、2011.12（初版：2000.09）
- 蔡培火編、『台湾白話字普及の趣旨及び島内賛成者氏名』、東京：(不明)、1934.05
- 周莊萍編、『世界語五十年』、上海：上海世界語者協會、1937.01
- 周婉窈、『海行兮的年代 日本殖民統治末期台湾史論集』、台北：允晨、2003.02
- 蔣渭水著、王曉波編、『蔣渭水全集 增訂版上冊』、台湾：海峽學術出版社、1998.10
- 蕭阿勤、『重構台湾 当代民族主義的文化政治』、台北：聯經、2012.12
- 蘇新、『未帰の台共鬥魂 蘇新自伝與文集』、台北：時報、1993.04
- 曾顯章、『張維賢』、台北：国立台北芸術大学、2003.07
- 陳原、『記胡愈之』、香港：商務印書館、1992.10
- 陳建忠、『日拠時期台湾作家論：現代性、本土性、殖民性』、台北：五南、2004.08
- 陳芳明、『殖民地摩登：現代性與台湾史觀』台北：麥田、2004.10
- 、『台湾新文学史』、台北：聯經、2011.11
- 陳淑容、『一九三〇年代郷土文学:台湾話文論争及其餘波』、台南：台南市立図書館、2004
- 張深切、『張深切全集 里程碑—又名：黑色的太陽(上)』、台北：文經、1998.01
- 趙勳達、『狂飆時刻—日治時代台湾新文学的高峰期(1930-1937)』(台南：国立台湾文学館、2011.12)
- 東方雜誌社編、『国際語運動』、上海：商務、1923.12
- 中島利郎編、『1930年代台湾郷土文学論戦資料彙編』高雄：春暉、2003.03
- 倪海曙、『拉丁化新文字運動の始末和編年紀事』、上海：知識出版社、1987.12
- 費孝通・夏衍ら著、『胡愈之印象記』、北京：中国友誼出版公司、1989.02

布哈林、『共產主義的 ABC』、上海：新青年社、1926.01
『文史薈刊 復刊第七輯 莊松林先生台南專輯』、台南：台南市文史協會、2005.06
于友、『胡愈之』、北京：人民日報出版社、2005.05
——、『胡愈之』、北京：群言出版社、2011.01
葉榮鐘、『日拋下台灣政治社會運動史（上）』、台中：晨星、2000.07
——、『日拋下台灣政治社會運動史（下）』、台中：晨星、2000.08
楊渡、『簡吉 台灣農民運動史詩』、台北：南方家園文化事業、2009.01
藍天強主編、『中國世界語者與世界語運動』北京：中國世界語出版社、2002
李南衡校註、『日據下台灣新文學・明集 5・文獻資料選集』、台北、明潭、1979.03
李婉薇、『清末民初的粵語書寫』、香港：三聯、2011.04
林翠鳳、『鄭坤五研究』、台北：文津、2004.11
連雅堂、『雅言』、台北：実学社、2002.08
魯迅、『魯迅全集 12』、北京：人民文學、1973

ほか言語の著書：

甘為霖 (William Campbell, 1841-1921)、『Ē-m̄ng-im Sin Jī-tián (廈門音新字典)』、台南：
台灣教會公報、1913.07
『廈語短篇小說 第一集』、廈門：廈語社、1924 (アモイ語ローマ字)
金三守、『韓國에스페란토運動史』、ソウル：淑明女子大學校出版部、1976.11

連温卿関連資料：

越無 (連温卿)、『蠹魚的旅行日記』、1924、台灣：中央研究院所藏
温・連 (連温卿)、「怎麼是世界語主義」、『台灣民報』2 (128、129、131、139)、1926
陳規懷 (連温卿)、「日本帝國主義下の植民地台灣」、『大衆』、1926.11
——、「台灣に於ける政治運動」、『大衆』、1926.12
辛運農 (連温卿)、「郭懷一抗荷事蹟考略」、「郭懷一抗荷事蹟考略 (續)」、『台灣風物』第 1、
2 号、1951.12.01、1952.01.01
史可乘 (連温卿)、「人類之家・台灣 ESP 学会」、『台北文物』3(1)、1954.05
——、「日拋時期台灣 ESP 運動」、『台灣風物』17(4)、1967.08
戴國輝、「台灣抗日左派指導者連温卿とその稿本」、『史苑』35(2)、立教大學史学会、1975.03
戴國輝校訂、「連温卿日記—1930 年の 33 日間」、『史苑』39(1)、東京：立教大學史学会、
1978.11
毛一波、「哀悼連温卿先生」、『台灣風物』7(6)、1957.12
連温卿、「英國に於ける英語擁護運動とエスペラント」、『台灣青年』2(4)、1921
——、「言語之社會的性質」、『台灣民報』2(19)、1924
——、「將來之台灣話」、『台灣民報』2(20-21)、3(4)、1924-1925
——、「エスペラント講座 I」、『台灣新文學』1(3)、1936.04
——、「エスペラント講座 II」、『台灣新文學』1(4)、1936.05
——、「台灣エスペラント運動の回顧」、『La Revuo Orienta』、1936.06
——、「林道乾」、『台北文物』2(2)、1953.08.15
——、「台灣文化的特質」、『台北文物』3(2)、1954.08.20
——、「再就台灣文化的特質而言」、『台灣文物』3(3)、1954.12.10
連温卿 (戴國輝校註)、「台灣に於る日本植民政策の実態」、『史苑』35(2)、立教大學史学
会、1975.03
——、「日本帝國主義の台灣に於る土地収奪の過程 (一)」、『史苑』(37)
1、立教大學史学会、1976.12
——、「日本帝國主義の台灣に於る土地収奪の過程 (二)」、『史苑』39(1)、
立教大學史学会、1978.11
連温卿著、張炎憲・翁佳音編校、『台灣政治運動史』、台北：稻鄉、2003.11

林芳婦訳、「連温卿日記——一九三〇年の三十三天——備忘録」、『台湾風物』36(1)、1986.03

論文（日本語）：

- 朝比賀昇、「日本のプロレタリア・エスペラント運動」、『第81回日本エスペラント大会』資料集、東京：日本エスペラント学会、1994.10
- 池田敏雄遺稿、「敗戦日記Ⅰ・Ⅱ」、台湾近現代史研究会編集、『台湾近現代史研究4・池田敏雄氏追悼記念特集』、東京：緑蔭書房、1982.10
- 池田敏雄、「植民地下台湾の民俗雑誌」、台湾近現代史研究会編集、『台湾近現代史研究4・池田敏雄氏追悼記念特集』、東京：緑蔭書房、1982.10
- 「インタビュー 柳田国男との出会い 比嘉春潮／（ききて）谷川健一」、『柳田国男研究資料集成』第15巻、東京：日本図書センター、1987.04
- 逸見吉三、「山鹿泰治・人とその生涯(上)—エスペラントとアナキズムの生活者—」、『現代の眼』13(2)、1972.02
- 、「山鹿泰治・人とその生涯(中)—中国アナキズム運動との交流—」、『現代の眼』13(3)、1972.03
- 、「山鹿泰治・人とその生涯(下)—中国アナキズム運動との交流—」、『現代の眼』13(4)、1972.04
- 臼井祐之、「北一輝の〈エスペラント採用論〉に見る近代日本の〈英語問題〉〈国語問題〉」、『Speech communication education』20、日本コミュニケーション学会、2007.03
- 、「国際派からオカルト・ナショナリストへ」、日本エスペラント学会紀要『エスペラント研究』第4号、2010.06
- 小谷一郎、「日中プロレタリア・エスペラント運動の交流—中国人留学生のプロレタリア・エスペラントを中心に」、『「磁場」としての日本—一九三〇、四〇年代の日本と「東アジア」』第一輯、埼玉：埼玉大学教養学部、2008.03
- 小林勇、「二人のエスペランチスト—私の青春をかけぬけた伊藤三郎と中垣虎児郎」、『文芸春秋』50(14)、1972.11
- 小林文男、「エスペラント運動と中国——栗栖継氏に聞く——」、『アジア経済』17(5)、1976.05
- 栗栖継、「思想運動としてのエスペラント運動—体験的エスペラント運動論」、『思想の科学』通巻326号、1980.5
- 西東なほみち(中垣虎児郎)、「プロレタリアとエスペラント」、『戦旗』、1930.08
- 清水賢一郎、「梁啟超と〈帝国漢文〉—「新文体」の誕生と明治東京のメディア文化—」、『アジア遊学』13、2000.12
- 下村作次郎、「台湾詩人吳坤煌の東京時代（1929年-1938年）—朝鮮人演劇活動家金斗鎔や日本人劇作家秋田雨雀との交流をめぐって—」、『関西大学中国文学会紀要』27、2006.03
- 田中貞美、「満洲エスペラント運動史概観（上）、（下）」、『満洲評論』20(11)、1941.03.15、20(12)、1941.03.23
- 張企程、「エスペラントとエスペラント運動を語る」、『アジア経済旬報』1138-139、1980.01
- 手塚登士雄、「日本の初期エスペラント運動と大杉栄らの活動(一)」、『トスキナア』第4号、2006.12
- 、「稲垣藤兵衛の『非台湾』など」、『トスキナア』8、2009.10
- 、「日本の初期エスペラント運動と大杉栄らの活動（一）」、『トスキナア』、東京：トスキナアの会、2006.12
- 奈良宏志、「柳田国男とエスペラント」、後藤総一郎編、『柳田国男研究資料集成』第16巻、1987.04
- 中垣虎児郎、「ポ・エ・ウのころ—戦前のエスペラント運動の思い出—」、『文学』32、1964.10
- 中村浩平、「平和の鳩：ヴェルダ—マーヨー反戦に生涯を捧げたエスペランチスト長谷川テル」、『人文学研究所報』37、神奈川大学、2004.03
- 並松信久、「比嘉春潮と沖縄研究の展開：インフォーマントとしての役割」、『京都産業大

- 学論集』人文科学系列 46、2013.03
- 野呂俊文、『『ハムレット』の二つのエスペラント語訳に見るエスペラント語の語源』、*Philologia* (42)、三重大学英語研究会、2011
- 浜田ゆみ、「陳望道と言語・文字改革運動」、『一橋論叢』112(3)、1994.09
- 、「エスペラント運動との接点からみた中国の言語・文字改革運動について—エスペランチストにより支えられたラテン化新文字運動—」、一橋大学社会学研究科博士課程単位修得論文、1995
- 、「1930～1950年代における広州・香港のラテン化新文字運動」、『一橋論叢』125(2)、2001.02
- 、「1930年代における中国エスペラント運動の成功—言語・文字改革運動との結びつき—」、田中克彦ら編、『ライブラリ相関社会科学4 言語・国家、そして権力』、東京：新世社、1997.10
- 林義強、「『万国』と『新』の意味を問いかける--清末国学におけるエスペラント（万国新語）論」、『東洋文化研究所紀要』147、2005.03
- 広瀬浩二郎、「人類愛善運動の史的意義：大本教のエスペラント・芸術・武道・農業への取り組み」、『国立民族学博物館研究報告』27(1)、2002
- 藤澤親雄、「日満両国の共通語問題」、『満蒙』14(3)、1933.03.01
- 蒲豊彦、「庶民のための書き言葉を求めて」、森時彦編、『二十世紀中国の社会システム』、京都：京都大学人文科学研究所、2009.06
- 松田はるひ、「緑の蔭で—植民地台湾エスペラント運動史(1-6)」、『La Revuo Orienta』58a(6-11)、59a(1)、1977-1978
- 、「中国エスペラント運動史」、東京大学人文科学研究所修士論文、1978.03
- 水野義明、「エスペラントの『国際性』について」、『明治大学教養論集』132、1980
- 、「ヨーロッパのエスペラント事情散見--東欧を中心として」、『明治大学教養論集』187、1986
- 、「言語発展の原理—国際共通語エスペラントの観点から」、『明治大学教養論集』247、1992
- 、「東アジアのエスペラント事情」、『明治大学人文科学研究所紀要』41、1997
- 森岡健二、「共通語とその変容—思考と表現の観点から—」、近代語学会編、『近代語研究第八集』、東京：武蔵野書院、1990.09
- Yotumoto-Minoru（四元実）「Taiwan, Tyôsen, Nan'yô no Rômazikwa（台湾、朝鮮、南洋のローマ字化）」、『ローマ字世界』26(10)、1936.10

論文（中国語）：

- 王美惠、「1930年代台湾新文学作家的民間文学理念與实践」、台南：成功大学歴史系博士論文、2008.01
- 何耀坤、「台南郷土生物研究の先河—王雨卿先生」、『台南文化』新15、1983.06
- 邱士杰、「一九二零年代台湾社会運動中の『大衆党』問題」、若林正文ら主編『跨域青年学台湾史研究統集』、台北：政治大学台湾史研究所、2009.07
- 黄華、「白話文為何在五卅時期活起来了」、『二十一世紀』142、香港：香港中文大学、2014.04
- 吳叡人、「福爾摩沙意識型態—試論日本殖民統治下台湾民族運動『民族文化』論述的形成（1919-1937）」、『新史学』17(2)、2006.02
- 、「誰は『台湾民族』？：連温卿與台共的台湾解放論與台湾民族形成論之比較」、『地方菁英與台湾農民運動国際學術研討会』、台北：中央研究院、2008.03
- 周質平、「晚清改革中の語言烏托邦：從提倡世界語到廢滅漢字」、『二十一世紀』雙月刊137号、香港：香港中文大学、2013.06
- 朱鋒（莊松林）、「台湾民間童話（鹿角還狗舅・鱷虎）」、『台湾風物』21(2)、1971.05
- 朱子文、「莊松林先生生平事蹟」、『台南文化』新55、2003.09
- 鄧慧恩、「日治時期台湾知識份子對於『世界主義』的实践：以基督教受容為中心」、台南：成功大学台湾文学系博士論文、2011.05

- 彭明偉、「愛羅先珂與魯迅 1922 年的思想轉變—兼論〈端午節〉及其他作品」『政大中文学報』7、2007.06
- 彭春凌、「以“一返方言”抵抗“漢字統一”与万国新語—章太炎与語言文字問題的論争(1906-1911)」、『近代史研究』、2008.02
- 呂美親、「《La Verda Ombro》、《La Formoso》、及其他戰前在台湾發行的世界語刊物」、『考掘・研究・再現 台湾文学史料集刊』第一輯、台南：国家台湾文学館、2011.09
- 、「關於連温卿的〈台湾原住民伝説〉」、『経眼・辨析・苦行 台湾文学史料集刊』第三輯、台南：国家台湾文学館、2013.07
- 、「日本時代台湾世界語運動的開展與連温卿」、陳翠蓮ら主編、『跨域青年学者台湾史研究』第五集、台北：政治大学台湾史研究所、2013.08
- 、「訓読・模倣・創造—台湾白話文：論日本時代台湾近代文体的形成與様貌」、『頼和・台湾魂の迴盪—2014 彰化研究學術研討會論文集』、彰化：彰化县政府、2015.03

Web 検索システム

- 大本エスペラント普及会ホームページ：<http://www.epa.jp/pg217.html>
- カナモジカイ公式ホームページ：<http://www9.ocn.ne.jp/~kanamozi/>、
- 近代デジタルライブラリー：<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1450047>
- 国立国会図書館デジタルコレクション：<http://dl.ndl.go.jp/>
- 国立台湾図書館電子資源查詢系統：<http://hyerm.ntl.edu.tw/ntlterm/home.jsp>
- 台湾総督府職員録系統：<http://who.ith.sinica.edu.tw/mpView.action>
- 台湾白話字文献館：<http://pojbh.lib.ntnu.edu.tw/script/index.php>、
- 台語文數位典藏資料庫：<http://ip194097.ntcu.edu.tw/nmtl/dadwt/pbk.asp>
- 日本ローマ字会公式ホームページ：<http://www.roomazi.org/>
- 日本のローマ字社公式ホームページ：<http://www.age.ne.jp/x/nrs/>
- バハイ教公式サイト：<http://www.bahai.org/>